実装ガイド

Arcserve® Backup

18.0

法律上の注意

組み込みのヘルプシステムおよび電子的に配布される資料も含めたこのドキュメント(以下「本書」) はお客様への情報提供のみを目的としたもので、Arcserve により随時、変更または撤回されることがあります。

Arcserve の事前の書面による承諾を受けずに本書の全部または一部を複写、譲渡、変更、開示、修正、複製することはできません。本書は Arcserve が知的財産権を有する機密情報であり、ユーザは (i) 本書に関連する Arcserve ソフトウェアの使用について、Arcserve とユーザとの間で別途締結される契約により許可された以外の目的、または (ii) ユーザとArcserveとの間で別途締結された守秘義務により許可された以外の目的で本書を開示したり、本書を使用することはできません。

上記にかかわらず、本書で取り上げているソフトウェア製品(複数の場合あり) のライセンスを受けたユーザは、そのソフトウェアに関して社内で使用する場合に限り本書の合理的な範囲内の部数のコピーを作成できます。ただし Arcserve のすべての著作権表示およびその説明を各コピーに添付することを条件とします。

本書を印刷するかまたはコピーを作成する上記の権利は、当該ソフトウェアのライセンスが完全に有効となっている期間内に限定されます。いかなる理由であれ、そのライセンスが終了した場合には、ユーザは Arcserve に本書の全部または一部を複製したコピーを Arcserve に返却したか、または破棄したことを文書で証明する責任を負います。

準拠法により認められる限り、Arcserve は本書を現状有姿のまま提供し、商品性、お客様の使用目的に対する適合性、他者の権利に対する不侵害についての黙示の保証を含むいかなる保証もしません。また、本システムの使用に起因して、逸失利益、投資損失、業務の中断、営業権の喪失、情報の損失等、いかなる損害(直接損害か間接損害かを問いません) が発生しても、Arcserve はお客様または第三者に対し責任を負いません。Arcserve がかかる損害の発生の可能性について事前に明示に通告されていた場合も同様とします。

本書に記載されたソフトウェア製品は、該当するライセンス契約書に従い使用されるものであり、当該ライセンス契約書はこの通知の条件によっていかなる変更も行われません。

本書の制作者は Arcserve です。

「制限された権利」のもとでの提供：アメリカ合衆国政府が使用、複製、開示する場合は、FAR Sections 12.212, 52.227-14 及び 52.227-19(c)(1) 及び (2)、及び、DFARS Section252.227-7014(b)(3) または、これらの後継の条項に規定される該当する制限に従うものとします。

© 2019 Arcserve(その関連会社および子会社を含む) 。All rights reserved.サードパーティの商標または著作権は各所有者の財産です。

Arcserve 製品リファレンス

このマニュアルが参照している Arcserve 製品は以下のとおりです。

- Arcserve® Backup
- Arcserve® Unified Data Protection
- Arcserve® Unified Data Protection Agent for Windows
- Arcserve® Unified Data Protection Agent for Linux
- Arcserve® Replication および High Availability

Arcserve サポートへの問い合わせ

Arcserve サポート チームは、技術的な問題の解決に役立つ豊富なリソースを提供します。重要な製品情報に簡単にアクセスできます。

テクニカル サポートへの問い合わせ

Arcserve のサポート：

- Arcserve サポートの専門家が社内で共有しているのと同じ情報ライブラリに直接アクセスできます。このサイトから、弊社のナレッジ ベース(KB) ドキュメントにアクセスできます。ここから、重要な問題やよくあるトラブルについて、製品関連 KB 技術情報を簡単に検索し、検証済みのソリューションを見つけることができます。
- 弊社のライブ チャット リンクを使用して、Arcserve サポート チームとすぐにリアルタイムで会話を始めることができます。ライブ チャットでは、製品にアクセスしたまま、懸念事項や質問に対する回答を即座に得ることができます。
- Arcserve グローバル ユーザ コミュニティに参加して、質疑応答、ヒントの共有、ベスト プラクティスに関する議論、他のユーザとの会話を行うことができます。
- サポート チケットを開くことができます。オンラインでサポート チケットを開くと、質問の対象製品を専門とする担当者から直接、コールバックを受けられます。
- また、使用している Arcserve 製品に適したその他の有用なリソースにアクセスできます。

Arcserve Backup マニュアル

Arcserve Backupドキュメントには、すべてのメジャー リリースおよびサービス パックについての特定のガイドとリリース ノートが含まれています。ドキュメントにアクセスするには、以下のリンクをクリックします。

- Arcserve Backup 18.0 リリース ノート
- Arcserve Backup 18.0 マニュアル選択メニュー

コンテンツ

第 1章 : の紹介 Arcserve Backup 13
概要 14
本書の目的 15
第 2章 : ストレージ環境の計画 17
基本タスク 18
Enterprise ストレージの要件 19
予算に関する考慮事項 20
ネットワークおよびコンピューター インフラストラクチャ要件 21
データ転送の要件 22
バックアップ スケジュールの要件 23
データのバックアップ ウィンドウに関する考慮事項 24
ハードウェア データ転送速度 25
ネットワーク帯域幅に関する考慮事項 28
データ転送の要件およびリソースの計算 29
データ パスに関する考慮事項 30
代替データ パスに関する考慮事項 34
(複数のストリーミング) 並列ストレージ操作 39
ストレージ容量の要件 40
オンライン復旧データ ストレージの要件 41
バックアップ データ ストレージの要件 42
Global Dashboard データ保存要件 43
ストレージの容量とリソース 44
テスト計画および予測 47
致命的イベント 48
リスクの見積もり 49
オフサイト リポジトリに関する考慮事項 50
惨事復旧アーカイブに関する考慮事項 54
惨事復旧のテスト 55
計算例 56
100Base-Tイーサネット LAN上のサブネット設定のないクライアントとサーバの転送速度 57
2つの100Base-Tイーサネット サブネット上のクライアントとサーバの転送速度 58
ギガビット イーサネット ネットワーク上のクライアントとサーバの転送速度 59
クライアントを持たないサーバの転送速度 60

SAN Optionを使用するサーバでの転送速度 61
1 回のフルバックアップと 1 回の増分バックアップで 2 セットの復旧データを保持する場合のストレージ容量 62
第 3章 : Arcserve Backup インストールの計画 65
サポートしているプラットフォーム 66
サポート デバイス 67
テープライブラリのインストール 68
Storage Area Network(SAN) のインストール 69
Arcserve Backup のインストールに必要なディスク空き容量 70
インストール方法 71
Arcserve Backup サーバインストールのタイプ 73
Arcserve Backup サーバオプション 76
caroot ユーザアカウント 77
データベース要件 78
Microsoft SQL Server 2014 SP2 Express Edition に関する考慮事項 79
Microsoft SQL Server データベースに関する考慮事項 82
Agent for Arcserve Database 86
インストールの進行状況ログ 87
Global Dashboard に関する考慮事項 88
アップグレードに関する考慮事項 90
サポート対象のアップグレード 91
旧バージョンとの互換性 92
Global Dashboard のアップグレード 94
以前のリリースからのデータマイグレーション 95
製品ライセンスの要件 96
インストール処理のオペレーティングシステムに対する影響 97
未署名のバイナリファイル 103
サポートされる OS のない実行可能ファイル 105
最新の OS をサポートしないマニフェストを含む実行可能ファイル 108
無効なファイルバージョン情報が含まれるバイナリファイル 110
Windows セキュリティ要件に適合しないバイナリファイル 112
完全にアンインストールされないバイナリファイル 117
埋め込みマニフェストを含まないバイナリファイル 119
Arcserve Backup MSI インストーラパッケージ ID 121
第 4章 : Arcserve Backup のインストールとアップグレード 123
前提条件作業の実施方法 124

インストール Arcserve Backup 128
以前のリリースからの Arcserve Backup のアップグレード 135
サイレント インストール レスポンス ファイルの作成 142
現在のリリースへの Arcserve Backup エージェントのサイレント アップグレード 148
プライマリ サーバからリモート コンピュータへのエージェントの展開 151
リモート展開に関する考慮事項 153
自動アップグレードを使用したリモート コンピュータへのエージェントの展開 154
カスタム展開を使用したリモート コンピュータへのエージェントの展開 157
仮想マシン展開を使用した仮想マシンへのエージェントの展開 160
インストール後の作業 163
第 5 章 : クラスタ対応環境での Arcserve Backup のインストールとアップグレード 165
クラスタ対応インストールの概要 166
展開に関する考慮事項 167
Arcserve Backup HA 展開の計画 169
MSCS での Arcserve Backup サーバの展開 171
MSCS ハードウェア要件 172
MSCS ソフトウェア要件 173
MSCS クラスタ リソースの準備 174
Windows Server 2008 システム上での MSCS クラスタ リソースの準備 176
Windows Server 2012 および Windows Server 2012 R2 システム上での MSCS クラスタ リソースの準備 177
MSCS クラスタ対応環境への Arcserve Backup のインストール 178
MSCS クラスタ環境での Arcserve Backup r16.5 SP1、r17、r17.5 から 18.0 へのアップグレード 188
MSCS クラスタからの Arcserve Backup のアンインストール 191
Arcserve Backup クラスタ リソースの削除 193
NEC クラスタでの Arcserve Backup サーバの展開 194
NEC CLUSTERPRO/ExpressCluster ハードウェア要件 195
NEC CLUSTERPRO/ExpressCluster ソフトウェア要件 196
NEC CLUSTERPRO/ExpressCluster リソースの準備 197
NEC クラスタ対応環境への Arcserve Backup のインストール 199
NEC CLUSTERPRO 環境での 16.5、r17、r17.5 から r18.0 への Arcserve Backup のアップグレード 211
NEC CLUSTERPRO/ExpressCluster の管理および設定 215
NEC CLUSTERPRO/ExpressCluster から Arcserve Backup をアンインストールする方法 217
NEC クラスタ グループの停止 219

NEC クラスタ スクリプトでの Arcserve Backup の無効化 220
NEC クラスタ スクリプトでの Arcserve Backup の有効化 223
クラスタ対応インストールおよびアップグレードの確認方法 226
第 6章 : テープ統合モジュールに対する Arcserve UDP または Arcserve Backup のアップグレード 229
Arcserve UDP 6.5 から v7.0 へのアップグレード方法 230
Arcserve Backup 17.5 から r18.0 へのアップグレード方法 231
第 7章 : Arcserve Backup と他の製品との統合 233
Arcserve Replication の統合 234
Arcserve Backup Patch Manager との統合 235
Arcserve UDP の統合 236
Arcserve UDP セッションのバックアップ方法の定義 238
バックアップ マネージャから Arcserve UDP サーバを管理する方法 239
Arcserve Backup による暗号化済み Arcserve UDP バックアップ セッションの処理方法 249
第 8章 : 環境設定 Arcserve Backup 251
Arcserve Backup のアクティブ化 252
マネージャまたはマネージャ コンソールを開く 253
Arcserve Backup ホーム画面 255
最初に表示されるホーム画面とユーザ チュートリアル 259
サービスの状態アイコン 260
Arcserve Backup へのログイン 261
Arcserve Backup マネージャの環境設定の指定 263
コード ページ 266
Arcserve Backup による複数のコード ページのサポートについて 267
バックアップ マネージャ ウィンドウでのコード ページの指定 268
リストア マネージャ ウィンドウでのコード ページの指定 269
Arcserve Backup システム アカウント 270
Arcserve Backup による認証の管理方法 271
ジョブ セキュリティのシステム アカウントの使用方法 272
Arcserve Backup データベース保護ジョブの開始 273
Arcserve Backup SQL Server データベースの微調整 274
必要な SQL 接続の数を計算する方法 275
データベースの整合性チェック 276
リモート データベース設定での ODBC 通信の指定 277
デバイス ウィザードを使用したデバイスの設定 278
Enterprise Module コンポーネントの設定 279

Global Dashboard の環境設定 280
セントラル サイトの環境設定 282
ブランチ サイトの環境設定 284
ファイル システム デバイスの作成 286
Arcserve Backup データベース エージェント用スキップ パラメータとインクルード パラメータの定義方法 288
通信を最適化するためのファイアウォールの設定 290
ポート環境設定ファイルに関するガイドライン 291
ポート設定ファイルの変更 292
Arcserve Backup コンポーネントで使用するポート 294
ファイアウォールを通じたテスト通信 330
第 9章 : Arcserve Backup のアンインストール 331
Arcserve Backup のアンインストール 332
コマンド ラインを使用した Arcserve Backup コンポーネントのアンインストール 335
Agent Deployment セットアップ ファイルのアンインストール 338
第 10章 : Arcserve Backup インストールのトラブルシューティング 339
セットアップがリモート Microsoft SQL Server データベースと通信できない 340
このリリースのインストール後に Arcserve Backup にログインできない 342
Arcserve Backup サービスの初期化に失敗する 344
メンバ サーバのアップグレードで、テープ エンジンが起動しない 345
このリリースへのアップグレード後に Arcserve Backup にログインできない 346
Arcserve Backup でどのデバイスがサポートされているかを判断できない 347
クラスタ HA リソースが作成されない 348
第 11章 : 推奨事項を使用した Arcserve Backup のインストールおよびアップグレード 349
Arcserve Backup のインストールに関する推奨事項 350
Arcserve Backup のインストールの前提条件タスクの完了方法 351
単一サーバ環境への Arcserve Backup のインストール 353
プライマリ サーバとメンバ サーバのインストール 359
メンバ サーバおよびデバイスとのプライマリ サーバのインストール 366
SAN におけるメンバサーバおよび共有デバイスとのプライマリ サーバのインストール 373
SAN への複数のプライマリ サーバとメンバ サーバのインストール 381
クラスタ対応環境への Arcserve Backup のインストール 389
以前のリリースからの Arcserve Backup のアップグレードに関する推奨事項 395
Arcserve Backup のアップグレードの前提条件タスクの完了方法 396
スタンドアロン サーバまたはプライマリ サーバのアップグレード 398

ドメイン内の複数のスタンドアロンサーバのアップグレード 406
リモートデータベースを共有する複数のスタンドアロンサーバのアップグレード 415
ローカルまたはリモートのデータベースを使用する SAN 内のサーバのアップグレード 424
SAN および非 SAN の環境における複数のサーバの本リリースへのアップグレード 434
セントラルデータベースを使用する複数のサーバのアップグレード 444
クラスタ対応環境における複数サーバのアップグレード 453
一般的な推奨事項 462
マネージャコンソールをインストールする場所 463
ライセンスのインストールと管理の方法 464
Arcserve Backup サーバベースオプションのインストール方法 469
第 12章: 用語集 471
Arcserve Backup Agent Deployment 472
caroot アカウント 472
Data Mover サーバ 472
ファイルシステムエージェント 472
メンバサーバ 472
プライマリサーバ 472
レスポンスファイル 473
仮想マシン 473

第1章: の紹介 Arcserve Backup

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

概要 14

本書の目的 15

概要

Arcserve Backup は、多種多様な環境のビジネスニーズに対応する高性能なデータ保護ソリューションです。本製品は、柔軟なバックアップとリストア、容易な管理、幅広いデバイス互換性、そして信頼性を提供します。また、個々のストレージ要件に応じてデータ保護戦略をカスタマイズできるため、データストレージの機能を最大限に活用できます。さらに、柔軟なユーザインターフェースにより詳細な設定が可能で、あらゆるユーザがその技術的知識のレベルにかかわらず、さまざまなエージェント機能や各種オプションを展開して保守できます。

本リリースの Arcserve Backup for Windows は、Arcserve Backup ファミリの次世代製品です。旧リリースの機能をベースに、バックアップおよびリストア作業で最大のパフォーマンスを得られる新機能も備えています。Arcserve Backup は、分散環境およびリストア処理のための包括的なデータ保護を提供します。多種多様なオプションとエージェントにより、企業全体でのデータ保護機能が強化され、さまざまな拡張機能 (オンライン ホット バックアップや、アプリケーションおよびデータ ファイルのリストア、拡張デバイスおよびメディアの管理、惨事復旧など) が使用可能になります。

本書の目的

この「*実装ガイド*」では、以下について説明しています。

- ストレージ環境の計画
- Arcserve Backup インストールの計画
- インストールの前提条件作業の実施
- インストール Arcserve Backup
- 以前のリリースからの Arcserve Backup のアップグレード
- Arcserve Backup のアンインストール
- 代替インストール方法のセットアップ
- インストール後の作業の実施
- その他の Arcserve 製品との統合
- Arcserve Backup をインストールして以前のリリースから Arcserve Backup をアップグレードするための推奨事項の使用

第2章: ストレージ環境の計画

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

基本タスク 18
Enterprise ストレージの要件 19
データ転送の要件 22
ストレージ容量の要件 40
致命的イベント 48
計算例 56

基本タスク

データの保護とバックアップストレージの管理は、本質的にはテクノロジの問題ではなく、ポリシーの問題です。テクノロジによりポリシーを実装することはできますが、テクノロジからポリシーを決めることはできません。

Arcserve Backup ソフトウェアを効果的に使用するには、まず、企業のデータストレージに関する要件を分析する必要があります。そのために、以下のことを行います。

- 企業のデータリソースがどのように使用されているかを理解します。
- 企業のデータリソースのセキュリティと可用性が企業の利益に与える影響を理解します。
- ハードウェアの追加購入やArcserve Backupの構成を行う前に、包括的なストレージ計画を立案します。

ストレージに対するニーズが明確になったら、以下を考慮した実装計画を立てることができます。

- ユーザが削除したファイルとディレクトリ、およびデータベース関連データの迅速な回復。
- ネットワーク内リソースの一元的バックアップ管理
- 一般業務への影響を最小限に抑えたバックアップ処理
- 必要に応じた適切なメディアとデバイスの数
- 致命的なデータ破壊からの完全回復

Enterprise ストレージの要件

ボールト容量、ストレージのハードウェア、およびストレージ メディアの必要性を確認するのには具体的な要件の設定するに、高度なプランを変換する必要があります。かを決定する必要があります。

- 量メディア、ハードウェア、およびネットワークの改良点を抑える必要があるか。
- 量本当に必要なデータを保護しますか?
- 別の作業を妨げることがなくバックアップを実行する場合は、ですか。
- トラフィック量、ネットワークは、バックアップ期間中に処理できますか。
- 平均ファイルまたはデータの損失は、以下のリストアするファイル システムの待機時間ですか。

以下のセクションでは、これらの問題の詳細について説明します。

- 予算に関する考慮事項
- ネットワークおよびコンピューター インフラストラクチャ要件

予算に関する考慮事項

大きなプロジェクトの計画では、すでにわかっていることは初期段階に強調しておくと効果的である場合があります。このセクションで取り上げる各要素には、すべて費用が関係します。速度を必要とする場合、高速、高い帯域幅ネットワーク、および詳細必要があり、高速デバイスをバックアップします。どちら premium 価格も必要です。

速度またはデータのセキュリティ要件を満たすためには、複数のメディアを購入する必要があります。メディア エレメントは、特に新しいとより高速なバックアップ デバイスの場合も経費です。

組織を許容できる量を決定する必要があります。

- バックアップおよび復旧のソリューションの支出
- 失われたデータと担当者時間が失われる

次に、以下の事項を検討します。

- 何が境界内費用の両方の種類を保持するために準備の整ったを決定します。
- パフォーマンスまたはエコノミーは、重要な問題かどうかを決定します。
- この初期決定に応じて次のセクションで取り上げるデメリットを評価します。

ネットワークおよびコンピューター インフラストラクチャ要件

されていない場合を把握ハードウェア、ネットワーク、およびサイト環境設定、バックアップおよび復旧計画をサポートするとします。わかっている必要があります。

- コンピュータおよびワークステーションの種類と番号は、バックアップする必要があります。
- ライブラリまたはデバイスが取り付けられているサーバ(Arcserve Backupサーバ)の確認
- SCSI またはファイバ各ライブラリをサーバおよびケーブル接続の転送速度に接続するケーブルの入力するします。
- 各サーバ上でのライブラリの入力するします。
- 各ライブラリおよびそれらのデータ転送速度でデバイスの入力するします。
- よってある程度のデータ圧縮が存在する場合、使用を計画しています。
- タイプと、ネットワーク、サブネット、ルータ、およびなどの容量。

データ転送の要件

バックアップおよび復旧システムの全体的なデータ転送速度は、ストレージの操作に必要な時間を設定します。バックアップウィンドウ、バックアップデータと、既存のインフラストラクチャと、組織の予算の制約の機能に対して復旧速度の要件のバランスがあります。

持っているデータの量を定量化して、バックアップする場合、時刻完全を実現する必要があります最小データ転送速度約推定するできます後に、割り当てられた時間に、データをバックアップします。この転送速度は、後ほどこのセクションで決定を行う際の最初のポイントになります。

概算、最小の転送速度を計算するためには、データの量を分割し、データのバックアップを利用できる時間の量により。

databackedup ¶ backup_window = required_rate

例: データ転送の計算

1 テラバイトをバックアップする必要がある場合、利用可能な 5 時間毎晩と対象となるすべてのデータを 1 つのセッションでバックアップを 1 時間あたり 200 GB の速度を実現する必要があります。

バックアップ スケジュールの要件

多くのデータがある場合は、多くの時間では、ハードウェア、メディア、およびネットワーク帯域幅が必要です。

かを決定する必要があります。

- かどうかは、ユーザのデータのみをバックアップする必要があります。
- かどうかもシステム設定を指定する必要があり、アプリケーションをインストールします。
- 組織の経験に基づいて増加の妥当な利益を許可する、バックアップする必要がありますデータの合計サイズを推定します。

データのバックアップ ウィンドウに関する考慮事項

バックアップする必要があるデータの量、およびインフラストラクチャと管理の要件は、指定した期間にバックアップ処理に使用される時間に依存します。次の事項を確認してください。

- したバックアップを実行できます非稼働時間中に夜間または週末ですか。
- 通常の業務処理と同時にバックアップを実行する、ネットワーク使用されているためで 24 時間いますか。

曜日と週の間に使用可能な時間のブロックを識別します。月または年の中に、長期間の組織がシャット ダウンした場合、これらの時間もを考慮する可能性があります。

ハードウェア データ転送速度

バックアップ ハードウェアでは、ターゲット データ転送速度に到達したを制限する要素とする可能性があります。ほとんどのデバイスは非常に高速です。ただし、計画段階では、ハードウェアの速度を評価する必要があります。最低限、十分なハードウェア、または十分に高速のハードウェア、許可された時間内でストレージメディアへのデータの書き込みにする必要があります。少ない数の高速デバイスまたは遅いデバイスの大きい番号では、同じ合計スループット頻度を実現できます。ハードウェアの総計データ転送速度を推定するに以下の情報を使用します。

- SCSIまたはファイバ インターフェースに関する考慮事項
- テープドライブに関する考慮事項

SCSIまたはファイバ インターフェースに関する考慮事項

デバイスの転送速度が最大になるのは、そのデバイスがデータソースに直接接続されたときです。現在のバックアップデバイスは、標準のSCSIまたはファイバチャネルインターフェースを使用して接続します。一般的なインターフェースの種類を以下の表に示します。

バージョン	バス幅	およその最大データ転送速度
Wide Ultra SCSI	16ビット	40 MB/秒 =144 GB/時間
Ultra2 SCSI	8ビット	40 MB/秒 =144 GB/時間
Wide Ultra2 SCSI	16ビット	80 MB/秒 =288 GB/時間
Ultra 160 SCSI	16ビット	160 MB/秒 =576 GB/時間
Ultra 320 SCSI	16ビット	320 MB/秒 =1152 GB/時間
ファイバチャネル	1 GB	100 MB/秒 =360 GB/時間
ファイバチャネル	2 GB	200 MB/秒 =720 GB/時間

この表からわかるように、SCSIインターフェースとファイバチャネルインターフェースの多くが、200 GB/時間の要件を満たしています。たとえば、Wide Ultra2 SCSIを使用する場合は、1時間未満で200 GB/時間に達します。これより低速なSCSIコントローラを使用する場合でも、複数のSCSIコントローラを使用すると、合わせて200 GB/時間のデータ転送速度を実現できます。

つまり、SCSIバスまたはファイバチャネルインターフェースが目標とするデータ転送速度を制限することは、ほとんどないということです。また、この例で目標としている40GB/時間の転送速度には、これらすべてのSCSI規格で容易に対応できます。実際、ほとんどの規格で、200 GB のジョブを 2 時間以内に処理できます。Ultra 160 SCSIであれば、処理には約30分しかかかりません。

テープドライブに関する考慮事項

さまざまな種類のデバイスがあります。いくつかの一般的なは、以下の表に表示されます。

デバイスの種類	およそのレート 2:1 (圧縮されたデータの転送)	最大容量 (圧縮されたデータ)
DDS 4	6.0 MB/秒 =21.6 GB/時間	40 GB
AIT-2	12.0 MB/秒 =43.2 GB/時間	100 GB
AIT 3	31.2 MB/秒 =112.3 GB/時間	260 GB
DLT 7000	10.0 MB/秒 =36.0 GB/時間	70 GB
DLT 8000	12.0 MB/秒 =43.2 GB/時間	80 GB
スーパー DLT	24.0 MB/秒 =86.4 GB/時間	220 GB
Mammoth-2	24.0 MB/秒 =86.4 GB/時間	160 GB
ウルトリウム (LTO)	30.0 MB/秒 =108.0 GB/時間	200 GB
IBM 9890	20.0 MB/秒 =72.0 GB/時間	40 GB
IBM 3590E	15.0 MB/秒 =54.0 GB/時間	60 GB

場合でも、単一のデバイスは、弊社例設定する 1 時間あたり 200 GB のデータ転送速度を指定できない可能性があります、複数のメディアデバイスを使用することができますこの総計転送速度を実現します。たとえば、ウルトリウムテープドライブを使用している場合、1 時間あたり 200 GB を実現する 2 つのテープドライブまたは同じスループットを実現する 5 台の DLT 8000 ドライブします。

ネットワーク帯域幅に関する考慮事項

これで、ネットワークを考慮する必要があります。別の要因にも使用可能なネットワーク帯域幅は、バックアップ期間中に実際には転送可能なデータの量を決定します。以下の表は、異なる種類のネットワークのパフォーマンスを比較します。この表からもわかるように、ネットワークの性能は大規模なバックアップ処理の大きな妨げになり得ます。

ネットワークの種類	理論上のデータ転送速度	現実的なスループット	現実的な転送レート *
10 BASE-T イーサネット	10 mbps = 1.25 MB/秒	40-50%	500 KB/秒 = 1.8 GB/時間
100 BASE-T イーサネット	100 mbps = 12.5 MB/秒	80%	10 MB/秒 =36 GB/時間
1 ギガビット イーサネット	1000 mbps = 125 MB/秒	70%	87.5 MB/秒 =315 GB/時間

注：別の操作と同時にバックアップする場合、バックアップ操作を表示、現実的な最大転送速度実現できないことに注意してください。

データ転送の要件およびリソースの計算

前のセクションに記載された予備計算ことを示す、必要なデータ転送速度できない、既存のインフラストラクチャを与え、ここ停止することができる可能性があります。ただし、予備計算通常明らかに示されている要件および利用可能な時間とリソースの競合します。

Minbandwidth が送信できるパスに狭い、遅いボトルネックを通して指定した期間にバックアップソースからバックアップメディアにデータの量と、バックアップウィンドウが利用できる時間の場合、バックアップの処理するが以下の数式によって制御します。

datatransferred = backupwindow × minbandwidth

ここでは、5 時間、高速ストレージデバイス、および 100 BASE-T イーサネットがあります。したがって、Ethernet LAN は弊社弱いリンクで、次の数式。

datatransferred = 5 時間 × 36 GB/時間 = 180 GB

そのため、1 テラバイトのデータをバックアップする、少なくとも以下のタスクのいずれかを実行する必要があります。

- データのバックアップを利用できる時間の量を増やします。
- データパスの狭い部分で利用可能な帯域幅を増やします。
- 1テラバイトを小さな独立した複数の処理に分けてバックアップすることにより、*datatransferred(データ転送量)* のサイズを削減します。

データ パスに関する考慮事項

利用できる時間の移動するに必要なデータの量を減らすことはできない場合、は、利用可能な帯域幅を増加する可能なソリューションがされます。帯域幅を拡大するのは、データ ホストをArcserve Backupサーバにリンクするネットワークでも、サーバとバックアップ メディアを接続するハードウェアでもかまいません。

詳細情報：

ネットワークの拡張機能

ネットワークの拡張機能

ネットワークは、通常 enterprise バックアップ環境で遅延の最上位ソースです。高速テクノロジが利用可能なまたはできない場合は、アップグレードするに適切な投資可能性があります。

例：ネットワークの拡張機能の計算

たとえば、100 BASE-T Ethernet LAN と、同じデータ転送の例のようにお持つことが要件がある場合されてを使用してために (200 GB/時間)、許可された時間に行われたバックアップ (5 時間) を取得するおことはできません。かかる約 6 回すべてのバックアップにある限り、します。ギガビット イーサネット ネットワーク予備する時間とすべてのデータをバックアップし、別の業務も利点が得られます。

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

- ストレージ エリア ネットワーク
- SCSI バスとデバイスの機能拡張

ストレージ エリア ネットワーク

ストレージ エリア ネットワーク (SAN) では、低速なネットワーク接続ではなく、高速なファイバ接続経由でデータを移動して、バックアップ パフォーマンスを大幅に向上できます。低ホスト CPU 使用率と高帯域幅ファイバー接続から派生パフォーマンス利点、に加えて、SAN、全体的なネットワークのパフォーマンスも向上によって専用ストレージをエンタープライズ ネットワークからバックアップ データの転送をロードオフネットワーク。

SAN が実装および保守コストがかかりますが、利点だけのバックアップを超えた。決定が、SAN の実装に行われる前に、要件を慎重に分析する必要があります。Arcserve Backup での SAN の活用については、「管理者ガイド」を参照してください。

SCSI バスとデバイスの機能拡張

内である場合が低いデバイス スループットを制限することを考慮または、既存のデバイスのパフォーマンスの高いデバイス以上する必要があります、高速ネットワークに余分な容量がある場合。古いを使用する場合遅いドライブ テクノロジその可能性があります支払う高速デバイスを高速の SCSI バス アップグレードするにします。多くの場合はデバイスを追加したほうが可能性がありますが、必要に応じて、ライブラリ。一度に複数のデバイスを使用して同時にストレージの操作を実行できます。

代替データパスに関する考慮事項

アップグレードするネットワークまたはバックアップを利用できる時間を展開できません、ほとんどの場合、特定のインスタンスのバックアップの際に処理されますが、データ設定するのサイズを小さくことができます。以下のタスクのいずれかの方法によって、これを実現します。

- ネットワークをセグメント化します。
- 一連の連続するバックアップ中にバックアップされているように、データをセグメント化します。
- データ設定するが最後に保存されているために変更されたデータのみ格納するように、バックアップの範囲を制限します。

ネットワークをセグメントします。

多くの場合、Arcserve Backupサーバを複数のサブネットに配置することにより、既存のネットワーク帯域幅をより効率的に利用できます。

- サブネットが存在しない場合、バックアップデータはすべてのネットワークを経由してArcserve Backupサーバに到達します。実際には、あらゆるデータ順次へ移動ごとのノードのネットワークします。
- するサブネットをネットワーク有効で作成するバックアップデータの一部を処理速度が同じの2つ以上のネットワーク。データは、同時に送られます。

ここでは場合 1t ネットワーク全体の代わりに2つのサブネット上 500 GB のバックアップおでしたバックアップ2倍の速度。各サブネット (以前 28 時間) 14 時間の合計経過時間の時間あたり36 GB で、500 GB に転送でした。弊社 5 時間バックアップウィンドウしても転送でした360 GB となり、不足していても 180 GB よりもはるかに優れたがサブネット化されていない、ネットワーク上で達成おでした。

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

- セグメント データ
- バックアップの対象範囲

セグメント データ

何も強制的にすべての組織のデータを単一のユニットとして処理します。多くの場合、バックアップの前にデータを論理的に関連付けられたグループにセグメント化しておくと効率的です。任意の1つのストレージの操作に必要な時間を短縮、短バックアップの使用率をこのより低速なネットワーク。まだ、すべてのデータをバックアップします。だけで行うことは一連の短い操作分散数日しています。

お、インスタンスでのバックアップ データの1テラバイトの20%例毎晩、月曜日土曜日までからです。週、全この方法はせずにバックアップ全体弊社 1t 100 BASE-Tネットワーク全体にわたって日単位 5時間バックアップ期間の範囲を超えています。追加のメリットとしては、コンパクト バックアップ要素は、検索で検索の対象を減らすことで迅速かつ容易に、データのリストアを確認します。

このアプローチの欠点は、ある日単位は、すべてのデータはバックアップされません。ほとんどの組織に not 日単位データのバックアップの完了する; できません。そのため、この方法適さない場合があります。

以下の方法のいずれかでバックアップ用にデータをセグメント可能性があります。

- 部門 (会計、engineering、担当者管理、営業、shipping など)
- 地理的な場所 (このようなカリフォルニア開発ラボ、セントルイス配布センター、ニューヨークビジネスオフィス、Miami ビジネス office、東京ビジネス office および Paris 配布センター)
- ネットワーク ロケーション (NA005、NA002、NA003、JP001、EU001 など)

時間のかかる検索および追加のネットワークトラフィックに取得する速度が失われないように、セグメンテーション スキーマがある場合、十分に連続してバックアップソースにデータをグループしかし、します。

バックアップの対象範囲

データをセグメント化すると、バックアップ対象範囲が限定され、高いデータ転送速度の要件を若干低くすることができます。一般に、毎日変更されるデータは、それほど多いわけではありません。変更部分の保存のみでよい場合には、フルバックアップは不要です。

例：バックアップの対象範囲

毎日全データをバックアップしていても、1日に変更されるデータが全体の10%のみである場合、貴重なバックアップ時間の90%を、すでにバックアップしてあるデータの保存に費やしていることになります。メディアの消費とバックアップデバイスの消耗も考慮すると、フルバックアップは必要以上に経費のかかる計画になります。

これを、1週間に1回、データの半分以上が変更されてからすべてのデータをバックアップするという方法に変更すると、より合理的になります。この処理は、週末に実行することにより、より長いバックアップ期間を確保できます。毎日実行する処理では、変更箇所のみをバックアップします。このようにすると、バックアップを短時間で実行でき、メディアの節約にもなります。

Arcserve Backupでは、オプションとして以下のバックアップタイプを選択して、この問題に対処できます。

- フルバックアップ - データ変更とは無関係に、すべてのデータをバックアップします。
- 差分バックアップ - 最後に実行されたフルバックアップジョブ以降に変更されたファイルのみをバックアップします。
- 増分バックアップ - 前回のフルバックアップまたは増分バックアップ以降に変更されたファイルをバックアップします。
- 合成フルバックアップ - r16.5以降のWindows Client Agentでは、前回のフルバックアップセッションとすべての増分セッションを合成してフルセッションを作成します。以前の増分セッションは必要ありません。

上記の、フルバックアップと部分バックアップをバランスよく組み合わせて実行すると非常に効果的です。データの各単位、各バージョンを1回ずつバックアップできると理想的です。そして、メディアと時間を浪費する不要な重複は最小限に抑えます。バックアップ方式を決めるときには、以下の点に注意します。

- フルバックアップでは、すべてのデータが一度にバックアップされます。フルバックアップでは、バックアップ時点のデータの完全で一貫性のある1つのバックアップセッションが生成されます。またバックアップされたデータは、すべて単一の管理しやすいメディアに保存されます。しかし、フルバックアップだけに頼ったバックアップ計画は、通常は非効率的なものになります。これは、新しいデータが

データセット全体に占める割合が一般的には少ないためです。フルバックアップでは、前回の処理で適切にバックアップされている多くのファイルも重複して保存されます。

ただし、短期間にデータの大部分が変更されるような、特殊な形式で運用する場合、フルバックアップだけを行うバックアップ計画が最適な選択肢になります。このような場合は、データの大部分が常に更新された状態になるので、フルバックアップだけを実行するバックアップ計画の方が、差分/増分処理と組み合わせた場合よりも、実際に不必要な複製が生成されにくいと言えます。

- 増分バックアップと差分バックアップでは、ネットワークの輻輳とメディアの浪費を避けることができます。この方法は、既存のハードウェアと帯域幅に制限がある場合に便利な方法であり、バックアップの時間帯をユーザの業務時間に支障がないよう調整することもできます。増分バックアップと差分バックアップは、フルバックアップよりも処理が高速です。フルバックアップと次のフルバックアップの間に増分バックアップや差分バックアップを実行すると、前回のフルバックアップ以降に変更されたすべてのファイルがバックアップされるため、より最新のファイルがバックアップされることになります。この冗長性により、完全な復旧に必要なすべてのデータが最大 2 つのデータセット(フルバックアップと最後の増分バックアップ)に保存されていることになり、リストア速度が向上します。

  増分バックアップと差分バックアップは、データセット全体の量に比べて、変更されるデータの量が少ない場合にのみ経済的な方法です。このような場合は、小容量のリムーバブルメディアに、変更されたデータを頻繁に保存できます。

- r16.5 以降の Windows Client Agent の場合のみ、合成フルバックアップによって、ネットワークの輻輳とメディアの浪費を避けることもできます。合成バックアップは、フルバックアップより処理が高速です。最初のリアルフルバックアップ(親)を実行した後、必要に応じて増分バックアップと合成フルバックアップをスケジュールします。合成フルバックアップでは、最初のフルバックアップとその後のすべての増分セッションが 1 つの合成フルセッションに合成されます。最後のフルセッションとすべての増分セッションが組み合わされているため、ファイルをリストアする必要がある場合は、合成フルバックアップを使用するだけで済みます。この冗長性により、完全な回復に必要なすべてのデータが 1 つのデータセット(最後の合成フルバックアップ)に保存されていることになり、リストア速度が向上します。

(複数のストリーミング) 並列ストレージ操作

デバイスの転送速度を制限して操作し、必要なネットワーク帯域幅が利用可能な場合は、一度にすべての利用可能なデバイスを使用する、操作を設定する可能性があります。同時ストリームにデータを分散、この方法は、バックアップ操作に必要な時間を大幅に減ります。複数のネットワーク帯域幅を消費して、しかし。すべての利用可能なデバイス連携一度にすべてまたはほとんどのバックアップデータをリストアするため、致命的な損失後のリカバリが高速、可能性があります。Arcserve Backup は、自動的にテープデバイスの可用性に基づいて複数のストリームを作成する機能をいます。

ストレージ容量の要件

これまでに、バックアップおよびリストア操作を実行する速度に影響する要因について説明してきました。必要なオンラインでのデータストレージの量を考慮する必要があります。

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

- オンライン復旧データストレージの要件
- バックアップデータストレージの要件
- Global Dashboard データ保存要件
- ストレージの容量とリソース
- テスト計画および予測

オンライン復旧データストレージの要件

ロボット ライブラリにオンラインにして、保存する必要があります復旧データの量を把握する必要があります。致命的な惨事の後にアーカイブ用に、主に、または復旧に使用されるデータは、リポジトリまたはボールト オフライン保存できます。すぐに必要と思われることはできません。通常、最新のバックアップ データをユーザーが簡単に見つける迅速が失われると思われるファイルの最新、そのままのコピーを回復するようにロボット ライブラリで利用可能である必要があります。

復旧データの量を計算する必要がありますストア オンライン

1. 平均、フル バックアップのサイズを推定します。
2. 平均増分バックアップの推定サイズを追加します。
3. 組織がすぐに利用可能なバックアップのセットの数を掛ける (最新の「1」、「2」の最も最近およびなど 2)。これは、オンライン状態を維持する必要があります復旧データの量です。

   recoverydata = (avgsizefull + avgsizeincrements) × numberbackupskept

バックアップ データ ストレージの要件

スケジュール バックアップ用のオンライン ストレージ スペースを確保しておく必要があります。

必要なスペースの量を計算する方法

1. 平均、フル バックアップのサイズを推定します。
2. 通常のフル バックアップのサイクルにおける平均的なデータ セット増加分を加算します。
3. 平均増分バックアップの推定サイズを追加します。
4. 通常の増分バックアップのサイクルにおける平均的なデータ セット増加分を加算します。

Global Dashboard データ保存要件

Global Dashboard 環境では、登録済みの各ブランチ プライマリ サーバから収集された Dashboard データ(Arcserve Backup データおよび SRM 関連データ) が、設定されたセントラル プライマリ サーバに同期されます。そこでは、セントラル Arcserve Backup データベース(ASDB) にデータが保存されます。そのため、セントラル プライマリ サーバを選択する際に考慮すべき主な点は、データベースのサイズです。選択したセントラル プライマリ サーバに、登録されているすべてのブランチ プライマリ サーバから受け取る Dashboard データを保存できる十分な容量があることを確認してください。

注： ブランチ プライマリ サーバについては、Arcserve Backup プライマリ サーバまたはスタンドアロン サーバ用の最小要件以外に必要とされる追加のハードウェアやソフトウェアはありません。

Global Dashboard 環境内のセントラル ASDB に必要な総容量を概算する際は、以下の点を考慮します。

- 各ブランチ サイトからセントラル ASDB へのデータ アップロードは毎日実行されるため、セントラル ASDB は、100 ノードにつき 1 日あたりおよそ 4MB (各ノードに 4 ボリュームと想定) の容量が増加すると推定されます(または、100 セッションにつき 1 日あたり 1MB) 。
- セッションの数は、ノードの数に 1 ノードあたりのボリュームの平均数を掛けることにより計算されます。データベース保存期間の日数は、ブランチ Arcserve Backup セットアップによって決定されます。
- セントラル サイトに必要なおよそのディスク空き容量は、推定される1 日あたりの ASDB 増加量 (100 のセッションにつき 1MB) にデータベース保存期間の日数を掛けることにより計算できます。

  例：

  10 のブランチ サイトの各サイトに 10 のノードがあり、各ノードに 4 ボリュームある場合、セントラル ASDB は毎日 4MB ずつ増加します。データベース レコードが 180 日間保存されるとすると、セントラル ASDB は 720MB 必要になります。

  - 10 ブランチ サイト x 10 ノード x 4 ボリューム = 400 セッション
  - 400 セッション = 1 日あたり 4MB のデータベース容量増加 (100 セッションにつき 1MB)
  - 1 日あたり増加量 4MB x データベース保存日数 180 日 = セントラル ASDB に必要なデータベース総容量 720MB

  注： ブランチ ASDB で実行されたデータベースの廃棄処理はすべて、次にデータ同期を実行したときにセントラル ASDB に反映されます。

ストレージの容量とリソース

容量に対する要件を満たすことができるかどうかは、以下の条件で決まります。

- ライブラリのタイプ
- 各タイプのライブラリの数
- 各ライブラリで使用するメディアのタイプ

使用できるライブラリのタイプと数を確認後、以下の式で各ライブラリの容量を算出できます。

totalcapacity(総容量) = numberslotsavailable(使用可能なスロット数) x mediaelementcapacity(メディアの容量)

この式で、numberslotsavailable(使用可能なスロット数) は、ライブラリに格納されているスロットの数であり、mediaelementcapacity(メディアの容量) は、インストールされているドライブで使用されるメディアの容量です。

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

- メディアの容量
- 容量の計算に影響する要因

メディアの容量

メディアの容量は、ドライブタイプ、メディアタイプ、および使用するデータ圧縮率によって異なります。実際のデータ容量を算出するには、あらかじめメディアの容量から以下の値を減算しておきます。

オーバーヘッド分として-10%

これには、Arcserve Backupメディアヘッダとさまざまなエンジン固有のオーバーヘッド情報が含まれます。多数の小さなファイルをバックアップした場合などには、オーバーヘッドがこの値より大きくなる場合があります。

例：メディアの容量

たとえば、オーバーヘッド分を減算して、100 GBのデータをバックアップできるデバイス10台で、1テラバイトをバックアップしようとすると、バックアップのたびにメディアの使用率が100%である必要があります。このようなことは実際には不可能なので、11台のデバイスが必要になります。一方、オーバーヘッド分を差し引いて200 GBのデータをバックアップするカートリッジを6つ使用すると、200 GB(20%) の余裕を持って1テラバイトをバックアップできます。

この余裕を確保することは重要です。オーバーヘッドを見込んだメディア使用率に容量に余裕がないと、バックアップ処理中にメディアを使いきり、バックアップが不完全になる可能性があります。

容量の計算に影響する要因

デバイスには、使用時間や使用回数などで示される寿命があります。必要なメディア数を算出する場合には、メディアの寿命も考慮してください。メディアの製造元の推奨期間を確認してください。

メディアに厳密な選択条件があったり、オフサイトに大規模なストレージがある場合には、上記で計算した最低限必要なメディア容量をさらに大きく見積もる必要がある場合があります。

一般的に、バックアップ対象データの合計サイズは、時間の経過と共に増加します。データ量が増加するペースは企業によって異なりますが、総量はほぼ必ず増加していきます。ここまでに算出した値は、データがほぼ一定しているという仮定の上での値です。したがって、バックアップが必要なデータの量(この例では1テラバイト)を見積もる場合には、常にデータの増加分を考慮する必要があります。そして、増大するニーズに対応できるだけの予備のストレージが常に用意されているよう、定期的なチェックを行います。

テスト計画および予測

目標値を確認し、必要な計算をすべて終え、企業にとって有効なバックアップ計画を立てたら、その計画をテストする必要があります。小規模な環境を使ったパイロット テストを実行します。

Arcserve Backup ログを参照すると、概算値が適切であったかどうかを確認できます。バックアップ ログを使用して、以下の操作を行うことができます。

- 計画に従って生成されたフル バックアップのサイズを確認すると、バックアップ データの量が正しく算出されていたかどうかを確認できます。
- 増分バックアップのサイズを確認することにより、データの平均変更率の計算が正しいかどうかを確認できます。
- バックアップする必要のあるデータがすべてバックアップされたかどうかを確認できます。
- データとネットワークのセグメント化が期待どおりに機能したかどうかを確認できます。

致命的イベント

ここまでは、主に機器の故障やユーザの誤操作による日常的なデータ損失などの脅威を取り上げ、すべてのバックアップ/リストアに共通するプロセスについて説明しました。ここでは、致命的な惨事からの復旧を計画する場合の考慮事項について説明します。

ここでいう致命的な障害とは、火災や洪水などの自然災害および人災です。致命的な障害が発生した場合には、ローカルに保存されたバックアップメディアやハードウェアを含め、複数のホスト、データセンタ、またはネットワーク全体が喪失します。緊急事態に対処するには、バックアップメディアを保管するための安全なオフサイトの保管場所を用意する必要があります。また、このオフサイトのデータを常に最新の状態に維持しておくことも必要です。

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

- リスクの見積もり
- オフサイト リポジトリに関する考慮事項
- 惨事復旧アーカイブに関する考慮事項
- 惨事復旧のテスト

リスクの見積もり

まず、データの重要度、データ保護に要する経費、リスクの規模、およびすべてのサイトに適用する企業ポリシーを考慮して、実際に備えるべき惨事の種類を決定します。

以下の内容を検討します。

- 地域全体または都市部に影響を与える大規模な惨事が発生する可能性はどの程度か。これは、地震、大洪水、戦争などの惨事を指しています。
- 建物の火災、局地的な洪水や暴動など、小規模な惨事が発生する可能性はどの程度か。
- 大規模な惨事で失われるデータの量はどの程度か。小規模な惨事の場合では場合ではどの程度か。
- それぞれのケースが企業に与える損失の程度はどの程度か。
- 各リスクを回避するために、企業はどれだけの経費をかけることができるか。

オフサイト リポジトリに関する考慮事項

ストレージ管理で、オフサイト リポジトリまたは*ボールト*を選択する際には、以下に挙げる要件とのトレードオフを考慮する必要があります。

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

- ボールトのセキュリティに関する考慮事項
- ボールトのアクセスに関する考慮事項
- ボールトの費用に関する考慮事項

ボールトのセキュリティに関する考慮事項

オフサイトは、対処すべき致命的な惨事からオフサイト データを保護するために、主要な施設から地理的に離れている必要があります。

例：ボールトのセキュリティに関する考慮事項

- 対処すべき最大の惨事が地震である場合、オフサイトは主要サイトから地理的に離れた耐震の建物内か、別の市や別の地域の建物内に設置する必要があります。
- 火災や局地的な洪水に備える場合は、通りの向かいの建物の上層階にオフサイトを確保すれば充分です。

ボールトのアクセスに関する考慮事項

プライマリサイトからデータをオフサイトに隔離する方法をとると、オフサイトのデータを常に最新に保つことが難しくなり、費用も高額になります。オフサイトのデータを使用するには、そのデータが適切に最新の状態に維持されていること、つまり適度にアクセスしやすい状態であることが必要になります。地理的に離れた場所にあるオフサイトにデータを格納しておくと、深刻な惨事からもデータを保護できますが、毎日そこまでメディアを運ぶことは現実的ではありません。

ボールトの費用に関する考慮事項

一般的に、オフサイトは安全性を高めるほど多額の経費がかかります。同様に、安全性の高い施設ほど高額になります。また、こうしたオフサイトとの間でメディアをやりとりするには、時間と経費もかかります。オフサイトに多くのメディアを保管すると、主要サイトにも多くのメディアが必要になります。

惨事復旧アーカイブに関する考慮事項

通常、致命的な惨事が発生した場合は、バックアップメディアと同時にインフラストラクチャも損害を受けるため、データの回復を行う前に、システムの完全な再構築も必要になります。このため、オフサイトには以下のものも用意しておく必要があります。

- Arcserve Backup サーバ用のブート可能なオペレーティングシステムを含むメディアおよびデバイス。
- がサポートしている現在のファイルシステム、データベース、およびメールサーバの完全なバックアップ Arcserve Backup.

また、Arcserve BackupのCD-ROM、およびハードウェア/ソフトウェア構成が記載されているテキスト ファイルなども必要です。

惨事復旧のテスト

惨事の発生時に確実にデータを使用できるようにするには、オフサイトに保管しているデータを定期的にテストしておく必要があります。日常的に使用されるバックアップデータは、ユーザが削除したファイルをリストアできない場合にテストされます。この場合、通常は問題箇所をすぐに特定できるため、要する経費もわずかで済みます。しかし、惨事はその性質上ごくまれにしか発生せず、その復旧には莫大な経費を要します。データセンタで火災が発生した後でバックアップデータが使用できないことが判明するという事態は、許されません。したがって、使用頻度の低いバックアップであっても、時折テストしておく必要があります。

新しいソフトウェアまたはハードウェアをインストールしたとき、または既存の手順を変更したときには、必ず以下のテストを行います。

- オフサイトのストレージおよび惨事復旧用として、実際にメディアにバックアップを行います。
- 指定されたデータがすべて正しくバックアップされていることを確認します。
- テストのバックアップメディアを使用して、惨事後の復旧をシミュレートします。

機会があるたびに、バックアップとリストアの簡単なシミュレーションを実行してください。日常的にテストを実行することにより、復旧プロセスの訓練と評価を継続して行うことができます。

計算例

ここでは、バックアップ/復旧計画で処理する必要のある代表的な状況をいくつか紹介します。

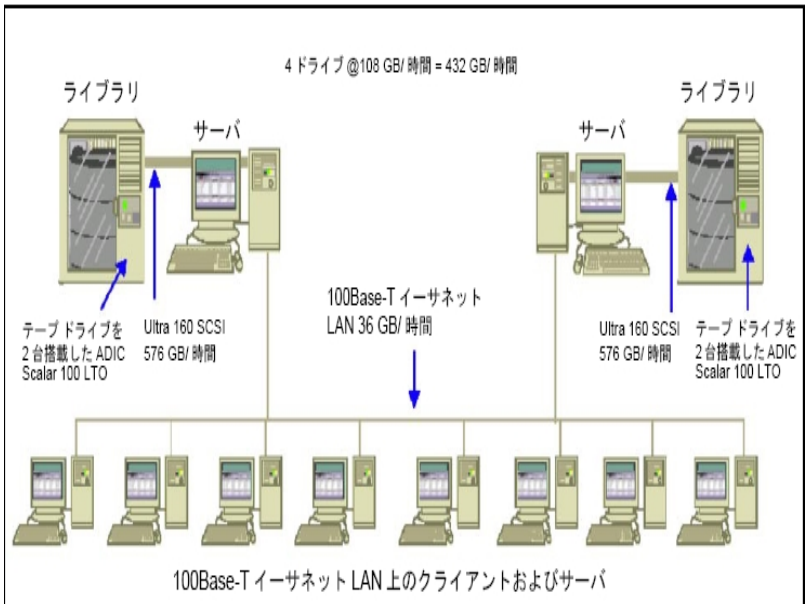
注： 以下の説明では、バックアップ サーバに高速なCPUと充分なメモリが搭載され、クライアントとサーバ双方のハード ディスクの処理速度も充分に高速であることを前提としています。

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

- 100Base-Tイーサネット LAN上のサブネット設定のないクライアントとサーバの転送速度
- 2つの100Base-Tイーサネット サブネット上のクライアントとサーバの転送速度
- ギガビット イーサネット ネットワーク上のクライアントとサーバの転送速度
- クライアントを持たないサーバの転送速度
- SAN Optionを使用するサーバでの転送速度
- 1回のフル バックアップと1回の増分バックアップで2セットの復旧データを保持する場合のストレージ容量

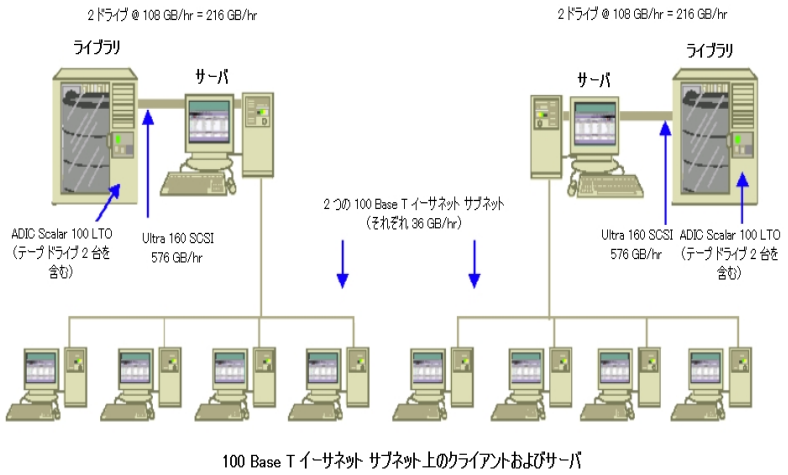
100Base-Tイーサネット LAN上のサブネット設定のないクライアントとサーバの転送速度

この構成では、使用可能なサーバとライブラリの数にかかわらず、ネットワーク上のデータ転送速度は最高で36 GB/時間です。1 テラバイトのデータをバックアップする場合は、28 時間のバックアップ処理が必要です。



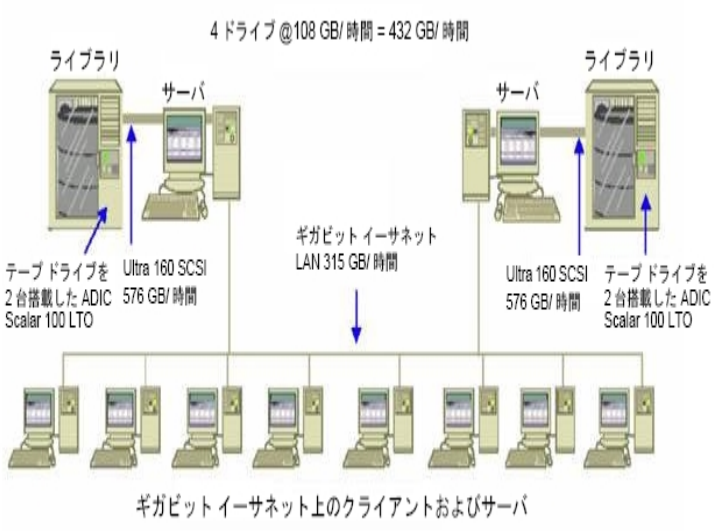
2つの100Base-Tイーサネット サブネット上のクライアントとサーバの転送速度

この構成では、100Base-Tの場合の36 GB/時間の2倍のデータを転送できます。1テラバイトのデータをバックアップする場合、各サブネットで処理するデータ量は500 GBになり、バックアップ処理には14時間かかります。各ライブラリのメディアドライブの転送速度を36 GB/時間に維持しておくことはできないため、パフォーマンスが多少低くなります。



ギガビット イーサネット ネットワーク上のクライアントとサーバの転送速度

この構成では、データの転送速度は315 GB/時間です。1テラバイトのデータをバックアップするには、3時間かかります。

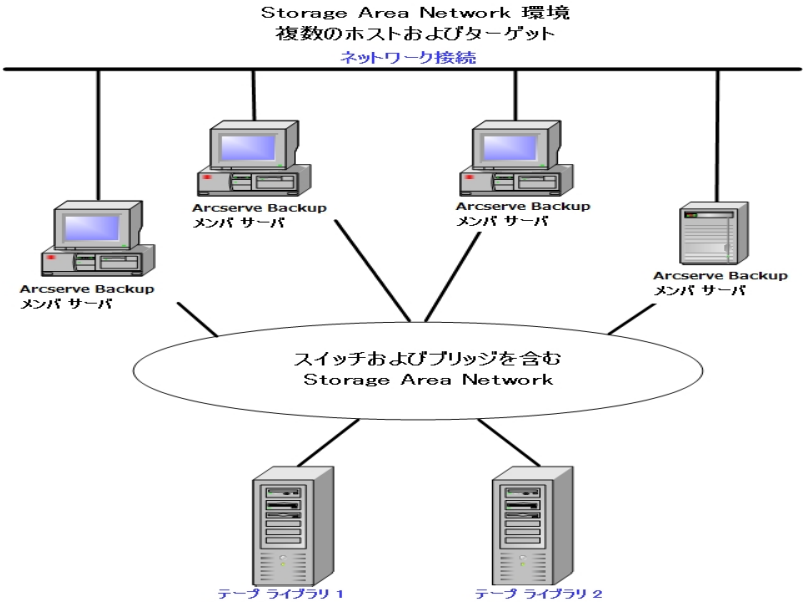


クライアントを持たないサーバの転送速度

この場合、ディスクシステムもサーバもボトルネックでないと仮定すると、216 GB/時間のドライブがボトルネックの要因になります。したがって、1テラバイトのデータをバックアップするには、5時間かかります。

SAN Optionを使用するサーバでの転送速度

この構成では、SAN上の各サーバのローカルバックアップの転送速度は432 GB/時間になります。



1 回のフル バックアップと 1 回の増分バックアップで 2 セットの復旧データを保持する場合のストレージ容量

以下の条件を仮定します。

- 1週間に1回、1テラバイトのユーザ データをフル バックアップします。
- 増分バックアップを毎日実行します。
- 毎日のデータ変更率は約10%とします。
- 前回と前々回のバックアップ サイクルのデータを高速回復用にオンラインで使用できるようにします。
- 20スロット構成の1つのライブラリに圧縮率2:1のLTOテープドライブを使用します。
- どのメディアも使用率に問題はありません。

まず、現在のバックアップ処理の出力を保存するために必要な容量を計算します。LTOメディアの容量は、圧縮率2:1で200 GBです。オーバーヘッド分10%を差し引くと、実際の容量は約180 GBです。したがって、1テラバイトのフル バックアップでは以下の式が成り立ちます。

1 TB ÷ 180 GB/メディア= 6 メディア

上の式を利用すると、マージンについて以下の式が成り立ちます。

(6 X 180 - 1000) /1000 = 8%

6本のテープ(1テラバイト) で8%のマージンを確保できるので、テープを追加する必要はありません。この例では、フル バックアップ用に6本のLTOテープが必要になります。予測した変更率を基にすると、増分バックアップの容量は以下のようになります。

1 TB x 10%(変更率) /増分 x 5(増分の回数) = 500 GB(変更分)

したがって、少なくとも以下の式で求められるメディアが必要になります。

500 GB ÷ 180 GB/メディア= 3 メディア

3 本のテープ(500 ギガバイト) で 9 % のマージンを確保できるので、テープを追加する必要はありません。テープ3本で、1セット分の増分バックアップを保存できます。

次に、オンライン復旧データに必要なストレージ スペースを計算します。ライブラリに2世代前までのバックアップ セットを保存しておく必要があるので、前々回の復旧データ用と前回の復旧データ用に、それぞれ9本ずつのテープが必要です。したがって、復旧データを保存するには、18本のテープが必要になります。

つまり、必要なストレージの合計は、以下のようになります。

テープ9本 (現在のバックアップ用) +テープ18本 (復旧データ用) =テープ27本

次に、クリーニング スロット分を差し引いて、ライブラリの容量を計算します。

20スロット/ライブラリ- 1(クリーニング スロット) = 19(使用可能なスロット)

したがって、スロットが27 - 19 = 8足りないということになり、以下のいずれかの処理が必要になります。

- ライブラリを増やす。
- 保存データを圧縮する。
- オンラインで保存する復旧データを1セットだけにする。

第3章: Arcserve Backup インストールの計画

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

サポートしているプラットフォーム 66
サポート デバイス 67
Arcserve Backup のインストールに必要なディスク空き容量 70
インストール方法 71
Arcserve Backup サーバ インストールのタイプ 73
caroot ユーザ アカウント 77
データベース要件 78
Global Dashboard に関する考慮事項 88
アップグレードに関する考慮事項 90
製品ライセンスの要件 96
インストール処理のオペレーティング システムに対する影響 97

サポートしているプラットフォーム

Arcserve Backup for Windows Server コンポーネントにより、以下のプラットフォームで実行しているエージェントを保護することができます。

- Windows
- UNIX
- Linux
- Mac OS X

サポートされるオペレーティングシステムの最新のリストについては、互換性マトリクスを参照してください。

サポート デバイス

使用するハードウェア デバイスと Arcserve Backup との互換性を確認するには、このリンクで最新の認定デバイス リストを参照してください。

テープ ライブラリのインストール

Arcserve Backup ベース製品には、単一ドライブ テープ ライブラリのサポートが含まれています。複数のドライブを含むテープ ライブラリを使用している場合は、Tape Library Option を個別にインストールする必要があります。また、複数ドライブのライブラリが接続された個々の Arcserve Backup プライマリ サーバまたは Arcserve Backup スタンドアロン サーバで、ライセンスを登録する必要があります。

テープ エンジンを初めて起動したときに、Arcserve Backup は自動的にライブラリを環境設定します。

Tape RAID 操作をご使用の環境で実行するには、Tape Library Option のラインセンスを登録する必要があります。ライセンスを登録した後は、Tape RAID デバイスがローカル接続されたプライマリ サーバまたはメンバ サーバで [デバイス環境設定] を実行して、Tape RAID デバイスを環境設定することができます。詳細については、「Tape Library Option ユーザ ガイド」を参照してください。

Storage Area Network(SAN) のインストール

Arcserve Backup ベース製品には、Storage Area Network (SAN) 操作のサポートが含まれています。

使用している SAN にプライマリサーバ、およびライブラリを共有する 1 つ以上のメンバサーバが含まれている場合、別にインストールされている Storage Area Network (SAN) オプションが必要です。プライマリサーバにオプションをインストールして、そのオプションのライセンスを登録する必要があります。

Arcserve Backup のインストールに必要なディスク空き容量

Arcserve Backup for Windows は、Windows x64 および x86 のオペレーティング システムにインストールできます。必要とされるディスク空き容量は、バックアップ サーバにインストールされる Windows のバージョン、およびインストールする Arcserve Backup サーバのタイプによって異なります。

以下の情報は、Arcserve Backup for Windows ベース製品、Arcserve Backup Client Agent for Windows、および Arcserve Backup 診断ユーティリティをインストールするために必要なディスク空き容量を示しています。

- Windows x64 システム
  - プライマリ サーバおよびスタンドアロン サーバ -- 1 ～ 2.13GB
  - メンバ サーバ -- .71GB (727MB) ～ 1.97 GB
- Windows x86 システム
  - プライマリ サーバおよびスタンドアロン サーバ -- .77GB (788MB) ～ 1.34 GB
  - メンバ サーバ -- .67GB (690MB) ～ .91GB (932MB)

注： バックアップ サーバ上に Agent Deployment セットアップ ファイルをインストールする場合は、上記の容量に 1.4GB を追加する必要があります。

インストール方法

以下の方法で、Arcserve Backup をインストールできます。

- **インストール ウィザード** -- インストール ウィザードは、ローカル システムとリモート システムに Arcserve Backup をインストールするための対話式アプリケーションです。

  インストール ウィザードでは、次のインストール オプションを指定します。

  インストール タイプまたはアップグレード タイプ

  ローカル システム、リモート システム、クラスタ環境に Arcserve Backup をインストールしたり、自動インストールの実行に使用するレスポンス ファイルを作成したりできます。

  リモート インストールを実行する場合は、インストール ウィザードで複数のリモート システムに Arcserve Backup を同時にインストールできます。リモート インストールでは、ターゲットのリモート システムを異なる Arcserve Backup サーバ タイプ、異なる Arcserve Backup エージェントとオプション、またはその両方で構成することができます。

  注： 以前のリリースから Arcserve プライマリ サーバにアップグレードしている場合は、[ローカル インストール/アップグレード]オプションを選択する必要があります。Arcserve Backup は、リモート システムでの以前のリリースから Arcserve プライマリ サーバへのアップグレードはサポートしていません。

  Arcserve サーバ タイプ

  インストールする Arcserve サーバのタイプを指定できます。詳細については、「Arcserve Backup サーバ インストールのタイプ」を参照してください。

  Arcserve Backup 製品

  ターゲット システムにインストールする Arcserve Backup エージェント、オプション、および他のコンポーネントを指定できます。

  Arcserve データベース

  Arcserve Backup データベースに使用するアプリケーションを指定および設定できます。Microsoft SQL Server 2014 SP2 Express Edition または Microsoft SQL Server をインストールできます。

  Microsoft SQL Server 2014 SP2 Express は、Arcserve Backup に付属している無料のデータベース アプリケーションです。Microsoft SQL Server 2014 SP2 Express Edition は、Arcserve Backup サーバにインストールする必要があります。詳細については、「Microsoft SQL Server 2014 SP2 Express Edition に関する考慮事項」を参照してください。

Microsoft SQL Server は、拡張性の高いデータベース アプリケーションで、Arcserve Backup サーバまたはご使用の環境内の他のシステムにインストールできます。

- **サイレント インストール**--サイレント インストールではユーザによる操作が必要なく、レスポンス ファイルを使用することで処理を簡略化します。

  重要：Arcserve Backup は、レスポンス ファイルを使用した以前のリリースから Arcserve プライマリ サーバへのアップグレードはサポートしていません。

  サイレント インストールについては、「サイレント インストール レスポンス ファイルの作成」を参照してください。

Arcserve Backup サーバ インストールのタイプ

Arcserve Backup は、以下のインストールのタイプをサポートしています。

高速

バックアップ環境を保護するために必要な Arcserve Backup 製品およびコンポーネントをインストールすることによって、インストール プロセスを簡略化できます。高速インストールでは、一部のセットアップ ページがスキップされます。Arcserve データベースの設定を省略して、Microsoft SQL Express を Arcserve のデータベースとしてインストールできます(Microsoft のデフォルト設定) 。高速インストールは、ローカルの新規インストールにのみ適用されます。ローカル マシンにすでに以前のリリースの Arcserve Backup 製品がインストールされている場合、 [高速]オプションは利用できません。

注： 高速インストールは非クラスタ マシンのみをサポートします。

高速インストールでは、以下の製品とコンポーネントがデフォルトでインストールされますが、インストール ウィザードで不要なコンポーネントを選択解除できます。

製品/コンポーネント	デフォルトのインストール場所 (x86)	デフォルトのインストール場所 (x64)
スタンドアロン サーバ	c:\program files\CA\ARCserve Backup	c:\program files (x86)\CA\ARCserve Backup
マネージャ(コンソール)	c:\program files\CA\ARCserve Backup	c:\program files (x86)\CA\ARCserve Backup
Tape Library Option	c:\program files\CA\ARCserve Backup	c:\program files (x86)\CA\ARCserve Backup
Enterprise Module	c:\program files\CA\ARCserve Backup	c:\program files (x86)\CA\ARCserve Backup
Global Dashboard	c:\program files\CA\ARCserve Backup\GlobalDashboard	c:\program files (x86)\CA\ARCserve Backup\GlobalDashboard
Disaster Recovery Option	c:\program files\CA\ARCserve Backup	c:\program files (x86)\CA\ARCserve Backup
Client Agent for Windows	c:\program files\CA\ARCserve Backup Client Agent for Windows	c:\program files\CA\ARCserve Backup Client Agent for Windows
Agent for Open Files for Windows (BAOF サーバおよび BAOF コンソールを含む)	c:\program files\CA\ARCserve Backup Agent for Open Files	c:\program files (x86)\CA\ARCserve Backup Agent for Open Files
Agent Deployment セットアップ ファイル	c:\program files\CA\ARCserve Backup\Packages\AgentDeploy	c:\program files (x86)\CA\ARCserve

		Backup\Packages\AgentDeploy
セットアップ プログラムによって環境で検出されるアプリケーション エージェント (たとえば、Agent for Microsoft Exchange Server や Agent for Microsoft SQL Server など)	c:\program files\CA\ARCserve Backup Agent for Microsoft Exchange c:\program files\CA\ARCserve Backup Agent for Microsoft SQL Server	c:\program files\CA\ARCserve Backup Agent for Microsoft Exchange c:\program files\CA\ARCserve Backup Agent for Microsoft SQL Server
診断ユーティリティ	c:\program files\CA\ARCserve Backup Diagnostic	c:\program files (x86)\CA\ARCserve Backup Diagnostic

カスタム

インストールする個々のコンポーネント、エージェント、およびオプションを指定できます。

Arcserve マネージャ コンソール

グラフィカル ユーザ インターフェース(GUI) で構成され、ご使用の環境の Arcserve スタンドアロン サーバ、プライマリ サーバ、およびメンバ サーバで実行する処理を管理できます。

Arcserve スタンドアロン サーバ

サーバに対してローカルで実行されるジョブの実行、管理、および監視を行うことが可能な単一サーバで構成されます。

Arcserve プライマリ サーバ

Arcserve Backup ドメイン内の単一のセントラル サーバで構成され、メンバ サーバおよびプライマリ サーバ上で実行されるバックアップ ジョブおよびリストア ジョブをサブミット、管理、およびモニタできます。

プライマリ サーバを使用すると、メンバ サーバに関連したデバイスおよびライセンスの管理、レポートの作成、Alert 通知、そしてドメイン内の全サーバのアクティビティ ログ データの表示ができます。

テープ ライブラリなどのストレージ デバイスを、プライマリ サーバに接続することができます。プライマリ サーバまたはリモート システム上に Arcserve Backup データベースを展開できます。

一元管理機能を有効するには、Central Management Option をインストールしてライセンスを登録する必要があります。

注： プライマリ サーバを使用した日常業務の管理の詳細については、「一元管理」を参照してください。

Arcserve メンバ サーバ

Arcserve Backup ドメイン内のサーバで構成され、プライマリ サーバからジョブおよびデバイスに関する指示を受け取ります。メンバ サーバは、進行中のジョブ、ジョブ履歴、およびアクティビティ ログ データに関する情報をプライマリ サーバへ送信し、その情報は Arcserve Backup データベースに保存されます。

テープ ライブラリなどのストレージ デバイスを、メンバ サーバに接続することができます。

一元管理機能を有効にするには、サーバをメンバ サーバに指定して、プライマリ サーバが管理するドメインに追加する必要があります。

注： メンバ サーバを使用した日常活動の管理の詳細については、「一元管理」を参照してください。

その他

このオプションにより、Arcserve Backup サーバ、エージェント、およびオプションのインストールをカスタマイズできます。

Arcserve Backup サーバ オプション

以下の表はインストール可能な Arcserve Backup オプションを Arcserve Backup サーバのタイプごとに示したものです。

オプション	スタンドアロン サーバ	プライマリ サーバ	メンバ サーバ
Central Management Option		利用可能	
Tape Library Option	利用可能	利用可能	
Storage Area Network (SAN) Option		利用可能	
Enterprise Module	利用可能	利用可能	利用可能
Disaster Recovery Option	利用可能	利用可能	利用可能
Global Dashboard	利用可能	利用可能	利用可能
NDMP NAS Option	利用可能	利用可能	

注： Arcserve Backup のインストール後に Arcserve Backup サーバ ベース オプションをインストールまたはアンインストールするには、サーバ管理マネージャを使用してタスクを完了します。詳細については、「*管理者ガイド*」を参照してください。

caroot ユーザ アカウント

Arcserve Backupでは、管理目的で独自の認証方式を使用しています。Arcserve Backup をインストールする際、「caroot」というデフォルトのユーザ名が作成されます。caroot を使用して Arcserve Backup マネージャコンソールにログインできます。

デフォルトの caroot ユーザ アカウントには、Arcserve Backup のすべての機能に対する root 権限が割り当てられています。caroot ユーザ プロファイルのパスワードはソフトウェアの設定時に設定できますが、ソフトウェアの設定後にユーザ プロファイル マネージャを使用して設定することもできます。また、ユーザ プロファイル マネージャを使用して追加のユーザ プロファイルを作成することもできます。

caroot パスワードは、任意の英数字と特殊文字を組み合わせて指定できますが、15 バイトを超えないようにしてください。合計 15 バイトのパスワードは、およそ 7 ～ 15 文字に相当します。

注： Arcserve Backup のユーザ名は、Arcserve Backup の機能へのアクセスのみを制御します。このユーザ名をオペレーティング システムのログイン名およびパスワードと混同しないようにしてください。

データベース要件

ストレージ環境を管理するために、Arcserveバックアップでは以下のいずれかのデータベースアプリケーションが必要になります。

- Microsoft SQL Server 2014 SP2 Express Edition
- Microsoft SQL Server

このリリースの Arcserve Backup にアップグレードしている場合は、データを古い Arcserve データベースから Microsoft SQL Server Express Edition または Microsoft SQL Server にマイグレートできます。

注：Arcserve アップグレードが可能な製品の一覧については、「サポート対象のアップグレード」を参照してください。

Microsoft SQL Server 2014 SP2 Express Edition に関する考慮事項

Microsoft SQL Server 2014 SP2 Express Edition は、Microsoft SQL Server の簡易バージョン(無料) であり、Arcserve Backup に付属しています。Arcserve Backup データベースで Microsoft SQL Server 2014 SP2 Express Edition を使用することを検討している場合は、以下の情報を確認してください。

- Arcserve システムアカウントが Microsoft SQL Server 2014 SP2 Express Edition データベースに対する管理者権限を持つことを確認してください。
- Microsoft SQL Server 2014 SP2 Express Edition は、リモート操作をサポートしていません。Arcserve データベースを、Arcserve Backup サーバにローカルインストールする必要があります。
- Microsoft は、ドメインコントローラとして機能している Windows Server システム上で、ローカルシステムアカウント、ローカルサービスアカウント、またはネットワークサービスアカウントを使用して Microsoft SQL Server 2014 SP2 Express Edition を実行することを推奨していません。ドメインコントローラとして機能しているシステムに Arcserve Backup をインストールすると、Arcserve Backup データベース(ARCSERVE_DB) はローカルシステムアカウント、その他のすべてのサービスはネットワークサービスアカウントを使用して通信を行うように設定されます。ドメインコントローラとして機能する Windows Server システムで Arcserve Backup データベースが通信できるようにするために、Arcserve Backup をインストールした後で、Microsoft SQL Server 2014 SP2 Express Edition のアカウントを Windows ドメインユーザのアカウントに変更する必要があります。

  注： Windows ドメインユーザアカウントに Microsoft SQL Server 2014 SP2 Express Edition アカウントを変更する方法の詳細については、Microsoft SQL Server ドキュメントを参照してください。
- Microsoft SQL Server 2014 2 Express Edition が正常に機能するためには、.NET Framework 4.5.1 SP がシステムにインストールされている必要があります。Microsoft .NET Framework 4.5.1 は Arcserve Backup に付属しており、Arcserve Backup インストールメディアに格納されています。
- Microsoft SQL Server 2014 SP2 Express Edition が Arcserve Backup 環境のニーズを満たしていないと考えられる場合は、[サーバ環境設定ウィザード]を使用して Arcserve Backup データベースを Microsoft SQL Server に変換してから、既存のデータを変換が完了した後の新しいデータベースにマイグレートできます。Arcserve Backup をインストールまたはアップグレードした後で、データベースをいつでも変換できます。

注： Microsoft SQL Server 2014 SP2 Express Edition から Microsoft SQL Server へのアップグレードの詳細については、「管理者ガイド」を参照してください。

- Arcserve Backup は、Microsoft SQL Server データベースから Microsoft SQL Server 2014 SP2 Express データベースへのデータのマイグレートをサポートしていません。そのため、現在 Microsoft SQL Server を実行している環境では、Arcserve Backup データベース用に Microsoft SQL Server を使用する必要があります。
- Global Dashboard については、Arcserve Backup データベースを、Microsoft SQL Server Express がインストールしてあるセントラルプライマリサーバ用に設定することはできません。Microsoft SQL Server 2005 以降がセントラルプライマリサーバにインストールされる必要があります。
- 環境内で実行されている Microsoft SQL Server 2014 SP2 Express Edition のバージョンに適用される最新のアップデート、セキュリティパッチ、サービスパックをダウンロードおよびインストールできます。Arcserve サポートの Web サイト上の互換性マトリクスは、現在の実装に適用可能なアップデートを確認するのに役立ちます。

  重要： Microsoft SQL Server Express Edition のサービスパックを Arcserve Backup の実装に適用する場合は常に、Arcserve サポートの Web サイト上の互換性マトリクスを確認する必要があります。互換性のあるサービスパックを確認した後、Microsoft の推奨に基づいてアップデートおよびセキュリティパッチを適用するようにしてください。
- 以下のようなアップグレードシナリオを考慮してください。
  - Arcserve Backup 16.5 SP1 (GA およびすべてのサービスパック) 以前のバージョンから Arcserve Backup r18.0 にアップグレードした場合、Arcserve データベースのデフォルトインスタンスは SQL Server 2014 SP2 Express Edition にアップグレードされます。
  - Arcserve Backup 17.0/r18.0 から Arcserve Backup r17.5 にアップグレードした場合、Arcserve Backup データベースのデフォルトインスタンスはアップグレードされません。Arcserve Backup データベースのデフォルトインスタンスは、SQL Server 2014 SP1 Express Edition です。このインスタンスは、Arcserve Backup サーバをアップグレードする前または後に、リンクを使用して手動でアップグレードできます。
  - Microsoft SQL Server Express Edition を使用して Arcserve Backup データベースをホストしているとします。Arcserve Backup データベースインスタンスの名前は ARCSERVE_DB (デフォルト) です。このシナリオには、前のリリースの Arcserve Backup はターゲットシステムにインストールされて**いない**けれども、Microsoft SQL Server Express Edition がターゲットシステムに

インストールされており、他のアプリケーション向けに ARCSERVE_DB という名のインスタンスが使用されているような状況も含まれます。

– Microsoft SQL Server Express Edition を使用して Arcserve Backup データベースをホストしているとします。Arcserve Backup データベース インスタンスの名前は ARCSERVE_DB ではありません。

このリリースにアップグレードする際、セットアップがデフォルトの Arcserve Backup データベース インスタンスを検索します。セットアップが ARCSERVE_DB という名のインスタンスを検出した場合、セットアップはインスタンスを Microsoft SQL Server 2014 SP2 Express Edition にアップグレードし、Arcserve Backup は前のリリースからのインスタンスとデータの使用を続行します。ただし、セットアップが ARCSERVE_DB という名のインスタンスを検出できない場合、セットアップは ARCSERVE_DB と呼ばれる新しいインスタンスを作成します。セットアップが新しいデータベース インスタンスを作成すると、前の Arcserve Backup リリースからの情報は新しいインスタンスでは保持されません。

注： /r17.0/r17.5 (すべてのサービス パック) からのアップグレードでは、Microsoft SQL Server は Microsoft SQL Server 2014 SP2 Express Edition にアップグレードされません。

Microsoft SQL Server データベースに関する考慮事項

Arcserve Backup データベースに Microsoft SQL Server を使用することを検討している場合は、以下の情報を確認してください。

- 本リリースへのアップグレードを予定していて、現在 Arcserve Backup データベースとして Microsoft SQL Server を実行している場合は、引き続き Microsoft SQL Server を Arcserve Backup データベースとして使用する必要があります。
- デフォルトでは、Arcserve Backup は単純復旧モデルを使用して Arcserve Backup データベース(ASDB) を作成します。このモデルを、正しい操作のために維持する必要があります。
- Microsoft SQL Server は、ローカルおよびリモートの通信をサポートします。この機能により、Arcserve Backup データベースを Arcserve Backup サーバにローカルまたはリモートで実行するように設定できます。

  注： 詳細については、「リモート データベースの考慮事項」を参照してください。

- デフォルトでは、Arcserve Backup はバックアップ ファイルとディレクトリに関する情報をカタログ データベースに保存します。そのため、カタログ データベースは Arcserve Backup データベースよりも速いペースでサイズが大きくなります。この動作と組織のニーズを考慮しながら、カタログ データベースの拡張に備えて十分な空きディスク領域を確保するように計画してください。
- Global Dashboard については、セントラル プライマリ サーバ Arcserve Backup データベース(ASDB) に Microsoft SQL Server 2008 以降がインストールされている必要があります(Microsoft SQL Server 2008 Express Edition、Microsoft SQL Server 2014 Express Edition、または Microsoft SQL Server 2000 はデータベースとしてサポートしていません) 。

  注： ブランチ プライマリ サーバについては、Arcserve Backup プライマリ サーバ用の最小要件以外に必要とされる追加のハードウェアやソフトウェアはありません。

- Microsoft SQL Server をサポートする Arcserve Backup を正常にインストールするには、デバイスを作成する権限を持つ sa アカウントのような管理アカウントが必要になります。

  Microsoft SQL Server をサポートする Arcserve Backup をインストールする際に、Arcserve Backup データベース(SQL) システム アカウントの入力が求められた場合は、*sa* アカウントを使用する必要があります。

- SQL Enterprise Manager で、データベースのセキュリティ モードを SQL セキュリティに設定します。これは SQL セキュリティを認証モードとして使用し、バック

アップするシステムが Windows ドメインの内側または外側に存在する場合に適用されます。

- セットアップ中に、Microsoft SQL Server 2008 または Microsoft SQL Server 2014 を Arcserve Backup データベースとして指定すると、Windows 認証または SQL Server 認証を使用して Microsoft SQL データベースと通信することができます。
- Microsoft SQL Server のアカウントが変更された場合は、サーバ環境設定ウィザードを使用して対応する変更を行う必要があります。
- Arcserve Backup データベース エンジンは、Microsoft SQL Server データベースのステータスを定期的にポーリングします。Microsoft SQL Server が正常に応答しない場合、データベース エンジンはその Microsoft SQL Server が使用不能でありシャットダウンされていると判断します(データベース エンジンのアイコンが赤色で表示されます) 。この問題を回避するには、以下のレジストリキーの値をより大きな値に変更して、Arcserve Backup データベース エンジンの待機時間を延長します。

  HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\ComputerAssociates\ Arcserve Backup\Base\Database\MSSQL\SQLLoginTimeout
- Arcserve Backup は、NEC CLUSTERPRO 環境においては、Microsoft SQL Server を Arcserve Backup サーバにローカル インストールすることはできません。NEC CLUSTERPRO 環境では、Arcserve Backup データベース インスタンスをリモート システムにインストールする必要があります。
- ODBC ドライバを設定できる場合、[ODBC データ ソース アドミニストレータ]ダイアログ ボックスの [システム DSN]タブにあるシステム データ ソース「ASNT」で、クライアント設定により TCP/IP 通信を使用できるようにする必要があります。

リモート データベースの考慮事項

リモート データベースを使用すると、ローカル マシン上のデータベースと同じような感覚で、単一のデータベースをシンプルかつ透過的な方法で共有することができます。この設定を使用した場合、情報はすべてリモート データベースに保存されるので、ローカル マシンにはデータベースが必要ありません。この設定は、以下のような状況に最適です。

- データベースに使用できる十分なディスク容量が、ローカルに存在しない場合。
- 組織としての要件がなく、データベースを 1 箇所に集約して管理を容易にする場合。
- Arcserve Backup サーバではないマシンを、Microsoft SQL Server 専用マシンとして使用する場合。
- クラスタ対応環境で SQL Server インスタンスを保護するためには、すべてのクラスタ ノードに Agent for Microsoft SQL Server を手動でインストールする必要があります。

  注： Microsoft SQL Server データベースのバックアップとリストアの詳細については、「Agent for Microsoft SQL Server ユーザ ガイド」を参照してください。
- サーバ環境設定ウィザードを使用して、リモート Arcserve データベースと Arcserve プライマリ サーバまたはスタンドアロン サーバの間の ODBC 通信を設定します。このウィザードを使用すると、特に、使用中の環境に複数の Arcserve Backup サーバがある場合、サーバ間で効率の良い通信を設定できます。
- Arcserve データベース インスタンスをホストしているシステムと Arcserve Backup が通信できるようにするには、SQL Server データベース インスタンスと Arcserve サーバ間の TCP/IP 通信を有効にする必要があります。

  注： 詳細については、「Microsoft SQL Server データベースで TCP/IP 通信を有効にする方法」を参照してください。

重要： Microsoft SQL Server 2014 SP2 Express Edition は、リモート データベース通信をサポートしていません。

注： デバイスの設定およびデータベース保護ジョブの変更の詳細については、「*管理者ガイド*」を参照してください。

Microsoft SQL Server データベースで TCP/IP 通信を有効にする方法

Microsoft SQL Server 2008 以降を使用して Arcserve データベース インスタンスをホストしていて、Arcserve Backup データベースがリモート システムにある場合、インストール ウィザードがリモート システム上のデータベースと通信できない場合があります。

インストール ウィザードがリモート ホストと通信できるようにするには、Arcserve Backup をインストールする前に、Arcserve Backup サーバと Arcserve Backup データベースをホストするサーバの間の TCP/IP 通信を有効にする必要があります。

Microsoft SQL Server 2008 以降のシステムで TCP/IP 通信を有効にするには、SQL Server Configuration Manager を実行し、SQL Server インスタンスに対して TCP/IP 通信を有効にします。TCP/IP 通信を適用するには、すべての Microsoft SQL Server サービスを再起動します。

注：Microsoft SQL Server 2008 では、SQL Server Native Client 10.0 ドライバを使用する必要があります。

Agent for Arcserve Database

Arcserve Backup Agent for Arcserve Database は、Arcserve Backup Agent for Microsoft SQL Server の一種です。このエージェントは、Arcserve Backup をインストールするときに自動的にインストールされるか、または Arcserve Backup データベースの場所を変更するか、クラスタの複数のノードにインストールする場合は、特別なユーティリティを使用して手動でインストールされます。

SQLAgentRmtInst.exe という名前のこのユーティリティは、Arcserve Backup のインストール時に、Arcserve Backup ホーム ディレクトリの Packages サブフォルダ内にある ASDBSQLAgent というフォルダに格納されます。Arcserve Backup サーバではないコンピュータにこのエージェントをインストールする場合は、エージェントをインストールするシステムに ASDBSQLAgent フォルダをコピーして、そのマシンで SQLAgentRmtInst.exe ユーティリティを実行します。

Agent for Arcserve Database では、Arcserve Backup データベース自体をバックアップし、リストアできます。また、Arcserve Backup データベースを含む Microsoft SQL Server インスタンスから、システム データベースや惨事復旧エレメントをバックアップし、リストアできます。Agent for Microsoft SQL Server と共に Agent for Arcserve Database をインストールすると、Agent for Microsoft SQL Server で Arcserve Backup データベースの存在を認識できるようになります。さらに、Arcserve Backup と連携して、Arcserve Backup データベースに適用できる特別な復旧方式が提供されます。

Arcserve Backup を以前のリリースからアップグレードする場合、Agent for Arcserve Database をアップグレードする必要があります。これは、Arcserve Backup データベースの現在のバージョンが、エージェントの現在のバージョンによって保護されることを保証するためです。そのため、[コンポーネント] ダイアログ ボックスの製品選択ツリーでは、Agent for Microsoft SQL Server の横のチェック ボックスをオフにすることはできません。

以下のいずれかの状況では、Agent for Arcserve Database をインストールするスタンドアロンのユーティリティを使用できます。

- Arcserve Backup データベースを移動した場合
- 誤ってエージェントを削除してしまったために、再インストールする場合
- クラスタの追加ノードにエージェントをインストールする場合
- Arcserve Backup インストーラで直接リモート コンピュータにエージェントをインストールできない場合

インストールの進行状況ログ

Arcserve Backup および必要なエージェントとオプションをすべてインストールした後で、Arcserve Backup はインストールの進行状況ログを作成します。インタラクティブ、サイレント、自動インストールに失敗した場合は、このログを参考にできます。インストールの進行状況ログは、インストール時に問題が発生した場合に、Arcserve カスタマサポートまで連絡いただく際に役立ちます。

- **インタラクティブ インストール** -- Arcserve Backup のベース製品、エージェント、またはオプションのインストールに失敗した場合は、[インストール サマリ]ダイアログ ボックスからインストールの進行状況ログにアクセスします。インストールの進行状況ログを表示するには、[インストール サマリ]ダイアログ ボックスのアプリケーションの横のエラー アイコンをダブルクリックします。
- **サイレントおよび自動インストール** -- インストールの進行状況ログには、以下のディレクトリからアクセスできます。

  <system drive>:\WINDOWS\Temp\CA_*.tmp

  それぞれのインストール セッションに対して、Arcserve Backup が固有の CA_*.tmp ディレクトリ(*はランダムな番号) を作成します。このディレクトリ内に、*MACHINENAME* という名前のディレクトリと ProdWiz.log という名前のテキスト ファイルが表示されます。*MACHINENAME* は、Arcserve Backup をインストールしたコンピュータのマシン名です。

  - ProdWiz.log - マスタ セットアップ ログ。
  - *MACHINENAME ディレクトリ- 、エージェント、オプションのインストール時に作成されたログ ファイルを含むディレクトリです。*Arcserve Backup

    たとえば、ARCSERVE.log は Arcserve Backup のベース製品のインストール時に作成されたログ ファイルです。Tape Library Option をインストールした場合は、<マシン名> ディレクトリ内の OPTTLO.LOG という名前のインストールの進行状況ログにアクセスできます。

Global Dashboard に関する考慮事項

Arcserve Backup ベース製品には、Global Dashboard 操作のサポートが含まれます。

Global Dashboard の環境設定は、Arcserve Backup のインストール中またはインストール後に実行できます。ただし、Global Dashboard を設定する前に、以下を考慮してください。

- Global Dashboard 環境内のどのサーバをセントラルプライマリサーバとして設定するか。

  セントラルプライマリサーバは、1 つの Global Dashboard 環境内に 1 台のみ設定できます。

  - セントラルプライマリサーバを選択する際に考慮すべき主な点は、データベースのサイズです。選択したセントラルプライマリサーバに、登録されているすべてのブランチプライマリサーバから受け取る Dashboard データを保存できる十分な容量があることを確認してください。
  - セントラルプライマリサーバを選択する際には、サーバのパフォーマンスも考慮する必要があります。セントラルプライマリサーバと、関連付けられているすべてのブランチプライマリサーバとの間のデータインターフェースが、速度、効率、信頼性において十分であることを確認してください。
  - セントラルプライマリサーバを選択する際は、データベースのタイプも考慮する必要があります。

  Global Dashboard では、セントラルプライマリサーバは Microsoft SQL Server /2008/2008 R2/2012/2014/2016/2017 のみをサポートしています。Microsoft SQL /2008/2008 R2/2012/2014/2016/2017 Express エディションおよび Microsoft SQL Server 2000 および 2005 はサポートしていません。

- Global Dashboard 環境内のどのサーバをブランチプライマリサーバとして設定するか。

  ブランチプライマリサーバは、各サーバロケーションにおいて、Arcserve Backup ドメイン内の(ドメインメンバサーバではなく) プライマリサーバまたはスタンドアロンサーバである必要があります。

- 環境設定の処理中、Arcserve Backup データベースエンジンは数分間シャットダウンします。Arcserve Backup ジョブがスケジュールされておらず、ほかとの競合のない都合の良い時間にインストールを計画してください。

- Global Dashboard ドメインで、ブランチプライマリサーバをメンバサーバに降格するか、または、セントラルプライマリサーバとして設定するプライマリサーバを変更する場合に、古いプライマリサーバの情報を収集し、継続的に使用し

たい場合があります。Global Dashboard を使用すると、古いプライマリサーバからこの情報をエクスポート(および保存)して、新しいプライマリサーバにインポートできます。

ライセンスの要件:

- Global Dashboard 機能を有効にするには、登録済みのブランチプライマリサーバをすべてカバーする複数ライセンスと共に、セントラルプライマリサーバで有効な Arcserve Backup Global Dashboard ライセンスを持っている必要があります。(ブランチプライマリサーバでは Global Dashboard ライセンスをインストールする必要はありません)。
- 登録済みの各ブランチプライマリサーバは、Global Dashboard ライセンスを 1 カウントずつ占有します。登録済みのブランチ数がライセンスの最大限度を超えた場合、そのセントラルプライマリサーバにはブランチサイトを新規登録できません。
- 以下の各シナリオに対して、ライセンスステータスの確認が実施されます。
  - ブランチサイトを登録する場合
  - ブランチサイトを再登録する場合
  - フルデータ同期を実行する場合
  - 増分同期を実行する場合
- ライセンスステータスの確認が失敗した場合、追加のライセンスを取得するか、再度既存のライセンスを割り当ててセントラルプライマリサーバへのデータ同期を有効にする必要があります。(各ブランチサイトのライセンスステータスはセントラルマネージャダイアログボックス上に表示されます)。

  注: セントラルマネージャからブランチサーバを削除すると、そのブランチが占有していたライセンスカウントがリリースされ、別のブランチサーバへのそのライセンスカウントを再度割り当てることができます。

アップグレードに関する考慮事項

以下のセクションでは、Arcserve Backup のアップグレード前の確認事項について説明します。

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

- サポート対象のアップグレード
- 旧バージョンとの互換性
- Global Dashboard のアップグレード
- 以前のリリースからのデータマイグレーション

サポート対象のアップグレード

以下のいずれかのバージョンの Arcserve Backup を現在使用している場合は、以下の製品からこのリリースにアップグレードできます。

- Arcserve Backup r17.5 for Windows -- General Availability (GA) リリースと最新のサービスパックがすべて含まれます。
- Arcserve Backup r17.0 for Windows -- General Availability (GA) リリースと最新のサービスパックがすべて含まれます。
- Arcserve Backup r16.5 for Windows -- General Availability (GA) リリースと最新のサービスパックがすべて含まれます。

重要: 以前のリリースの Arcserve Backup からアップグレードする場合、以前のリリースをアンインストールし、このリリースの Arcserve Backup をインストールする必要があります。ただし、以前の実装のデータベース情報を保持する場合は、以前の実装を Arcserve Backup 、16.5 SP1、r17、r17.5 または r17.5 SP1 にアップグレードしてから、r18.0 リリースにアップグレードする必要があります。

旧バージョンとの互換性

このリリースの Arcserve Backup サーバコンポーネントでは、以下の後方互換性がサポートされます。

- **エージェント** -- Arcserve Backup 18.0 サーバコンポーネントを使用して、以下のリリースのエージェントを管理できます。
  - Arcserve Backup r17.5 for Windows -- General Availability (GA) リリースと最新のサービスパックがすべて含まれます。
  - Arcserve Backup r17 for Windows -- General Availability (GA) リリースと最新のサービスパックがすべて含まれます。
  - Arcserve Backup r16.5 -- General Availability (GA) リリースと最新サービスパックが含まれます。

  以下の点に注意してください。

  - エージェント コンポーネントをバックアップする場合は、Arcserve Backup サーバコンポーネントのバージョンが、バックアップするエージェントのリリース以降である必要があります。このリリースの Arcserve Backup のエージェントは、以前のリリースの Arcserve Backup サーバコンポーネントでは使用できません。
  - パフォーマンスを最適化するには、お使いのバックアップ環境にインストールされているすべての Arcserve Backup エージェントおよびオプションを本リリースにアップグレードする必要があります。
  - 1 つのコンピュータにインストールされたすべての Arcserve Backup 製品は同じリリースである必要があります。

    例： Arcserve Backup サーバコンポーネント、Agent for Microsoft SQL Server および Agent for Virtual Machines が 1 つのコンピュータにインストールされています。Arcserve Backup サーバコンポーネントをこのリリースにアップグレードする場合は、Agent for Microsoft SQL Server および Agent for Virtual Machines も同じリリースにアップグレードする必要があります。

- **Arcserve Backup ドメイン** -- ドメイン内のすべての Arcserve Backup サーバは、同一バージョンの Arcserve Backup サーバコンポーネントを実行している必要があります。バージョンの異なる Arcserve Backup サーバコンポーネントを持つ Arcserve Backup サーバは、同じ Arcserve Backup ドメインに存在することはできません。

- **ジョブ スクリプト** --Arcserve Backup および Enterprise Backup の以前のバージョンで作成したバックアップ テープのデータをリストアし、ジョブ スクリプトをロードすることもできます。

Global Dashboard のアップグレード

Global Dashboard を以前のリリースからアップグレードする場合、1 つのセントラル プライマリ サーバと少なくとも 1 つの登録済みブランチ プライマリ サーバがある構成では、ブランチ プライマリ サーバをアップグレードする前に、セントラル プライマリ サーバをアップグレードするのが最も良い方法です。

以前のリリースからのデータ マイグレーション

Arcserve Backup を以前のリリースからアップグレードする場合、現在の設定の大部分を維持したまま、以前の Arcserve Backup データベースに保存されている情報を新しい Arcserve Backup データベースにマイグレートすることができます。

アップグレードが完了すると、Arcserve Backup は以下のタイプのデータを新しい Arcserve Backup データベースにマイグレートします。

- **認証** - アップグレード処理によって、ユーザ名やパスワードなど、すべての Arcserve Backup システム アカウント データが古いデータベースから新しいデータベースへマイグレートされます。

  注： メンバ サーバのアップグレードの場合、メンバ サーバが属するドメインにすでにユーザ アカウントやパスワードが存在する場合、Arcserve Backup はこれらをマイグレートしません。

- **ジョブ** - アップグレード処理により、ローテーション ジョブ、GFS ローテーション、カスタム ジョブなどのすべてのジョブ スクリプトが、古いデータベースから新しいデータベースへマイグレートされます。

  注： アップグレード処理は、古いインストールからデータベース廃棄ジョブ設定をマイグレートしません。データベース廃棄ジョブ設定を指定する場合の詳細は、*「管理者ガイド」*を参照してください。

- **コア データベース データ** - アップグレード処理により、すべてのコア データが古いデータベースから新しいデータベースにマイグレートされます。コア データは、ジョブ、メディア、セッション、デバイス、メディア プール、ファイル パス名、ファイル名などに関する情報で構成されます。

- **ログ データ** - アップグレード処理により、古いデータベースのアクティビティ ログ データが新しいデータベースにマイグレートされます。

- **セッション データ** - アップグレード処理により、セッション データが、古いデータベースから新しいデータベースにマイグレートされます。

  注： セッション データのマイグレート処理には時間がかかる場合があります。ただし、ファイル レベルおよびセッション レベルのリストアを、アップグレードおよびマイグレーション処理が完了した後にすぐ行うことができます。

- **カタログ データ** - アップグレード処理により、カタログ データベース データが、古いデータベースから新しいデータベースにマイグレートされます。

  注： カタログ データのマイグレート処理には時間がかかる場合があります。進捗状況ダイアログ ボックスは表示されません。

製品ライセンスの要件

Arcserve 製品のライセンスに関する詳細については、Arcserve ライセンス ユーザヘルプを参照してください。

インストール処理のオペレーティングシステムに対する影響

Arcserve Backup インストール処理は、Microsoft Installer Package (MSI) というインストールエンジンを使用して、さまざまな Windows オペレーティングシステムのコンポーネントを更新します。MSI に含まれるコンポーネントにより、Arcserve Backup はカスタムアクションを実行し、Arcserve Backup のインストール、更新およびアンインストールが可能になります。以下の表では、カスタムアクションと影響を受けるコンポーネントについて説明します。

注： Arcserve Backup のインストールおよびアンインストールを行う場合、すべての Arcserve Backup MSI パッケージは、この表にリストされたコンポーネントを呼び出します。

コンポーネント	説明
CallAllowInstall	インストール処理で現在の Arcserve Backup インストールに関する状態を確認できます。
CallPreInstall	インストール処理で MSI プロパティの読み取りと書き込みが可能になります。たとえば、MSI から Arcserve Backup インストールパスを読み取ります。
CallPostInstall	インストール処理でインストールに関するさまざまなタスクを実行できます。たとえば、Arcserve Backup を Windows レジストリに登録します。
CallAllowUninstall	アンインストール処理で現在の Arcserve Backup インストールに関する状態を確認できます。
CallPreUninstall	アンインストール処理でアンインストールに関するさまざまなタスクを実行できます。たとえば、Windows レジストリから Arcserve Backup の登録を削除します。

更新されるディレクトリ

インストール処理では、デフォルトで以下のディレクトリに、Arcserve Backup ファイルのインストールと更新が行われます。

Arcserve Backup (ベース製品)

- C:¥Program Files¥CA¥Arcserve Backup (x86 オペレーティングシステム)
- C:¥Program Files (x86)¥CA¥Arcserve Backup (x64 オペレーティングシステム)
- C:\Program Files\CA\SharedComponents\Arcserve Backup
- C:\Program Files\Arcserve\SharedComponents\ArcservePKI
- C:\Program Files\Arcserve\SharedComponents\CA_LIC

Client Agent for Windows

- C:\Program Files\CA\Arcserve Backup Client Agent for Windows
- C:\Program Files\CA\SharedComponents\Arcserve Backup
- C:\Program Files\Arcserve\SharedComponents\ArcservePKI

x64 ベースのシステム用 Client Agent for Windows

- C:\Program Files (x86)\CA\Arcserve Backup Agent for Open Files
- C:\Program Files\Arcserve\SharedComponents\ArcservePKI
- C:\Program Files (x86)\Arcserve\SharedComponents\ArcservePKI
- C:\Program Files (x86)\CA\SharedComponents\Arcserve Backup

Agent for Virtual Machines

- C:\Program Files\CA\Arcserve Backup Client Agent for Windows
- C:\Program Files (x86)\CA\SharedComponents\Arcserve Backup

x64 ベースのシステム用 Agent for Virtual Machines

- C:\Program Files\CA\Arcserve Backup Client Agent for Windows
- C:\Program Files (x86)\CA\SharedComponents\ARCserve Backup

Agent for Open Files for Windows

- C:\Program Files\CA\Arcserve Backup Agent for Open Files\
- C:\Program Files\Arcserve\SharedComponents\ArcservePKI

x64 ベースのシステム用 Agent for Open Files for Windows

- C:\Program Files\CA\Arcserve Backup Agent for Open Files\
- C:\Program Files\Arcserve\SharedComponents\ArcservePKI
- C:\Program Files (x86)\Arcserve\SharedComponents\ArcservePKI

Agent Deployment セットアップファイル

- C:\Program Files\CA\Arcserve Backup\

Agent for Microsoft SQL Server

- C:\Program Files\CA\Arcserve Backup Agent for Microsoft SQL Server\
- C:\Program Files \CA\SharedComponents\Arcserve Backup
- C:\Program Files\Arcserve\SharedComponents\ArcservePKI

x64 ベースのシステム用 Agent for Microsoft SQL Server

- C:\Program Files\CA\Arcserve Backup Agent for Microsoft SQL Server\
- C:\Program Files \CA\SharedComponents\Arcserve Backup

- C:\Program Files (x86)\Arcserve\SharedComponents\ArcservePKI
- C:\Program Files\Arcserve\SharedComponents\ArcservePKI

Agent for Microsoft SharePoint Server

- C:\Program Files\CA\Arcserve Backup Agent for Microsoft SharePoint Server
- C:\Program Files\Arcserve\SharedComponents\ArcservePKI

x64 ベースのシステム用 Agent for Microsoft SharePoint Server

- C:\Program Files\CA\Arcserve Backup Agent for Microsoft SharePoint Server
- C:\Program Files (x86)\Arcserve\SharedComponents\ArcservePKI
- C:\Program Files\Arcserve\SharedComponents\ArcservePKI

Agent for Microsoft Exchange Server

- C:\Program Files\CA\Arcserve Backup Agent for Microsoft Exchange Server
- C:\Program Files\Arcserve\SharedComponents\ArcservePKI

x64 ベースのシステム用 Agent for Microsoft Exchange Server

- C:\Program Files\CA\Arcserve Backup Agent for Microsoft Exchange Server
- C:\Program Files (x86)\Arcserve\SharedComponents\ArcservePKI
- C:\Program Files\Arcserve\SharedComponents\ArcservePKI

Agent for Oracle

- C:\Program Files\CA\Arcserve Backup Agent for Oracle\
- C:\Program Files\Arcserve\SharedComponents\ArcservePKI

x64 ベースのシステム用 Agent for Oracle

- C:\Program Files\CA\Arcserve Backup Agent for Oracle\
- C:\Program Files (x86)\Arcserve\SharedComponents\ArcservePKI
- C:\Program Files\Arcserve\SharedComponents\ArcservePKI

Agent for Lotus Domino

- C:\Program Files\CA\Arcserve Backup Agent for Lotus Domino\
- C:\Program Files\Arcserve\SharedComponents\ArcservePKI

Agent for Sybase

- C:\Program Files\CA\Arcserve Backup Agent for Sybase
- C:\Program Files\Arcserve\SharedComponents\ArcservePKI
- C:\Program Files\Arcserve\SharedComponents\CA_LIC

Agent for Informix

- C:\Program Files\CA\C:\Program Files\CA\CA Arcserve Backup Agent for Informix
- C:\Program Files\Arcserve\SharedComponents\ArcservePKI
- C:\Program Files\Arcserve\SharedComponents\CA_LIC

診断ユーティリティ

- C:\Program Files\CA\Arcserve Backup Diagnostic\
- C:\Program Files\Arcserve\SharedComponents\ArcservePKI

Enterprise Option for SAP R/3 for Oracle

- C:\Program Files\CA\Arcserve Backup Enterprise Option for SAP R3 for Oracle\
- C:\Program Files\Arcserve\SharedComponents\ArcservePKI
- C:\Program Files\Arcserve\SharedComponents\CA_LIC

x64 ベースのシステム用 Enterprise Option for SAP R/3 for Oracle

- C:\Program Files\CA\Arcserve Backup Enterprise Option for SAP R3 for Oracle\
- C:\Program Files (x86)\Arcserve\SharedComponents\ArcservePKI
- C:\Program Files\Arcserve\SharedComponents\ArcservePKI
- C:\Program Files (x86)\Arcserve\SharedComponents\CA_LIC

Arcserve Backup は、Arcserve Backup ベース製品と同じディレクトリフォルダに以下の Arcserve Backup 製品をインストールします。

- Enterprise Module
- Disaster Recovery Option
- NDMP NAS Option

Arcserve Backup をデフォルトのインストールディレクトリにインストールするか、または Arcserve Backup を別のディレクトリにインストールすることができます。インストール処理では、さまざまなシステムファイルが以下のディレクトリにコピーされます。

C:\Windows\system

Arcserve Backup は、以下のディレクトリに設定ファイルをコピーします。

C:\Documents and Settings\<ユーザ名>

注： Arcserve Backup 未署名ファイルのリストを確認するには、「未署名の Arcserve Backup ファイル」を参照してください。

更新される Windows レジストリキー

インストール処理では以下の Windows レジストリキーが更新されます。

- デフォルトのレジストリキー

  HKLM\SOFTWARE\Computer Associates

- インストール処理では、システムの現在の設定に基づき、新しいレジストリキーが作成され、その他のさまざまなレジストリキーが変更されます。

インストールされるアプリケーション

インストール処理ではコンピュータに以下のアプリケーションがインストールされます。

- Arcserve ライセンス登録
- ArcservePKI (暗号化)
- Microsoft Visual C++ 2010 Redistributable
- Arcserve Backup サーバをインストールする場合、インストール処理では以下のアプリケーションもインストールされます。
  - Microsoft .NET Framework 4.5.1
  - Java Runtime Environment (JRE) 1.8.0.
  - Microsoft XML 6.0
- Microsoft SQL Express Edition を Arcserve Backup データベースとしてインストールする場合、以下のアプリケーションもインストールされます。
  - Microsoft SQL Server 2014 SP2 Express Edition
  - Microsoft Windows Installer 4.5 Redistributable
- Arcserve Backup Agent for Oracle (x86/x64) または Enterprise Option for SAP R/3 for Oracle (x86/x64) をインストールする場合、以下のアプリケーションもインストールされます。
  - Microsoft XML 6.0
  - Java Runtime Environment (JRE) 1.8.0.

Data Mover サーバ、Oracle エージェント、および SAP エージェント

UNIX/Linux Data Mover を UNIX および Linux サーバ上にインストールする場合、および、Agent for Oracle (UNIX/Linux) 、Agent for SAP R3 for Oracle (UNIX/Linux) をインストールする場合、インストール処理によって以下のアプリケーションがコンピュータにインストールされます。

- Sun および HPUX の場合、Arcserve Backup は、コンピュータの以下のディレクトリに JRE (Java Runtime Environment) をインストールします。

  /opt/Arcserve/SharedComponents/jre

- AIX オペレーティング システムの場合、Arcserve Backup は、コンピュータの以下のディレクトリに IBM JRE (IBM Java Runtime Environment) および Sun をインストールします。

  /opt/Arcserve/SharedComponents/jre
  /opt/Arcserve/SharedComponents/jre.sun

- Linux オペレーティング システムの場合、Arcserve Backup は、コンピュータの以下のディレクトリに JRE (Java Runtime Environment) をインストールします。

  /opt/Arcserve/SharedComponents/jre

未署名のバイナリファイル

Arcserve Backup は、サード パーティおよび Arcserve Backup によって開発された未署名のバイナリファイルをインストールします。以下の表は、これらのバイナリファイルについての説明です。

バイナリ名	ソース
ansiatl.dll	Microsoft
ATL80.dll	Microsoft
CALicense.msi	Arcserve ライセンス
Cazipxp.exe	Arcserve ライセンス
ccme_base.dll	EMC (RSA)
ccme_ecc.dll	EMC (RSA)
ccme_eccaccel.dll	EMC (RSA)
ccme_eccnistaccel.dll	EMC (RSA)
cdcdrom.sys	Microsoft
cdrom.sys	Microsoft
CFX2032.DLL	ChartFX
COMPRESS.EXE	Microsoft
cryptocme2.dll	EMC (RSA)
dbghelp.dll	Microsoft
GX1142R.dll	Classworks
icudt34.dll	IBM
icuin34.dll	IBM
icuio34.dll	IBM
icule34.dll	IBM
iculx34.dll	IBM
icutest.dll	IBM
icutu34.dll	IBM
icuuc34.dll	IBM
libeay32.dll	OpenSSL
libetpki_openssl_crypto.dll	EMC (RSA)
LogSet_rwtest13-vm22_20121025_163425.cab	Microsoft
mfc80.dll	Microsoft
mfc80CHS.dll	Microsoft
mfc80CHT.dll	Microsoft
mfc80DEU.dll	Microsoft
mfc80ENU.dll	Microsoft
mfc80ESP.dll	Microsoft
mfc80FRA.dll	Microsoft

mfc80ITA.dll	Microsoft
mfc80JPN.dll	Microsoft
mfc80KOR.dll	Microsoft
mfc80u.dll	Microsoft
mfcm80.dll	Microsoft
mfcm80u.dll	Microsoft
msdia80.dll	Microsoft
msi.dll	Microsoft
msstkprp.dll	Microsoft
msvcm80.dll	Microsoft
msvcp80.dll	Microsoft
msvcr71.dll	Microsoft
msvcr80.dll	Microsoft
Msvcrt40.dll	Microsoft
roboex32.dll	Blue Sky Software Corporation
sqlite3.dll	SQLite software
ssleay32.dll	Arcserve Backup
System.EnterpriseServices.Wrapper.dll	Microsoft
tpcdrom.sys	Microsoft
txf_wrapper.dll	Arcserve RHA
unzip.exe	Info-ZIP
vcomp.dll	Microsoft
Vim25Service2005.dll	Arcserve Backup
Vim25Service2005.XmlSerializers.dll	VMware
VimService2005.dll	Arcserve Backup
VimService2005.XmlSerializers.dll	VMware
xalan_messages_1_10.dll	Apache Software Foundation
xalan-c_1_10.dll	Apache Software Foundation
xerces-c_2_7.dll	Apache Software Foundation
xsec_1_2_0.dll	Apache Software Foundation
zlib1.dll	Zlib 圧縮ライブラリ
7za.exe	7-zip
ccme_asym.dll	EMC (RSA)
ccme_ecc_accel_fips.dll	EMC (RSA)
ccme_error_info.dll	EMC (RSA)
cryptocme.dll	EMC (RSA)
Data1.cab	Arcserve Backup
tcnative-1.dll	Apache Software Foundation
tomcat7.exe	Apache Software Foundation
alerthelp.cab	Arcserve Backup

サポートされる OS のない実行可能ファイル

Arcserve Backup は、サードパーティ、他の Arcserve 製品、および Arcserve Backup によって開発されたバイナリファイルをインストールします。これには、サポートされるオペレーティングシステムが指定されていない、マニフェストを含む実行可能ファイルが含まれています。以下の表は、これらのバイナリファイルについての説明です。

バイナリ名	ソース
tomcat7.exe	Apache Software Foundation
adrlogviewer.exe	Arcserve Backup
adrmain.exe	Arcserve Backup
drcreate.exe	Arcserve Backup
drscansession.exe	Arcserve Backup
drw.exe	Arcserve Backup
PEDRMain.exe	Arcserve Backup
PEDRStart.exe	Arcserve Backup
tapetest.exe	Arcserve Backup
UnivAgent.exe	Arcserve Backup
adrlogviewer.exe	Arcserve Backup
SetupSQL.exe	Arcserve Backup
UpgradeUtil.exe	Arcserve Backup
BAOFConfigMigration.exe	Arcserve Backup
CHGTEST.EXE	Arcserve Backup
cstmsgbox.exe	Arcserve Backup
Ofant.exe	Arcserve Backup
ofawin.exe	Arcserve Backup
CADiagInfo.exe	Arcserve Backup
CADiagSupport.exe	Arcserve Backup
CADiagWiz.exe	Arcserve Backup
ABFuncWrapper.exe	Arcserve Backup
acscfg.exe	Arcserve Backup
ashell.exe	Arcserve Backup
ASMsgCenter.exe	Arcserve Backup
ATLCFG.exe	Arcserve Backup
bab.exe	Arcserve Backup
CA.ARCserve.Communication Foundation.WindowsService.exe	Arcserve Backup
ca_auth.exe	Arcserve Backup

ca_backup.exe	Arcserve Backup
ca_dbmgr.exe	Arcserve Backup
ca_devmgr.exe	Arcserve Backup
ca_jobsecmgr.exe	Arcserve Backup
ca_loadasm.exe	Arcserve Backup
ca_log.exe	Arcserve Backup
ca_merge.exe	Arcserve Backup
ca_mmo.exe	Arcserve Backup
ca_qmgr.exe	Arcserve Backup
ca_recoverdb.exe	Arcserve Backup
ca_restore.exe	Arcserve Backup
ca_scan.exe	Arcserve Backup
CAAdvReports.exe	Arcserve Backup
caauthd.exe	Arcserve Backup
caclurst.exe	Arcserve Backup
cadiscovd.exe	Arcserve Backup
cadvwiz.exe	Arcserve Backup
caserved.exe	Arcserve Backup
casischk.exe	Arcserve Backup
caVER.exe	Arcserve Backup
CCIConfigSettings.exe	Arcserve Backup
cdbmergelog.exe	Arcserve Backup
chgtest.exe	Arcserve Backup
CloudAccountConfiguration.exe	Arcserve Backup
CstMsgBox.exe	Arcserve Backup
DBENG.exe	Arcserve Backup
dbgtool.exe	Arcserve Backup
DBtosql.exe	Arcserve Backup
dbtosql_exp.exe	Arcserve Backup
Dumpdb.exe	Arcserve Backup
DvConfig.exe	Arcserve Backup
ELOConfig.exe	Arcserve Backup
exptosql.exe	Arcserve Backup
GFSPRED.EXE	Arcserve Backup
GroupConfig.exe	Arcserve Backup
imagefix.exe	Arcserve Backup
IMGW2K.exe	Arcserve Backup
ImportNodeInfo.exe	Arcserve Backup

jobeng.exe	Arcserve Backup
JobWindow.exe	Arcserve Backup
JobWinUtil.exe	Arcserve Backup
jobwizard.exe	Arcserve Backup
LDBServer.exe	Arcserve Backup
LQserver.exe	Arcserve Backup
Mediasvr.exe	Arcserve Backup
Mergecat.exe	Arcserve Backup
MMOADMIN.exe	Arcserve Backup
msgeng.exe	Arcserve Backup
pfc.exe	Arcserve Backup
raidtest.exe	Arcserve Backup
rpcinfo.exe	Arcserve Backup
ServerMigration.exe	Arcserve Backup
SetupSQL.exe	Arcserve Backup
simulate.exe	Arcserve Backup
sqlclean.exe	Arcserve Backup
sqlclean_exp.exe	Arcserve Backup
Sqltosql.exe	Arcserve Backup
Svrless.exe	Arcserve Backup
tapecomp.exe	Arcserve Backup
tapecopy.exe	Arcserve Backup
tapetest.exe	Arcserve Backup
Aladmin.exe	Arcserve Backup
alert.exe	Arcserve Backup
InstallAlert.exe	Arcserve Backup
Catirpc.exe	Arcserve Backup
casdscsvc.exe	Arcserve Backup
CentralMgr.exe	Arcserve Backup
ASWANSync.exe	Arcserve Backup
admin.exe	Arcserve Backup
AgPkiMon.exe	Arcserve Backup
caagstart.exe	Arcserve Backup
ConfigBAF.exe	Arcserve Backup
dirwatcher.exe	Arcserve Backup

最新の OS をサポートしないマニフェストを含む実行可能ファイル

Arcserve Backup は、サードパーティ、他の Arcserve 製品、および Arcserve Backup によって開発されたバイナリファイルをインストールします。これには、最新のオペレーティングシステムをサポートしない、マニフェストを含む実行可能ファイルが含まれています。以下の表は、これらのバイナリファイルについての説明です。

バイナリ名	ソース
SDOInst.exe	Arcserve Backup
AgentDeploy.exe	Arcserve Backup
SetupFW.exe	Arcserve Backup
bdelobj_BAB.exe	Arcserve Backup
ASDBInst.exe	Arcserve Backup
DeleteOPT_W2K.exe	Arcserve Backup
SetupSQL_exp.exe	Arcserve Backup
UpdateCFG.exe	Arcserve Backup
BConfig.exe	Arcserve Backup
DBAconfig.exe	Arcserve Backup
liccheck.exe	Arcserve Backup
OraUpgrade.exe	Arcserve Backup
SPSO12Upgrade.exe	Arcserve Backup
UpdateCFG.exe	Arcserve Backup
ArcDrvInstall.exe	Arcserve Backup
checkia64.exe	Arcserve Backup
AgIfProb.exe	Arcserve Backup
ARCserveCfg.exe	Arcserve Backup
AsRecoverDB.exe	Arcserve Backup
AuthSetup.exe	Arcserve Backup
babha.exe	Arcserve Backup
BConfig.exe	Arcserve Backup
cabatch.exe	Arcserve Backup
carunjob.exe	Arcserve Backup
HDVSSCOM.exe	Arcserve Backup
DeployDummy.exe	Arcserve Backup
EMConfig.exe	Arcserve Backup
MergeIngres2Sql.exe	Arcserve Backup
SDOInst.exe	Arcserve Backup

AgentDeploy.exe	Arcserve Backup
DBAconfig.exe	Arcserve Backup
dsconfig.exe	Arcserve Backup
HelpLink.exe	Arcserve Backup
SetupFW.exe	Arcserve Backup
Uninstall.exe	Arcserve Backup
DBAconfig.exe	Arcserve Backup
CadRestore.exe	Arcserve Backup

無効なファイル バージョン情報が含まれるバイナリファイル

Arcserve Backup は、サード パーティ、他の Arcserve 製品、および Arcserve Backup によって開発された、無効なバージョン情報を含むバイナリファイルをインストールします。以下の表は、これらのバイナリファイルについての説明です。

バイナリ名	ソース
ABFuncWrapperTypeLib.dll	Arcserve Backup
casmgmtsvc.exe	タヌキソフトウェア
cryptocme2.dll	EMC (RSA)
decora-d3d.dll	Java Runtime Environment
decora-sse.dll	Java Runtime Environment
fxplugins.dll	Java Runtime Environment
glass.dll	Java Runtime Environment
glib-lite.dll	Java Runtime Environment
gstreamer-lite.dll	Java Runtime Environment
gvmomi.dll	VMware
icutest.dll	IBM
icutu34.dll	IBM
javafx-font.dll	Java Runtime Environment
javafx-iio.dll	Java Runtime Environment
jfxmedia.dll	Java Runtime Environment
jfxwebkit.dll	Java Runtime Environment
libcurl.dll	VMware
libeay32.dll	OpenSSL
libetpki_openssl_crypto.dll	EMC (RSA)
liblber.dll	VMware
libldap.dll	VMware
libldap_r.dll	VMware
libxml2.dll	Java Runtime Environment
libxslt.dll	Java Runtime Environment
MSClusterLib.dll	Microsoft
mxvfdwyr.dll	Microsoft
prism-d3d.dll	Java Runtime Environment
sqlite3.dll	SQLite software
TroubleTicketUtil.exe	Arcserve Alert
unzip.exe	Info-ZIP
Vim25Service2005.dll	Arcserve Backup

Vim25Service2005.XmlSerializers.dll	VMware
VimService2005.dll	Arcserve Backup
VimService2005.XmlSerializers.dll	VMware
WindowsServer2003-KB942288-v4-x86.exe	Microsoft
WindowsXP-KB942288-v3-x86.exe	Microsoft
wrapper.dll	タヌキソフトウェア
xalan_messages_1_10.dll	Apache Software Foundation
zlib1.dll	Zlib 圧縮ライブラリ

Windows セキュリティ要件に適合しないバイナリファイル

Arcserve Backup は、サードパーティ、他の Arcserve 製品、および Arcserve Backup によって開発された、Windows セキュリティ要件に適合しないバイナリファイルをインストールします。以下の表は、これらのバイナリファイルについての説明です。

バイナリ名	ソース
Acslsrdc.dll	Arcserve Backup
AGUIEXC.dll	Arcserve Backup
Albuild.dll	Arcserve Alert
AlertPackage.exe	Arcserve Alert
ARCserve.dll	Arcserve Backup
ARCserveMgr.exe	Arcserve Backup
Asbrdcst.dll	Arcserve Backup
ASCORE.dll	Arcserve Backup
ASDBEXP.dll	Arcserve Backup
asdbsql_exp.dll	Arcserve Backup
asdcen.dll	Arcserve Backup
ASETUPRES.dll	Arcserve Backup
Asm_db.dll	Arcserve Backup
asm_dt.dll	Arcserve Backup
Asm_mm.dll	Arcserve Backup
ASREMSVC.EXE	Arcserve Backup
Asvctl.dll	Arcserve Backup
asycfilt.dll	Microsoft
BaseLicInst.exe	Arcserve ライセンス
bdaemon2.exe	Arcserve Backup
bdelobj.exe	Arcserve Backup
brand.dll	Arcserve Backup
CAPatchManager.dll	Arcserve Backup
careports.exe	Arcserve Backup
casmgmtsvc.exe	タヌキソフトウェア
ccme_base.dll	EMC (RSA)
ccme_ecc.dll	EMC (RSA)
ccme_eccaccel.dll	EMC (RSA)
cdcdrom.sys	Microsoft
Cdict32.dll	Microsoft

CFX2032.DLL	ChartFX
cheyprod.dll	Arcserve Backup
comcat.dll	Microsoft
CommandBase.dll	Arcserve Backup
COMPRESS.EXE	Microsoft
Configencr.exe	Arcserve Backup
cryptintf.dll	Arcserve Backup
cryptocme2.dll	EMC (RSA)
CryptoWrapperDll.dll	Arcserve Backup
cstool.dll	Arcserve Backup
Ctl3d32.dll	Microsoft
Dbaxchg2.dll	Arcserve Backup
DeleteMe.exe	Arcserve Backup
demo32.exe	Flexera Software
diskLibPlugin.dll	VMware
dotnetfx35.exe	Microsoft
e55userupd.dll	Arcserve Backup
etpki_setup.exe	ArcserveETPKI
EtpkiCrypt.dll	Arcserve Backup
exchenum.dll	Arcserve Backup
fcrinst.dll	Arcserve Backup
fsminst.dll	Arcserve Backup
glib-2.0.dll	VMware
gobject-2.0.dll	VMware
gthread-2.0.dll	VMware
gvmomi.dll	VMware
GX1142R.dll	Classworks
HBMINST.DLL	Arcserve Backup
iconv.dll	VMware
icudt34.dll	IBM
icuin34.dll	IBM
icuio34.dll	IBM
icule34.dll	IBM
iculx34.dll	IBM
icutest.dll	IBM
icutu34.dll	IBM
icuuc34.dll	IBM
Interop.COMAdmin.dll	Microsoft
intl.dll	VMware

libcaopenssl_crypto.dll	ArcserveETPKI
libcaopenssl_ssl.dll	ArcserveETPKI
libcapki.dll	ArcserveETPKI
libcapki_ipthread.dll	ArcserveETPKI
libcapki_thread.dll	ArcserveETPKI
libcurl.dll	VMware
libeay32.dll	OpenSSL
libetpki_openssl_crypto.dll	EMC (RSA)
liblber.dll	VMware
libldap.dll	VMware
libldap_r.dll	VMware
libxml2.dll	VMware
licreg.dll	Arcserve ライセンス
licregres.dll	Arcserve ライセンス
MalwareAPI.dll	Arcserve Backup
MAPISis.dll	Arcserve Backup
MasterSetup.exe	Arcserve Backup
MasterSetup_Main.exe	Arcserve Backup
mfc42.dll	Microsoft
mfc42u.dll	Microsoft
MFC71u.dll	Microsoft
mfc80.dll	Microsoft
mfc80u.dll	Microsoft
mfcm80.dll	Microsoft
mfcm80u.dll	Microsoft
mscomct2.ocx	Microsoft
MSetupRes.dll	Arcserve Backup
MSetupResEx.dll	Arcserve Backup
msi.dll	Microsoft
msstkprp.dll	Microsoft
msvcirt.dll	Microsoft
msvcm80.dll	Microsoft
msvcp60.dll	Microsoft
msvcp71.dll	Microsoft
msvcp80.dll	Microsoft
msvcr71.dll	Microsoft
msvcr80.dll	Microsoft
msvcrt.dll	Microsoft
MSVCRT40.DLL	Microsoft

msxml3.dll	Microsoft
msxml3a.dll	Microsoft
msxml3r.dll	Microsoft
msxml4.dll	Microsoft
msxml4a.dll	Microsoft
msxml4r.dll	Microsoft
NotesUI.dll	Arcserve Alert
ofawin.dll	Arcserve Backup
oleaut32.dll	Microsoft
olepro32.dll	Microsoft
PatchManagerLog.dll	Arcserve Backup
PatchManagerService.exe	Arcserve Backup
PatchManagerUI.exe	Arcserve Backup
PMGUI.dll	Arcserve Backup
psapi.dll	Microsoft
roboex32.dll	Blue Sky Software Corporation
setup.exe	Arcserve Backup
SetupCLS.dll	Arcserve Backup
setupdd.351	Microsoft
setupdd.40	Microsoft
setupddf.351	Microsoft
setupddf.40	Microsoft
Signatures_Plugin.dll	Arcserve Backup
silent.exe	Arcserve ライセンス
sps15adp.dll	Arcserve Backup
SQLEXPR.EXE	Microsoft
sqlite3.dll	SQLite software
ssleay32.dll	VMware
stdole2.tlb	Microsoft
sysimgbase.dll	VMware
tpcdrom.sys	Microsoft
types.dll	VMware
unzip.exe	Info-ZIP
UpgradePatchManager.dll	Arcserve Backup
vcredist_x64.exe	Microsoft
vcredist_x86.exe	Microsoft
vixDiskLib.dll	VMware
vixDiskLibVim.dll	VMware
vixMntapi.dll	VMware

vmacore.dll	VMware
vmomi.dll	VMware
VMware-mount.exe	VMware
VMware-vdiskmanager.exe	VMware
VService.exe	Arcserve Backup
WindowsInstaller-KB893803-v2-x86.exe	Microsoft
wrapper.dll	タヌキソフトウェア
ws_backup.dll	Arcserve RHA
xalan_messages_1_10.dll	Apache Software Foundation
xalan-c_1_10.dll	Apache Software Foundation
xerces-c_2_7.dll	Apache Software Foundation
xoctl.dll	Arcserve RHA
xsec_1_2_0.dll	Apache Software Foundation
zlib1.dll	Zlib 圧縮ライブラリ
COMPRESS.EXE3	Microsoft
COMPRESS.EXE1	Microsoft
psapi.dll	Microsoft
cryptocme2.dll	EMC (RSA)
ccme_ecc_accel_fips.dll	EMC (RSA)
asbumngr.dll	Arcserve Backup
ccme_asym.dll	EMC (RSA)
ccme_ecc_accel_fips.dll	EMC (RSA)
ccme_error_info.dll	EMC (RSA)
cryptocme.dll	EMC (RSA)
Data1.cab	Arcserve Backup
tomcat7.exe	Apache Software Foundation

完全にアンインストールされないバイナリファイル

Arcserve Backup は、サード パーティ、他の Arcserve 製品、および Arcserve Backup によって開発された、完全にはアンインストールできないバイナリファイルをインストールします。以下の表は、これらのバイナリファイルについての説明です。

バイナリ名	ソース
C:\Program Files (x86)\Arcserve\SharedComponents\ArcservePKI\Windows\x86\32\uninstaller-.exe	Arcserve Backup
C:\Program Files (x86)\Arcserve\SharedComponents\ArcservePKI\Windows\amd64\64\uninstaller.exe	Arcserve Backup
C:\Program Files (x86)\Arcserve\SharedComponents\CA_LIC\lic98.dat	Arcserve ライセンス
C:\Program Files (x86)\Arcserve\SharedComponents\CA_LIC\lic98.log	Arcserve ライセンス
C:\Program Files (x86)\Arcserve\SharedComponents\CA_LIC\lic98-port	Arcserve ライセンス
C:\Windows\Downloaded Installations\{3D52BE33-2E8C-4A39-BECF-878DD4D58252}\CALicense.msi	Arcserve ライセンス
C:\Program Files (x86)\CA\SharedComponents\Jre	Java Runtime Environment
C:\$Mft	Microsoft
C:\inetpub\temp\appPools\APC47F.tmp	Microsoft
C:\msdia80.dll	Microsoft
C:\Program Files (x86)\Common Files\microsoft shared\	Microsoft
C:\Program Files (x86)\Microsoft SQL Server\	Microsoft
C:\Program Files (x86)\Microsoft Visual Studio 9.0\	Microsoft
C:\Program Files (x86)\Microsoft.NET\	Microsoft
C:\Program Files\Microsoft Logo\Software Certification Toolkit\Data\	Microsoft
C:\Program Files\Microsoft SQL Server\	Microsoft
C:\Users\Administrator\	Microsoft
C:\Windows\AppCompat\Programs\RecentFileCache.bcf	Microsoft
C:\Windows\assembly\NativeImages_v2.0.50727_32\	Microsoft
C:\Windows\bootstat.dat	Microsoft
C:\Windows\debug\PASSWD.LOG	Microsoft
C:\Windows\Downloaded Installations\{3D52BE33-2E8C-4A39-BECF-878DD4D58252}\1041.MST	Microsoft

C:\Windows\inf\	Microsoft
C:\Windows\Microsoft.NET\	Microsoft
C:\Windows\ODBC.INI	Microsoft
C:\Windows\PFRO.log	Microsoft
C:\Windows\rescache\rc0002\ResCache.hit	Microsoft
C:\Windows\ServiceProfiles\NetworkService\AppData\	Microsoft
C:\Windows\SoftwareDistribution\DataStore\	Microsoft
C:\Windows\System32\	Microsoft
C:\Windows\SysWOW64\	Microsoft
C:\Windows\Tasks\	Microsoft
C:\Windows\WindowsUpdate.log	Microsoft
C:\Windows\winsxs\	Microsoft

埋め込みマニフェストを含まないバイナリファイル

Arcserve Backup は、サードパーティ、他の Arcserve 製品、および Arcserve Backup によって開発された、埋め込みマニフェストおよびテキスト マニフェストを含まないバイナリファイルをインストールします。以下の表は、これらのバイナリファイルについての説明です。

バイナリ名	ソース
ASDBCom.exe	Arcserve Backup
ca_vcbpopulatedb.exe	Arcserve Backup
DBBAFAgentWrapper.exe	Arcserve Backup
VCBUI.exe	Arcserve Backup
BaseLicInst.exe	Arcserve ライセンス
UpdateData.exe	Arcserve ライセンス
unzip.exe	Info-ZIP
java.exe	Java Runtime Environment
javac.exe	Java Runtime Environment
javacpl.exe	Java Runtime Environment
java-rmi.exe	Java Runtime Environment
javaw.exe	Java Runtime Environment
javaws.exe	Java Runtime Environment
jucheck.exe	Java Runtime Environment
keytool.exe	Java Runtime Environment
kinit.exe	Java Runtime Environment
klist.exe	Java Runtime Environment
ktab.exe	Java Runtime Environment
orbd.exe	Java Runtime Environment
pack200.exe	Java Runtime Environment
policytool.exe	Java Runtime Environment
rmid.exe	Java Runtime Environment
rmiregistry.exe	Java Runtime Environment
servertool.exe	Java Runtime Environment
tnameserv.exe	Java Runtime Environment
unpack200.exe	Java Runtime Environment
COMPRESS.EXE	Microsoft
DTSWizard.ni.exe	Microsoft
SQLEXPR.EXE	Microsoft
SQLPS.ni.exe	Microsoft
vcredist_x64.exe	Microsoft
vcredist_x86.exe	Microsoft

WindowsInstaller-KB893803-v2-x86.exe	Microsoft
WindowsServer2003-KB942288-v4-x64.exe	Microsoft
WindowsServer2003-KB942288-v4-x86.exe	Microsoft
WindowsXP-KB942288-v3-x86.exe	Microsoft
casmgmtsvc.exe	タヌキソフトウェア
BAB_060706_SETUP_ALPHA.EXE	仮想メモリシステム
BAB_060706_SETUP_VAX.EXE	仮想メモリシステム

Arcserve Backup は、他の Arcserve 製品、および Arcserve Backup によって開発された、テキスト マニフェストを含み埋め込みマニフェストは含まないバイナリファイルをインストールします。以下の表は、これらのバイナリファイルについての説明です。

バイナリ名	ソース
setuprd.exe	Arcserve Backup
Cazipxp.exe	Arcserve ライセンス
BAOFCatRegistration.exe	Arcserve Backup
imagefix.exe	Arcserve Backup
IMGW2K.exe	Arcserve Backup
drscansession.exe	Arcserve Backup
drw.exe	Arcserve Backup
tapeeng.exe	Arcserve Backup
SQLAgentRmtInst.exe	Arcserve Backup
BConfig.exe	Arcserve Backup
DRNetConfig.exe	Arcserve Backup
makermt.exe	Arcserve Backup
DRSessions.exe	Arcserve Backup
partview.exe	Arcserve Backup
DRNetConfig.exe	Arcserve Backup
DRSessions.exe	Arcserve Backup
makermt.exe	Arcserve Backup
partview.exe	Arcserve Backup
UnivAgent.exe	Arcserve Backup

Arcserve Backup MSI インストーラ パッケージ ID

Windows MSI インストーラ パッケージには [プロパティ] テーブルおよび [アップグレード] テーブルが含まれます。Arcserve Backup MSI インストーラには [アップグレード] テーブルを含まないものがあります。以下が、影響を受ける Arcserve Backup インストーラ パッケージです。

- ARCserve.msi
- BaofNtNw.msi
- BrightStorSAK.msi
- CADiag.msi
- DBAExch.msi
- DBAExch12.msi
- DBAIFX.msi
- DBANotes.msi
- DBASQL.msi
- DBASYB.msi
- EBSAgent.msi
- msxml.msi
- NASAgent.msi
- NTAgent.msi
- OPTDRO.msi
- OPTEO.msi
- OPTIO.msi
- OPTSBO.msi
- PM.msi
- RMANAgent.msi
- SAPAgent.msi
- SP2K7Agent.msi
- CADS.msi
- SetupCommon.msi
- UniAgent.msi
- msxml6_x64.msi

- AgentDeploy.msi
- CentralDashboard.msi
- VMAgent.msi

第4章: Arcserve Backup のインストールとアップグレード

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

前提条件作業の実施方法 124
インストール Arcserve Backup 128
以前のリリースからの Arcserve Backup のアップグレード 135
サイレント インストール レスポンス ファイルの作成 142
現在のリリースへの Arcserve Backup エージェントのサイレント アップグレード 148
プライマリ サーバからリモート コンピュータへのエージェントの展開 151
インストール後の作業 163

前提条件作業の実施方法

Arcserve Backup をインストールまたはアップグレードする前に、以下の作業を完了する必要があります。

インストールおよびシステム要件

オペレーティングシステムの要件、ハードウェアおよびソフトウェアの前提条件、直前の変更、および Arcserve Backup に関する既知の問題が記載されている「Arcserve Backup リリースノート」を参照してください。

インストールサーバ

Arcserve Backup をインストールしているサーバの一覧を作成して、以下について確認します。

- Arcserve Backup ドメインの名前。
- Arcserve Backup をインストールしているサーバの名前。

  注： Arcserve Backup サーバ名と Arcserve Backup ドメイン名は、15 バイト以内である必要があります。合計 15 バイトの名前は、およそ 7 ～ 15 文字に相当します。

- インストールしている Arcserve Backup サーバのタイプを判別します。

  注： 詳細については、「Arcserve Backup サーバインストールのタイプ」を参照してください。

- Arcserve Backup、エージェント、およびオプションをリモートシステムにインストールする場合は、ターゲットシステムのホスト名を指定する必要があります。リモートインストールまたはアップグレードを実行している場合、Arcserve Backup は IP アドレスの指定をサポートしません。

Arcserve Backup データベース

Arcserve Backup インストールに使用するデータベースアプリケーションを決定します。詳細については、「データベースの要件」を参照してください。

管理者権限

Arcserve Backup をインストールするサーバ上で、ソフトウェアのインストールに必要な管理者権限（または管理者に相当する権限）を有していることを確認します。

アップグレード

現在の Arcserve Backup インストールをこのリリースにアップグレードする場合は、アップグレード、後方互換性、およびデータマイグレーションに関する情報を「アップグレードに関する考慮事項」で確認してください。

プライマリ サーバのインストール

プライマリ サーバをインストールするには、Arcserve Backup Central Management Option をインストールしてライセンスを設定する必要があります。

注： 1 つのプライマリ サーバおよび 1 つ以上のメンバ サーバで構成された Arcserve Backup ドメインをインストールするには、メンバ サーバをインストールする前にプライマリ サーバをインストールする必要があります。プライマリ サーバのインストール時にドメインを作成し、インストール完了後に、メンバ サーバをドメインに追加します。

メンバ サーバのインストール

メンバ サーバをプライマリ サーバのドメインに追加するには、Arcserve Backup の認証情報を入力する必要があります(たとえば、プライマリ サーバのインストール時に入力した *cartoot* および Arcserve Backup パスワード) 。メンバ サーバを Arcserve Backup ドメインに追加できるようにする処理では、Windows 認証が使用できます。

Global Dashboard のインストール

Global Dashboard をインストールする前に、以下の前提条件を確認してください。

ライセンスの要件

Global Dashboard 機能を有効にするには、登録済みのブランチ プライマリ サーバをすべてカバーする複数ライセンスと共に、セントラル プライマリ サーバで有効な Arcserve Backup Global Dashboard ライセンスを持っている必要があります。(ブランチ プライマリ サーバでは Global Dashboard ライセンスをインストールする必要はありません) 。

セントラル プライマリ サーバ

- Arcserve Backup (プライマリ サーバまたはスタンドアロン サーバ) がインストールされている。

  注： Global Dashboard をメンバ サーバにインストールすることは可能です。ただし、メンバ サーバはセントラル プライマリ サーバとして機能できません。

- Arcserve Backup データベースに Microsoft SQL Server 2008 以降がインストールされている(Microsoft SQL Express および Microsoft SQL Server 2000 はデータベースとしてサポートしていません) 。
- Global Dashboard 環境に必要な Arcserve Backup データベース容量。セントラル プライマリ サーバ用のデータベース推定容量の詳細については、「Global Dashboard データ保存要件」を参照してください。

ブランチ プライマリ サーバ

- Arcserve Backup (プライマリ サーバまたはスタンド アロン サーバ) がインストールされている。
- Arcserve Backup データベースに Microsoft SQL Server 2008 以降がインストールされている。

Global Dashboard コンソール

Arcserve Backup プライマリ サーバ、スタンド アロン サーバ、またはマネージャ コンソール コンポーネントがインストールされている。

注： Global Dashboard コンソールをメンバ サーバにインストールすることは可能です。ただし、メンバ サーバはブランチ プライマリ サーバとして機能できません。

ポート環境設定

プライマリ サーバおよびメンバ サーバが安全な環境で通信できるようにするには、Arcserve Backup のインストール中にすべての通信ポートを開いたままにできるようにする必要があります。詳細については、「プライマリ サーバとメンバ サーバの通信ポート」を参照してください。

クラスタのインストール

Arcserve Backup のインストールでは、インストール ウィザードによって以下のクラスタ アプリケーションが検出されます。

- Microsoft Cluster Server(MSCS)
- NEC Cluster Server(CLUSTERPRO/ExpressCluster)

インストール ウィザードを起動する前に、これらのクラスタ アプリケーションがインストールされていること、適切に設定され実行中であることを確認してください。

注： Arcserve Backup はクラスタ環境でのリモート インストールをサポートしていません。

ストレージ デバイス

ストレージ デバイスを、Arcserve Backup プライマリ サーバとメンバ サーバとして指定するシステム、および SAN に接続します。Arcserve Backup は、テープ エンジンが最初に起動されたとき、Arcserve Backup サーバおよび SAN に直接接続されているライブラリを検出して設定します。Arcserve Backup が、サポート ライブラリを検出および設定できるようにするのに、ウィザードや他の外部アプリケーションを実行する必要はありません。他のすべてのタイプのデバイス(たとえば、NAS デバイス、Arcserve テープ RAID ライブラリ、Arcserve 仮想ライブラリ) では、［デバイス環境設定］を使用して Arcserve Backup をインストールした後、デバイスを手動で設定する必要があります。

注： 詳細については、「*管理者ガイド*」を参照してください。

ファイバまたは SCSI デバイスを使用している場合は、Arcserve Backup サーバに、Windows と Arcserve Backup の両方がサポートする SCSI/ファイバコントローラまたはアダプタが接続されていることを確認してください。Arcserve Backup はインストールされたほとんどの SCSI コントローラをサポートできます。

注： ハードウェアが対応デバイスであり Arcserve Backup がシステムと通信できることを確認するために、最新の認定デバイスリストを www.arcserve.com から入手してください。

Storage Area Network(SAN) のインストール

SAN 複数サーバ環境では、共有ライブラリに接続されているサーバをプライマリサーバとして機能するように指定した後で、Arcserve Backup サーバコンポーネントおよび Arcserve Backup Central Management Option をドメインプライマリサーバでインストールしてライセンス登録する必要があります。その後で、共有ライブラリに接続されている他のすべてのサーバがメンバサーバとして機能するように指定する必要があります。メンバサーバは、プライマリサーバと同じ Arcserve Backup ドメインに存在している必要があります。終了すると、プライマリサーバは SAN インフラストラクチャを自動的に検出するため、手動の設定は必要ありません。

注： 以前のリリースからアップグレードしている場合は、SAN プライマリとして機能するシステム上に Arcserve Backup プライマリサーバをインストールし、SAN メンバサーバとして機能するシステム上に Arcserve Backup メンバサーバをインストールする必要があります。

DNS 通信

ドメインネームシステム(DNS) 通信が設定されていることを確認して、環境内の Arcserve Backup マネージャコンソールとリモートシステム間の通信を最適化してください。たとえば、DNS が逆引きを効率的に実行できるように設定する必要があります。DNS 通信設定に関する詳細は、Microsoft のサポートオンライン Web サイトを参照してください。

クロスプラットフォームのエージェント

クロスプラットフォームエージェントをインストールまたはアップグレードするには、Arcserve Backup インストールメディアをインストールウィザードの実行中も使用できるようにする必要があります。

インストール Arcserve Backup

Arcserve Backup は、インストール ウィザードを使用して、Windows Server Core を実行するローカルまたはリモートのコンピュータにインストールできます。

Arcserve Backup をインストールするには、以下の手順に従います。

1. Arcserve Backup インストール メディアをコンピュータのオプティカル ドライブに挿入します。

   注： Arcserve Backup インストール ブラウザが表示されない場合は、Setup.exe をインストール メディアのルート ディレクトリから実行してください。

   [製品のインストール] ブラウザの右側の列で、[Arcserve Backup for Windows のインストール] をクリックします。

   [前提条件コンポーネント] ダイアログ ボックスが表示されます。

2. [インストール] をクリックして、前提条件コンポーネントをインストールします。

   [前提条件コンポーネント] ダイアログ ボックスは、ターゲット コンピュータにインストールされている Arcserve Backup 前提条件コンポーネントが検出されなかった場合にのみ表示されます。

   注： クラスタ対応環境内のアクティブ ノードに Arcserve Backup をインストールする場合は、アクティブ ノードが再起動する間に、アクティブ ノードからパッシブ ノードにクラスタ リソースが移動されます。アクティブ ノードが再起動したら、元のアクティブ ノードにクラスタ リソースを移動する必要があります。

3. [使用許諾契約] ダイアログ ボックスで、使用許諾契約の条件に同意して [次へ] をクリックします。

4. 表示されるプロンプトに従って、ダイアログ ボックスに必要なすべての情報を記入します。

   次のリストは、Arcserve Backup のインストールに関するダイアログ ボックス固有の情報について説明しています。

   インストール/アップグレードの種類の選択ダイアログ ボックス

   リモート インストール オプションを選択すると、Arcserve Backup を複数のシステムにインストールできます。

   リモート インストールでは、ターゲットのリモート システムを異なる Arcserve サーバ タイプ、異なる Arcserve Backup エージェントとオプション、またはその両方で構成することができます。

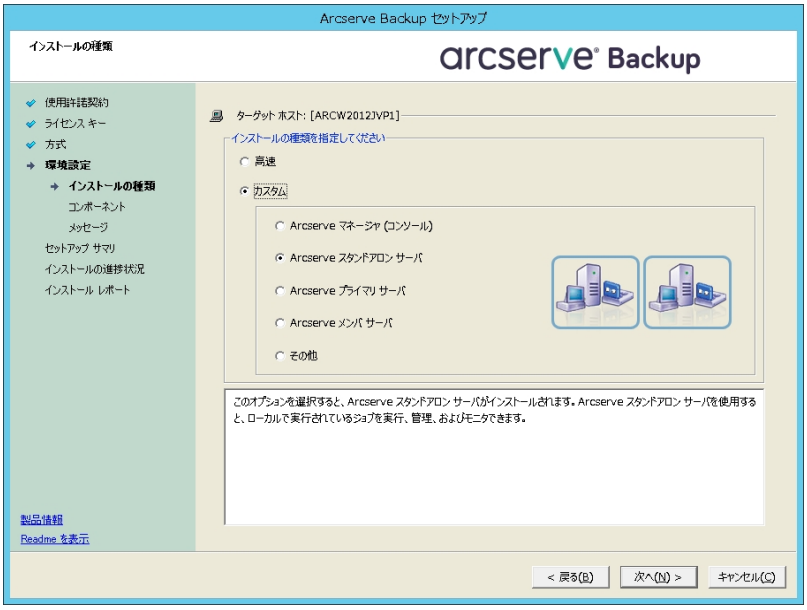
   注： クラスタ マシンのセットアップ プログラムは Arcserve Backup ベース製品または Arcserve Backup エージェントのリモート インストールはサポートしていま

せん。Arcserve Backup エージェント(たとえば Agent for Microsoft SQL Server または Agent for Microsoft Exchange Server) に関するこのリモート インストールの制限は、仮想ホストを使用している場合のみ当てはまります。クラスタの物理ホストを使用した Arcserve Backup エージェントのリモート インストールはサポートされています。

[インストールの種類]ダイアログ ボックス

インストールの種類として [高速]または [カスタム]を選択することによって、インストールする Arcserve Backup コンポーネントの種類を指定できます。

注： 以前のリリースからアップグレードする場合、インストール ウィザードでは、現在の Arcserve 設定を検出し、新しいインストールに適切なインストール/アップグレードの種類を選択します。詳細については、「Arcserve Backup サーバ インストールのタイプ」および「Arcserve Backup サーバ オプション」を参照してください。



[コンポーネント]ダイアログ ボックス

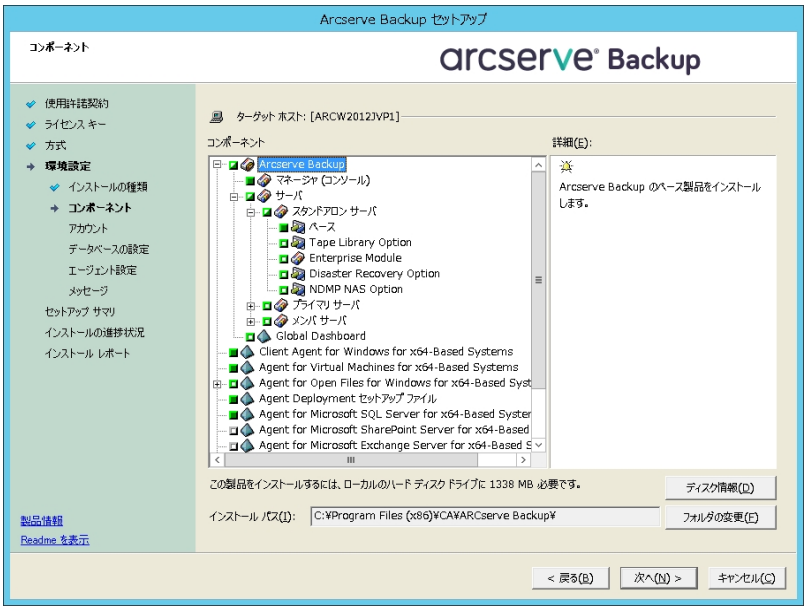
ターゲット システムにインストールする Arcserve Backup コンポーネントを指定できます。

以下の点に注意してください。

- プライマリ サーバをインストールするには、プライマリ サーバに Arcserve Backup Central Management Option をインストールする必要があります。
- メンバ サーバをインストールするには、インストール ウィザードがネットワーク内の Arcserve Backup ドメイン名とプライマリ サーバ名を検出できる必要があります。したがって、メンバ サーバ インストールを実行する前に、少なくとも 1 つのプライマリ サーバ インストールを完了しておく必要があります。

- Arcserve Backup オブジェクトまたはサーバ オブジェクトを 製品の選択]ダイアログ ボックスでクリックすると、インストール ウィザードでは、 [インストール/アップグレードの種類]ダイアログ ボックスで指定したインストールの種類に関係なく、デフォルトのスタンドアロン サーバ インストール コンポーネントが指定されます。正しいコンポーネントをインストールするには、サーバ オブジェクトを展開し、インストールする Arcserve Backup サーバのタイプのオブジェクトを展開して、インストールするコンポーネントに対応するチェックボックスをオンにします。
- Agent Deployment は、Arcserve Backup をインストールした後で、Arcserve Backup エージェントを複数のリモート システムにインストールしてアップグレードできるウィザード形式のアプリケーションです。この機能をサポートするには、セットアップ プログラムで Setup ソース ファイルを Arcserve Backup サーバにコピーする必要があります。インストール メディアのコンテンツを Arcserve Backup サーバにコピーするには、 [コンポーネント]ダイアログ ボックスで Agent Deployment を選択する必要があります。Agent Deployment を選択すると、Arcserve Backup のインストールまたはアップグレードに要する時間がかなり長くなります。
- リモート インストールまたはサイレント インストールを実行する場合、Arcserve Backup Client Agent for Windows を Arcserve Backup ベース製品と同じディレクトリにインストールしないでください。
- Global Dashboard はプライマリ サーバ、スタンドアロン サーバおよびメンバ サーバにインストールできます。ただし、メンバ サーバをセントラル プライマリ サーバおよびブランチ プライマリ サーバとして機能するように設定することはできません。*セントラル プライマリ サーバおよびブランチ プライマリ サーバの詳細については、「Dashboard ユーザ ガイド」を参照してください。*
- Windows Server Core を実行するコンピュータでは、以下の Arcserve Backup 製品のみをインストールできます。
  - メンバ サーバおよびサポートされるオプション
  - Agent for Open Files
  - Agent for Virtual Machines
  - Client Agent for Windows
  - Disaster Recovery Option

以下の図では、Client Agent for Windows のデフォルトのインストール パスが表示されていて、Agent Deployment が指定されています。

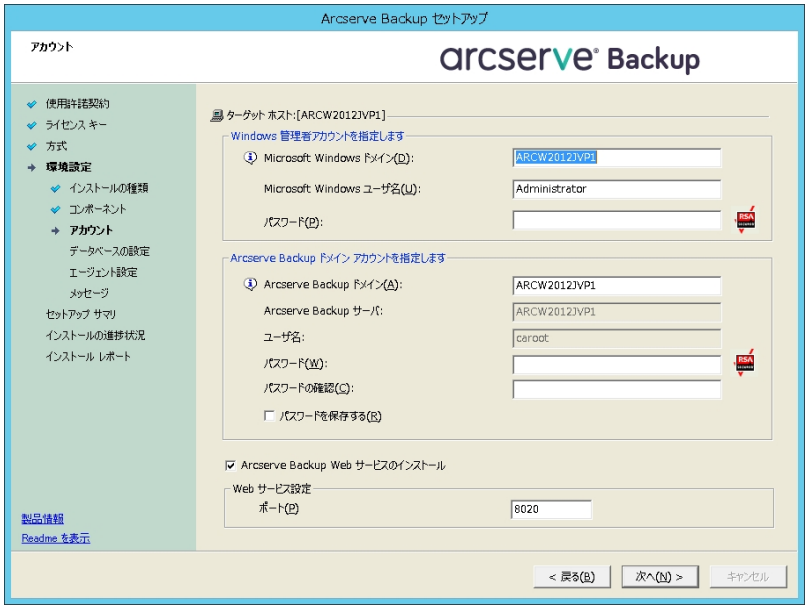


[アカウント]ダイアログ ボックス

Arcserve Backup アカウントを設定し、[**Arcserve Backup Web サービスのインストール**]を有効にするオプションを提供します。

セットアップ中に、クラスタ対応アプリケーションが環境内で実行されていることが検出された場合、Arcserve Backup をクラスタ対応環境にインストールするには、[クラスタ環境インストール]オプションを選択して Arcserve Backup をインストールする共有ディスクのパスを指定します。

注： Arcserve Backup サーバ名と Arcserve Backup ドメイン名は、15 バイト以内である必要があります。合計 15 バイトの名前は、およそ 7 ～ 15 文字に相当します。



Arcserve Backup Web サービスは、UDP テープへのコピー タスクと Arcserve Backup の間のブリッジとして機能します。デフォルトでは、Arcserve Backup をインストールすると、[**Arcserve Backup Web サービスのインストール**]が有効になります。**Web サービス設定**のデフォルトのポート番号は 8020 です。このポート番号は変更できます。

[**Arcserve Backup Web サービスのインストール**]チェック ボックスをオフにして、Arcserve Backup Web サービスを無効にします。

Arcserve Backup のインストール後に [**Arcserve Backup Web サービスのインストール**]を有効化/変更できます。

注： Arcserve Backup ドメインのすべてのサーバに Arcserve Backup Web サービスをインストールする際と同じポート番号を指定します。Arcserve UDP は、同じポート番号を使用して、Arcserve Backup プライマリ サーバおよび Arcserve Backup ドメイン内のメンバ サーバの両方のサーバに接続します。

以下の手順に従います。

1. コマンド ラインから Arcserve Backup ベース インストール パスに移動します。
2. コマンド プロンプトで、以下のコマンドを入力します。

   Bconfig –c

   [<Arcserve Backup> アカウント]ダイアログ ボックスが表示されます。

3. Web サービスを設定または更新します。

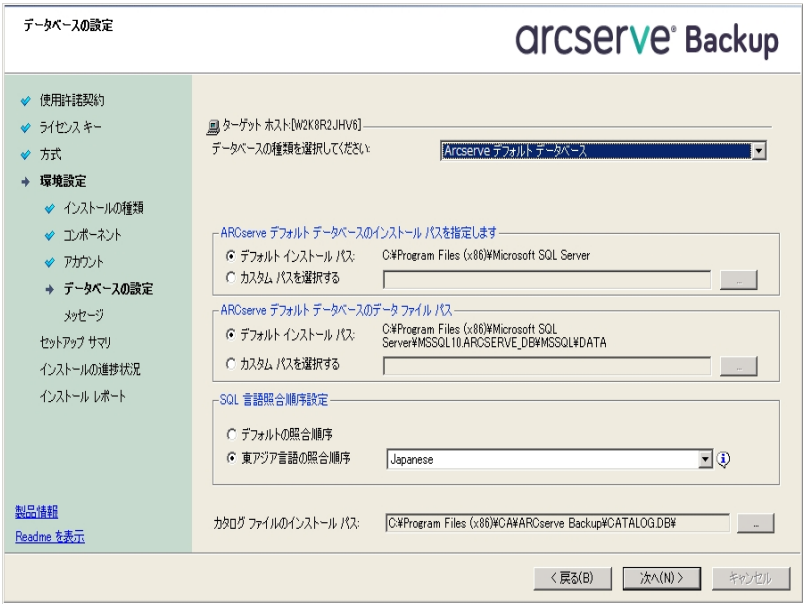
   [データベースの設定]ダイアログ ボックス

   Arcserve Backup データベースを設定できます。

   このダイアログ ボックスで、データベース アプリケーション(Arcserve Backup のデフォルトのデータベースまたは Microsoft SQL Server) を指定するか、必須フィールドの入力を完了した後、 [次へ]をクリックします。

   注： Unicode ベースの東アジア言語文字 (JIS2004 など) を含むデータを保護する必要がある場合は、Arcserve Backup のデータ検索および並べ替えを可能にするため

に SQL 照合順序を有効にする必要があります。これを行うには、[東アジア言語の照合順序]をクリックしてドロップダウンリストから言語を選択します。



[メッセージ]ダイアログボックス

[メッセージ]ダイアログボックスでメッセージを確認し、この時点で問題の解決を試みる必要があります。

以下は、[重要な警告メッセージ]ダイアログボックスを示しています。

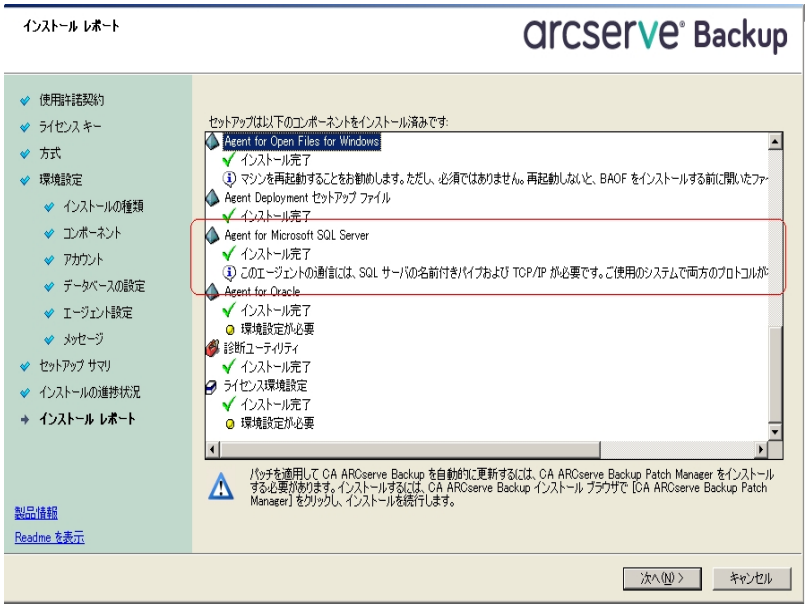
[セットアップ サマリ]ダイアログボックス

インストールするコンポーネントを変更するには、変更するインストールオプションが表示されているダイアログボックスに戻るまで [戻る]ボタンをクリックしてください。

[インストール レポート]ダイアログ ボックス

選択したコンポーネントで設定が必要な場合は、インストールの最後に設定ダイアログ ボックスが表示されます。すぐにコンポーネントを設定することも、後から [デバイス環境設定]または [Enterprise Module 環境設定]を使用して設定することもできます。たとえば、単一ドライブのオートローダを使用している場合は、セットアップで [インストール サマリ]ダイアログ ボックスでメッセージをダブルクリックすることで、該当する [デバイス環境設定]を起動するように指定することができます。

以下に、[インストール レポート]ダイアログ ボックスを示します。Agent for Microsoft SQL Server には、環境設定が必要です。



注： Arcserve Backup のインストール時に、サーバの再起動が必要になる場合があります。これは、すべてのファイル、サービス、およびレジストリの設定がオペレーティング システム レベルで更新されたかどうかによって決まります。

[インストール サマリ]ダイアログ ボックス

選択したコンポーネントで設定が必要な場合は、インストールの最後に設定ダイアログ ボックスが表示されます。すぐにコンポーネントを設定することも、後から [デバイス環境設定]または [Enterprise Module 環境設定]を使用して設定することもできます。たとえば、単一ドライブのオートローダを使用している場合は、セットアップで [インストール サマリ]ダイアログ ボックスでメッセージをダブルクリックすることで、該当する [デバイス環境設定]を起動するように指定することができます。

5. [インストール サマリ]ダイアログ ボックスで [完了]をクリックしてインストールを完了します。

以前のリリースからの Arcserve Backup のアップグレード

ローカルまたはリモートのコンピュータ、および Windows Server Core を実行するコンピュータ上の Arcserve Backup をインストールウィザードを使用してアップグレードできます。アップグレードとは、以前のリリースをアンインストールせずに、機能またはコンポーネントを新しいリリースやビルド番号に再インストールすることです。アップグレード処理では、現在の設定のほとんどを維持して、古いデータベースに保存されている情報を新しい Arcserve Backup データベースにマイグレートします。

以下のいずれかのバージョンの Arcserve Backup を現在使用している場合は、以下の製品からこのリリースにアップグレードできます。

- Arcserve Backup r17.0 for Windows -- General Availability (GA) リリースと最新のサービスパックがすべて含まれます。
- Arcserve Backup r16.5 for Windows -- General Availability (GA) リリースと最新のサービスパックがすべて含まれます。

重要：以前のリリースの Arcserve Backup からアップグレードする場合、以前のリリースをアンインストールし、このリリースの Arcserve Backup をインストールする必要があります。ただし、以前の実装のデータベース情報を保持する場合は、以前の実装を Arcserve Backup r16.5 にアップグレードしてから、r17.5 SP1 リリースにアップグレードする必要があります。

このリリースへのアップグレードに関する詳細は、「アップグレードに関する考慮事項」を参照してください。

以前のリリースからの Arcserve Backup のアップグレード方法

1. Arcserve Backup インストールメディアをコンピュータのオプティカルドライブに挿入します。

   注： Arcserve Backup インストールブラウザが表示されない場合は、Setup.exe をインストールメディアのルート ディレクトリから実行してください。

2. 「製品のインストール」ブラウザの右側の列で、「Arcserve Backup for Windows のインストール」をクリックします。

   「前提条件コンポーネント」ダイアログボックスが表示されます。

3. 「次へ」をクリックして前提条件コンポーネントをインストールします。

   注： 「前提条件コンポーネント」ダイアログボックスは、セットアップがターゲット コンピュータにインストールされている Arcserve Backup 前提条件コンポーネントを検出しなかった場合にのみ表示されます。

4. [使用許諾契約]ダイアログ ボックスで、使用許諾契約の条件に同意して [ユーザ情報]ダイアログ ボックスのフィールドに入力します。
5. 続くダイアログ ボックスのプロンプトに従い、必要な情報をすべて提供します。

以下のリストは、Arcserve Backup の古いリリースからのアップグレードに関するダイアログ ボックス固有の情報について説明しています。

[方式]ダイアログ ボックス

- リモート システムでの以前のリリースから Arcserve プライマリ サーバへのアップグレード
- レスポンス ファイルを使用しているシステムでの以前のリリースから Arcserve プライマリ サーバへのサイレント アップグレード

他のすべてのタイプのアップグレードの場合は、実行するタスクに対応するオプションを選択してください。

[コンポーネント]ダイアログ ボックス

ターゲット システムにインストールする Arcserve Backup コンポーネントを指定できます。

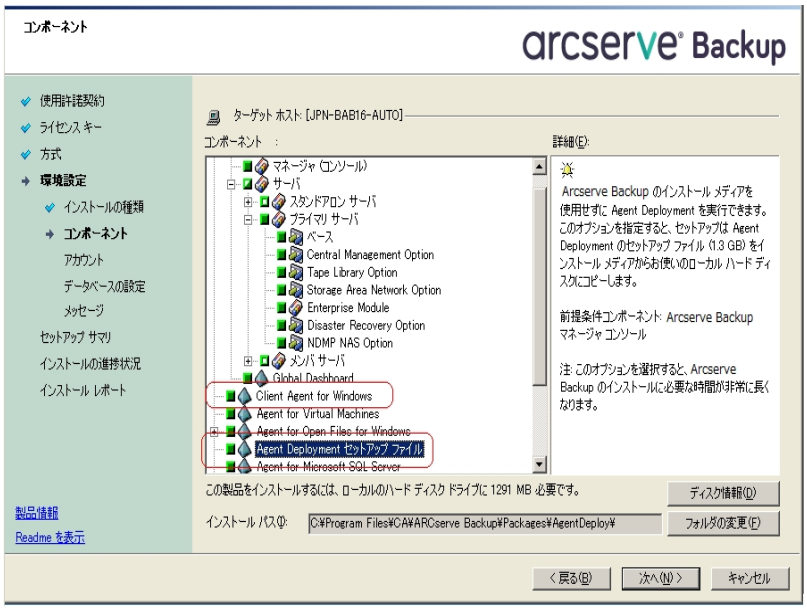
以下の点に注意してください。

- プライマリ サーバをインストールするには、プライマリ サーバに Arcserve Backup Central Management Option をインストールする必要があります。
- メンバ サーバをインストールするには、インストール ウィザードがネットワーク内の Arcserve Backup ドメイン名とプライマリ サーバ名を検出できる必要があります。

したがって、メンバ サーバ インストールを実行する前に、少なくとも 1 つのプライマリ サーバ インストールを完了しておく必要があります。

- Arcserve Backup オブジェクトまたはサーバ オブジェクトを [製品の選択] ダイアログ ボックスでクリックすると、インストール ウィザードでは、[インストール/アップグレードの種類] ダイアログ ボックスで指定したインストールの種類に関係なく、デフォルトのスタンドアロン サーバ インストール コンポーネントが指定されます。正しいコンポーネントをインストールするには、サーバ オブジェクトを展開し、インストールする Arcserve Backup サーバのタイプのオブジェクトを展開して、インストールするコンポーネントに対応するチェックボックスをオンにします。
- Agent Deployment は、Arcserve Backup をインストールした後で、Arcserve Backup エージェントを複数のリモート システムにインストールしてアップグレードできるウィザード形式のアプリケーションです。この機能をサポートするには、セットアップ プログラムで Setup ソース ファイルを Arcserve Backup サーバにコピーする必要があります。インストール メディアのコンテンツを Arcserve Backup サーバにコピーするには、[コンポーネント] ダイアログ ボックスで Agent Deployment を選択する必要があります。Agent Deployment を選択すると、Arcserve Backup のインストールまたはアップグレードに要する時間がかなり長くなります。
- リモート インストールまたはサイレント インストールを実行する場合、Arcserve Backup Client Agent for Windows を Arcserve Backup ベース製品と同じディレクトリにインストールしないでください。
- Global Dashboard はプライマリ サーバ、スタンドアロン サーバおよびメンバ サーバにインストールできます。ただし、メンバ サーバをセントラル プライマリ サーバおよびブランチ プライマリ サーバとして機能するように設定することはできません。*セントラル プライマリ サーバおよびブランチ プライマリ サーバの詳細については、「Dashboard ユーザ ガイド」を参照してください。*
- Windows Server Core を実行するコンピュータでは、以下の Arcserve Backup 製品のみをインストールできます。
  - メンバ サーバおよびサポートされるオプション
  - Agent for Open Files
  - Agent for Virtual Machines
  - Client Agent for Windows
  - Disaster Recovery Option

以下の図では、Client Agent for Windows のデフォルトのインストールパスが表示されていて、Agent Deployment が指定されています。



[アカウント]ダイアログ ボックス

セットアップ中にクラスタ対応アプリケーションが環境内で実行されていることが検出された状態で、Arcserve Backup をクラスタ対応環境にインストールする場合は、[クラスタ環境インストール]オプションをチェックして Arcserve Backup をインストールするパスを指定します。

注： Arcserve Backup サーバ名と Arcserve Backup ドメイン名は、15 バイト以内である必要があります。合計 15 バイトの名前は、およそ 7 ～ 15 文字

に相当します。

[データベースの設定]ダイアログ ボックス

Arcserve Backup データベースを設定できます。

データベース アプリケーション(Microsoft SQL Server または Microsoft SQL Server 20014 SP2 Express Edition) を指定したら、このダイアログ ボックスの必須フィールドに入力します。

注：

- r16.5 (すべてのサービス パック) からのアップグレードでは、デフォルト データベースが SQL Server 2014 SP2 Express Edition に更新されます。Arcserve Backup r17.0/r17.5 SP1 からのアップグレードでは、デフォルト データベースは SQL Server 2014 SP2 Express Edition にアップグレードされません。
- Unicode ベースの東アジア言語文字 (JIS2004 など) を含むデータを保護する必要がある場合は、Arcserve Backup でデータ検索および並べ替えを可能にするために SQL 照合順序を有効にする必要があります。これを行うには、 [東アジア言語の照合順序]をクリックしてドロップダウン リストから言語を選択します。

[メッセージ]ダイアログ ボックス

[重要な警告メッセージ]ダイアログ ボックスでメッセージを確認した後は、この時点で問題の解決を試みる必要があります。

[セットアップ サマリ]ダイアログ ボックス

インストールするコンポーネントを変更するには、変更するインストール オプションが表示されているダイアログ ボックスに戻るまで [戻る]ボタンをクリックしてください。

[インストール サマリ]ダイアログ ボックス

選択したコンポーネントで設定が必要な場合は、インストールの最後に設定ダイアログ ボックスが表示されます。すぐにコンポーネントを設定することも、後から [デバイス環境設定]または [Enterprise Module 環境設定]を使用して設定することもできます。たとえば、単一ドライブのオートローダを使用している場合は、セットアップで [インストール サマリ]ダイアログ ボックスでメッセージをダブルクリックすることで、該当する [デバイス環境設定]を起動するように指定することができます。

[ライセンスの確認]ダイアログ ボックス

ライセンス キーを入力するには、インストールしているコンポーネント、エージェント、およびオプションへ移動し、 [ライセンス キーを使用する]オプションを選択してそのコンポーネントのライセンス キーを入力します。

[続行]をクリックして [ライセンスの確認]ダイアログ ボックスを閉じます。

[インストール サマリ]ダイアログ ボックスで [完了]をクリックし、 [Arcserve Backup サーバ マイグレーション]ダイアログ ボックスを開きます。

[Arcserve Backup サーバ データ マイグレーション]ダイアログ ボックス

マイグレートするデータを指定します。データ マイグレーションの詳細については、「以前のリリースからのデータ マイグレーション」を参照してください。

6. アップグレードを完了するには、[Arcserve Backup サーバ データ マイグレーション]ダイアログ ボックスで [OK]をクリックします。

以下の制限および考慮事項に注意してください。

- 前回のバックアップがこのリリースにアップグレードする前に実行された場合、Arcserve Backup では Arcserve Backup データベースの回復はサポートされません。アップグレードが完了した後、できるだけ早く Arcserve Backup をバックアップしてください。
- アップグレードが完了した後は、サーバの再起動が必要になる場合があります。これは、すべてのファイル、サービス、およびレジストリの設定がオペレーティング システム レベルで更新されたかどうかによって決まります。
- クラスタ対応環境ですべての Arcserve Backup サービスが適切に開始されるようにするには、Arcserve Backup マネージャ コンソールを開く前に Arcserve Backup サーバで cstop スクリプトと cstart スクリプトを実行する必要があります。

サイレント インストール レスポンス ファイルの作成

Arcserve Backupコンポーネントの多くは、インストールの実行中にユーザが設定情報(インストール ディレクトリ、ユーザ名、パスワードなど)を入力する必要があります。サイレント インストール(ユーザの介入を必要としない方式のインストール)では、それらの設定情報が、事前に生成しておいたレスポンス ファイルから読み込まれます。デフォルトのレスポンス ファイル名は setup.icf ですが、この名前は必要に応じて変更できます。

サイレント インストール レスポンス ファイルを作成する方法

1. Arcserve Backup インストール メディアをコンピュータのオプティカル ドライブに挿入します。
2. \Install ディレクトリを参照します。
3. MasterSetup.exe をダブルクリックして MasterSetup を起動し、[Arcserve Backup へようこそ]ダイアログ ボックスで [次へ]をクリックします。
4. [使用許諾契約]ダイアログ ボックスで、使用許諾契約の条件に同意して [ユーザ情報]ダイアログ ボックスのフィールドに入力します。
5. 続くダイアログ ボックスのプロンプトに従い、必要な情報をすべて提供します。

   次のリストでは、レスポンス ファイル作成に関するダイアログ ボックス固有の情報を説明しています。

   [方式]ダイアログ ボックス

レスポンス ファイルを作成するには、［レスポンス ファイルの作成］を選択する必要があります。

［コンポーネント］ダイアログ ボックス

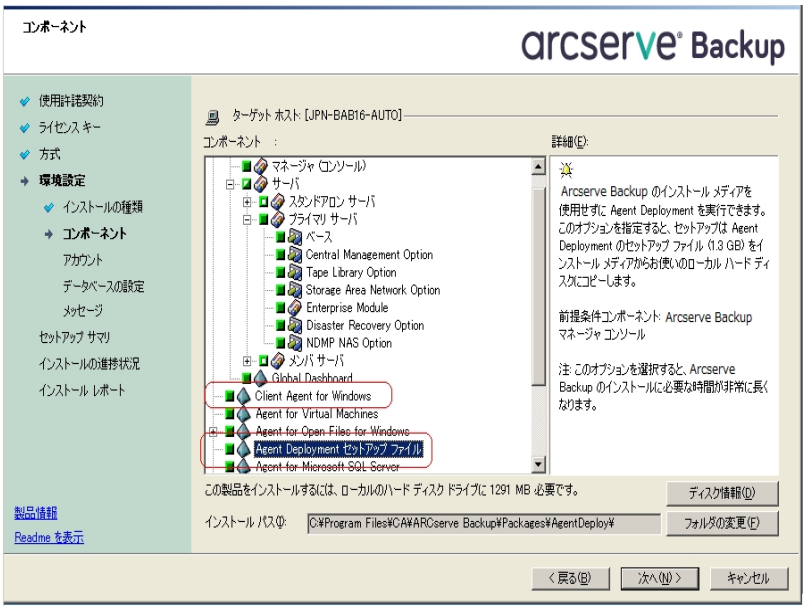
ターゲット システムにインストールする Arcserve Backup コンポーネントを指定できます。

以下の点に注意してください。

- プライマリ サーバをインストールするには、プライマリ サーバに Arcserve Backup Central Management Option をインストールする必要があります。
- メンバ サーバをインストールするには、インストール ウィザードがネットワーク内の Arcserve Backup ドメイン名とプライマリ サーバ名を検出できる必要があります。したがって、メンバ サーバ インストールを実行する前に、少なくとも 1 つのプライマリ サーバ インストールを完了しておく必要があります。
- Arcserve Backup オブジェクトまたはサーバ オブジェクトを［製品の選択］ダイアログ ボックスでクリックすると、インストール ウィザードでは、［インストール/アップグレードの種類］ダイアログ ボックスで指定したインストールの種類に関係なく、デフォルトのスタンドアロン サーバ インストール コンポーネントが指定されます。正しいコンポーネントをインストールするには、サーバ オブジェクトを展開し、インストールする Arcserve Backup サーバのタイプのオブジェクトを展開して、インストールするコンポーネントに対応するチェックボックスをオンにします。

- Agent Deployment は、Arcserve Backup をインストールした後で、Arcserve Backup エージェントを複数のリモート システムにインストールしてアップグレードできるウィザード形式のアプリケーションです。この機能をサポートするには、セットアップ プログラムで Setup ソース ファイルを Arcserve Backup サーバにコピーする必要があります。インストール メディアのコンテンツを Arcserve Backup サーバにコピーするには、[コンポーネント] ダイアログ ボックスで Agent Deployment を選択する必要があります。Agent Deployment を選択すると、Arcserve Backup のインストールまたはアップグレードに要する時間がかなり長くなります。
- リモート インストールまたはサイレント インストールを実行する場合、Arcserve Backup Client Agent for Windows を Arcserve Backup ベース製品と同じディレクトリにインストールしないでください。
- Global Dashboard はプライマリ サーバ、スタンドアロン サーバおよびメンバ サーバにインストールできます。ただし、メンバ サーバをセントラル プライマリ サーバおよびブランチ プライマリ サーバとして機能するように設定することはできません。*セントラル プライマリ サーバおよびブランチ プライマリ サーバの詳細については、「Dashboard ユーザ ガイド」を参照してください。*
- Windows Server Core を実行するコンピュータでは、以下の Arcserve Backup 製品のみをインストールできます。
  - メンバ サーバおよびサポートされるオプション
  - Agent for Open Files
  - Agent for Virtual Machines
  - Client Agent for Windows
  - Disaster Recovery Option

以下の図では、Client Agent for Windows のデフォルトのインストール パスが表示されていて、Agent Deployment が指定されています。



[アカウント] ダイアログ ボックス

Arcserve Backup ドメイン名と Arcserve Backup サーバ名は、15 バイト以内である必要があります。合計 15 バイトの名前は、およそ 7 ～ 15 文字に相当します。

注： 古いインストールのドメイン名を維持しない場合、Arcserve Backup は古い caroot パスワードを空のパスワードに変更します。空のパスワードは、インストールが完了した後で変更できます。

caroot パスワードは、任意の英数字と特殊文字を組み合わせて指定できますが、15 バイトを超えないようにしてください。合計 15 バイトのパスワードは、およそ 7 ～ 15 文字に相当します。

[データベースの設定] ダイアログ ボックス

Unicode ベースの東アジア言語文字 (JIS2004 など) を含むデータを保護する必要がある場合は、データ検索および並べ替えを可能にするために SQL 照合順序を有効にする必要があります。このためには、 [SQL Server Express インスタンス] ダイアログ ボックスで [言語サポート オプション] をクリックし、画面の指示に従って設定を完了します(Arcserve Backup データベースを Microsoft SQL Server でホストしている場合は、 [データベースのインストール パスを選択してください] ダイアログ ボックスで [言語サポート オプション] をクリックします) 。

[セットアップ サマリ] ダイアログ ボックス

インストールするコンポーネントを変更するには、変更するインストール オプションが表示されているダイアログ ボックスに戻るまで [戻る] ボタンをクリックしてください。

[ライセンスの確認] ダイアログ ボックス

ライセンス キーを入力するには、インストールしているコンポーネント、エージェント、およびオプションへ移動し、 [ライセンス キーを使用する]

オプションを選択してそのコンポーネントのライセンス キーを入力します。

6. レスポンス ファイルの生成が完了したら、MasterSetup.exe でそのファイルを使用して、選択した Arcserve Backup コンポーネントのサイレント インストールを実行できます。

   デフォルトでは、Arcserve Backup は以下のディレクトリにレスポンス ファイルを保存します。

   C:\Users\Administrator\Documents\Setup.icf

   [セットアップ サマリ]ダイアログ ボックスで、省略記号ボタンをクリックすることによって別の場所を指定できます。

7. レスポンス ファイルのセットアップが完了したら、 [完了]をクリックします。

   必須パラメータの詳細を表示するには、Windows のコマンド ラインを開いて次のコマンドを実行します。

   mastersetup /?

   例：レスポンス ファイルの実行

   以下の例では、レスポンス ファイルを実行する構文について説明します。レスポンス ファイルは setup.icf のラベルが付けられ、c:\temp に配置されます。

   mastersetup.exe /I:"c:\temp\setup.icf"

   setup.icf ファイルを編集して InstallScanEng の設定を 1 から 0 に変更し、スキャン エンジンをインストールしないようにできます。

   注： インストールの完了後にターゲット システムを再起動する必要がある場合があります。マシンを再起動する必要があるかどうかについては、ProdWiz.log の再起動メッセージを確認してください。

   レスポンス ファイルを使用して Arcserve Backup をインストールする方法の詳細については、「現在のリリースへの Arcserve Backup エージェントのサイレント アップグレード」を参照してください。

現在のリリースへの Arcserve Backup エージェントのサイレント アップグレード

システムにインストールされている別の Arcserve リリースから現在のリリースにエージェントをアップグレードする必要が生じる場合があります。エージェントとリリース番号を特定するプロセス、およびアップグレードを実行するプロセス自体には長い時間がかかる可能性があります。

このタスクを簡単にするため、MasterSetup を Windows コマンドラインからサイレントで実行し、システムにインストールされているすべての Arcserve Backup エージェントを現在のリリースにアップグレードします。

このタスクを完了するにはいくつかの方法があります。

- MasterSetup をインストールメディアから直接実行します。ターゲット(リモート)システム上のすべてのエージェントをアップグレードする構文を指定します。
- ネットワーク上でインストールメディアがマウントされているオプティカルドライブを共有します。ターゲット(リモート)システムからコマンドを実行し、ローカルシステム上のすべてのエージェントをアップグレードする構文を指定します。
- ネットワーク共有を作成し、インストールメディアの中身全体を共有ディレクトリにコピーします。ターゲット(リモート)システムからコマンドを実行し、ローカルシステム上のすべてのエージェントをアップグレードする構文を指定します。

MasterSetup をコマンドラインから実行した場合、Arcserve Backup ベース製品および Arcserve Backup オプションをアップグレードすることはできません。

MasterSetup は、インストールメディアの以下のディレクトリにインストールされています。

<drive>\Install\mastersetup.exe

Arcserve Backup エージェントを現在のリリースにアップグレードする方法

1. 「以前のリリースからの Arcserve Backup のアップグレード」の手順を実行します。
2. 「サイレント インストール用レスポンス ファイルの作成」の手順に従ってレスポンス ファイルを作成します。
3. アップグレード プロセスを完了し、レスポンス ファイルを作成した後、Windows コマンドラインを開き MasterSetup にアクセス可能なディレクトリを参照します。
4. 以下の構文を使用して MasterSetup を実行します。

   MasterSetup [/?][/D][/H:<host name>][/U:<User Name>][/P:<Password>][/I:<Icf Path>][/AU][/O]

注： 角かっこ [ ] は、かっこ内の引数がオプションであることを示しています。山かっこ <> は、かっこ内の引数が必須であることを示します。

/?

このコマンドの使用方法を表示します。

/D

インストールのステータスを表示します。

/H

ターゲット システムのホスト名を指定します。

/U

ターゲット システムのユーザ名を指定します。

/P

ターゲット システム上のユーザ名のパスワードを指定します。

/I

レスポンス ファイルの場所を指定します。

/AU

サイレント アップグレードを実行するように指定します。

注： この引数では、ローカル システムにインストールされているすべてのエージェントをアップグレードできます。

/O

出力ファイルの場所を指定します。この引数を使用するには、/AU 引数を指定する必要があります。

実行が完了したら、指定されたシステムにインストールされているすべてのエージェントが本リリースにアップグレードされます。

注： MasterSetup が Arcserve Backup ベース製品がターゲット システムにインストールされていることを検出すると、アップグレード処理は失敗します。

例：MasterSetup 構文

以下の例は、computer001 にインストールされているすべてのエージェントを本リリースにアップグレードするのに必要な構文を表しています。ユーザはプライマリ サーバにログインしており、ユーザ名は administrator、パスワードは test-001 です。

```
mastersetup /h:computer001 /u:administrator /p:test-001 /au
```

以下の例は、ローカル システムにインストールされているすべてのエージェントをアップグレードするのに必要な構文を表しています。ユーザは、管理者権限を持つユーザ アカウントでターゲット システムにログインしている必要があります。

mastersetup /au

プライマリ サーバからリモート コンピュータへのエージェントの展開

Arcserve Backup によって、バックアップ管理者およびバックアップ マネージャは、Agent Deployment ウィザード アプリケーションを使用して、リモート コンピュータ上の Arcserve Backup エージェントのコレクションを同時にインストールおよびアップグレードできます。Agent Deployment は、選択された Arcserve Backup エージェントのグループの最新バージョンがバックアップ環境で実行されていることを確認します。

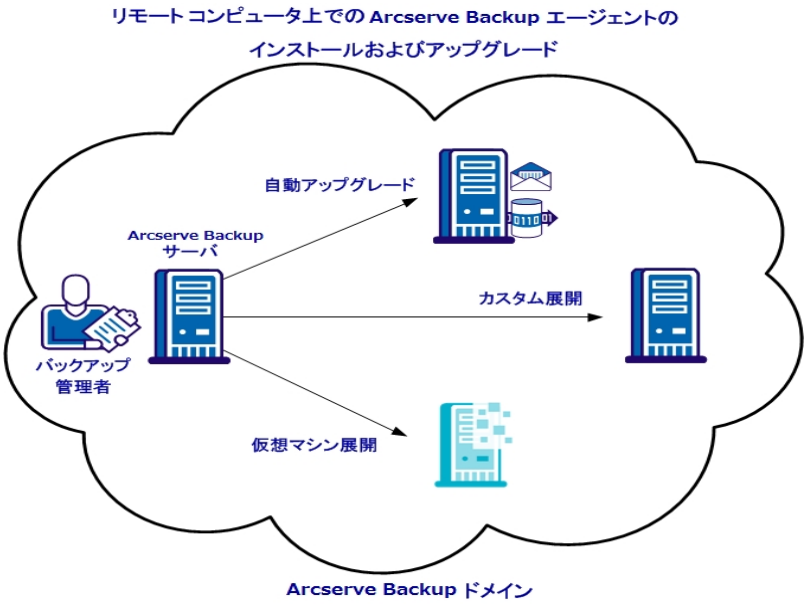
エージェントは、プライマリ サーバおよびスタンドアロン サーバからリモート コンピュータに展開できます。

Agent Deployment によって、以下の Arcserve Backup 製品を展開できます。

- Arcserve Backup Agent for Microsoft Exchange Server
- Arcserve Backup Agent for Open Files
- Arcserve Backup Agent for Virtual Machines
- Arcserve Backup Client Agent for Windows
- Arcserve Backup 診断ユーティリティ

注： このリストにある製品以外のエージェントがリモート コンピュータにインストールされていることを Agent Deployment が検出した場合、展開プロセスは終了します。

以下の図は、エージェントをリモート コンピュータにインストールおよびアップグレードする方法を示しています。



Agent Deployment を使用すると、以下の表に述べる方式を使用してエージェントを展開できます。

展開方式	詳細情報
自動アップグレード	自動アップグレードを使用したリモート コンピュータへのエージェントの展開
カスタム展開	カスタム展開を使用したリモート コンピュータへのエージェントの展開
仮想マシン展開	仮想マシン展開を使用した仮想マシンへのエージェントの展開

リモート展開に関する考慮事項

Agent Deployment を使用する前に以下を確認します。

- Agent Deployment を使用するには、Arcserve Backup サーバにインストールできるインストール ファイルが必要です。この方法により、Agent Deployment の実行時に Arcserve Backup インストール メディアを用意する必要がなくなります。Agent Deployment には約 1.3 GB のハードディスク容量が必要で、Arcserve Backup のインストールの所要時間が大幅に増えます。インストール メディアを用意する必要がないようにするには、Arcserve Backup のインストール時に Agent Deployment のセットアップ ファイルを明示的に選択する必要があります。
- Agent for Microsoft Exchange Server を Exchange クライアント アクセス サーバおよび Hub 転送サーバにインストールする場合は、Agent Deployment を使用しないでください。
- Agent Deployment では、ターゲット システムのホスト名を指定する必要があります。Arcserve Backup では、リモート システムにエージェントを展開するときに IP アドレスを指定 *できません*。
- Agent Deployment は、デフォルトのインストール パスにエージェントをインストールします。たとえば、Agent Deployment は、Client Agent for Windows を以下のパスにインストールまたはアップグレードします(x86 システム) 。

  C:\Program Files\CA\ARCserve Backup Client Agent for Windows
- エージェントをリモート コンピュータに展開するには、管理者権限があるアカウントでコンピュータにログインする必要があります。
- リモート コンピュータ上の管理用共有リソース(たとえば、C$、Admin$ など) が、エージェントを配信するサーバからアクセス可能であることを確認します。
- リモート コンピュータ上の [ファイルとプリンタ] サービスに対するファイアウォール例外ルールが有効になっていることを確認します。デフォルトでは、Windows Server 2008 ファイアウォール ポリシーによって [ファイルとプリンタ] サービスの通信がブロックされるため、Windows Server 2008 システムでこのタスクが必要になります。
- Windows ファイアウォールによって [ファイルとプリンタの共有] 通信がブロックされないようにするには、ドメイン レベルのグループ ポリシーを使用して、バックアップ環境内のすべてのサーバの [ファイルとプリンタの共有] 通信に対する例外を有効にしてください。

自動アップグレードを使用したリモート コンピュータへのエージェントの展開

Arcserve Backup Agent Deployment により、バックアップ管理者およびバックアップマネージャは、Arcserve Backup エージェントをリモート コンピュータにインストールおよびアップグレードできます。自動アップグレードを使用すると、本リリースにアップグレードする必要があるエージェントを持つコンピュータが検出され、そこにエージェントを展開できます。この方法によって、お使いの Arcserve Backup 環境で実行されているすべてのエージェントのリリース番号が Arcserve Backup ベース製品と同じであることが確実になります。

注： 自動アップグレードを使用した場合、リモート コンピュータのホスト名を手動で指定することはできません。

自動アップグレード方式では、以下のエージェントとコンポーネントを展開できます。

- Arcserve Backup Agent for Microsoft Exchange Server
- Arcserve Backup Agent for Microsoft SQL Server
- Arcserve Backup Agent for Microsoft SharePoint Server
- Arcserve Backup Agent for Open Files
- Arcserve Backup Agent for Oracle
- Arcserve Backup Agent for Virtual Machines
- Arcserve Backup Client Agent for Windows
- Arcserve Backup 診断ユーティリティ

自動アップグレード方式では、エージェントを本リリースにアップグレードするために、ターゲット コンピュータにインストールされている以前のリリースのエージェントを検出する必要があります。エージェントが検出されない場合は、カスタム展開方式を使用して、ターゲット コンピュータにエージェントをインストールします。

注： 以下のタスクを完了する前に、「リモート展開に関する考慮事項」を参照してください。

自動アップグレードを使用してリモート コンピュータにエージェントを展開する方法

1. Arcserve Backup マネージャ コンソールを開きます。
2. [クイック スタート] メニューから [管理] を選択し、[Agent Deployment] をクリックします。

   Arcserve Backup Agent Deployment が起動し、[ログオン サーバ] ダイアログ ボックスが開きます。

3. [ログオン サーバ]ダイアログ ボックスで必要なフィールドに入力して、[次へ]をクリックします。
4. [方式]ダイアログ ボックスで [自動アップグレード]をクリックし、[次へ]をクリックします。

   [コンポーネント]ダイアログ ボックスに、Agent Deployment によって検出された、以前のリリースの Arcserve Backup エージェントを実行しているコンピュータのリストが表示されます。
5. [次へ]をクリックして、検出されたコンピュータのホスト名、ユーザ名、およびパスワードを [ホスト情報]ダイアログ ボックスに取り込みます。
6. リモート コンピュータのユーザ名とパスワードを変更するには、以下の手順に従います。
   a. ホスト名の横のチェック ボックスをオンにして選択します。
   b. *ホスト名の横の [ユーザ名]フィールドをクリックし、ユーザ名を「<ドメイン>\<ユーザ名>」の形式で入力します。*
   c. [パスワード]フィールドをクリックし、パスワードを入力します。

   注： ユーザ名とパスワードがすべてのリモート コンピュータに対して同じである場合は、コンピュータのチェック ボックスをすべてオンにします。選択されたすべてのコンピュータの下で、[ユーザ名]フィールドにユーザ名を「<ドメイン>\<ユーザ名>」の形式で入力し、[パスワード]フィールドにパスワードを入力して、[認証情報の適用]をクリックします。
7. [リモート インストール処理の間 Remote Registry サービスの実行を許可する]オプションをクリックします。このオプションにより、Agent Deployment はターゲット コンピュータに関する情報を取得し、指定された認証情報が正しいことを検証できます。

   注： このオプションでは、リモート インストール処理の間のみ Remote Registry サービスが実行されます。
8. (オプション) [ホストおよび認証情報]リストからコンピュータを削除するには、削除するホストの横にあるチェック ボックスをオンにし、[削除]をクリックします。
9. [次へ]をクリックします。

   Agent Deployment は、すべての指定ホストに対して指定された情報を検証します。認証エラーが検出されなかった場合は、[ステータス]フィールドに「保留」と表示されます。認証エラーが検出された場合は、[ステータス]フィールドに表示される「失敗」をクリックして、理由を確認します。続行するには、すべての失敗メッセージを修正する必要があります。

10. すべてのリモート ホストの [ステータス] フィールドに [検証済み] と表示されたら、[次へ] をクリックします。
11. [セットアップ サマリ] ダイアログ ボックスで、指定したコンポーネントおよびホスト名を確認し、[次へ] をクリックします。
12. [インストール ステータス] ダイアログ ボックスで、[インストール] をクリックし、[次へ] をクリックします。

    Agent Deployment は、指定されたコンピュータ上の Arcserve Backup エージェントをインストールまたはアップグレードします。

    すべてのアップグレードが完了すると、[インストール レポート] ダイアログ ボックスが開きます。
13. [再起動] ダイアログ ボックスで、すぐに再起動するリモート コンピュータの横のチェック ボックスをオンにし、[再起動] をクリックします。

    すべてのリモート コンピュータをすぐに再起動する場合は、[すべて] チェック ボックスをオンにします。

    Agent Deployment はすべてのコンピュータを再起動します。

    注： 再起動が必要なリモート コンピュータのリストを作成する場合は、[再起動レポートのエクスポート] をクリックします。
14. すべてのリモート コンピュータの [ステータス] フィールドに [完了] と表示されたら、[終了] をクリックします。

カスタム展開を使用したリモート コンピュータへのエージェントの展開

Arcserve Backup Agent Deployment により、バックアップ管理者およびバックアップ マネージャは、Arcserve Backup エージェントをリモート コンピュータにインストールおよびアップグレードできます。カスタム展開では、リモート コンピュータ上でインストールおよびアップグレードするエージェントを指定できます。対象のコンピュータには、エージェントの以前バージョンがインストールされている場合とされていない場合の両方が考えられます。この方法は、お使いの Arcserve Backup 環境で実行されているすべてのエージェントのリリース番号が Arcserve Backup ベース製品と同じであることを確認するのに役立ちます。

カスタム展開方式を使用して、以下のエージェントおよびコンポーネントを展開できます。

- Arcserve Backup Agent for Microsoft Exchange Server
- Arcserve Backup Agent for Open Files
- Arcserve Backup Agent for Virtual Machines
- Arcserve Backup Client Agent for Windows
- Arcserve Backup 診断ユーティリティ

注： 以下のタスクを完了する前に、「リモート展開に関する考慮事項」を参照してください。

カスタム展開を使用してリモート コンピュータにエージェントを展開する方法

1. Arcserve Backup マネージャ コンソールを開きます。
2. [クイック スタート] メニューから [管理] を選択し、[Agent Deployment] をクリックします。

   Arcserve Backup Agent Deployment が起動し、[ログオン サーバ] ダイアログ ボックスが開きます。
3. [ログオン サーバ] ダイアログ ボックスで必要なフィールドに入力して、[次へ] をクリックします。
4. [方式] ダイアログ ボックスで [カスタム インストール] をクリックし、[次へ] をクリックします。
5. [コンポーネント] ダイアログ ボックスで、すべてのリモート コンピュータにインストールするエージェントを選択し、[次へ] をクリックします。
6. [ホスト情報] ダイアログ ボックスで、以下のいずれかを実行することによりリモート ホストの名前を指定します。

- [インポート]をクリックし、リモート コンピュータのリストをテキスト ファイルからインポートします。

  注： ホスト名は、改行で区切る必要があります。複数のテキスト ファイルをインポートできますが、リモート コンピュータの総数は 1000 以下にする必要があります。

- [ホスト名]フィールドにリモート ホスト名を指定し、[追加]をクリックします。必要なすべてのホスト名が [ホスト]列に表示されるまで、この手順を繰り返します。

注： リモート コンピュータは、最大 1000 まで指定できます。1000 より多くのリモート コンピュータにエージェントを展開するには、Agent Deployment を再起動してこのタスクを繰り返すか、別の Arcserve Backup プライマリ サーバまたはスタンドアロン サーバから Agent Deployment を実行します。

7. 以下を実行して、リモート ホストごとにユーザ名とパスワードを指定します。
   a. ホスト名の横のチェック ボックスをオンにして選択します。
   b. *ホスト名の横の [ユーザ名] フィールドをクリックし、ユーザ名を「<ドメイン>\<ユーザ名>」の形式で入力します。*
   c. [パスワード]フィールドをクリックし、パスワードを入力します。

   注： *ユーザ名とパスワードがすべてのリモート コンピュータに対して同じである場合は、チェック ボックスをすべてオンにします。*選択されたすべてのコンピュータの下で、[ユーザ名]フィールドにユーザ名を「<ドメイン>\<ユーザ名>」の形式で入力し、[パスワード]フィールドにパスワードを入力して、[認証情報の適用]をクリックします。

8. [リモート インストール処理の間 Remote Registry サービスの実行を許可する]オプションをクリックします。このオプションにより、Agent Deployment はターゲット コンピュータに関する情報を取得し、指定された認証情報が正しいことを検証できます。

   注： このオプションでは、リモート インストール処理の間のみ Remote Registry サービスが実行されます。

9. (オプション) [ホストおよび認証情報]リストからホストを削除するには、削除するホストの横にあるチェック ボックスをオンにし、[削除]をクリックします。

10. [次へ]をクリックします。

    Agent Deployment は、すべての指定されたホストに対して情報を検証します。認証エラーが検出されなかった場合は、[ステータス]フィールドに「保留」と表示されます。認証エラーが検出された場合は、[ステータス]フィールドに表示される「失敗」をクリックして、理由を確認します。続行するには、すべての失敗メッセージを修正する必要があります。

11. すべてのホストの [ステータス] フィールドに [保留] または [検証済み] と表示されたら、[次へ] をクリックします。
12. [セットアップ サマリ] ダイアログ ボックスで、指定したコンポーネントおよびホスト名を確認し、[次へ] をクリックします。
13. [インストール ステータス] ダイアログ ボックスで [インストール] をクリックします。

    Agent Deployment は、指定されたホストの Arcserve Backup エージェントをインストールまたはアップグレードします。

    すべてのインストールとアップグレードが完了すると、[インストール レポート] ダイアログ ボックスが開きます。
14. 以下のいずれかを行います。
    - 再起動が必要なリモート コンピュータがある場合は、[次へ] をクリックします。

      [再起動] ダイアログ ボックスが開き、再起動が必要なリモート コンピュータが特定されます。

      次の手順に進みます。
    - 再起動が必要なリモート コンピュータがない場合は、[終了] をクリックします。
15. [再起動] ダイアログ ボックスで、すぐに再起動するリモート ホストの横のチェック ボックスをオンにします。

    または、[すべて] チェック ボックスをオンにすると、すべてのリモート コンピュータがすぐに再起動されます。
16. [再起動] をクリックします。

    Agent Deployment は、すべてのリモート コンピュータを再起動します。

    注： 再起動が必要なリモート コンピュータのリストを作成する場合は、[再起動レポートのエクスポート] をクリックします。
17. すべてのリモート コンピュータの [ステータス] フィールドに [完了] と表示されたら、[終了] をクリックします。

仮想マシン展開を使用した仮想マシンへのエージェントの展開

Arcserve Backup Agent Deployment により、バックアップ管理者およびバックアップマネージャは、Arcserve Backup エージェントをローカルまたはリモートの仮想マシン (VM) にインストールおよびアップグレードできます。ターゲット VM には、エージェントの以前バージョンがインストールされている場合もされていない場合もあります。この方法は、お使いの Arcserve Backup 環境内の VM で実行されているすべてのエージェントのリリース番号が Arcserve Backup ベース製品と同じであることを確認するのに役立ちます。

仮想マシン展開方式を使用して、以下のエージェントおよびコンポーネントを展開できます。

- Arcserve Backup Agent for Open Files
- Arcserve Backup Agent for Virtual Machines
- Arcserve Backup Client Agent for Windows
- Arcserve Backup 診断ユーティリティ

以下の点に注意してください。

- VM に対してエージェントをインストールしたりアップグレードしたりするには、VM の電源がオンになっている必要があります。
- Agent Deployment によって、ESX/ESXi Server システムおよび Hyper-V ホスト システムにあるすべての VM にエージェントがインストールまたはアップグレードされます。

注： 以下のタスクを完了する前に、「リモート展開に関する考慮事項」を参照してください。

仮想マシン展開を使用してエージェントを仮想マシンに展開する方法

1. Arcserve Backup マネージャ コンソールを開きます。
2. [クイック スタート]- [管理]- [Agent Deployment]の順に選択します。

   Arcserve Backup Agent Deployment が起動し、[ログオン サーバ]ダイアログ ボックスが開きます。
3. [ログオン サーバ]ダイアログ ボックスで必要なフィールドに入力して、[次へ]をクリックします。
4. [方式]ダイアログ ボックスで、[仮想マシンの展開]をクリックし、[次へ]をクリックします。

5. [コンポーネント]ダイアログ ボックスから、すべてのリモート コンピュータにインストールするエージェントを選択し、[次へ]をクリックします。
6. 以下のいずれかを実行することにより、[ホスト情報]ダイアログ ボックスで VM が含まれるリモート コンピュータの名前を指定します。
   - [インポート]をクリックし、リモート コンピュータのリストをテキスト ファイルからインポートします。

     注： ホスト名は、改行で区切る必要があります。複数のテキスト ファイルをインポートできますが、リモート コンピュータの総数は 1000 以下にする必要があります。
   - [更新]をクリックし、Arcserve Backup データベースから既存の VM をインポートします。
   - [ホスト名]フィールドのリモート ホスト名を指定し、[追加]をクリックします。必要なすべてのホスト名が [ホスト]列に表示されるまで、この手順を繰り返します。

   [ホスト]列にホスト名が表示されたら、次の手順に進みます。

   注： リモート コンピュータは、最大 1000 まで指定できます。1000 より多くのリモート コンピュータにエージェントを展開するには、Agent Deployment を再起動してこのタスクを繰り返すか、別の Arcserve Backup プライマリ サーバまたはスタンドアロン サーバから Agent Deployment を実行します。
7. 以下を実行して、リモート ホストごとにユーザ名とパスワードを指定します。
   a. ホスト名の横のチェック ボックスをオンにして選択します。
   b. *ホスト名の横の [ユーザ名]フィールドをクリックし、ユーザ名を「<ドメイン>\<ユーザ名>」の形式で入力します。*
   c. [パスワード]フィールドをクリックし、パスワードを入力します。

   注： *ユーザ名とパスワードがすべてのリモート コンピュータに対して同じである場合は、チェック ボックスをすべてオンにします。*選択されたすべてのコンピュータの下で、[ユーザ名]フィールドにユーザ名を「<ドメイン>\<ユーザ名>」の形式で入力し、[パスワード]フィールドにパスワードを入力して、[認証情報の適用]をクリックします。
8. [リモート インストール処理の間 Remote Registry サービスの実行を許可する]オプションをクリックします。このオプションにより、Agent Deployment はターゲット コンピュータに関する情報を取得し、指定された認証情報が正しいことを検証できます。

   注： このオプションでは、リモート インストール処理の間のみ Remote Registry サービスが実行されます。

9. [ホストおよび認証情報]リストからホストを削除するには、削除するホストの横にあるチェック ボックスをオンにし、[削除]をクリックします。
10. [次へ]をクリックします。

    Agent Deployment は、すべての指定されたホストに対して情報を検証します。認証エラーが検出されなかった場合は、[ステータス]フィールドに「保留」と表示されます。認証エラーが検出された場合は、[ステータス]フィールドに表示される「失敗」をクリックして、理由を確認します。続行するには、すべての失敗メッセージを修正する必要があります。
11. すべてのホストの [ステータス]フィールドに [保留]または [検証済み]と表示されたら、[次へ]をクリックします。
12. [セットアップ サマリ]ダイアログ ボックスで、指定したコンポーネントおよびホスト名を確認し、[次へ]をクリックします。
13. [インストール ステータス]ダイアログ ボックスで [インストール]をクリックします。

    Agent Deployment は、指定されたホストの Arcserve Backup エージェントをインストールまたはアップグレードします。

    すべてのインストールとアップグレードが完了すると、[インストール レポート]ダイアログ ボックスが開きます。
14. 以下のいずれかを行います。
    - 再起動を必要とするリモート コンピュータがある場合は、[次へ]をクリックして [再起動]をクリックします。
    - 再起動が必要なリモート コンピュータがない場合は、[終了]をクリックします。
15. [再起動]ダイアログ ボックスで、すぐに再起動するリモート コンピュータの横のチェック ボックスをオンにし、[再起動]をクリックします。

    すべてのリモート コンピュータをすぐに再起動する場合は、[すべて]チェック ボックスをオンにします。

    注： 再起動が必要なリモート コンピュータのリストを作成する場合は、[再起動レポートのエクスポート]をクリックします。
16. すべてのリモート コンピュータの [ステータス]フィールドに [完了]と表示されたら、[終了]をクリックします。

    Arcserve Backup エージェントが VM に展開されます。

インストール後の作業

Arcserve Backup をインストールまたはアップグレードした後、必ず以下の作業を完了してください。

- 環境設定が必要なエージェントまたはオプションをインストールした場合、適切なエージェントまたはオプションのマニュアルを参照してください。Arcserve Backup のマニュアルは、インストールメディアまたは Arcserve Backup マネージャコンソールのヘルプメニューからアクセスできます。
- すべてのジョブがスケジュール通りに起動するようにするため、プライマリサーバとそのメンバサーバ間のシステム時間を同一時刻にしてください。

  注： Arcserve BackupWindows Time サービスを使用して、ドメイン内のすべてのサーバ上の時間を同期します。
- Arcserve Backup データベース保護ジョブをセットアップします。詳細については、「Arcserve Backup データベース保護ジョブの開始」、または「管理者ガイド」を参照してください。

第5章: クラスタ対応環境での Arcserve Backup のインストールとアップグレード

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

クラスタ対応インストールの概要 166
展開に関する考慮事項 167
Arcserve Backup HA 展開の計画 169
MSCS での Arcserve Backup サーバの展開 171
NEC クラスタでの Arcserve Backup サーバの展開 194
クラスタ対応インストールおよびアップグレードの確認方法 226

クラスタ対応インストールの概要

ジョブフェールオーバ機能を持つクラスタ環境での Arcserve Backup のインストールは、以下のクラスタプラットフォームに対してサポートされています。

- x86/x64 Windows Server の Microsoft Cluster Server (MSCS)
- CLUSTERPRO/ExpressCluster

展開に関する考慮事項

クラスタ環境への Arcserve Backup の展開を開始する前に、以下の事項を考慮する必要があります。

- **サポートされているオペレーティング システム** -- サポートされているオペレーティング システムについては、「Arcserve Backup リリース ノート」を参照してください。
- **必要なクラスタ リソース** -- 他のクラスタ対応アプリケーションと同様に、Arcserve Backup HA サーバは、自身を共有ディスクや仮想名/IP アドレスなどのクラスタ リソースとバインドする必要があります。クラスタ リソースをグループ化することにより、Arcserve Backup を既存のグループにインストールしてそのグループにすでに確立されている既存のクラスタ リソースにバインドしたり、Arcserve Backup 展開用の専用グループを作成することができます。
- **特殊なインストール/環境設定** -- Arcserve Backup をすべてのクラスタ ノードに展開するには、すべてのノードに同じ Arcserve Backup コンポーネントをインストールし、それらに同じ設定を適用する必要があります。Arcserve Backup のシステム アカウントは、各クラスタ ノードにインストールされているすべての Arcserve Backup サーバ上で統一する必要があります。

  注： クラスタ マシンのセットアップ プログラムは Arcserve Backup ベース製品または Arcserve Backup エージェントのリモート インストールはサポートしていません。Arcserve Backup エージェント(たとえば Agent for Microsoft SQL Server または Agent for Microsoft Exchange Server) に関するこのリモート インストールの制限は、仮想ホストを使用している場合のみ当てはまります。クラスタの物理ホストを使用した Arcserve Backup エージェントのリモート インストールはサポートされています。
- **フェールオーバをトリガする仕組み** -- Arcserve Backup には、独自のクラスタ リソースのダイナミック リンク ライブラリ機能(DLL) およびスクリプトが用意されていて、クラスタ サービス機能を拡張して、Arcserve Backup の障害を監視、検出します。仮想サーバのネットワーク名 やIPアドレスにより、Arcserve Backupを単一のシステムとして認識できるので、クラスタ管理ツールの機能を活用できるようになります。
- **アップグレード** -- すべての Arcserve Backup サービスが適切に開始されるようにするには、アップグレード処理が完了した後、Arcserve Backup マネージャ コンソールを開く前に、cstop および cstart のスクリプトを実行する必要があります。r16.5 (GA リリースおよび最新のサービス パックをすべて含む) 、r17 (GA リリースおよび最新のサービス パックをすべて含む) 、および r17.5 (GA リリースおよび最新のサービス パックをすべて含む) からこのリリースにアップグレードする場合は、このタスクを実行する必要があります。

cstop および cstart のバッチ ファイルは、Arcserve Backup サーバの Arcserve Backup インストール ディレクトリに格納されています。

注： cstop および cstart の使用の詳細については、「管理者ガイド」を参照してください。

Arcserve Backup HA 展開の計画

High Availability (HA) はフォールトトレラント システムと結びついていることが多く、コンポーネントの障害や計画された停止時においてもシステムが稼働を継続できます。フォールトトレラントなシステムでコンポーネントの障害が 1 つ発生しても、ユーザに意識させることなく代替コンポーネントがそのタスクを引き継ぐため、システムが中断することはありません。Arcserve Backup における一元管理機能を維持するには、24 時間 365 日のデータ保護を提供する高可用性はますます重要になっています。特に、Arcserve Backup ドメインの一元管理センターとして主要な役割を果たすプライマリ サーバにとって重要といえます。

Arcserve Backup サーバのクラスタ対応インストールを実行する前に、以下を考慮する必要があります。

クラスタ対応として展開される Arcserve Backup サーバの決定

一元管理環境では、通常、クラスタ保護により HA 機能を実現するには Arcserve Backup プライマリ サーバが適した候補として考えられます。しかし、クラスタのメンバ サーバもサポートされます。

注： クラスタ マシンのセットアップ プログラムは Arcserve Backup ベース製品または Arcserve Backup エージェントのリモート インストールはサポートしていません。Arcserve Backup エージェント (たとえば Agent for Microsoft SQL Server または Agent for Microsoft Exchange Server) に関するこのリモート インストールの制限は、仮想ホストを使用している場合のみ当てはまります。クラスタの物理ホストを使用した Arcserve Backup エージェントのリモート インストールはサポートされています。

Arcserve Backup HA サーバとして展開されるクラスタ ノードの決定

クラスタ システムには、いくつかのクラスタ ノードが含まれる場合があります。クラスタ環境では、アクティブなノードとして設定された 1 つのノードと、パッシブ ノードとして設定された 1 つ以上のノードが必要です。通常は「アクティブ × 1 + パッシブ × 1」ソリューションが使用されますが、「アクティブ× 1 + パッシブ × 複数」ソリューションを使用することも可能です。

Arcserve Backup のインストール先

実運用環境では、1 つのクラスタ システムを複数のクラスタ対応アプリケーションが共有する場合もあります。各々のクラスタ対応アプリケーションには、独自の仮想名と IP アドレス、および専用の共有ディスクが必要です。Arcserve Backup の展開には、以下の 3 つの選択肢があります。

- 専用グループに Arcserve Backup をインストールする

  仮想名 /IP アドレスおよび共有ディスクのコンテナとして専用グループを作成し、この新しいグループに Arcserve Backup を展開することが推奨されます。こ

の方法の利点は、フェールオーバのリスクをグループ内にとどめ、他のアプリケーションには及ばないようにできることです。たとえば、Arcserve Backup サーバのフェールオーバが SQL Server に影響を及ぼすことはありません。

- 他のアプリケーションが作成した既存グループに Arcserve Backup をインストールする

  他のクラスタ対応アプリケーション(SQL Server Cluster など) はそれぞれ独自のグループを作成して、アプリケーションが指定したリソースを管理します。これらと同じグループの共有ディスクに Arcserve Backup をインストールして、Arcserve Backup で既存のアプリケーションとグループを共有することができます。

使用する Arcserve Backup データベースタイプの決定

Arcserve Backup プライマリサーバは、バックエンド データベースとして、ローカル Microsoft SQL Server 2014 Express Edition、およびローカルまたはリモートの Microsoft SQL Server の使用をサポートしています。ただし、クラスタ対応プライマリサーバがサポートしているのは、以下のシナリオのみです。

- Microsoft SQL Server 2014 SP2 Express Edition (SQLE)

  SQL Server クラスタを購入せず、限られた SQL Server 2014 Express の機能で十分であるならば、それが一番よい選択肢です。

  注： MSCS クラスタ環境では、Arcserve データベースが SQLE である場合、Arcserve Backup データベースサマリ(データベースマネージャ上) はインストールパスの物理名を仮想名の代わりに表示します。

- ローカル Microsoft SQL Server クラスタ

  既存の SQL Server クラスタが実稼働環境に存在する場合は、そのクラスタを Arcserve Backup のデータベースとして使用できます。

  注： Arcserve Backup では、NEC CLUSTERPRO/ExpressCluster 環境において、Arcserve Backup データベースに Microsoft SQL Server をローカルでインストールすることはできません。

- リモート Microsoft SQL Server

  リモート SQL Server を Arcserve Backup データベースとして選択することもでき、これにより 24 時間 365 日の安定したサービスが提供されます。

MSCS での Arcserve Backup サーバの展開

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

- MSCS ハードウェア要件
- MSCS ソフトウェア要件
- MSCS クラスタリソースの準備
- Windows Server 2008 システム上での MSCS クラスタリソースの準備
- Windows Server 2012 および Windows Server 2012 R2 システム上での MSCS クラスタリソースの準備
- MSCS クラスタ対応環境への Arcserve Backup のインストール
- MSCS クラスタ環境での Arcserve Backup r16 SP1、r17、r17.5 から 18.0 へのアップグレード
- MSCS クラスタからの Arcserve Backup のアンインストール
- Arcserve Backup クラスタリソースの削除

MSCS ハードウェア要件

Arcserve Backup を MSCS クラスタに展開するためには、システムが以下のハードウェア要件を満たしている必要があります。

- すべてのクラスタノードは、同一機種のハードウェア(SCSIアダプタ、ファイバチャネルアダプタ、RAIDアダプタ、ネットワークアダプタ、ハード ディスクなど) で構成されている必要があります。
- ディスクデバイスとテープデバイスには、それぞれ異なるSCSIアダプタ/ファイバチャネルアダプタを使用してください。

注：環境設定を容易にし、互換性の問題を回避するためにも、すべてのノードで同一のハードウェアを使用することをお勧めします。

MSCS ソフトウェア要件

Arcserve Backup を MSCS クラスタに展開するためには、システムが以下のソフトウェア要件を満たしている必要があります。

- Arcserve Backup サーバコンポーネントでサポートされているオペレーティングシステムについては、Arcserve Backup ソフトウェア互換性マトリクスを参照してください。Arcserve Backup は、サーバサポートとしてリストされているすべてのオペレーティングシステム上のクラスタ対応環境設定をサポートしています。
- HA プラットフォームが MSCS クラスタ用に環境設定されている

MSCS クラスタ リソースの準 備

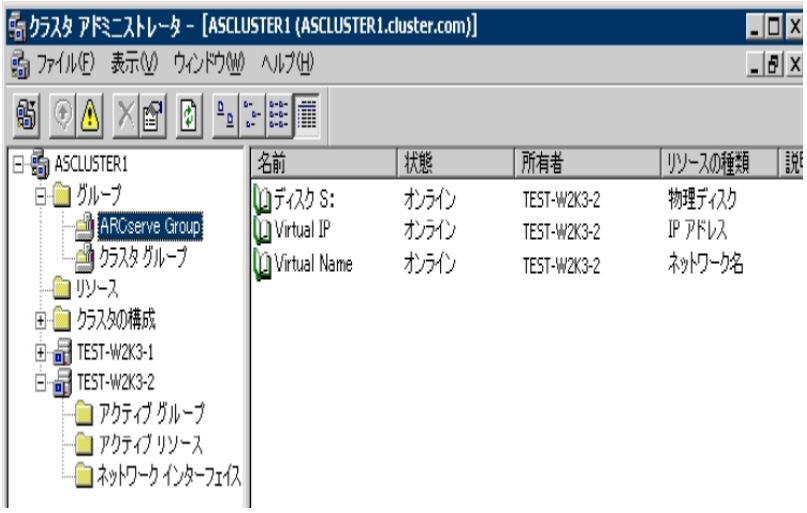
Arcserve Backup を専 用 のグループにインストールする場 合 は、仮 想 IP アドレス、仮 想 名 、共 有 ディスクなどの必 須 のリソースを新しい専 用 グループへ作 成 する必 要 があります。

注： フェールオーバ クラスタ マネージャは Microsoft が提 供 するユーティリティであり、MSCS がインストール済 みのサーバにインストールされています。クラスタに関 する環 境 設 定 および管 理 タスクのほとんどは、このユーティリティを使 用 して実 行 します。

以 下 の画 面 の例 では、Windows Server システム上 に以 下 の 3 つの関 連 リソースを持 つ「ARCserve Group」という名 前 のグループが Arcserve Backup インストールのために作 成 されています。

- 共 有 ディスク S:
- 仮 想 IP アドレス
- 仮 想 名

後 で、共 有 ディスク S にあるパスへの Arcserve Backup のインストールを選 択 できます。



同じグループを既 存 のアプリケーションと共 有 する場 合 は、新しいリソースを作 成 する必 要 はありません。同じ画 面 の例 で、Arcserve Backup を「クラスタ グループ」にインストールし、クォーラム ディスク、管 理 仮 想 IP アドレス、および仮 想 名 とバインドできます。

注： クラスタ グループは、MSCS のセットアップ中 、クラスタが作 成 される際 に作 られたデフォルトのリソース グループ名 です。クラスタ グループはクォーラム ディスク リソース、仮 想 IP アドレスおよび仮 想 名 で構 成 され、クラスタを管 理 するために使 用 さ

れます。クォーラム リソースが入っているディスクはクォーラム ディスクと呼ばれ、デフォルト クラスタ グループのメンバである必要があります。

Windows Server 2008 システム上での MSCS クラスタリソースの準備

Windows Server 2008 システムでは、フェールオーバクラスタ管理ユーティリティを使用して MSCS クラスタリソースを準備します。

注： Windows Server 2008 システムでは、このユーティリティはフェールオーバクラスタ管理と呼ばれます。Windows Server 2008 R2 システムでは、このユーティリティはフェールオーバクラスタマネージャと呼ばれます。以下の手順では、Windows Server 2008 システム上でクラスタリソースを準備する方法について説明します。

Windows Server 2008 システム上で MSCS クラスタリソースを準備する方法

1. Windows のスタートメニューから [フェールオーバー クラスタ管理] を開きます。

   [高可用性ウィザードの開始する前に] ダイアログボックスが表示されます。

2. [開始する前に] ダイアログボックスの内容を確認し、[次へ] をクリックします。

   [フェールオーバー クラスタ管理] ウィンドウが表示されます。

3. ディレクトリツリーから [サービスとアプリケーション] を右クリックし、コンテキストメニュー上の [サービスまたはアプリケーションの構成] をクリックします。

   [サービスまたはアプリケーションの選択] ダイアログボックスが表示されます。

4. サービスとアプリケーションのリストから、[その他のサーバ] をクリックして [次へ] をクリックします。

   [クライアント アクセス ポイント] ダイアログボックスが表示されます。

5. [クライアント アクセス ポイント] ダイアログボックス上の必要なフィールドに入力します。以下の情報が入力されたことを確認します。

   - サービス名
   - サービスの場所のパブリックおよびプライベート IP アドレス

6. [次へ] をクリックします。

   [記憶域の選択] ダイアログボックスが表示されます。

7. サービスまたはアプリケーションに割り当てるボリュームを指定します。

8. [次へ] をクリックし、[完了] をクリックします。

クラスタリソースの準備ができました。

Windows Server 2012 および Windows Server 2012 R2 システム上での MSCS クラスタ リソースの準備

Windows Server 2012 および Windows Server 2012 R2 システムでは、フェールオーバ クラスタ管理ユーティリティを使用して MSCS クラスタ リソースを準備します。

以下の手順に従います。

1. Windows のスタート メニューから [フェールオーバー クラスタ管理] を開きます。
2. [ロール] を右クリックし、次に、[ロールの設定] をクリックします。

   高可用性ウィザードの [開始する前に] ダイアログ ボックスが表示されます。
3. [開始する前に] ダイアログ ボックスの内容を確認し、[次へ] をクリックします。
4. [ロールの選択] オプションをクリックし、[ロール] ポップアップ メニューのリストから [その他のサーバ] をクリックします。

   [クライアント アクセス ポイント] ダイアログ ボックスが表示されます。
5. [クライアント アクセス ポイント] ダイアログ ボックス上の必要なフィールドに入力します。以下の情報が入力されたことを確認します。
   - クラスタ役割の名前
   - クラスタ役割の場所のパブリックおよびプライベート IP アドレス
6. [次へ] をクリックします。

   [記憶域の選択] ダイアログ ボックスが表示されます。
7. クラスタ役割に割り当てるボリュームを指定します。
8. [次へ] をクリックすると、[高可用性はロール用に正常に構成されました。] というメッセージが表示されます。
9. [完了] ボタンをクリックします。

   クラスタ リソースの準備ができました。

MSCS クラスタ対応環境への Arcserve Backup のインストール

インストール ウィザードを使用して、MSCS クラスタ対応環境に Arcserve Backup をインストールできます。

MSCS クラスタ対応環境に Arcserve Backup をインストールする方法

1. Arcserve Backup インストール メディアをコンピュータのオプティカル ドライブに挿入します。

   注： Arcserve Backup インストール ブラウザが表示されない場合は、Setup.exe をインストール メディアのルート ディレクトリから実行してください。

2. 「製品のインストール」ブラウザの右側の列で、「Arcserve Backup for Windows のインストール」をクリックします。

   「前提条件コンポーネント」ダイアログ ボックスが表示されます。

3. 「インストール」をクリックして、前提条件コンポーネントをインストールします。

   以下の動作に注意してください。

   「前提条件コンポーネント」ダイアログ ボックスは、ターゲット コンピュータにインストールされている Arcserve Backup 前提条件コンポーネントが検出されなかった場合にのみ表示されます。

   注： クラスタ対応環境内のアクティブ ノードに Arcserve Backup をインストールする場合は、アクティブ ノードが再起動する間に、アクティブ ノードからパッシブ ノードにクラスタ リソースが移動されます。アクティブ ノードが再起動したら、元のアクティブ ノードにクラスタ リソースを移動する必要があります。

4. 「使用許諾契約」ダイアログ ボックスで、使用許諾契約の条件に同意して「次へ」をクリックします。

5. 表示されるプロンプトに従って、ダイアログ ボックスに必要なすべての情報を記入します。

   次のリストは、Arcserve Backup のインストールに関するダイアログ ボックス固有の情報について説明しています。

   インストール/アップグレードの種類の選択ダイアログ ボックス

   リモート インストール オプションを選択すると、Arcserve Backup を複数のシステムにインストールできます。

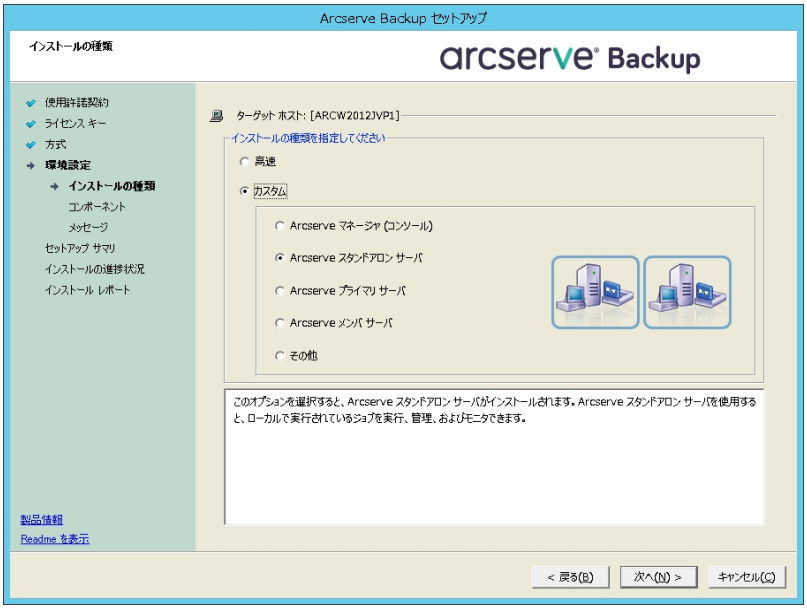
   リモート インストールでは、ターゲットのリモート システムを異なる Arcserve サーバ タイプ、異なる Arcserve Backup エージェントとオプション、またはその両方で構成することができます。

注： クラスタ マシンのセットアップ プログラムは Arcserve Backup ベース製品または Arcserve Backup エージェントのリモート インストールはサポートしていません。Arcserve Backup エージェント(たとえば Agent for Microsoft SQL Server または Agent for Microsoft Exchange Server) に関するこのリモート インストールの制限は、仮想ホストを使用している場合のみ当てはまります。クラスタの物理ホストを使用した Arcserve Backup エージェントのリモート インストールはサポートされています。

[インストールの種類]ダイアログ ボックス

インストールの種類として [高速]または [カスタム]を選択することによって、インストールする Arcserve Backup コンポーネントの種類を指定できます。

注： 以前のリリースからアップグレードする場合、インストール ウィザードでは、現在の Arcserve 設定を検出し、新しいインストールに適切なインストール/アップグレードの種類を選択します。詳細については、「Arcserve Backup サーバ インストールのタイプ」および「Arcserve Backup サーバ オプション」を参照してください。



[コンポーネント]ダイアログ ボックス

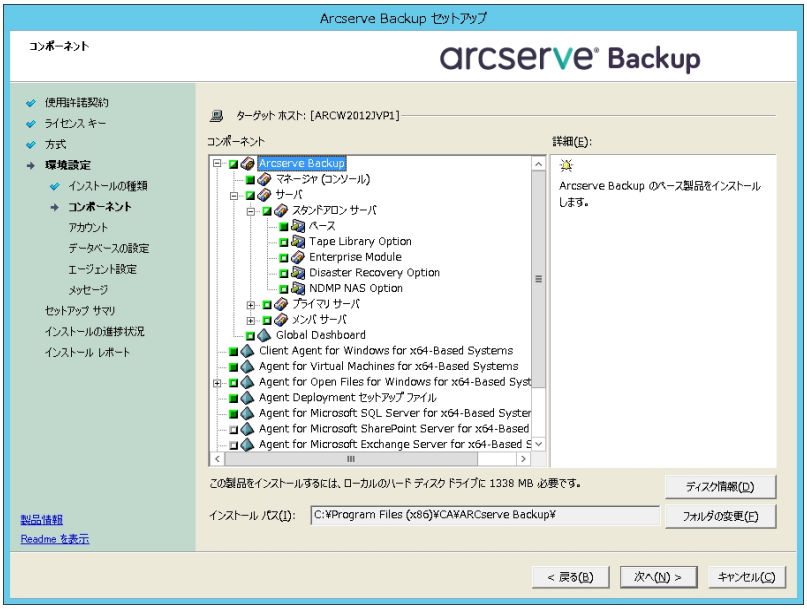
ターゲット システムにインストールする Arcserve Backup コンポーネントを指定できます。

以下の点に注意してください。

- プライマリ サーバをインストールするには、プライマリ サーバに Arcserve Backup Central Management Option をインストールする必要があります。

- メンバ サーバをインストールするには、インストール ウィザードがネットワーク内の Arcserve Backup ドメイン名とプライマリ サーバ名を検出できる必要があります。したがって、メンバ サーバ インストールを実行する前に、少なくとも 1 つのプライマリ サーバ インストールを完了しておく必要があります。
- Arcserve Backup オブジェクトまたはサーバ オブジェクトを [製品の選択] ダイアログ ボックスでクリックすると、インストール ウィザードでは、[インストール/アップグレードの種類] ダイアログ ボックスで指定したインストールの種類に関係なく、デフォルトのスタンドアロン サーバ インストール コンポーネントが指定されます。正しいコンポーネントをインストールするには、サーバ オブジェクトを展開し、インストールする Arcserve Backup サーバのタイプのオブジェクトを展開して、インストールするコンポーネントに対応するチェックボックスをオンにします。
- Agent Deployment は、Arcserve Backup をインストールした後で、Arcserve Backup エージェントを複数のリモート システムにインストールしてアップグレードできるウィザード形式のアプリケーションです。この機能をサポートするには、セットアップ プログラムで Setup ソース ファイルを Arcserve Backup サーバにコピーする必要があります。インストール メディアのコンテンツを Arcserve Backup サーバにコピーするには、[コンポーネント] ダイアログ ボックスで Agent Deployment を選択する必要があります。Agent Deployment を選択すると、Arcserve Backup のインストールまたはアップグレードに要する時間がかなり長くなります。
- リモート インストールまたはサイレント インストールを実行する場合、Arcserve Backup Client Agent for Windows を Arcserve Backup ベース製品と同じディレクトリにインストールしないでください。
- Global Dashboard はプライマリ サーバ、スタンドアロン サーバおよびメンバ サーバにインストールできます。ただし、メンバ サーバをセントラル プライマリ サーバおよびブランチ プライマリ サーバとして機能するように設定することはできません。*セントラル プライマリ サーバおよびブランチ プライマリ サーバの詳細については、「Dashboard ユーザ ガイド」を参照してください。*
- Windows Server Core を実行するコンピュータでは、以下の Arcserve Backup 製品のみをインストールできます。
  - メンバ サーバおよびサポートされるオプション
  - Agent for Open Files
  - Agent for Virtual Machines
  - Client Agent for Windows
  - Disaster Recovery Option

以下の図では、Client Agent for Windows のデフォルトのインストール パスが表示されていて、Agent Deployment が指定されています。



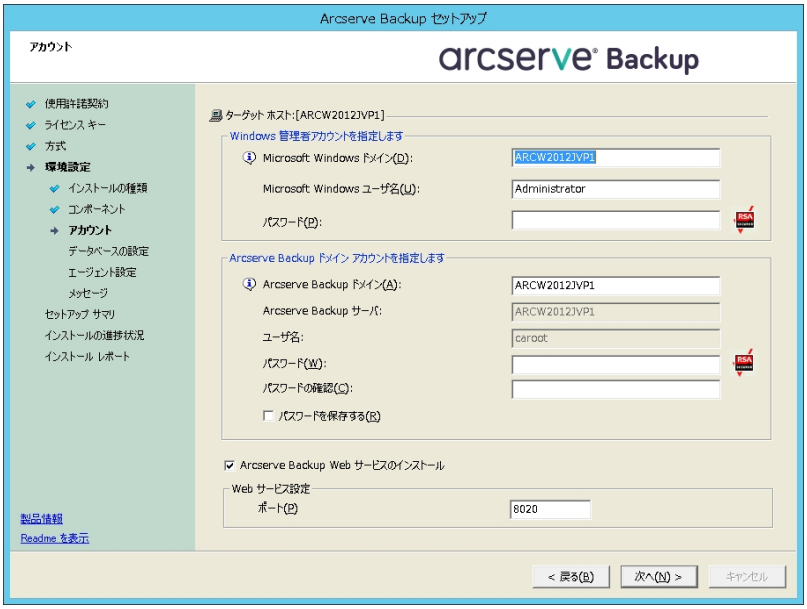
[アカウント]ダイアログ ボックス

Arcserve Backup アカウントを設定し、[**Arcserve Backup Web サービスのインストール**]を有効にするオプションを提供します。

セットアップ中に、クラスタ対応アプリケーションが環境内で実行されていることが検出された場合、Arcserve Backup をクラスタ対応環境にインストールするには、[クラスタ環境インストール]オプションを選択して Arcserve Backup をインストールする共有ディスクのパスを指定します。

注： Arcserve Backup サーバ名と Arcserve Backup ドメイン名は、15 バイト以内である必要があります。合計 15 バイトの名前は、およそ 7 ～ 15 文字

に相当します。



Arcserve Backup Web サービスは、UDP テープへのコピー タスクと Arcserve Backup の間のブリッジとして機能します。デフォルトでは、Arcserve Backup をインストールすると、[**Arcserve Backup Web サービスのインストール**]が有効になります。**Web サービス設定**のデフォルトのポート番号は 8020 です。このポート番号は変更できます。

[**Arcserve Backup Web サービスのインストール**]チェック ボックスをオフにして、Arcserve Backup Web サービスを無効にします。

Arcserve Backup のインストール後に [**Arcserve Backup Web サービスのインストール**]を有効化/変更できます。

注： Arcserve Backup ドメインのすべてのサーバに Arcserve Backup Web サービスをインストールする際と同じポート番号を指定します。Arcserve UDP は、同じポート番号を使用して、Arcserve Backup プライマリ サーバおよび Arcserve Backup ドメイン内のメンバ サーバの両方のサーバに接続します。

以下の手順に従います。

1. コマンド ラインから Arcserve Backup ベース インストール パスに移動します。
2. コマンド プロンプトで、以下のコマンドを入力します。

   Bconfig –c

   [<Arcserve Backup> アカウント]ダイアログ ボックスが表示されます。

3. Web サービスを設定または更新します。

[クラスタ設定] ダイアログ ボックス

[クラスタ設定] ダイアログ ボックスは、クラスタ対応環境に Arcserve Backup をインストールすることをセットアップが検出した場合にのみ表示されます。続行するには、このダイアログ ボックスのすべてのフィールドに記入する必要があります。

クラスタのインストールについては、以下がデータベース インストール時の注意事項になります。

- Arcserve Backup は、NEC CLUSTERPRO 環境においては、Microsoft SQL Server を Arcserve Backup サーバにローカル インストールすることはできません。従って、Arcserve データベース インスタンスをリモート システムにインストールする必要があります。
- Arcserve データベース インスタンスと Arcserve Backup のインストールが同じクラスタに配置されていない場合、SQL Server の種類に「リモート」を選択する必要があります。

[データベースの設定] ダイアログ ボックス

Arcserve Backup データベースを設定できます。

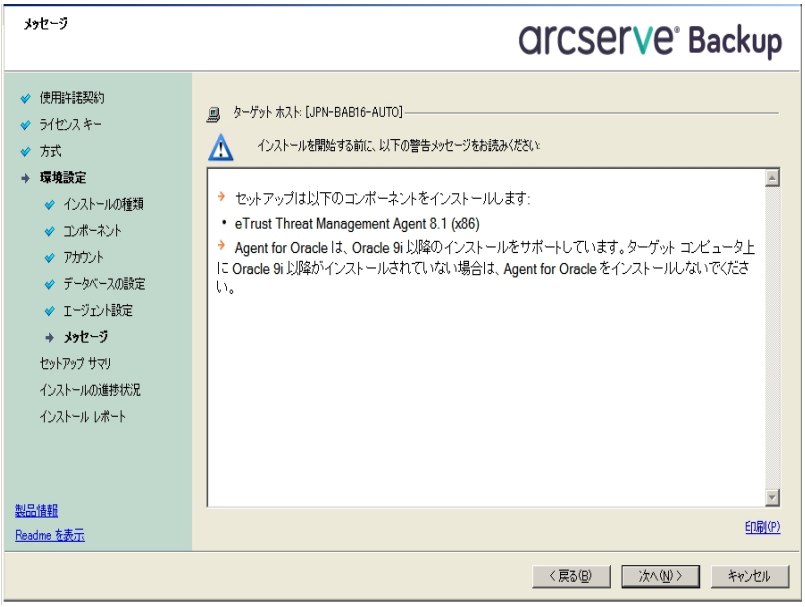
このダイアログ ボックスで、データベース アプリケーション(Arcserve のデフォルトのデータベースまたは Microsoft SQL Server) を指定するか、必須フィールドの入力を完了した後、[次へ] をクリックします。

注： Unicode ベースの東アジア言語文字 (JIS2004 など) を含むデータを保護する必要がある場合は、Arcserve Backup のデータ検索および並べ替えを可能にするために SQL 照合順序を有効にする必要があります。これを行うには、［東アジア言語の照合順序］をクリックしてドロップダウンリストから言語を選択します。

［メッセージ］ダイアログ ボックス

［メッセージ］ダイアログ ボックスでメッセージを確認し、この時点で問題の解決を試みる必要があります。

以下の図は、[メッセージ]ダイアログ ボックスを示しています。



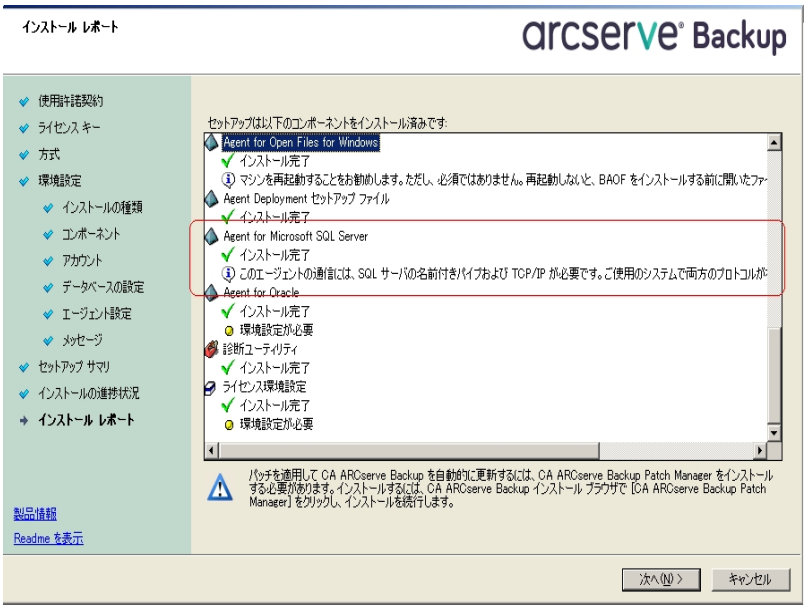
[セットアップ サマリ]ダイアログ ボックス

インストールするコンポーネントを変更するには、変更するインストール オプションが表示されているダイアログ ボックスに戻るまで [戻る]ボタンをクリックしてください。

[インストール レポート]ダイアログ ボックス

選択したコンポーネントで設定が必要な場合は、インストールの最後に設定ダイアログ ボックスが表示されます。すぐにコンポーネントを設定することも、後から [デバイス環境設定]または [Enterprise Module 環境設定]を使用して設定することもできます。たとえば、単一ドライブのオートローダを使用している場合は、セットアップで [インストール サマリ]ダイアログ ボックスでメッセージをダブルクリックすることで、該当する [デバイス環境設定]を起動するように指定することができます。

以下に、[インストールレポート]ダイアログボックスを示します。Agent for Microsoft SQL Server には、環境設定が必要です。



注： Arcserve Backup のインストール時に、サーバの再起動が必要になる場合があります。これは、すべてのファイル、サービス、およびレジストリの設定がオペレーティングシステムレベルで更新されたかどうかによって決まります。

[インストール サマリ]ダイアログボックス

選択したコンポーネントで設定が必要な場合は、インストールの最後に設定ダイアログボックスが表示されます。すぐにコンポーネントを設定することも、後から [デバイス環境設定]または [Enterprise Module 環境設定]を使用して設定することもできます。たとえば、単一ドライブのオートローダを使用している場合は、セットアップで [インストール サマリ]ダイアログボックスでメッセージをダブルクリックすることで、該当する [デバイス環境設定]を起動するように指定することができます。

[ライセンスの確認]ダイアログボックス

ライセンスキーを入力するには、インストールしているコンポーネント、エージェント、およびオプションへ移動し、[ライセンスキーを使用する]オプションを選択してそのコンポーネントのライセンスキーを入力します。

6. [続行]をクリックして [ライセンスの確認]ダイアログボックスを閉じます。
7. [インストール サマリ]ダイアログボックスで [完了]をクリックしてインストールを完了します。
8. パッシブノードに Arcserve Backup をインストールします。

9. アクティブ ノードおよびパッシブ ノード上でクラスタ リソースを設定します。

以下の点に注意してください。

- Windows Server システムでは、Arcserve Backup が展開される各クラスタ ノードに関して、現在のノードがクラスタ内でアクティブなノードとして設定され、共有ディスクにアクセスできることを確認する必要があります。現在のノードがパッシブとして設定されている場合は、クラスタ アドミニストレータの [グループの移動] オプションを使用してアクティブに変更できます。

  クラスタ アドミニストレータは Microsoft が提供するユーティリティであり、MSCS がインストール済みのサーバにインストールされています。クラスタ アドミニストレータでは、クラスタに関連したほとんどの環境設定および管理タスクを実行できます。

- クラスタ対応のインストールが正常に終了すると、セットアップ後のポップアップ画面が表示され、HA リソースを作成するオプションが示されます。HA リソースを作成するオプションがデフォルトで指定されています。このタスクは、Arcserve Backup のインストールがクラスタ内の最後のノードで終了した後に実行する必要があります。

MSCS クラスタ環境での Arcserve Backup r16.5 SP1、r17、r17.5 から 18.0 へのアップグレード

このセクションでは、MSCS クラスタ対応環境で、最新のサービス パックを含む Arcserve Backup r16.5 SP1、r17、r17.5 を 18.0 にアップグレードするために実行する必要がある手順について説明します。

始める前に、「以前のリリースからの Arcserve Backup のアップグレード」に記載されている情報を確認してください。

MSCS クラスタ環境で Arcserve Backup を 18.0 (GA およびすべてのサービス パック) にアップグレードする際に、以下の手順に従ってクラスタ化されたバックアップ データを保護する必要があります。この手順では、MSCS クラスタ環境での Arcserve Backup r16.5 SP1、r17、r17.5 の以下のアップグレード シナリオがサポートされています。

- プライマリ サーバの SQL Server から SQL Server へのアップグレード
- プライマリ サーバの SQL Server Express から SQL Server Express へのアップグレード
- メンバ サーバの 18.0 へのアップグレード

このアップグレード手順では 2 ノード クラスタ環境を想定しており、ノード A は初期アクティブ ノードを、ノード B は初期パッシブ ノードを表しています。

以下の図は、アップグレード手順を示します。

MSCS クラスタ環境での Arcserve Backup r16.5 SP1、r17、r17.5 から 18.0 へのアップグレード

重要：以下の手順を開始する前に、アクティブ ノードおよびパッシブ ノード上の Arcserve Backup レジストリを必ず同期してください。クラスタ アドミニストレータの中で [グループの移動] オプションを使用してレジストリを同期できます。

ノード A:

1. r16.5 SP1/r17/r17.5 の Arcserve クラスタ リソースを、以下の手順で削除します。
   a. クラスタ アドミニストレータにアクセスします。

      [クラスタ アドミニストレータ] ダイアログ ボックスが表示されます。

      注：クラスタ アドミニストレータは Microsoft のユーティリティで、[スタート] メニューの管理ツール グループからアクセスします。

b. Arcserve サーバが展開されている Arcserve グループを選択し、対応する Arcserve クラスタリソースを見つけます。各 Arcserve クラスタリソースを右クリックし、ポップアップメニューから [削除] を選択します。

r16.5 SP1/r17/r17.5 の Arcserve クラスタリソースが削除されます。

2. Arcserve Backup r16.5 SP1/r17/r17.5 のインストールディレクトリファイルを一時的な場所にコピーします。

   Arcserve Backup r16.5 SP1/r17/r17.5 ファイルのバックアップコピーは、元のファイルとは別の場所に置かれます。

3. ノード A に対して Arcserve Backup 18.0 のアップグレードインストールを実行します。「以前のリリースからの Arcserve Backup のアップグレード」を参照してください。

   – Arcserve Backup r16.5 SP1 のアップグレードのインストールパスの場所は、18.0 が現在インストールされている場所と同じである必要があります。

   ノード A の Arcserve Backup が r16.5 SP1/r17/r17.5 から 18.0 にアップグレードされます。この時点で、新しい Arcserve クラスタリソースは設定しないでください。

4. アクティブノードをノード A からノード B へ、以下のように移動します。

   a. クラスタアドミニストレータにアクセスします。 [クラスタアドミニストレータ] が開きます。

   b. ノード A の Arcserve グループを選択し、グループ名を右クリックしてショートカットメニューから [グループの移動] を選択します。

      – クラスタにノードが 2 つしかない場合は、アクティブノードのステータスが自動的に初期アクティブノード (ノード A) から他方のノード (ノード B) に移り、ノード B がアクティブノードになってノード A がパッシブノードになります。

      – クラスタ内のノード数が 3 つ以上の場合は、ポップアップ画面が表示されて、アクティブステータスをどのノードに移動するかを選択できます。移動先のノードを選択すると、指定したノードがアクティブノードになり、それまでに選択されていたノードがパッシブノードになります。クラスタ内の各ノードでこの手順を繰り返します。

ノード B:

1. Arcserve Backup r16.5 SP1/r17/r17.5 のインストールディレクトリファイルを、一時的な場所から元の場所へコピーバックします。

   これで、Arcserve Backup r16.5 SP1/r17/r17.5 のファイルが元の場所に戻されます。

2. 以下のいずれかを行います。
   - Arcserve Backup データベースをホストするために Microsoft SQL Server のリモート展開を使用するメンバサーバまたはプライマリサーバをアップグレードする場合は、次の手順に進みます。
   - 他のすべての場合のアップグレードについては、以下を実行します。
     a. クラスタ対応環境の共有ディスクの以下のディレクトリにアクセスします。

        Arcserve_Home\SQLASDB\data

     b. 上記のディレクトリのファイルをすべて選択します。
     c. 選択されたファイルを右クリックして、ポップアップメニューの [プロパティ] をクリックします。

        [プロパティ] ダイアログボックスが開きます。

     d. [セキュリティ] タブをクリックします。
     e. [追加] をクリックし、[ネットワークサービス] セキュリティグループを選択します。
     f. [ネットワークサービス] セキュリティグループの権限を「フルコントロール」に設定します。
     g. [OK] をクリックし、[プロパティ] ダイアログボックスで [OK] をクリックします。
3. ノード B で Arcserve Backup 18.0 のアップグレードインストールを、ノード A で選択したのと同じ設定 (ドメイン名、サーバタイプ、インストールパス、インストールしたオプション) で実行します。詳細については、「以前のリリースからの DA のアップグレード」を参照してください。
4. コマンドラインコンソールから、babha -postsetup ユーティリティを実行して新しい Arcserve クラスタリソースをセットアップします。babha -postsetup ユーティリティは、%bab_home% ディレクトリにあります。

   新しい Arcserve クラスタリソース(Arcserve HA、Arcserve データベース、Arcserve レジストリ、および Arcserve 共有) が作成されます。

   注： Arcserve Backup データベースの前回のバックアップの実行が本リリースへのアップグレード前である場合、Arcserve Backup は Arcserve Backup データベースの復旧をサポートしません。アップグレードの完了後に、できるだけ早く Arcserve Backup データベースをバックアップすることをお勧めします。Arcserve Backup データベースのバックアップの詳細については、「管理者ガイド」を参照してください。

MSCS クラスタからの Arcserve Backup のアンインストール

クラスタからの Arcserve Backup のアンインストールはアクティブ ノードからのみ可能であり、クラスタ内のすべてのノードについて行う必要があります。

MSCS クラスタから Arcserve Backup をアンインストールする方法

1. すべてのクラスタ リソースを削除します。詳細については、「Arcserve Backup クラスタ リソースの削除」を参照してください。

   すべての Arcserve Backup クラスタ リソースが削除されます。

2. Arcserve HA リソース タイプを登録解除するには、コマンド ライン ウィンドウにアクセスして以下のコマンドを入力します。

   cluster restype "ARCserveHA"/delete/type

   注： cluster restype コマンドは Microsoft のコマンドで、Windows システムに組み込まれています。

   Arcserve HA リソース タイプが登録解除されます。

   Windows Server 2012/2012R2/2016/2019 の場合：

   Windows PowerShell にアクセスし以下のコマンドを入力して、Arcserve HA リソース タイプを登録解除します。

   Remove-ClusterResourceType"ARCserveHA"

   注： この Remove-clusterresourcetype コマンドは Microsoft のコマンドで、Windows システムに組み込まれています。

   Arcserve HA リソース タイプが登録解除されます。

3. アクティブ ノードで、Arcserve Backup ディレクトリにアクセスします。すべてのファイルをタイプ別に並べ替えてから、すべての .dll ファイルを別の場所にコピーします(コピーする場所は、後でネットワーク コピーをしなくても済むように、共有ディスクにすることをお勧めします) 。

   注： Arcserve Backup Global Dashboard がインストールされている場合、\GlobalDashboard という名前のディレクトリとその中身も一時的な場所にコピーする必要があります。

   Arcserve Backup のダイナミック リンク ライブラリ(.dll) ファイルが別の場所にコピーされます。これにより、Arcserve Backup をクラスタ内のそれぞれのノードからアンインストールできるようになります。

4. Windows のコントロール パネルで、［プログラムの追加と削除］ユーティリティにアクセスして Arcserve Backup を現在のノードから削除します。

Arcserve Backup が現在の(アクティブ) ノードから削除されます。

5. .dll ファイルを Arcserve Backup ディレクトリの元の場所にコピーして戻します。

   注： \GlobalDashboard という名前のディレクトリとその中身を一時的な場所にコピーした場合、このディレクトリとその中身を元のディレクトリにコピーして戻す必要があります。

   Arcserve Backup の .dll ファイルは元の Arcserve Backup ディレクトリにコピーされます。

6. クラスタ アドミニストレータでグループ名を右クリックし、ポップアップメニューで [グループを移動]を選択してアクティブなノードを変更します。

   元のノードの状態は、「パッシブ」に変更され、クラスタ内の次のノードの状態は「アクティブ」に変更されます。

   必須： クラスタの残りのすべてのノードに対して、手順 3 ～ 5 を繰り返します。

   Arcserve Backup はクラスタ内のすべてのノードから削除されます。

Arcserve Backup クラスタ リソースの削除

新しいクラスタ リソースを作成する前に、Arcserve Backup が展開されているグループからすべての既存のクラスタ リソースをすべて削除する必要があります。

利用可能な MSCS クラスタ リソースは以下のとおりです。

- Arcserve HA
- Arcserve データベース
- Arcserve レジストリ

以下の手順に従います。

1. 以下のいずれかを行います。

   Windows Server 2008 システム:

   - フェールオーバ クラスタ マネージャを開きます。
   - サービスまたはアプリケーション名を右クリックし、［このサービスまたはアプリケーションをオフラインにする］をクリックします。

   Arcserve クラスタ リソースの状態がオンラインからオフラインに変更されます。

   Windows Server 2012、2012 R2、2016 および 2019 システム:

   - フェールオーバ クラスタ マネージャを開きます。
   - クラスタ役割および停止役割を右クリックします。

   Arcserve クラスタ リソースの状態がオンラインからオフラインに変更されます。

2. 使用する Windows サーバ システムに基づいて、以下のいずれかのオプションを実行します。

   - **Windows Server 2008 システムの場合**

     Arcserve サーバが展開される Arcserve グループを選択します。

   - **Windows Server 2012、2012 R2、2016 および 2019 システム:**

     Arcserve サーバが展開される Arcserve クラスタ役割を選択します。

3. 対応する Arcserve クラスタ リソースを見つけます。
4. 各 Arcserve クラスタ リソースを右クリックし、コンテキスト メニューの［削除］をクリックします。

   選択した Arcserve クラスタ リソースが削除されます。

NEC クラスタでの Arcserve Backup サーバの展開

以下のセクションでは、NEC クラスタでの Arcserve Backup サーバの展開について説明します。

注： 以下のセクションには、最新でない画面、あるいは、各ユーザの環境に展開されている NEC CLUSTERPRO/ExpressCluster のバージョンとは異なる NEC CLUSTERPRO/ExpressCluster 画面の画像が含まれる場合があります。詳細については、NEC CLUSTERPRO/ExpressCluster のマニュアルを参照してください。

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

NEC CLUSTERPRO/ExpressCluster ハードウェア要件

NEC CLUSTERPRO/ExpressCluster ソフトウェア要件

NEC CLUSTERPRO/ExpressCluster リソースの準備

NEC クラスタ対応環境への Arcserve Backup のインストール

NEC CLUSTERPRO 環境での Arcserve Backup r16.5、r17 から r17.5 へのアップグレード

NEC CLUSTERPRO/ExpressCluster の管理および設定

NEC CLUSTERPRO/ExpressCluster からの Arcserve Backup のアンインストール

NEC クラスタ グループの停止

NEC クラスタ スクリプトでの Arcserve Backup の無効化

NEC クラスタ スクリプトでの Arcserve Backup の有効化

NEC CLUSTERPRO/ExpressCluster ハードウェア要件

Arcserve Backup を NEC CLUSTERPRO/ExpressCluster に展開するためには、システムが以下のハードウェア要件を満たしている必要があります。

- すべてのクラスタノードは、同一機種のハードウェア(SCSIアダプタ、ファイバチャネルアダプタ、RAIDアダプタ、ネットワークアダプタ、ハード ディスクなど) で構成されている必要があります。
- ディスクデバイスとテープデバイスには、それぞれ異なるSCSIアダプタ/ファイバチャネルアダプタを使用してください。

注：環境設定を容易にし、互換性の問題を回避するためにも、すべてのノードで同一のハードウェアを使用することをお勧めします。

NEC CLUSTERPRO/ExpressCluster ソフトウェア要件

Arcserve Backup を NEC CLUSTERPRO/ExpressCluster に展開するためには、システムが以下のソフトウェア要件を満たしている必要があります。

Arcserve Backup サーバコンポーネントをサポートしているサポート対象オペレーティングシステムについては、Arcserve Backup ソフトウェア互換性マトリクスを参照してください。Arcserve Backup は、サーバコンポーネントでサポートされているすべてのオペレーティングシステム上のクラスタ対応環境設定をサポートしています。

HA オペレーティング環境は、NEC CLUSTERPRO/ExpressCluster 用に設定されています。

NEC CLUSTERPRO/ExpressCluster リソースの準備

Arcserve Backup を専用グループの中にインストールしている場合は、フローティング IP アドレスを持った仮想名、および共有 (またはミラー) ディスクを含む必要なリソースを新しい専用グループの中に作成する必要があります。NEC CLUSTERPRO/ExpressCluster 環境に Arcserve Backup をインストールするには、以下の手順に従います。

- Arcserve Backup をインストールする前に、クラスタの定義およびリソースを作成します。クラスタの定義およびリソースを作成する方法の詳細については、「*NEC CLUSTERPRO/ExpressCluster ユーザガイド*」を参照してください。
- Arcserve Backup をインストール後、クラスタにレジストリ同期リソースを追加します。クラスタにレジストリ同期リソースを追加する方法の詳細については、「NEC クラスタ対応環境への Arcserve Backup のインストール」の手順 8 を参照してください。

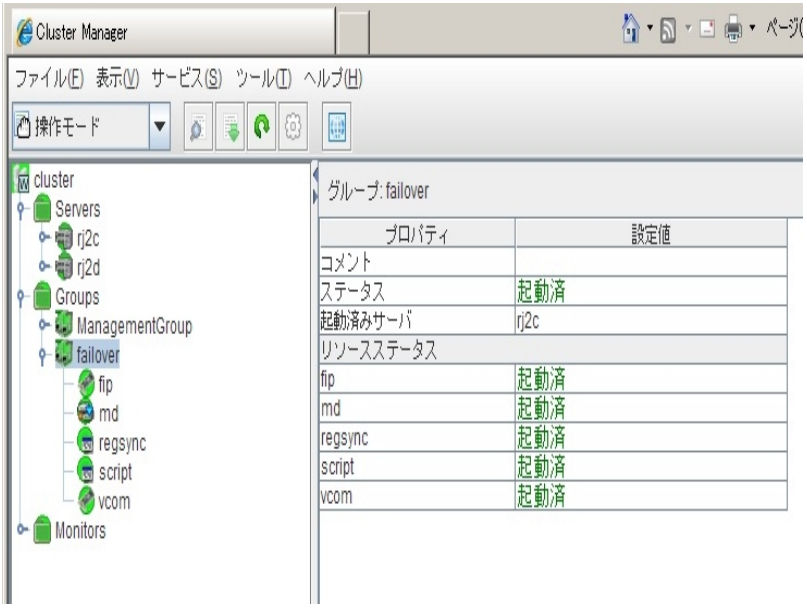
クラスタ マネージャとタスク マネージャは NEC のユーティリティで、NEC CLUSTERPRO/ExpressCluster をインストールしたサーバにインストールされています。

- クラスタ マネージャから、クラスタ グループの停止、開始、移動、削除やクラスタ プロパティおよびグループ リソースの設定など、クラスタに関連したほとんどの環境設定タスクと管理タスクを実行できます。
- タスク マネージャからは、各サービスまたはアプリケーションの停止と起動、および、それらのモニタリングの停止と開始のみが可能です。

以下の画面の例では、以下の 4 つの関連リソースを持つ「ARCserve Group」という名前のクラスタが Arcserve Backup インストールについて作成されます。

- フローティング IP アドレス(fip1)
- ミラー ディスク リソース(md1)
- スクリプト (script)
- 仮想コンピュータ名 (vcom1)

後で、共有ディスクにあるパスへの Arcserve Backup のインストールを選択できます。



同じグループを既存のアプリケーションと共有する場合は、新しいリソースを作成する必要はありません。

NEC クラスタ対応環境への Arcserve Backup のインストール

インストールウィザードを使用して、NEC クラスタ対応環境に Arcserve Backup をインストールできます。

NEC クラスタ対応環境に Arcserve Backup をインストールする方法

1. Arcserve Backup インストールメディアをコンピュータのオプティカルドライブに挿入します。

   注： Arcserve Backup インストールブラウザが表示されない場合は、Setup.exe をインストールメディアのルート ディレクトリから実行してください。

2. 「製品のインストール」ブラウザの右側の列で、「Arcserve Backup for Windows のインストール」をクリックします。

   「前提条件コンポーネント」ダイアログボックスが表示されます。

3. 「インストール」をクリックして、前提条件コンポーネントをインストールします。

   以下の動作に注意してください。

   「前提条件コンポーネント」ダイアログボックスは、ターゲット コンピュータにインストールされている Arcserve Backup 前提条件コンポーネントが検出されなかった場合にのみ表示されます。

   注： クラスタ対応環境内のアクティブノードに Arcserve Backup をインストールする場合は、アクティブノードが再起動する間に、アクティブノードからパッシブノードにクラスタリソースが移動されます。アクティブノードが再起動したら、元のアクティブノードにクラスタリソースを移動する必要があります。

4. 「使用許諾契約」ダイアログボックスで、使用許諾契約の条件に同意して「次へ」をクリックします。

5. 表示されるプロンプトに従って、ダイアログボックスに必要なすべての情報を記入します。

   次のリストは、Arcserve Backup のインストールに関するダイアログボックス固有の情報について説明しています。

   インストール/アップグレードの種類の選択ダイアログボックス

   リモート インストールオプションを選択すると、Arcserve Backup を複数のシステムにインストールできます。

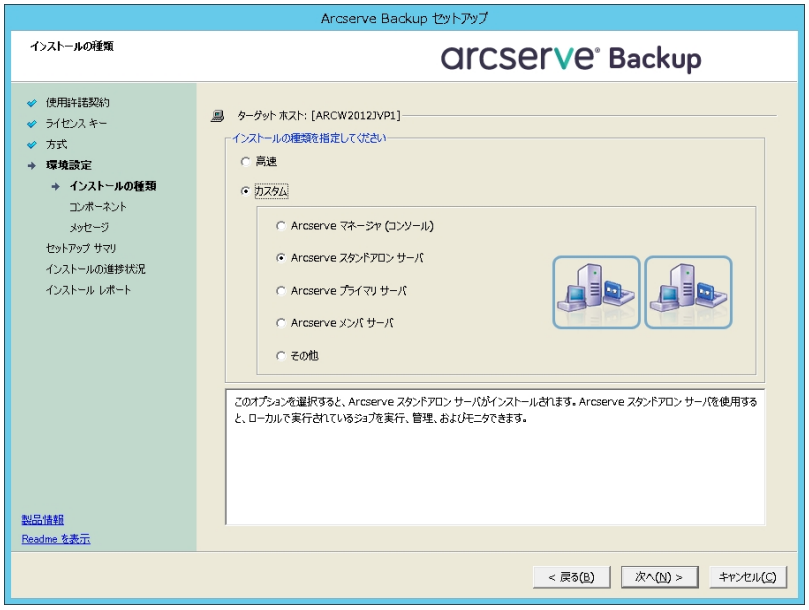
   リモート インストールでは、ターゲットのリモート システムを異なる Arcserve サーバタイプ、異なる Arcserve Backup エージェントとオプション、またはその両方で構成することができます。

   注： クラスタ マシンのセットアップ プログラムは Arcserve Backup ベース製品または Arcserve Backup エージェントのリモート インストールはサポートしていません。Arcserve Backup エージェント(たとえば Agent for Microsoft SQL Server または Agent for Microsoft Exchange Server) に関するこのリモート インストールの制限は、仮想ホストを使用している場合のみ当てはまります。クラスタの物理ホストを使用した Arcserve Backup エージェントのリモート インストールはサポートされています。

   「インストールの種類」ダイアログボックス

インストールの種類として [高速] または [カスタム] を選択することによって、インストールする Arcserve Backup コンポーネントの種類を指定できます。

注： 以前のリリースからアップグレードする場合、インストール ウィザードでは、現在の Arcserve 設定を検出し、新しいインストールに適切なインストール/アップグレードの種類を選択します。詳細については、「Arcserve Backup サーバ インストールのタイプ」および「Arcserve Backup サーバ オプション」を参照してください。



[コンポーネント] ダイアログ ボックス

ターゲット システムにインストールする Arcserve Backup コンポーネントを指定できます。

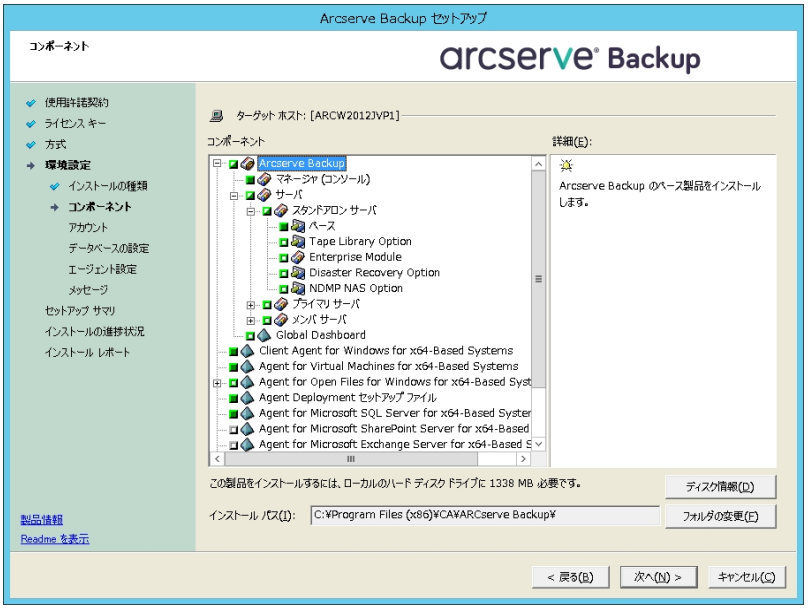
以下の点に注意してください。

- プライマリ サーバをインストールするには、プライマリ サーバに Arcserve Backup Central Management Option をインストールする必要があります。
- メンバ サーバをインストールするには、インストール ウィザードがネットワーク内の Arcserve Backup ドメイン名とプライマリ サーバ名を検出できる必要があります。したがって、メンバ サーバ インストールを実行する前に、少なくとも 1 つのプライマリ サーバ インストールを完了しておく必要があります。
- Arcserve Backup オブジェクトまたはサーバ オブジェクトを [製品の選択] ダイアログ ボックスでクリックすると、インストール ウィザードでは、[インストール/アップグレードの種類] ダイアログ ボックスで指定したインストールの種類に関係なく、デフォルトのスタンドアロン サーバ インストール コンポーネントが指定されます。正しいコンポーネントをインストールするには、サーバ オブジェクトを展開し、インストールする Arcserve Backup サーバのタイプのオブジェクトを展開して、インストールするコンポーネントに対応するチェック ボックスをオンにします。
- Agent Deployment は、Arcserve Backup をインストールした後で、Arcserve Backup エージェントを複数のリモート システムにインストールしてアップグレードできるウィザード形式のアプリケーションです。この機能をサポートするには、セットアップ プログラムで Setup ソース ファイルを Arcserve Backup サーバにコピーする必要があります。インストール メ

ディアのコンテンツを Arcserve Backup サーバにコピーするには、 [コンポーネント]ダイアログ ボックスで Agent Deployment を選 択 する必 要 があります。Agent Deployment を選 択 すると、Arcserve Backup のインストールまたはアップグレード に要 する時 間 がかなり長くなります。

- リモート インストールまたはサイレント インストールを実 行 する場 合 、Arcserve Backup Client Agent for Windows を Arcserve Backup ベース製 品 と同じディレクトリにインストールしないでください。
- Global Dashboard はプライマリ サーバ、スタンド アロン サーバおよびメンバ サーバにインストールできます。ただし、メンバ サーバをセントラル プライマリ サーバおよびブランチ プライマリ サーバとして機 能 するように設 定 することはできません。*セントラル プライマリ サーバおよびブランチ プライマリ サーバの詳 細 については、「Dashboard ユーザガイド」を参 照 してください。*
- Windows Server Core を実 行 するコンピュータでは、以 下 の Arcserve Backup 製 品 のみをインストールできます。
  - メンバ サーバおよびサポートされるオプション
  - Agent for Open Files
  - Agent for Virtual Machines
  - Client Agent for Windows
  - Disaster Recovery Option

以 下 の図 では、Client Agent for Windows のデフォルト のインストール パスが表 示 されていて、Agent Deployment が指 定 されています。

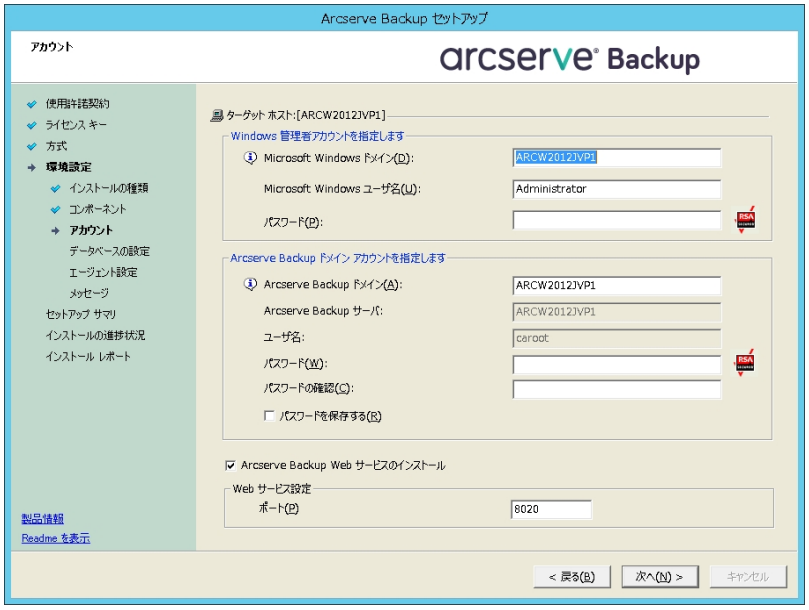


[アカウント]ダイアログ ボックス

Arcserve Backup アカウントを設 定 し、 [**Arcserve Backup Web サービスのインストール**]を有 効 にするオプションを提 供 します。

セットアップ中に、クラスタ対応アプリケーションが環境内で実行されていることが検出された場合、Arcserve Backup をクラスタ対応環境にインストールするには、[クラスタ環境インストール]オプションを選択して Arcserve Backup をインストールする共有ディスクのパスを指定します。

注： Arcserve Backup サーバ名と Arcserve Backup ドメイン名は、15 バイト以内である必要があります。合計 15 バイトの名前は、およそ 7 ～ 15 文字に相当します。



Arcserve Backup Web サービスは、UDP テープへのコピータスクと Arcserve Backup の間のブリッジとして機能します。デフォルトでは、Arcserve Backup をインストールすると、[**Arcserve Backup Web サービスのインストール**]が有効になります。**Web サービス設定**のデフォルトのポート番号は 8020 です。このポート番号は変更できます。

[**Arcserve Backup Web サービスのインストール**]チェックボックスをオフにして、Arcserve Backup Web サービスを無効にします。

Arcserve Backup のインストール後に [**Arcserve Backup Web サービスのインストール**]を有効化/変更できます。

注： Arcserve Backup ドメインのすべてのサーバに Arcserve Backup Web サービスをインストールする際と同じポート番号を指定します。Arcserve UDP は、同じポート番号を使用して、Arcserve Backup プライマリサーバおよび Arcserve Backup ドメイン内のメンバサーバの両方のサーバに接続します。

以下の手順に従います。

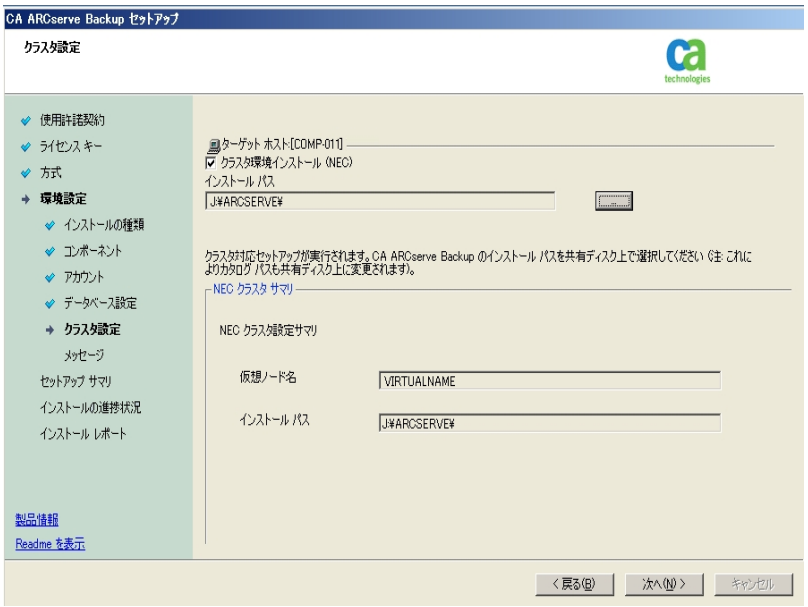
1. コマンドラインから Arcserve Backup ベースインストールパスに移動します。
2. コマンドプロンプトで、以下のコマンドを入力します。

   Bconfig –c

   [<Arcserve Backup> アカウント]ダイアログボックスが表示されます。
3. Web サービスを設定または更新します。

[クラスタ設定]ダイアログボックス

[クラスタ設定]ダイアログボックスは、クラスタ対応環境に Arcserve Backup をインストールすることをセットアップが検出した場合にのみ表示されます。続行するには、このダイアログボックスのすべてのフィールドに記入する必要があります。



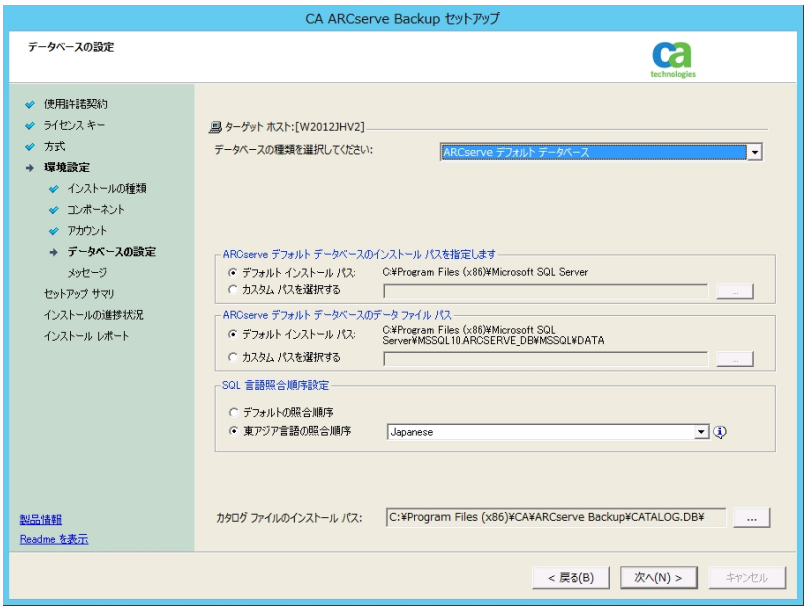
[データベースの設定]ダイアログボックス

Arcserve Backup データベースを設定できます。

このダイアログボックスで、データベースアプリケーション(Arcserve のデフォルトのデータベースまたは Microsoft SQL Server) を指定するか、必須フィールドの入力を完了した後、[次へ]をクリックします。

注： Unicode ベースの東アジア言語文字 (JIS2004 など) を含むデータを保護する必要がある場合は、Arcserve Backup のデータ検索および並べ替えを可能にするために SQL 照合順序を有効にする必要があります。これを行うには、[東アジア言語の

照合順序]をクリックしてドロップダウンリストから言語を選択します。



[メッセージ]ダイアログボックス

[メッセージ]ダイアログボックスでメッセージを確認し、この時点で問題の解決を試みる必要があります。

以下の図は、[メッセージ]ダイアログボックスを示しています。

[セットアップ サマリ]ダイアログボックス

インストールするコンポーネントを変更するには、変更するインストールオプションが表示されているダイアログボックスに戻るまで [戻る]ボタンをクリックしてください。

[インストール レポート]ダイアログボックス

選択したコンポーネントで設定が必要な場合は、インストールの最後に設定ダイアログボックスが表示されます。すぐにコンポーネントを設定することも、後から [デバイス環境設定] または [Enterprise Module 環境設定] を使用して設定することもできます。たとえば、単一ドライブのオートローダを使用している場合は、セットアップで [インストール サマリ] ダイアログボックスでメッセージをダブルクリックすることで、該当する [デバイス環境設定] を起動するように指定することができます。

以下に、[インストール レポート] ダイアログボックスを示します。Agent for Microsoft SQL Server には、環境設定が必要です。

注： Arcserve Backup のインストール時に、サーバの再起動が必要になる場合があります。これは、すべてのファイル、サービス、およびレジストリの設定がオペレーティングシステムレベルで更新されたかどうかによって決まります。

[インストール サマリ] ダイアログボックス

選択したコンポーネントで設定が必要な場合は、インストールの最後に設定ダイアログボックスが表示されます。すぐにコンポーネントを設定することも、後から [デバイス環境設定] または [Enterprise Module 環境設定] を使用して設定することもできます。たとえば、単一ドライブのオートローダを使用している場合は、セットアップで [インストール サマリ] ダイアログボックスでメッセージをダブルクリックすることで、該当する [デバイス環境設定] を起動するように指定することができます。

[ライセンスの確認] ダイアログボックス

ライセンス キーを入力するには、インストールしているコンポーネント、エージェント、およびオプションへ移動し、[ライセンス キーを使用する] オプションを選択してそのコンポーネントのライセンス キーを入力します。

6. [続行] をクリックして [ライセンスの確認] ダイアログボックスを閉じます。
7. [インストール サマリ] ダイアログボックスで [完了] をクリックしてインストールを完了します。
8. パッシブ ノードに Arcserve Backup をインストールします。

注： 手順 1 ～ 5 を繰り返してパッシブ ノードに Arcserve Backup をインストールします。

9. Arcserve Backup が展開される各クラスタノードにおいて、現在のノードがクラスタ内でアクティブなノードとして設定され、共有ディスクにアクセスできることを確認する必要があります。現在のノードがパッシブに設定されている場合、クラスタマネージャの [グループの移動] オプションを使用してアクティブに変更できます。

   クラスタ対応インストールが正常に完了した後、適用可能なサーバのスクリプトリソースの詳細から、start.bat および stop.bat を編集します。

   - すべてのメンバサーバと SQL Server Express Edition 以外のプライマリサーバの場合は、「メンバサーバおよび SQL Express 以外のプライマリサーバ用の start.bat スクリプト変更」に記述されている start.bat スクリプトを使用します。
   - SQL Server Express Edition プライマリサーバのみの場合、「SQL Express プライマリサーバ用の start.bat スクリプト変更」に記述されている start.bat スクリプトを使用します。
   - SQL Server Express Edition プライマリサーバのみの場合、「SQL Express プライマリサーバ用の stop.bat スクリプト変更」に記述されている stop.bat スクリプトを使用します。

10. Arcserve Backup サーバが展開されているフェールオーバグループ用にレジストリ同期リソースを作成します。

    x86 プラットフォームの場合、以下のキーを追加します。

    HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\ComputerAssociates\CA ARCServe Backup\Base

    x64 プラットフォームの場合、以下のキーを追加します。

    HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Wow6432Node\ComputerAssociates\CA ARCServe Backup\Base

メンバ サーバおよび SQL Express 以外のプライマリ サーバ用の start.bat スクリプト変更

インストール後、「NORMAL」と「FAILOVER」の後の 2 か所にテキストを追加して start.bat スクリプトを変更する必要があります。以下のスクリプト変更は、メンバ サーバおよび SQL Express 以外のプライマリ サーバにのみ適用されます。

以下のスクリプトをコピーして、start.bat ファイルの「NORMAL」および「FAILOVER」の後に貼り付けます。

```
REM Set the following variable 'process' to 1 for normal
REM operation.During upgrade / migration, modify this
REM script to set the value to zero
SET process=1
REM Set this flag to 1 if it's a primary server and using
REM MS SQL Express 2008 database, otherwise set it to 0
SET PRIMARY_SQLE_FLAG=0
IF %process%==0 GOTO end
REM Do normal processing here
net stop CASDiscovery
net stop CASSvcControlSvr
if %PRIMARY_SQLE_FLAG%==0 GOTO CA_SERVICES
net start mssql$arcserve_db
:CA_SERVICES
net start CASDiscovery
net start CASportmapper
armload CASSvcControlSvr /S /R 3 /FOV CASSvcControlSvr
armload CASunivDomainSvr /S /R 3 /FOV CASunivDomainSvr
armload CASDBEngine /S /R 3 /FOV CASDBEngine
armload CASMessageEngine /S /R 3 /FOV CASMessageEngine
armload CASTapeEngine /S /R 3 /FOV CASTapeEngine
armload CASJobEngine /S /R 3 /FOV CASJobEngine
armload CASMgmtSvc /S /R 3 /FOV CASMgmtSvc
armload CASASBUWebSvc /S /R 3 /FOV CASASBUWebSvc
net start "CA ARCserve Communication Foundation"
net start CA_ARCserve_RemotingServer
net start CADashboardSync
net start "CA ARCserve Communication Foundation (Global)"
:end
REM Exit out of the batch file
```

メンバサーバおよび SQL Express 以外のプライマリサーバ用の stop.bat スクリプト変更

インストール後、「NORMAL」と「FAILOVER」の後の 2 か所にテキストを追加して stop.bat スクリプトを変更する必要があります。以下のスクリプト変更は、メンバサーバおよび SQL Express 以外のプライマリサーバにのみ適用されます。

以下のスクリプトをコピーして、stop.bat ファイルの「NORMAL」および「FAILOVER」の後に貼り付けます。

```
REM Set the following variable 'process' to 1 for normal
REM operation.During upgrade / migration, modify this
REM script to set the value to zero
SET process=1
REM Set this flag to 1 if it's a primary server and using
REM MS SQL Express 2008 database, otherwise set it to 0
SET PRIMARY_SQLE_FLAG=0
REM Set the ARCServe home directory here
SET ARCSERVE_HOME=s:\arcserve_home
IF %process%==0 GOTO end
REM Do normal processing here
armsleep 2
armkill CASJobEngine
%ARCSERVE_HOME%\babha.exe -killjob
armkill CASMgmtSvc
armkill CASTapeEngine
armkill CASDBEngine
armkill CASMessageEngine
armkill CASunivDomainSvr
armkill CASSvcControlSvr
armkill CASASBUWebSvc
net stop "CA ARCserve Communication Foundation (Global)"
net stop CADashboardSync
net stop CA_ARCServe_RemotingServer
net stop "CA ARCserve Communication Foundation"
net stop CASportmapper
if %PRIMARY_SQLE_FLAG%==0 GOTO end
net stop mssql$arcserve_db
:end
REM Exit out of the batch file
```

SQL Express プライマリ サーバ用の start.bat スクリプト変更

インストール後、「NORMAL」と「FAILOVER」の後の 2 か所にテキストを追加して start.bat スクリプトを変更する必要があります。以下のスクリプト変更は、SQL Express プライマリ サーバにのみ適用されます。

以下のスクリプトをコピーして、start.bat ファイルの「NORMAL」および「FAILOVER」の後に貼り付けます。

```
REM Set the following variable 'process' to 1 for normal
REM operation.During upgrade / migration, modify this
REM script to set the value to zero
SET process=1
REM Set this flag to 1 if it's a primary server and using
REM MS SQL Express 2008 database, otherwise set it to 0
SET PRIMARY_SQLE_FLAG=1
IF %process%==0 GOTO end
REM Do normal processing here
net stop CASDiscovery
net stop CASSvcControlSvr
if %PRIMARY_SQLE_FLAG%==0 GOTO CA_SERVICES
net start mssql$arcserve_db
:CA_SERVICES
net start CASDiscovery
net start CASportmapper
armload CASSvcControlSvr /S /R 3 /FOV CASSvcControlSvr
armload CASunivDomainSvr /S /R 3 /FOV CASunivDomainSvr
armload CASDBEngine /S /R 3 /FOV CASDBEngine
armload CASMessageEngine /S /R 3 /FOV CASMessageEngine
armload CASTapeEngine /S /R 3 /FOV CASTapeEngine
armload CASJobEngine /S /R 3 /FOV CASJobEngine
armload CASMgmtSvc /S /R 3 /FOV CASMgmtSvc
armload CASASBUWebSvc /S /R 3 /FOV CASASBUWebSvc
net start "CA ARCserve Communication Foundation"
:end
REM Exit out of the batch file
```

SQL Express プライマリ サーバ用の stop.bat スクリプト変更

インストール後、「NORMAL」と「FAILOVER」の後の 2 か所にテキストを追加して stop.bat スクリプトを変更する必要があります。以下のスクリプト変更は、SQL Express プライマリ サーバにのみ適用されます。

以下のスクリプトをコピーして、stop.bat ファイルの「NORMAL」および「FAILOVER」の後に貼り付けます。

```
REM Set the following variable 'process' to 1 for normal
REM operation.During upgrade / migration, modify this
REM script to set the value to zero
SET process=1
REM Set this flag to 1 if it's a primary server and using
REM MS SQL Express 2008 database, otherwise set it to 0
SET PRIMARY_SQLE_FLAG=1
REM Set the ARCServe home directory here
SET ARCSERVE_HOME=s:\arcserve_home
IF %process%==0 GOTO end
REM Do normal processing here
armsleep 2
armkill CASJobEngine
%ARCSERVE_HOME%\babha.exe -killjob
armkill CASMgmtSvc
armkill CASTapeEngine
armkill CASDBEngine
armkill CASMessageEngine
armkill CASunivDomainSvr
armkill CASSvcControlSvr
armkill CASASBUWebSvc
net stop "CA ARCserve Communication Foundation"
net stop CASportmapper
if %PRIMARY_SQLE_FLAG%==0 GOTO end
net stop mssql$arcserve_db
:end
REM Exit out of the batch file
```

NEC CLUSTERPRO 環境での 16.5、r17、r17.5 から r18.0 への Arcserve Backup のアップグレード

このセクションでは、MSCS クラスタ対応環境で、最新のサービスパックを含む r16.5、r17、r17.5 をこのリリースにアップグレードするために実行する必要がある手順について説明します。

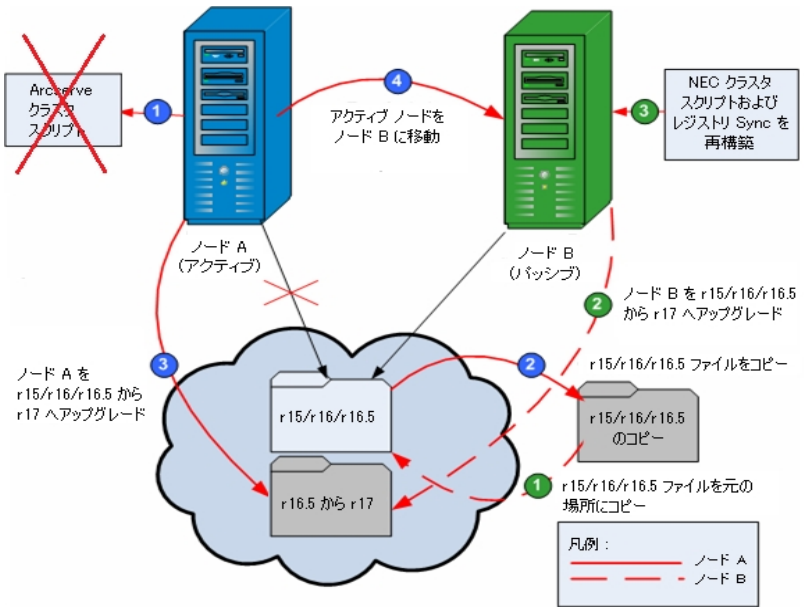
始める前に、「以前のリリースからの Arcserve Backup のアップグレード」に記載されている情報を確認してください。

NEC CLUSTERPRO 環境で 16.5、r17 および r17.5 (すべてのサービスパック) から r18.0 に Arcserve Backup をアップグレードする際に、以下の手順に従ってクラスタ化されたバックアップデータを安全に保護する必要があります。Arcserve Backup r16.5/r17/r17.5 (すべてのサービスパック) をまだクラスタ環境で使用していない場合は、この手順を実行する必要はありません。この手順では、NEC CLUSTERPRO クラスタ環境で以下の Arcserve Backup r16.5、r17 および r17.5 (すべてのサービスパック) のアップグレードを実行するシナリオをサポートしています。

- プライマリサーバの SQL Server から SQL Server へのアップグレード
- プライマリサーバの SQL Server Express から SQL Server Express へのアップグレード
- メンバサーバの r17.5 へのアップグレード

このアップグレード手順では 2 ノードクラスタ環境を想定しており、ノード A は初期アクティブノードを、ノード B は初期パッシブノードを表しています。

以下の図は、アップグレード手順を示します。



NEC CLUSTERPRO 環境で Arcserve Backup を 16.5、r17 および r17.5 から r18.0 へアップグレードするには

ノード A:

1. NEC Cluster Scripts を無効化して Registry Sync を削除します。詳細については、「NEC クラスタ スクリプトでの Arcserve Backup の無効化」を参照してください。
2. Arcserve Backup r16.5/r17/r17.5 のインストール ディレクトリファイルを一時的な場所にコピーします。

   Arcserve Backup r16.5/r17/r17.5 ファイルのバックアップ コピーが、元のファイルとは別の場所に置かれます。
3. ノード A に対して Arcserve Backup 18.0 のアップグレード インストールを実行します。詳細については、「以前のリリースからの Arcserve Backup のアップグレード」を参照してください。

   Arcserve Backup 18.0 アップグレードのインストール パスは、r16.5/r17/r17.5 が現在インストールされている場所と同じである必要があります。
4. アクティブ ノードをノード A からノード B へ、以下のように移動します。
   a. クラスタ マネージャにアクセスします。 [クラスタ マネージャ]ダイアログ ボックスが開きます。

      注：クラスタ マネージャは NEC のユーティリティで、NEC CLUSTERPRO をインストールしたサーバにインストールされています。クラスタ マネージャは、 [スタート]メニューの NEC ExpressCluster Server グループからアクセスします。クラスタ マネージャから、クラスタに関連したほとんどの環境設定および管理タスクを実行できます。
   b. Arcserve サーバが展開されている NEC グループを選択して、対応する Arcserve クラスタ リソースを見つけてください。各 Arcserve クラスタ リソースを右クリックし、ショートカット メニューの [グループの移動]を選択します。
      - クラスタにノードが 2 つしかない場合は、アクティブ ノードのステータスが自動的に初期アクティブ ノード(ノード A) から他方のノード(ノード B) に移り、ノード B がアクティブ ノードになってノード A がパッシブ ノードになります。
      - クラスタ内のノード数が 3 つ以上の場合は、ポップアップ画面が表示されて、アクティブ ステータスをどのノードに移動するかを選択できます。移動先のノードを選択すると、指定したノードがアクティブ ノードになり、それまでに選択されていたノードがパッシブ ノードになります。クラスタ内の各ノードでこの手順を繰り返します。

ノード B:

1. Arcserve Backup r16.5/r17/r17.5 のインストール ディレクトリ ファイルを、一時的な場所から元の場所へコピー バックします。

   これで、Arcserve Backup r16.5/r17/r17.5 のファイルが元の場所に戻されます。

2. 以下のいずれかを行います。

   - Arcserve Backup データベースをホストするために Microsoft SQL Server のリモート展開を使用するメンバ サーバまたはプライマリ サーバをアップグレードする場合は、次の手順に進みます。
   - 他のすべての場合のアップグレードについては、以下を実行します。

     a. クラスタ対応環境の共有ディスクの以下のディレクトリにアクセスします。

     ARCserve_Home\SQLASDB\data

     上記のディレクトリのファイルをすべて選択します。

     選択されたファイルを右クリックして、ポップアップ メニューの [プロパティ] をクリックします。

     [プロパティ] ダイアログ ボックスが開きます。

     b. [セキュリティ] タブをクリックします。

     [追加] をクリックし、[ネットワーク サービス] セキュリティ グループを選択します。

     [ネットワーク サービス] セキュリティ グループの権限を「フル コントロール」に設定します。

     [OK] をクリックし、[プロパティ] ダイアログ ボックスで [OK] をクリックします。

3. ノード B で Arcserve Backup 18.0 のアップグレード インストールを、ノード A で選択したのと同じ設定 (ドメイン名、サーバ タイプ、インストール パス、インストールしたオプションなど) で実行します。詳細については、「以前のリリースからの Arcserve Backup のアップグレード」を参照してください。

4. NEC クラスタ スクリプトおよびレジストリ Sync を再構築します。詳細については、「NEC クラスタ スクリプトでの Arcserve Backup の有効化」を参照してください。

   新規の NEC HA スクリプトが作成され、レジストリが同期化されます。

   注： Arcserve Backup データベースの前回のバックアップの実行が本リリースへのアップグレード前である場合、Arcserve Backup は Arcserve Backup データベースの復旧をサポートしません。アップグレードの完了後に、できるだけ早く Arcserve Backup データベースをバックアップすることをお勧めします。Arcserve Backup データベースのバックアップの詳細については、「管理者ガイド」を参照してください。

   詳細情報：

クラスタ対応インストールおよびアップグレードの確認方法

NEC CLUSTERPRO/ExpressCluster の管理および設定

NEC CLUSTERPRO/ExpressCluster では、Cluster Manager と Cluster Builder が 1 つの GUI に統合され、Web Manager と呼ばれています。Web Manager では、Cluster 内のクラスタおよびフェールオーバの両方のグループについて、作成、設定、管理などのタスクをすべて実行できます。

Web Manager を開くには、クラスタの任意のサーバで、Web ブラウザのアドレスバーに http://10.0.0.3:29003/ などの URL を入力し、Enter キーを押します。

以下の手順に従います。

1. Web Manager から Operation Mode を選択することにより、NEC CLUSTERPRO/ExpressCluster を管理します。

   このモードでは、クラスタおよびフェールオーバのグループに対して以下の運用タスクを実行できます。

   - クラスタの管理 - たとえば、クラスタの開始、停止、中断、再開、再起動など。
   - クラスタ内のサーバ(ノード) の管理 - たとえば、ノード上のクラスタ サービスの開始または停止、ノードのシャットダウンまたは再起動など。
   - クラスタ内のフェールオーバ グループの管理 - たとえば、グループの開始または停止、サーバ間のグループの移動など。
   - フェールオーバ グループ内でのリソースの開始または停止。

2. Web Manager から Config Mode を選択することにより NEC CLUSTERPRO/ExpressCluster を設定します。

   このモードでは、クラスタおよびフェールオーバのグループに対して以下の環境設定タスクを実行できます。

   - クラスタを設定します。
   - クラスタに対してサーバを追加/削除します。
   - サーバを設定します。
   - フェールオーバ グループを追加、削除、設定します。
   - フェールオーバ グループ内のリソースを追加、削除、設定します。

3. 完了したら、[File]- [Apply the Configuration File]を選択し、環境設定タスクを反映させます。

4. ［Tool］-［Reload from the Operation Mode］メニューを選択し、設定をクラスタマネージャにロードします。

NEC CLUSTERPRO/ExpressCluster から Arcserve Backup をアンインストールする方法

クラスタからの Arcserve Backup のアンインストールはアクティブ ノードからのみ可能であり、クラスタ内のすべてのノードについて行う必要があります。

NEC CLUSTERPRO/ExpressCluster から Arcserve Backup をアンインストールする方法

1. Arcserve Backup サーバが展開されているフェールオーバ グループを停止し、次にクラスタ グループを中断します。

   注： 詳細については、「NEC クラスタ グループの停止」を参照してください。

2. レジストリ sync を削除し、start.bat および stop.bat スクリプトを編集して、インストール中に追加された Arcserve Backup スクリプトを無効にします。詳細については、「NEC クラスタ スクリプトでの Arcserve Backup の無効化」を参照してください。

3. クラスタ グループを再開し、次にフェールオーバ グループを開始します。

4. Arcserve Backup ホーム ディレクトリにアクセスします。すべてのファイルをタイプ別に並べ替えてから、すべての .dll ファイルを一時的な場所にコピーします (コピーする場所は、後でネットワーク コピーをしなくても済むように、共有ディスクにすることをお勧めします)。

   重要： バックアップしている .dll ファイルの現在のノードがアクティブ ノードとして設定されていることを確認します。

   Arcserve Backup のダイナミック リンク ライブラリ(.dll) ファイルは別の場所にコピーされます。これにより、Arcserve Backup をクラスタ内のそれぞれのノードからアンインストールできるようになります。

5. (オプション) Arcserve Backup Global Dashboard がインストールされている場合は、\GlobalDashboard という名前のディレクトリとその中身を一時的な場所にコピーします。

6. Windows のコントロール パネルで、[プログラムの追加と削除] ユーティリティにアクセスして Arcserve Backup を現在のノードから削除します。

   Arcserve Backup が現在の(アクティブ) ノードから削除されます。

7. .dll ファイルを Arcserve Backup ホーム ディレクトリの元の場所にコピーして戻します。

   Arcserve Backup の .dll ファイルは元の Arcserve Backup ホーム ディレクトリにコピーされます。

8. (オプション) \GlobalDashboard という名前のディレクトリとその中身を一時的な場所にコピーした場合は、そのディレクトリと中身を一時的な場所から元のディレクトリにコピーして戻します。
9. クラスタ マネージャでグループ名を右クリックし、ポップアップメニューで [グループを移動]を選択してアクティブなノードを変更します。

   元のノードのステータスがオフライン(パッシブ) に変わり、クラスタ内で次のノードのステータスがオンライン(アクティブ) に変わります。
10. クラスタの残りのすべてのノードに対して、手順 6 ～ 9 を繰り返します。

    Arcserve Backup がクラスタ内のすべてのノードからアンインストールされます。

NEC クラスタ グループの停止

グループ プロパティを編集する必要がある場合 (たとえば、start.bat/stop.bat ファイルを編集したり、レジストリ sync を削除/追加するため) は、先にグループを停止する必要があります。さらに、NEC CLUSTERPRO/ExpressCluster から Arcserve Backup を削除する必要がある場合も、グループを停止する必要があります。

注： このセクションには、NEC CLUSTERPRO/ExpressCluster バージョン 8.0 に対応する画像が含まれています。より最新の NEC CLUSTERPRO/ExpressCluster を実行している場合は、NEC CLUSTERPRO/ExpressCluster のドキュメントを参照してください。

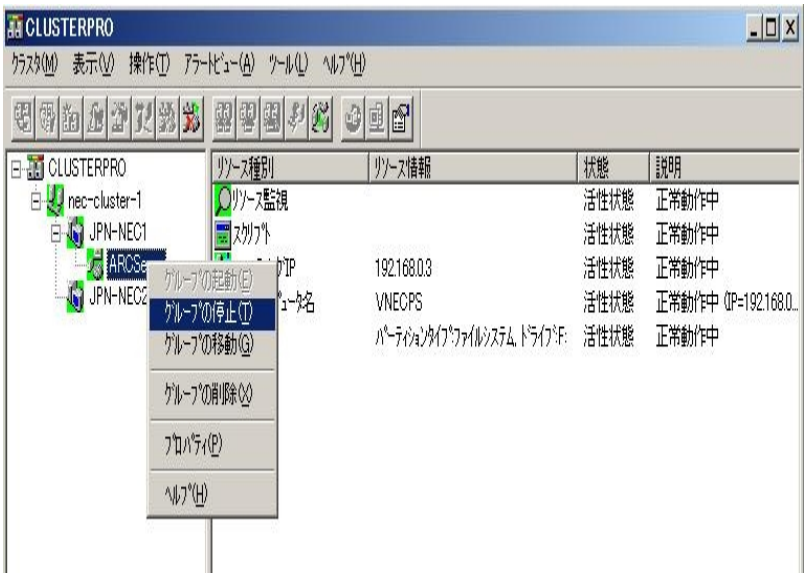
NEC クラスタ グループの停止方法

1. クラスタ マネージャにアクセスします。

   [クラスタ マネージャ] ウィンドウが表示されます。

2. ツリーから Arcserve グループを右クリックし、ポップアップ メニューで [グループの停止] を選択します。

   確認のポップアップ画面が表示されます。



3. [OK] をクリックします。

   選択したグループが停止します。

NEC クラスタ スクリプトでの Arcserve Backup の無効化

クラスタ スクリプトとレジストリ キーは、NEC のセットアップ後プロセスの際に挿入されます。前のリリースからアップグレードする場合は、クラスタ スクリプトを無効にし、レジストリ キーを削除する必要があります。

注：このセクションには、NEC CLUSTERPRO/ExpressCluster バージョン 8.0 に対応する画像が含まれています。より最新の NEC CLUSTERPRO/ExpressCluster を実行している場合は、NEC CLUSTERPRO/ExpressCluster のドキュメントを参照してください。

NEC クラスタ スクリプトで Arcserve Backup を無効化する方法

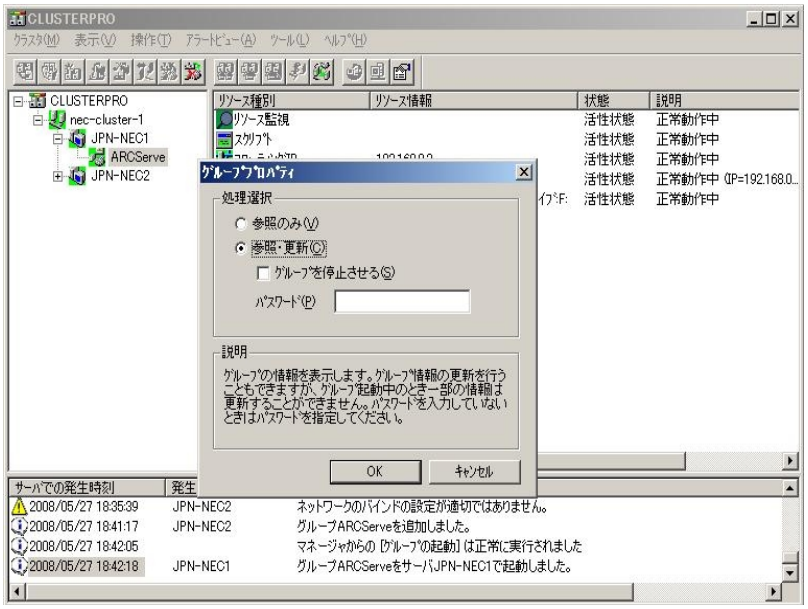
1. クラスタ マネージャにアクセスします。

   [クラスタ マネージャ]ウィンドウが表示されます。

   注：クラスタ マネージャは NEC のユーティリティで、NEC CLUSTERPRO/ExpressCluster をインストールしたサーバにインストールされています。クラスタ マネージャから、クラスタに関連したほとんどの環境設定および管理タスクを実行できます。

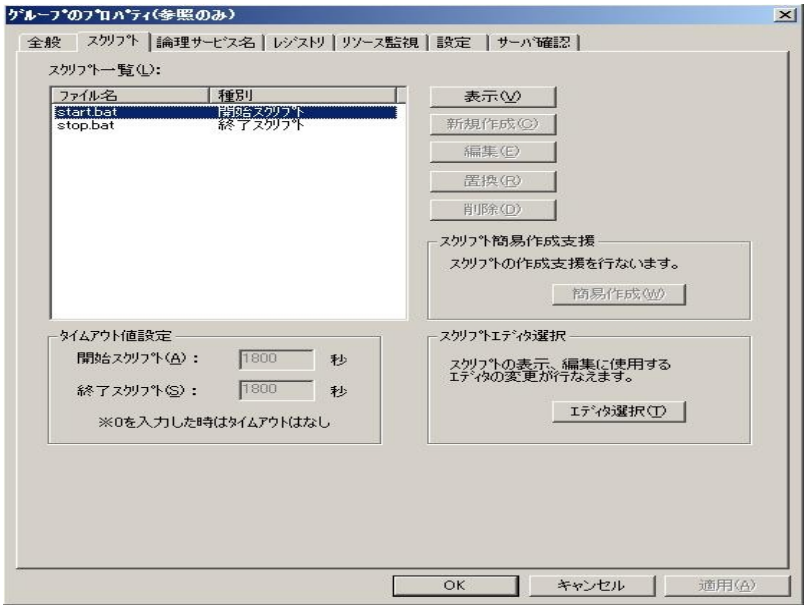
2. Arcserve サーバが展開されている NEC グループを選択し、対応する Arcserve クラスタ リソースを見つけます。各 Arcserve クラスタ リソースで右クリックして、ポップアップ メニューの [プロパティ]を選択します。

   [グループ プロパティ]ダイアログ ボックスが表示されます。



3. [参照および変更]オプションを選択します。[グループ プロパティ]ダイアログ ボックスが開いたら、[スクリプト]タブを選択します。

[スクリプト]タブ ダイアログ ボックスが表示されます。



4. [スクリプト]リストで、start.bat を選択して [編集]をクリックします。start.bat スクリプトが表示されたら、REM SET プロセス スクリプトを見つけて(2 か所)値を以下のようにゼロに設定します。

   SET process=0

   注： start.bat ファイルでは、REM SET プロセス スクリプトは NORMAL の後と FAILOVER の後にあります。

   start.bat スクリプトが変更されます。

5. [スクリプト]リストで、stop.bat を選択して [編集]をクリックします。stop.bat スクリプトが表示されたら、REM SET プロセス スクリプトを見つけて(2 か所)値を以下のようにゼロに設定します。

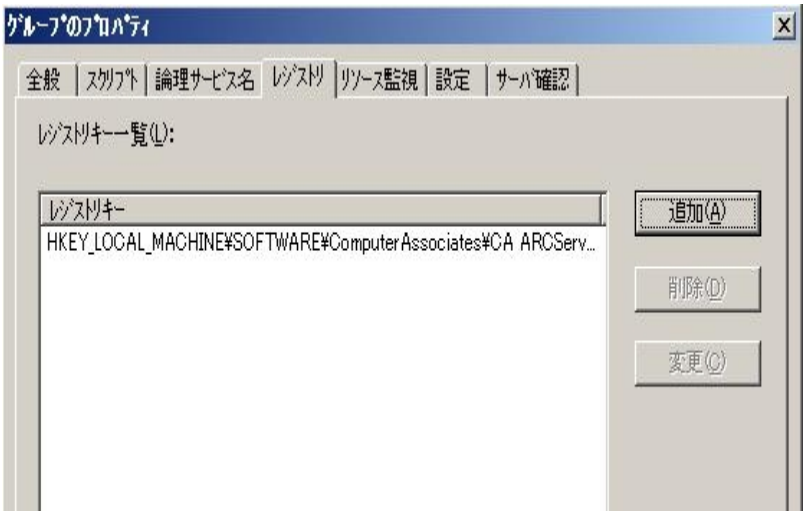
   SET process=0

   注： stop.bat ファイルでは、REM SET プロセス スクリプトは NORMAL の後と FAILOVER の後にあります。

   stop.bat スクリプトが変更されます。

6. [グループ プロパティ]ダイアログ ボックスで、[レジストリ]タブを選択します。

[レジストリ]ダイアログ ボックスが表示されます。



7. レジストリキーリストで、既存のレジストリキーを選択して [削除]をクリックします。
   レジストリキーが削除されます。

NEC クラスタ スクリプトでの Arcserve Backup の有効化

クラスタ スクリプトとレジストリ キーは、NEC のセットアップ後プロセスの際に挿入されます。アップグレード処理中、クラスタ スクリプトは無効になり、レジストリ キーは削除されます。アップグレードが終了すると、これらのクラスタ スクリプトを有効化してレジストリ キーをリビルドする必要があります。

注： このセクションには、NEC CLUSTERPRO/ExpressCluster バージョン 8.0 に対応する画像が含まれています。より最新の NEC CLUSTERPRO/ExpressCluster を実行している場合は、NEC CLUSTERPRO/ExpressCluster のドキュメントを参照してください。

NEC クラスタ スクリプトで Arcserve Backup を有効化する方法

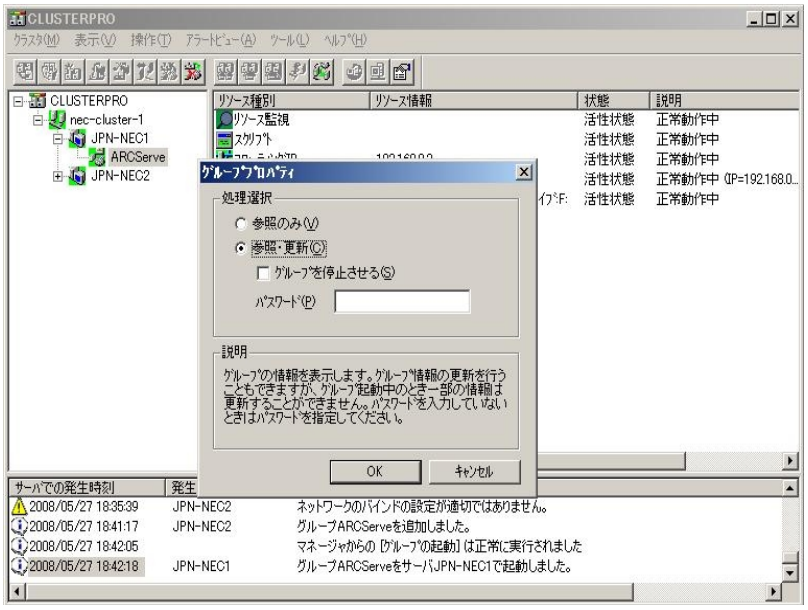
1. クラスタ マネージャにアクセスします。

   [クラスタ マネージャ] ダイアログ ボックスが表示されます。

   注： クラスタ マネージャは NEC のユーティリティで、NEC CLUSTERPRO/ExpressCluster をインストールしたサーバにインストールされています。クラスタ マネージャから、クラスタに関連したほとんどの環境設定および管理タスクを実行できます。

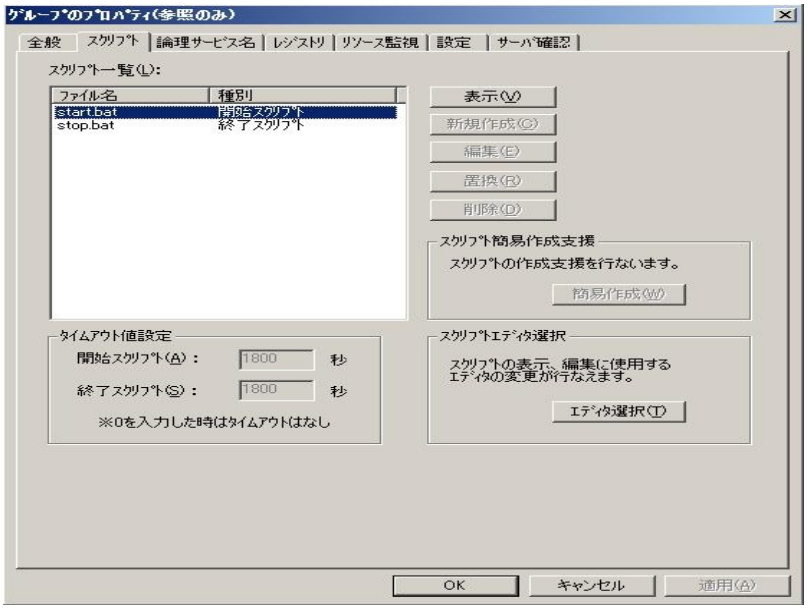
2. Arcserve サーバが展開されている NEC グループを選択し、対応する Arcserve クラスタ リソースを見つけます。各 Arcserve クラスタ リソースで右クリックして、ポップアップ メニューの [プロパティ] を選択します。

   [グループ プロパティ] ダイアログ ボックスが表示されます。



3. [参照および変更] オプションを選択します。[グループ プロパティ] ダイアログ ボックスが開いたら、[スクリプト] タブを選択します。

[スクリプト]タブ ダイアログ ボックスが表示されます。



4. [スクリプト]リストで、start.bat を選択して [編集]をクリックします。start.bat スクリプトが表示されたら、REM SET プロセス スクリプトを見つけて(2 か所)値を以下のように 1 に設定します。

   SET process=1

   注： start.bat ファイルでは、REM SET プロセス スクリプトは NORMAL の後と FAILOVER の後にあります。

   start.bat スクリプトが変更されます。

5. [スクリプト]リストで、stop.bat を選択して [編集]をクリックします。stop.bat スクリプトが表示されたら、REM SET プロセス スクリプトを見つけて(2 か所)値を以下のように 1 に設定します。

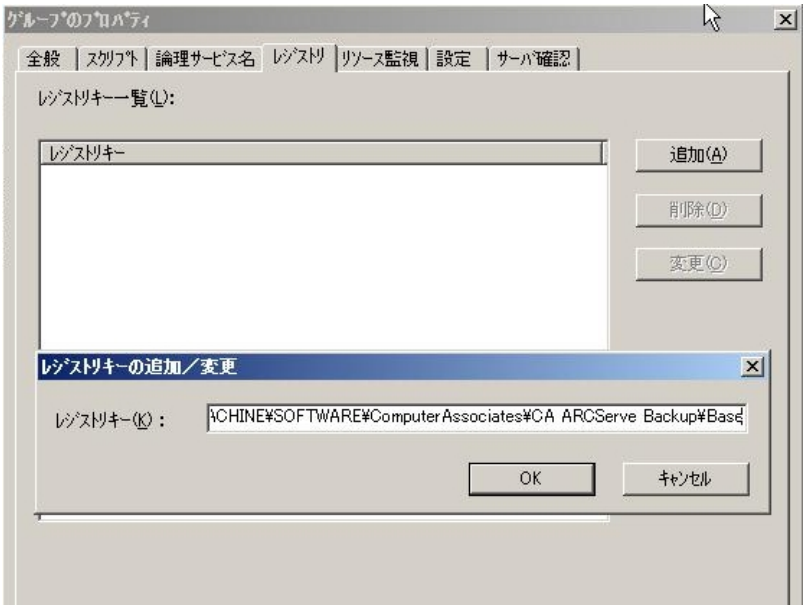
   SET process=1

   注： stop.bat ファイルでは、REM SET プロセス スクリプトは NORMAL の後と FAILOVER の後にあります。

   stop.bat スクリプトが変更されます。

6. [グループ プロパティ]ダイアログ ボックスで、[レジストリ]タブを選択します。[レジストリ]ダイアログ ボックスが開いたら [追加]をクリックします。

[レジストリキーの追加/変更]ダイアログボックスが開きます。



7. お使いのコンピュータのアーキテクチャに一致するレジストリキーを追加します。
   - **x86 プラットフォーム**

     HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\ComputerAssociates\CA ARCServe Backup\Base
   - **x64 プラットフォーム**

     HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Wow6432Node\ComputerAssociates\CA ARCServe Backup\Base
8. [OK]をクリックします。

   レジストリキーが [グループ プロパティ]ダイアログボックスのレジストリキーリストに追加されます。

クラスタ対応インストールおよびアップグレードの確認方法

このセクションでは、MSCS および NEC CLUSTERPRO クラスタ対応環境への Arcserve Backup インストールおよびアップグレードの確認方法について説明します。

クラスタ対応インストールおよびアップグレードの確認方法

1. インストールまたはアップグレード処理中にエラーが発生していないことを確認します。
2. Arcserve Backup サービスを適切に開始するには、cstop スクリプトを実行してすべての Arcserve Backup サービスを停止し、その後に cstart スクリプトを実行してすべての Arcserve Backup サービスを再開してください。

   注： cstop および cstart のバッチファイルは、Arcserve Backup サーバの Arcserve Backup インストールディレクトリに格納されています。*cstop スクリプトと cstart スクリプトの使用法の詳細については、「管理者ガイド」を参照してください。*
3. スタンドアロンサーバ上で Arcserve Backup マネージャコンソールを開きます。

   注： この時点では、クラスタノードにログインしないでください。
4. スタンドアロンシステムのマネージャコンソールから、新しくインストールまたはアップグレードしたシステムに仮想名を使用してログインします。
5. 新しいシステムに正常にログインできる場合は、Arcserve クラスタグループを別のノードに移動します。すべての Arcserve サービスが正常に開始されたことを確認します。
6. Arcserve クラスタグループを移動した後で、マネージャコンソールに移動できることを確認します。バックアップマネージャ、リストアマネージャ、ジョブステータスマネージャなどを開いてみて確認します。

   注： クラスタグループを移動している間、マネージャコンソールが応答を断続的に停止することがあります。
7. サーバ管理を開きます。プライマリサーバがすべてのメンバサーバを検出することを確認します。
8. デバイスマネージャを表示します。使用しているデバイスを Arcserve Backup が検出することを確認します。
9. ジョブステータスマネージャを表示します。すべてのデータが古いインストールから新しいプライマリサーバにマイグレートされたことを確認します。Arcserve Backup はジョブに関する情報、ログおよびユーザ情報を古いサーバから新しいプライマリサー

バへマイグレートします。

10. 単純バックアップジョブをメンバサーバ上でサブミットします。

第6章: テープ統合モジュールに対する Arcserve UDP または Arcserve Backup のアップグレード

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

Arcserve UDP 6.5 から v7.0 へのアップグレード方法 230
Arcserve Backup 17.5 から r18.0 へのアップグレード方法 231

Arcserve UDP 6.5 から v7.0 へのアップグレード方法

Arcserve UDP 7.0 環境の Arcserve Backup Manager for Arcserve Backup 18.0 で Arcserve UDP Agent for Windows、Arcserve UDP プロキシ サーバ、または Arcserve UDP 復旧ポイント サーバへのバックアップ ジョブを設定している場合は、「Arcserve UDP ソリューション ガイド」の「Arcserve UDP バージョン 7.0 へのアップグレード」を参照してください。

Arcserve Backup 17.5 から r18.0 へのアップグレード方法

Arcserve Backup テープ統合モジュールを使用すると、Arcserve Backup メディアに Arcserve UDP セッションをバックアップできます。Arcserve Backup メディアは、ファイルシステム デバイス、テープ メディア、NAS デバイス、および SAN 上のデバイスです。UDP データをバックアップするプロセスは、ファイル、フォルダ、ノード、サーバなどのバックアップに必要な手順と同じです。

このバックアップ方式では、Arcserve Backup はフルおよび増分 UDP バックアップ セッションからフル バックアップ セッションを合成できます。合成されたバックアップ セッションを使用すると、ファイル レベル、フォルダ レベル、およびアプリケーション レベルで UDP データを回復し、UDP サーバのフル システム復旧 (ベア メタル復旧など) を実行できます。

以前のリリースから 18.0 に Arcserve Backup をアップグレードするには、以下の手順を実行します。

1. 「アップグレードに関する考慮事項」を参照して、Arcserve Backup でサポートされているアップグレード パスを確認します。
2. 特定の Arcserve Backup 18.0 ハードウェアが必要です。ハードウェア要件の詳細については、「Arcserve Backup リリース ノート」を参照してください。
   - Arcserve Backup 18.0 のサポート マトリクスの詳細については、「Compatibility Matrix」を参照してください。
   - Arcserve Backup 18.0 ライセンス キーがあることを確認します。

   注： アップグレードを続行する前に、スケジュールされたジョブと実行中のジョブがすべて完了していることを確認します。

   アップグレード プロセスを完了するには、「以前のリリースからの Arcserve Backup のアップグレード」を参照してください。

第7章: Arcserve Backup と他の製品との統合

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

Arcserve Replication の統合 234

Arcserve Backup Patch Manager との統合 235

Arcserve UDP の統合 236

Arcserve Replication の統合

Arcserve Replication および Arcserve High Availability は、非同期リアルタイムレプリケーションを使用して惨事復旧機能を提供するデータ保護ソリューションです。このホストベースのソフトウェアは、継続的なデータレプリケーションを提供し、アプリケーション データへの変更を発生と同時に、ローカルまたは WAN(Wide Area Network, ワイド エリア ネットワーク) にあるスタンバイ レプリカ サーバに転送します。継続的なデータレプリケーションにより、常に最新のデータをリストアに使用できます。

Arcserve Replication および Arcserve High Availability は、個別に販売される Arcserve 製品です。

Arcserve Backup と Arcserve Replication との統合の詳細については、「Arcserve Replication 統合ガイド」を参照してください。

Arcserve Backup Patch Manager との統合

Arcserve Backup Patch Manager は、Arcserve Backup for Windows と共にArcserve Backup for Windows インストールメディアにパッケージされています。Arcserve Backup for Windows インストールブラウザを使用して Arcserve Backup Patch Manager をインストールメディアから直接インストールできます。

Arcserve Backup Patch Manager の使用方法の詳細については、Arcserve Backup Patch Manager で提供されるマニュアルを参照してください。Arcserve Backup Patch Manager のマニュアルは、Arcserve Backup Patch Manager インストールブラウザから直接開くことができます。

Arcserve UDP の統合

Arcserve Backup と Arcserve UDP を統合すると、以下を行うことができます。

- Arcserve UDP サーバを一元管理する。
  - ローカルディスクまたは共有フォルダ上で実行される Arcserve UDP バックアップ
    - ローカルディスクへの Arcserve UDP エージェント ベース バックアップでは、Arcserve UDP Agent for Windows にノードが追加されます。
    - ローカルディスクまたは共有フォルダへの Arcserve UDP エージェントレス/ホスト ベース バックアップ(HBBU) では、Arcserve UDP プロキシ サーバに HBBU プロキシが追加されます。

      注： 同じ共有フォルダへの複数の Arcserve UDP エージェント ベース バックアップでは、Arcserve UDP プロキシ サーバに、Arcserve UDP バックアップ先を保持するノードを追加することをお勧めします。
  - データストア上で実行される Arcserve UDP バックアップ
    - エージェント ベース バックアップとエージェントレス バックアップの両方で、「Arcserve UDP 復旧ポイント サーバ」に RPS サーバが追加されます。
- Arcserve UDP のバックアップ データから Arcserve Backup のバックアップ セッションを作成する。
- Arcserve UDP サーバにローカルで保存された Arcserve UDP のバックアップ セッションを Arcserve Backup メディアにバックアップする。
- プロキシ サーバにリモートで保存された Arcserve UDP のバックアップ セッションおよびリモート共有 (Linux サーバ上の NFS ボリュームなど) を Arcserve Backup メディアにバックアップする。

  注： Arcserve Backup は、Arcserve UDP サーバではなく、Arcserve UDP バックアップ セッションが配置されているサーバからバックアップを実行します。
- マルチ ストリーミングを使用して Arcserve UDP をバックアップする。
- Arcserve Backup のセッションを、テープ メディア(ライブラリ) 、ディスク(ファイル システム デバイス) 、およびネットワーク共有に保存する。
- ファイルおよびフォルダ レベル単位の Arcserve UDP バックアップ データを Arcserve Backup メディアから回復する。

- アプリケーション レベル単 位 の Microsoft SQL Server データベースおよび Microsoft Exchange Server メールボックスを Arcserve Backup メディアから回 復 する。

以 下 の点 に注 意 してください。

- Arcserve Backup が Arcserve UDP と通 信 および統 合 できるようにするには、Arcserve Backup Client Agent for Windows を Arcserve UDP サーバにインストールする必 要 があります。

  注 : プロキシ サーバ オプションを使 用して Arcserve UDP サーバをバックアップする場 合 、Arcserve Backup Client Agent for Windows をプロキシ サーバにインストールできます。

- 以 下 のセクションでは、Arcserve UDP サーバを Arcserve Backup 環 境 に統 合 する方 法 について説 明します。Arcserve UDP バックアップ セッションをバックアップする方 法 、および Arcserve Backup バックアップ セッションからデータを回 復 する方 法 の詳 細 については、「管 理 者 ガイド」を参 照 してください。

Arcserve UDP セッションのバックアップ方法の定義

Arcserve UDP セッションをバックアップするために使用する方式は、復旧時間の目標および Arcserve Backup バックアップ セッションの目的によって異なります。Arcserve UDP セッションをバックアップするために使用できる方法は以下のとおりです。

Arcserve UDP バックアップ

Arcserve UDP バックアップ処理では、以下の事項について考慮する必要があります。

- このバックアップ方式は、個別のファイルおよびフォルダを回復し、アプリケーション レベル単位でデータ(Microsoft Exchange Server および Microsoft SQL Server) を迅速に回復するときに使用します。
- 保護するノードに Arcserve UDP をインストールします。
- バックアップ マネージャのソース ツリーの Arcserve UDP サーバ オブジェクトに Arcserve UDP ノードを追加します。
- このバックアップ方式では、Arcserve Backup でフルおよび増分 Arcserve UDP バックアップ セッションからバックアップ セッションを作成できます。このバックアップ方式を使用すると、Arcserve Backup は Arcserve UDP カタログ ファイルをバックアップできます。
- マルチ ストリーミングを使用して Arcserve UDP フルおよび増分バックアップ セッションをバックアップすることにより、バックアップ ウィンドウを減らすことができます。マルチ ストリーミングでは、1 つのジョブでバックアップ データの複数のストリームを転送できます。増分バックアップでマルチ ストリーミングを使用すると、バックアップ ウィンドウを減らすことができます。

バックアップ マネージャから Arcserve UDP サーバを管理する方法

バックアップ ポリシーを設定し、Arcserve UDP サーバのバックアップをサブミットするには、Arcserve UDP サーバが、バックアップ マネージャ ソース ディレクトリ ツリーの Arcserve UDP サーバ オブジェクト、Arcserve UDP プロキシ サーバ オブジェクト、または Arcserve UDP 復旧ポイント サーバの下に表示される必要があります。

注： バックアップが正常に完了するためには、Arcserve UDP サーバ、Arcserve UDP ノード、および Arcserve UDP プロキシ サーバ上のシステム時刻が同じであることを確認します。これにより、Arcserve UDP プロキシ サーバによって保護された Arcserve UDP ノードおよび仮想マシンをバックアップするときに、バックアップが確実に実行されるようになります。

ソース ディレクトリ ツリーに Arcserve UDP サーバを手動で追加できます。詳細については、「Arcserve UDP サーバ オブジェクトへの Arcserve UDP サーバの割り当て」を参照してください。

以下の図は、バックアップ マネージャ ソース ツリーの Arcserve UDP サーバ、Arcserve UDP プロキシ サーバ オブジェクト、Arcserve UDP 復旧ポイント サーバを表しています。オブジェクトのリストには、Arcserve Backup 環境内に配置されている Arcserve UDP サーバ、Arcserve UDP プロキシ サーバ、Arcserve UDP 復旧ポイント サーバのホスト名または IP アドレスが表示されます。

注： バックアップ マネージャでは、Arcserve UDP サーバに含まれているディレクトリ、ファイル、およびフォルダを参照できません。

Arcserve UDP サーバ オブジェクトと Arcserve UDP プロキシ サーバ オブジェクトからは、以下のサーバ管理タスクを実行できます。

- Arcserve UDP サーバ オブジェクトへの Arcserve UDP サーバの割り当て
- Arcserve UDP プロキシ サーバ オブジェクトへの Arcserve UDP サーバの割り当て
- Arcserve UDP 復旧ポイント サーバ オブジェクトへの Arcserve UDP RPS サーバの割り当て
- バックアップ マネージャ ソース ツリーからの Arcserve UDP サーバの削除
- バックアップ マネージャから Arcserve UDP のホーム画面を開く
- 復旧ポイント サーバ(RPS) を介した Arcserve UDP データストアのバックアップ ジョブのサブミット
- Arcserve Backup メディアからの Arcserve UDP データストアの復旧

Arcserve UDP プロキシ サーバ オブジェクトへの Arcserve UDP プロキシの割り当て

バックアップ マネージャでは、ソース ツリーの Arcserve UDP プロキシ サーバ オブジェクトに Arcserve UDP プロキシを割り当てます。UDP プロキシ サーバ オブジェクトに UDP プロキシを割り当てると、Arcserve Backup は 1 つのプロキシ サーバを使用して、すべての UDP プロキシのすべてのバックアップ セッションをバックアップします。また、UDP プロキシに Arcserve Host-Based VM Backup がインストールされている場合、Arcserve Backup は、プロキシ サーバに割り当てられている、UDP が実行されているすべての仮想マシンのバックアップ セッションをバックアップします。

UDP プロキシ サーバ オブジェクトに UDP プロキシが割り当てられている場合、Arcserve Backup は UDP バックアップ セッションのフル バックアップを実行します。その後、Arcserve Backup バックアップ セッションを使用して、ベア メタル復旧 (BMR) などのフル システム復旧を実行できます。

注： Arcserve UDP プロキシ サーバに Arcserve UDP プロキシを割り当てるには、Windows リモート レジストリ サービスが Arcserve UDP ノード上で実行されている必要があります。

以下の手順に従います。

1. Arcserve Backup マネージャ コンソールを開きます。
2. [クイック スタート] メニューから、[バックアップ] をクリックしてバックアップ マネージャを開きます。
3. [ソース] タブをクリックします。

   ソース ツリーが表示されます。
4. 以下のいずれかを行います。
   - Arcserve UDP プロキシ サーバ オブジェクトに Arcserve UDP プロキシ サーバを追加しない場合は、手順 7 に進みます。
   - Arcserve UDP プロキシ サーバを追加するには、Arcserve UDP プロキシ サーバ オブジェクトを右クリックし、ポップアップ メニューの [Add UDP Proxy Server (UDP プロキシ サーバの追加)] をクリックします。

     [Add UDP Proxy Server (UDP プロキシ サーバの追加)] ダイアログ ボックスが開きます。
5. [Add UDP Proxy Server (UDP プロキシ サーバの追加)] ダイアログ ボックスの以下のフィールドに入力します。

- **ホスト名** -- UDP プロキシ サーバのホスト名を指定します。
- (オプション) **IP アドレス** -- UDP プロキシ サーバの IP アドレスを指定します。

  注： IP アドレスを指定するには、[コンピュータ名の解決を使用] チェック ボックスをオフにします。
- **ユーザ名** -- UDP プロキシ サーバへのログインに必要なユーザ名を指定します。
- **パスワード** -- UDP プロキシ サーバへのログインに必要なパスワードを指定します。
- (オプション) **ホストベース エージェントレス プロキシ** -- このオプションは、Arcserve Host-Based VM Backup がバックアップ プロキシ システム上で実行されていて、保護するプロキシが仮想マシンである場合にのみ指定します。

6. [OK] をクリックします。

   [Add UDP Proxy Server (UDP プロキシ サーバの追加)] ダイアログ ボックスが閉じ、新しく追加された Arcserve UDP プロキシ サーバがソース ツリーに表示されます。[ホストベース エージェントレス プロキシ] を指定した場合、Arcserve Backup は、Arcserve UDP プロキシ サーバ オブジェクトにホストベース エージェントレス プロキシ サーバを追加し、プロキシ サーバに、新しく追加されたプロキシ サーバに関連付けられている仮想マシンのホスト名を取り込みます。

7. Arcserve UDP プロキシ サーバに Arcserve UDP プロキシを割り当てるには、プロキシ サーバを右クリックし、ポップアップ メニューの [UDP サーバの割り当て] をクリックします。

   [Assign UDP Server to a Proxy Server (プロキシ サーバへの UDP サーバの割り当て)] ダイアログ ボックスが開きます。

   注： Arcserve UDP プロキシ サーバが Arcserve Host-Based VM Backup プロキシ サーバである場合、プロキシ サーバに個々の VM を直接割り当てることはできません。

8. [Assign UDP Server to a Proxy Server (プロキシ サーバへの UDP サーバの割り当て)] ダイアログ ボックスの以下のフィールドに入力します。

   - **ホスト名** -- UDP サーバのホスト名を指定します。
   - (オプション) **IP アドレス** -- UDP サーバの IP アドレスを指定します。

     注： IP アドレスを指定するには、[コンピュータ名の解決を使用] チェック ボックスをオフにします。
   - **ユーザ名** -- UDP サーバへのログインに必要なユーザ名を指定します。
   - **パスワード** -- UDP サーバへのログインに必要なパスワードを指定します。

9. ［OK］をクリックします。

   ［Assign UDP Server to a Proxy Server (プロキシ サーバへの UDP サーバの割り当て) ］ダイアログ ボックスが閉じます。

   ソース ツリーの Arcserve UDP プロキシ サーバの下に Arcserve UDP サーバが割り当てられます。

   注： Arcserve Backup では、ソース ツリーに追加した Arcserve UDP プロキシに含まれるドライブおよびディレクトリを参照することができません。

Arcserve UDP Agent for Windows オブジェクトへの Arcserve UDP エージェントの割り当て

バックアップ マネージャでは、ソース ツリーの Arcserve UDP Agent for Windows オブジェクトに Arcserve UDP エージェントを追加できます。

バックアップ データを使用してファイル レベル、フォルダ レベル、およびアプリケーション レベルの単位で UDP データをリストアする必要がある場合、Arcserve UDP Agent for Windows オブジェクトに Arcserve UDP エージェントを追加します。

以下の手順に従います。

1. Arcserve Backup マネージャ コンソールを開きます。
2. [クイック スタート] メニューから、[バックアップ] をクリックしてバックアップ マネージャを開きます。
3. [ソース] タブをクリックします。

   ソース ツリーが表示されます。
4. Arcserve UDP Agent for Windows オブジェクトを右クリックし、ポップアップ メニューの [UDP サーバの追加] をクリックします。

   [UDP サーバの追加] ダイアログ ボックスが開きます。
5. [UDP サーバの追加] ダイアログ ボックスの以下のフィールドに入力します。
   - **ホスト名** -- UDP サーバのホスト名を指定します。
   - (オプション) **IP アドレス** -- UDP サーバの IP アドレスを指定します。

     注： IP アドレスを指定するには、[コンピュータ名の解決を使用] チェック ボックスをオフにします。
   - **ユーザ名** -- UDP サーバへのログインに必要なユーザ名を指定します。
   - **パスワード** -- UDP サーバへのログインに必要なパスワードを指定します。
6. [OK] をクリックします。

ソース ツリーの Arcserve UDP Agent for Windows オブジェクトの下に Arcserve UDP エージェントが割り当てられます。

注： Arcserve Backup では、ソース ツリーに追加した Arcserve UDP Agent for Windows に含まれるドライブおよびディレクトリを参照することができません。

Arcserve UDP 復旧ポイント サーバ オブジェクトへの Arcserve UDP RPS サーバの割り当て

バックアップ マネージャでは、データ ストアでバックアップを実行中に、バックアップ マネージャのソース ツリーで Arcserve UDP 復旧ポイント サーバ オブジェクトに Arcserve UDP RPS サーバを追加できます。

バックアップ データを使用して、ファイル レベル、フォルダ レベル、およびアプリケーション レベルの単位で UDP データをリストアする場合、Arcserve UDP RPS サーバを Arcserve UDP 復旧ポイント サーバ オブジェクトに追加できます。

以下の手順に従います。

1. Arcserve Backup マネージャ コンソールを開きます。
2. [クイック スタート] メニューから、[バックアップ] をクリックしてバックアップ マネージャを開きます。
3. [ソース] タブをクリックします。

   ソース ツリーが表示されます。
4. Arcserve UDP 復旧ポイント サーバ オブジェクトを右クリックして、ポップアップ メニューの [**RPS サーバの追加**] をクリックします。

   [**RPS サーバの追加**] ダイアログ ボックスが開きます。
5. 以下のフィールドに入力します。
   - **ホスト名**
   - **IP アドレス**(オプション)

     注： IP アドレスを指定する前に [**コンピュータ名の解決を使用**] オプションをオフにします。
   - **ユーザ名**
   - **パスワード**
6. [**OK**] をクリックします。

   Arcserve UDP RPS サーバが Arcserve UDP 復旧ポイント サーバ オブジェクトに割り当てられます。

   注： Arcserve UDP では、Arcserve UDP RPS サーバが追加された後、Arcserve UDP 復旧ポイント サーバ内のドライブとディレクトリを参照することはできません。

バックアップ マネージャ ソース ツリーからの Arcserve UDP サーバの削除

バックアップ マネージャでは、ソース ツリーから Arcserve UDP サーバ、Arcserve UDP プロキシ サーバ、および Arcserve UDP 復旧ポイント サーバを解除できます。

以下の手順に従います。

1. Arcserve Backup マネージャ コンソールを開きます。
2. [クイック スタート] メニューから、[バックアップ] をクリックしてバックアップ マネージャを開きます。
3. [ソース] タブをクリックします。

   ソース ツリーが表示されます。
4. 以下のいずれかを行います。
   - **Arcserve UDP サーバ:** Arcserve UDP サーバ オブジェクトを展開し、削除するサーバを右クリックして、ポップアップ メニューの [Delete Arcserve UDP Recovery Point Server (Arcserve UDP サーバの削除)] をクリックします。
   - **Arcserve UDP プロキシ サーバ:** Arcserve UDP プロキシ サーバ オブジェクトを展開し、削除するプロキシ サーバを右クリックして、ポップアップ メニューの [Arcserve UDP プロキシ サーバの削除] をクリックします。
   - **Arcserve UDP 復旧ポイント サーバ:** Arcserve UDP 復旧ポイント サーバ オブジェクトを展開し、削除する復旧ポイント サーバを右クリックして、ポップアップ メニューの [Arcserve UDP 復旧ポイント サーバの削除] をクリックします。

   削除確認のダイアログ ボックスが開きます。
5. [はい] をクリックします。

   バックアップ マネージャ ソース ツリーからサーバが削除されます。

   注: Arcserve UDP サーバ オブジェクト、Arcserve UDP プロキシ サーバ オブジェクト、および Arcserve UDP 復旧ポイント サーバの下に Arcserve UDP サーバが表示される場合、削除プロセスにより、両方のディレクトリ ツリーから Arcserve UDP サーバが削除されます。

バックアップ マネージャから Arcserve UDP のホーム画面を開く

Arcserve Backup では、バックアップ マネージャから Arcserve UDP のホーム画面を開くことができます。

Arcserve UDP のホーム画面から、Arcserve UDP のさまざまなタスクを実行するときは、以下の手順に従います。

以下の手順に従います。

1. Arcserve Backup マネージャ コンソールを開きます。
2. [クイック スタート] メニューから、[バックアップ] をクリックしてバックアップ マネージャを開きます。
3. [ソース] タブをクリックします。

   ソース ツリーが表示されます。
4. 以下のいずれかを行います。
   - Arcserve UDP サーバ オブジェクトを展開します。

     設定する Arcserve UDP サーバを右クリックし、ポップアップ メニューの [UDP の起動] をクリックします。
   - Arcserve UDP プロキシ サーバ オブジェクトを展開します。

     プロキシ サーバを展開します。

     設定する Arcserve UDP サーバを右クリックし、ポップアップ メニューの [UDP の起動] をクリックします。

Arcserve UDP Home Page が表示されます。

注： Arcserve UDP の使い方の詳細については、Arcserve UDP 7.0 のドキュメントを参照してください。

復旧ポイント サーバ(RPS) を介した Arcserve UDP データストアのバックアップ ジョブのサブミット

詳細については、リンクを参照してください。

Arcserve Backup メディアからの Arcserve UDP データストアの復旧

詳細については、リンクを参照してください。

Arcserve Backup による暗号化済み Arcserve UDP バックアップ セッションの処理方法

Arcserve UDP では、データ暗号化を使用して、機密性の高いデータを保護することができます。データは、バックアップのサブミット時に指定する暗号化パスワードを使用して保護されます。Arcserve UDP データを回復するには、リストアのサブミット時にパスワードを指定します。

Arcserve UDP セッションを Arcserve Backup メディアにバックアップするには、バックアップのサブミット前に、[バックアップ マネージャ]ソース ディレクトリ ツリーに Arcserve UDP サーバを追加します。ソース ツリーに Arcserve UDP サーバを追加するには、Arcserve UDP のコンピュータ名および認証情報(ユーザ名とパスワード)の指定が必要です。Arcserve Backup では、Arcserve UDP 認証情報を使用して Arcserve UDP 暗号化パスワードの取得、データの復号化、Arcserve Backup メディアへのデータのバックアップを行います。その結果、Arcserve Backup は復号化された形式で Arcserve Backup メディア上に Arcserve UDP バックアップ セッションを保存します。

Arcserve Backup メディアから Arcserve UDP データを回復するには、パスワードは必要ありません。Arcserve Backup メディア上で Arcserve UDP データを暗号化したい場合は、ジョブのサブミット時に Arcserve Backup 暗号化オプションを指定します。暗号化オプションの詳細については「管理者ガイド」の「バックアップ マネージャの圧縮/暗号化オプション」を参照してください。

第8章: 環境設定 Arcserve Backup

このセクションでは、Arcserve Backup ベース製品を設定する方法について説明します。Arcserve Backup エージェントおよびオプションの設定方法の詳細については、対応するエージェントまたはオプションのマニュアルを参照してください。

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

Arcserve Backup のアクティブ化 252
マネージャまたはマネージャ コンソールを開く 253
Arcserve Backup ホーム画面 255
最初に表示されるホーム画面とユーザ チュートリアル 259
サービスの状態アイコン 260
Arcserve Backup へのログイン 261
Arcserve Backup マネージャの環境設定の指定 263
コード ページ 266
Arcserve Backup システム アカウント 270
Arcserve Backup データベース保護ジョブの開始 273
Arcserve Backup SQL Server データベースの微調整 274
デバイス ウィザードを使用したデバイスの設定 278
Enterprise Module コンポーネントの設定 279
Global Dashboard の環境設定 280
ファイル システム デバイスの作成 286
Arcserve Backup データベース エージェント用スキップ パラメータとインクルード パラメータの定義方法 288
通信を最適化するためのファイアウォールの設定 290

Arcserve Backup のアクティブ化

Arcserve Backup をインストールした後は、製品をマネージャコンソールからアクティブ化する必要があります。このアクティブ化を行うと、［製品向上プログラム］チェックボックスをオンにした場合に、Arcserve は自動的に製品をライセンス登録し、製品のログおよび使用状況の統計を収集することができます。

重要：Arcserve では、ノード名、IP アドレス、ログイン認証情報、ドメイン名、ネットワーク名など、個人または会社の重要な情報を収集することはありません。

製品をアクティブ化していない場合は、マネージャコンソールの［メッセージ］タブに次の通知が表示されます：「お使いの Arcserve Backup はアクティブ化されていません。」

Arcserve Backup をアクティブ化する方法の詳細については、Arcserve® Product ライセンス オンライン ヘルプの「Arcserve Backup に対する Arcserve ライセンスの使用」を参照してください。

マネージャまたはマネージャ コンソールを開く

マネージャ コンソールは、ご使用の環境におけるバックアップ管理、およびオペレーションのリストアを可能にするインターフェースです。マネージャ コンソールを使用すると、ローカルとリモートの Arcserve Backup サーバとドメインへのログイン、および管理が可能です。

この Arcserve Backup のリリースには、再設計されたマネージャ コンソールが用意されています。ご使用の環境で古いリリースの Arcserve Backup を起動している場合、前のバージョンのマネージャを使用して、旧リリースを起動中のシステムにログインする必要があります。

マネージャまたはマネージャ コンソールを開く方法

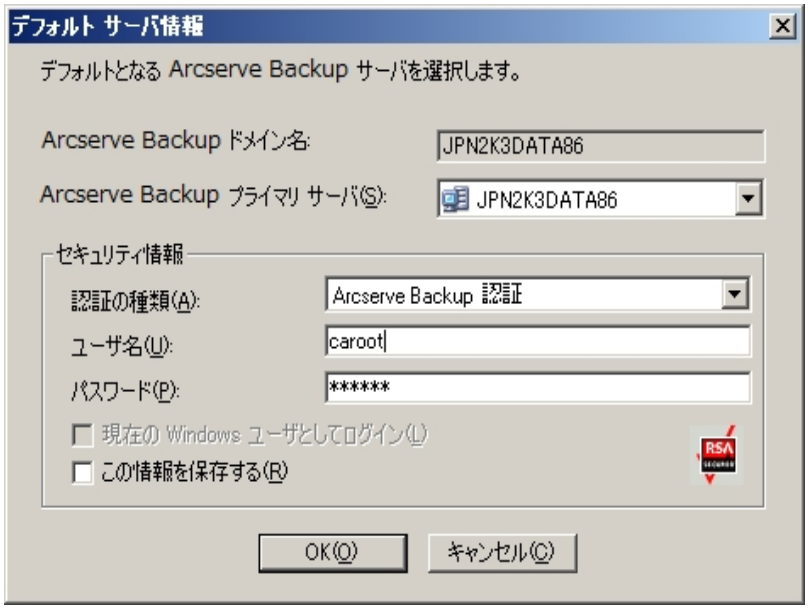
1. 以下のいずれかを行います。
   - このリリースの Arcserve Backup を実行中のサーバにアクセスするには、Windows の [スタート] ボタンから [プログラム] - [Arcserve] - [Arcserve Backup] を選択し、[マネージャ] をクリックします。
   - 前のリリースを実行中の Arcserve サーバにアクセスするには、以下のファイルを参照します。

     C:\Programs Files\CA\ARCserve Backup\ARCserveMgr.exe

     ARCserveMgr.exe をダブルクリックします。
   - Arcserve Backup の以前のリリースがデフォルトのインストール ディレクトリにインストールしてあり、インストールのプロセスを使用して Arcserve Backup をアップグレードした場合は、Windows の [スタート] ボタンから [プログラム] - [Arcserve] - [Arcserve Backup] を選択し、[マネージャ] をクリックすると、マネージャを開くことができます。

   [デフォルト サーバ情報] が表示されます。
2. デフォルト サーバを変更したり、別のサーバを指定したりするには、Arcserve Backup プライマリ サーバのリストからサーバを選択します。目的のサーバがドロップダウン リストに表示されない場合は、Arcserve Backup プライマリ サーバのリストで

サーバのホスト名 や IP アドレスを直 接 入 力 することができます。



3. ユーザを変 更 するには、Arcserve Backup 認 証 または Windows 認 証 を選 択 し、ユーザ名 とパスワードを指 定 します。

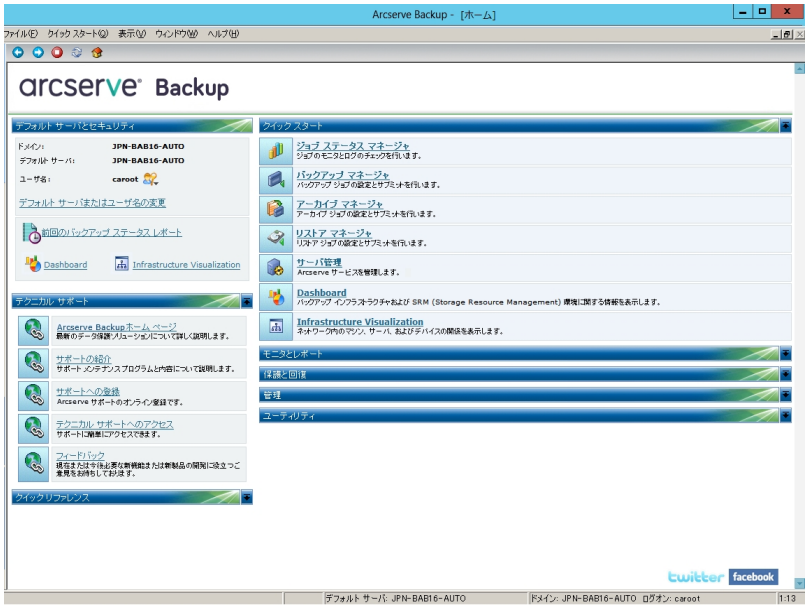
   デフォルトでは、Arcserve Backup にセキュリティ情 報 は保 存 されません。このサーバ用 に入 力 したユーザ名 およびパスワード 情 報 を保 存 する場 合 は、明 示 的 に [この情 報 を保 存 する]を選 択 する必 要 があります。この情 報 を保 存 しない場 合 、Arcserve Backup では、マネージャやウィザードなどを最 初 に開くときに Arcserve Backup セキュリティ認 証 情 報 の入 力 を促 すプロンプトが表 示 され、Arcserve Backup のユーザ名 とパスワードを入 力 する必 要 があります。

4. [ユーザ名]フィールドに「caroot」、 [パスワード]フィールドにパスワードを入 力 し、[OK]ボタンをクリックします。

   Arcserve Backup に初 めてログオンすると、 [チュートリアル]というチュートリアルが表 示 されます。このチュートリアルでは、画 面 の指 示 に従 って操 作 を進 めることで、基 本 的 なデータのバックアップおよびリストア方 法 を習 得 できます。このチュートリアルは、初 回 ログイン時 のみ表 示 されますが、 [ヘルプ]メニューから [チュートリアル]にアクセスすることもできます。

Arcserve Backup ホーム画面

ホーム画面は操作の基点となる画面で、ここから他の Arcserve Backup サーバへのログインや、Arcserve Backup の各種マネージャ、ウィザードおよびユーティリティへのアクセスが可能です。



デフォルト サーバおよびセキュリティ

Arcserve Backup サーバに関する以下の情報を表示します。

- 現在のユーザ名でログインしているドメインおよびデフォルト サーバ。

  注： デフォルト サーバを変更して別の Arcserve Backup プライマリ サーバまたはスタンバイ サーバにログインする方法の詳細は、「Arcserve Backup へのログオン」を参照してください。

- Windows ユーザが Arcserve Backup にログインしたときの、ユーザおよびその役割のサマリ。 [ユーザ名]フィールドの横の役割情報アイコンをクリックし、ユーザが保有するすべての役割が含まれる [ユーザの役割]リストを確認します。
- バックアップ ステータス レポート(日単位) 。
- Arcserve Backup Dashboard の起動。
- Infrastructure Visualization の表示
- Enterprise Module がインストールされていない場合、またはライセンスが期限切れになっている場合、詳細を表示。ホーム画面の GUI のリンクをクリックして制限を確認します。

クイック スタート

以下の Arcserve Backup マネージャを開くことができます。

- **ジョブ ステータス マネージャ** -- ジョブを監視し、ログを表示します。
- **バックアップ マネージャ** -- バックアップ ジョブを設定およびサブミットします。
- **アーカイブ マネージャ** -- アーカイブ バックアップ ジョブを設定およびサブミットします。
- **リストア マネージャ** -- 完全なデータ回復を実行します。
- **サーバ管理** -- Arcserve Backup エンジンを管理します。たとえば、データベース エンジン、ジョブ エンジン、およびテープ エンジンです。
- **Dashboard** -- バックアップ インフラストラクチャのスナップショット概要にアクセスできます。
- **Infrastructure Visualization** -- Arcserve Backup 環境内のコンピュータ、サーバ、およびデバイスの関係を表示します。

モニタとレポート

以下のマネージャおよびユーティリティを開くことができます。

- **ジョブ ステータス マネージャ** -- ジョブを監視し、ログを表示します。
- **レポート マネージャ** -- 完全データ リカバリを実行します。
- **レポート ライタ** -- カスタムの Arcserve Backup レポートを作成します。
- **Dashboard** -- バックアップ インフラストラクチャのスナップショット概要にアクセスできます。
- **Infrastructure Visualization** -- ネットワーク内のマシン、サーバ、およびデバイスの関係を表示します。

保護と回復

以下のマネージャおよびウィザードを開くことができます。

- **バックアップ マネージャ** -- バックアップ ジョブを設定およびサブミットします。
- **アーカイブ マネージャ** -- アーカイブ バックアップ ジョブを設定およびサブミットします。
- **リストア マネージャ** -- 完全なデータ回復を実行します。
- **Arcserve High Availability** -- Arcserve High Availability を起動またはインストールします。Arcserve High Availability は、非同期リアルタイム レプリケーションを使用して惨事復旧機能を提供するデータ保護ソリューションです。このリンクは、Arcserve High Availability をインストールするとアクティブになります。詳細については、「Arcserve High Availability 統合ガイド」を参照してください。

- **Arcserve UDP** -- Arcserve UDP を起動またはインストールします。Arcserve UDP は、ブロックレベルのデータ変更を追跡し、変更されたブロックのみをバックアップするバックアップソリューションです。Arcserve UDP では、増分バックアップを頻繁に実行できます。また、バックアップのサイズが削減され、バックアップデータを最新の状態に保つことができます。

管理

以下のマネージャ、ウィザードおよびユーティリティを開くことができます。

- **サーバ管理** -- Arcserve Backup エンジンを管理します。たとえば、データベースエンジン、ジョブエンジン、およびテープエンジンです。
- **セントラルエージェント管理** -- Arcserve Backup エージェントを管理します。
- **デバイスマネージャ** -- 環境内のストレージデバイスを管理します。
- **デバイス環境設定** -- Arcserve Backup 環境内のストレージデバイスを設定します。
- **デバイスウィザード** -- メディア操作を実行します。
- **デバイスグループ環境設定** -- Arcserve Backup 環境でデバイスのグループを簡単に設定し、データのステージングに使用するグループを選択できます。
- **メディアプール** -- Arcserve Backup 環境内でメディアプールを作成して管理します。
- **データベースマネージャ** -- Arcserve Backup データベースを管理および維持します。
- **Alert マネージャ** -- バックアップ中に発生するイベントに関するアラート通知を作成します。
- **ユーザプロファイル** -- Arcserve Backup 管理者がユーザプロファイルを管理して Arcserve Backup へのアクセスを提供できるようになります。
- **Agent Deployment** -- リモートホストに Arcserve Backup エージェントをインストールしたり、リモートホスト上の Arcserve Backup エージェントをアップグレードしたりするための Agent Deployment ツールを起動します。
- **メディア管理マネージャ** -- オフサイトのメディアリソースを管理します。

ユーティリティ

以下のウィザードおよびユーティリティを開くことができます。

- **ジョブスケジューラウィザード** -- Arcserve Backup コマンドラインユーティリティを制御します。

- **ブートキット ウィザード** -- 惨事復旧用ブート ディスク セットを作成します。このリンクは、Arcserve Backup Disaster Recovery Option をインストールするとアクティブになります。

  注： 詳細については、「*Disaster Recovery Option ユーザ ガイド*」を参照してください。

- **診断ウィザード** -- Arcserve Backup システム ログから情報を集めます。収集した情報は、トラブルシューティングに使用したり、Arcserve テクニカル サポートが問題を特定する際に役立てることができます。
- **マージ** -- セッション情報をメディアから Arcserve Backup データベースにマージします。
- **メディア検証とスキャン** -- メディア上のバックアップ セッションに関する情報を収集できます。
- **比較** -- メディア セッションの内容とコンピュータ上のファイルを比較します。
- **カウント** -- コンピュータ上のファイルおよびディレクトリをカウントします。
- **コピー** -- ハード ディスクのファイルを別のハード ディスクへコピーまたは移動します。
- **パージ** -- コンピュータからファイルやディレクトリを削除します。

テクニカル サポート

[テクニカル サポート] セクションから、以下のサポート ツールに迅速にアクセスできます。

- **Arcserve Backup Web ページ** -- Arcserve Backup に関する製品情報がある Arcserve サイトにリンクします。
- **サポートの紹介** -- 製品のメンテナンス情報およびサポート情報が提供されます。
- **サポートへの登録** -- Arcserve Support Online への登録手続きを行うオンラインフォームが提供されます。
- **テクニカル サポートへのアクセス** -- 弊社テクニカル サポートの Web サイトにリンクします。ここでは、最新の Arcserve Backup ニュースや情報、各種ガイド、操作マニュアル、ビデオ、トラブルシューティング手順、パッチなどが提供されます。

最初に表示されるホーム画面とユーザ チュートリアル

Arcserve Backup を初めて起動すると、チュートリアルが表示され、製品の紹介と主な機能に関する説明が行われます。このチュートリアルでは、ファイル システム デバイスを設定し、初めてのバックアップおよびリストアを実行するための手順が説明されます。

サービスの状態アイコン

Arcserve Backup マネージャの上部にあるツールバーには、各バックエンド サービス (ジョブ エンジン、テープ エンジン、およびデータベース エンジン) のアイコンが表示されます。

各アイコンの色は、以下の状態を示しています。

- **緑** -- サービスが実行中であることを示します。
- **赤** -- サービスが実行中でないことを示します。
- **グレー** -- サービスに接続できないか、不明な状態であることを示します。
- **青** -- サービスが一時停止していることを示します。

Arcserve Backup へのログイン

Arcserve Backup マネージャ コンソールを開く際には、Arcserve Backup にログインする必要があります。Arcserve Backup に初めてログインするときは、管理者権限を持つ caroot としてログインし、パスワード フィールドに適切なパスワードを入力する必要があります。または、Arcserve Backup をインストールしたときに指定した Windows アカウントを使用して Arcserve Backup にログインする方法、あるいはログインするコンピュータに関連付けられた Windows 管理者アカウントを使用してログインする方法があります。

ログインした後は、caroot ユーザのパスワードを変更し、新しいユーザを追加できます。コマンド ライン ユーティリティ ca_auth.exe を使用して、新しいユーザを追加することもできます。ca_auth.exe の詳細については、「コマンド ライン リファレンス ガイド」を参照してください。

注： caroot パスワードは、任意の英数字と特殊文字を組み合わせて指定できますが、15 バイトを超えないようにしてください。合計 15 バイトのパスワードは、およそ 7 ～ 15 文字に相当します。

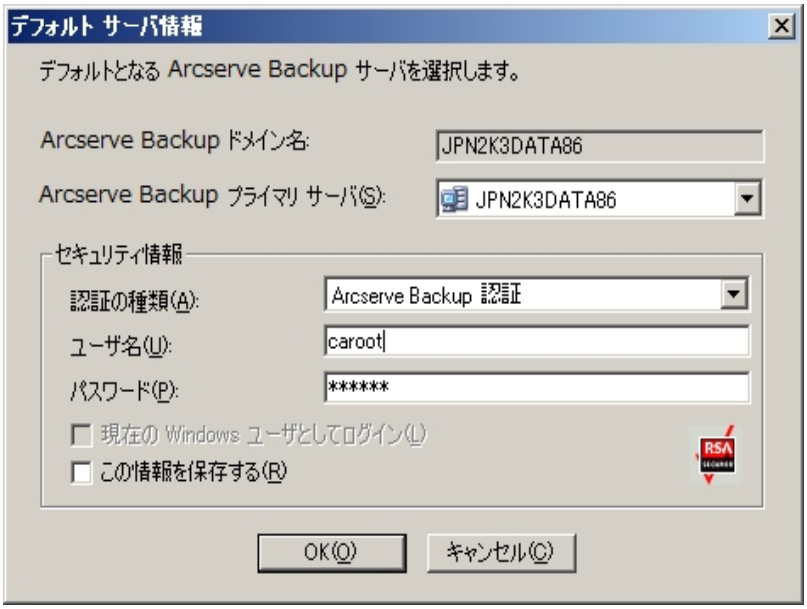
Arcserve Backup にログインするには、以下の手順に従います。

1. Arcserve Backup マネージャ コンソールを開きます。

   マネージャ コンソールを開くには、ツールバーの [スタート]- [プログラム]- [CA]- [Arcserve Backup]- [マネージャ]の順に選択します。

   [デフォルト サーバ情報]が表示されます。

2. デフォルト サーバを変更したり、別のサーバを指定したりするには、Arcserve Backup プライマリ サーバのリストからサーバを選択します。目的のサーバがドロップダウン リストに表示されない場合は、Arcserve Backup プライマリ サーバのリストでサーバのホスト名や IP アドレスを直接入力することができます。



3. ユーザを変更するには、Arcserve Backup 認証または Windows 認証を選択し、ユーザ名とパスワードを指定します。

   デフォルトでは、Arcserve Backup にセキュリティ情報は保存されません。このサーバ用に入力したユーザ名およびパスワード情報を保存する場合は、明示的に [この情報を保存する] を選択する必要があります。この情報を保存しない場合は、マネージャやウィザードなどを最初に開くときに Arcserve Backup セキュリティ認証情報の入力を促すプロンプトが表示され、Arcserve Backup のユーザ名とパスワードを入力する必要があります。

4. [ユーザ名] フィールドに「caroot」、[パスワード] フィールドにパスワードを入力し、[OK] ボタンをクリックします。

Arcserve Backup に初めてログインすると、チュートリアルが表示されます。このチュートリアルでは、画面の指示に従って操作を進めることで、基本的なデータのバックアップおよびリストア方法を習得できます。このチュートリアルは、初回ログイン時のみ表示されますが、[ヘルプ] メニューから [チュートリアル] にアクセスすることもできます。

Arcserve Backup マネージャの環境設定の指定

Arcserve Backup により、Arcserve Backup マネージャ ウィンドウの動作の仕様を設定できます。 [環境設定]ダイアログ ボックスから、グローバルおよびライブラリのフィルタ オプションを指定できます。

Arcserve Backup マネージャの環境設定を指定する方法

1. Windows の [スタート]メニューから [すべてのプログラム]- [Arcserve]- [Arcserve Backup]を選択し、 [マネージャ]をクリックして、 [Arcserve Backup マネージャ コンソール]を開きます。

   Arcserve Backup マネージャのホーム画面が開きます。

2. [クイック スタート]メニューから、 [バックアップ]ボタンをクリックします。

   [バックアップ マネージャ]ウィンドウが開きます。

   注： すべての [Arcserve Backup マネージャ]ウィンドウからこのタスクを完了できます。

3. [表示]メニューから [環境設定]を選択します。

   [環境設定]ダイアログ ボックスが開きます。

4. [グローバル設定]タブを選択します。以下のようなグローバル設定を指定します。

   ジョブ キュー リフレッシュ間隔の設定

   ジョブ ステータス マネージャが定期的に更新される間隔を秒単位で指定します。

   デバイス管理マネージャ リフレッシュ間隔の設定

   デバイス マネージャが定期的に更新される間隔を指定します。

   アニメーション速度の設定

   デバイス マネージャまたはバックアップ マネージャのアニメーション表示を選択した場合、テープ ビットマップ表示の回転速度を指定します。

   レジストリの表示

   バックアップで選択するためにレジストリ ファイルが表示されます。

   リーフ ノードの表示

   ツリー ビュー内ですべてのリーフ ノードを表示します。これにより、ファイルはディレクトリの下に表示され、メディアはドライブの下に表示されます。

   すべてのエンジンを自動起動

マネージャの使用時に、適切な Arcserve Backup エンジンが自動的に起動します。

注： [すべてのエンジンを自動起動]の設定はデフォルトで有効になります。

デフォルト マネージャ

マネージャコンソールを開いたときに特定のマネージャに直接アクセスできます。

カウント/コピー/パージ ジョブのサーバ選択ダイアログ ボックスを表示しない

カウント ジョブ、コピー ジョブ、またはパージ ジョブをサブミットする際に、[サーバの選択]ダイアログ ボックスを非表示にできます。

これらのジョブのいずれかをサブミットする際に、[サーバの選択]ダイアログ ボックスが開き、ジョブを実行するサーバを指定できます。ジョブには、プライマリ サーバ、スタンドアロン サーバ、またはメンバ サーバを指定できます。

このオプションを有効化すると、Arcserve Backup はジョブに使用するサーバを記憶し、ジョブをサブミットする際に [サーバの選択]ダイアログ ボックスは開きません。

カウント/コピー/パージ ジョブをサブミットする際に [サーバの選択]ダイアログ ボックスが開くようにするには、[カウント/コピー/パージ ジョブのサーバ選択ダイアログ ボックスを表示しない]オプションのチェックをオフにします。

5. [ライブラリ フィルタ]タブを選択します。以下のライブラリ フィルタ環境設定を指定します。

注： 以下の環境設定はライブラリ デバイスに適用され、デバイスまたはグループ階層が表示される Arcserve Backup のマネージャ ビューにのみ影響を及ぼします (たとえば、[デスティネーション]タブの下のバックアップ マネージャ、または [デバイス マネージャ]ビューなど) 。デフォルトでは、これらのオプションはすべて選択されておらず、どのオプションにもデフォルト値はありません。

フォーマット/消去画面で、書き込み禁止メディアを表示

すべてのフォーマットおよび消去画面で書き込み禁止のメディアに関する情報を表示します。

デバイス名をベンダ ID とシリアル番号で表示する

デバイス名をベンダ ID とシリアル番号で表示します。

空のスロットを表示

ライブラリ内の空のスロットを表示します。

次の間のスロットを表示

現在のマネージャ内に表示するスロットの範囲を指定します。範囲を定義するには、許可されるスロット値の最小値と最大値を入力します。

ブランク メディアの表示

ライブラリ内の空のメディアを表示します。

任意のメディア プールのみを表示

特定のメディア プール内のテープを表示します。ワイルドカード(「*」や「?」)をメディア プールで使用できます。

シリアル番号に一致するテープの表示

特定のシリアル番号に一致するテープを表示します。ワイルドカード(「*」や「?」)をシリアル番号で使用できます。

重要: フィルタを適用すると一度に処理するデータの量を大幅に減らすことができるため、大規模なライブラリにのみフィルタを使用するようにしてください。

6. Arcserve Backup マネージャの環境設定の指定が終了したら、[適用]をクリックします。

   注: 変更を取り消すには、[キャンセル]をクリックします。

7. [環境設定]ダイアログ ボックスを閉じるには、[OK]をクリックします。

コード ページ

ここでは、Arcserve Backupで複 数 のコード ページがどのようにサポートされているかについて説 明します。

このセクションには、以 下 のトピックが含 まれます。

Arcserve Backup による複 数 のコード ページのサポートについて

バックアップ マネージャ ウィンド ウでのコード ページの指 定

リストア マネージャ ウィンド ウでのコード ページの指 定

Arcserve Backup による複数のコード ページのサポートについて

コード ページは、特定の言語に関連する文字のマップです。Arcserve Backup サーバが存在する環境に、異なる言語およびその文字セットが使用されているコンピュータがある場合、バックアップ マネージャやリストア マネージャは、情報を解釈したり判読可能なテキストでソース ツリーに表示したりできない場合があります。

このような場合は、ご使用の環境でサポートしているコード ページを指定できます。コード ページにより、Arcserve Backupは情報を解釈して、ユーザが認識可能な形式でテキストを表示することができます。

ノードまたはボリュームのレベルでコード ページを指定すると、Arcserve Backup ではコード ページの特性が、すべての子のボリュームやディレクトリなどに適用されます。コード ページは Arcserve Backup の機能には影響しませんが、Arcserve Backup で、一度に複数の言語のコード ページを提供することはできません。

バックアップ マネージャ ウィンドウでのコード ページの指定

ソース ディレクトリ ツリーに表示されるすべての項目のコード ページを変更することができます。

注： Windows インストール メディアをコンピュータに挿入してこのタスクを完了するように促すメッセージが表示されます。

バックアップ マネージャ ウィンドウでコード ページを指定する方法

1. Arcserve Backup プライマリ、スタンドアロン、またはメンバ サーバで、Windows の [コントロール パネル] を開きます。
2. [地域と言語のオプション] を開き、[詳細] タブを選択します。

   [コード ページの変換テーブル] フィールドで、Arcserve 環境で実行中のリモート システムとエージェント システムのノード、ディレクトリ、およびボリューム名の表示に必要な言語の隣のチェック ボックスをクリックします。
3. (オプション) [適用] をクリックしてすべての設定を現在のユーザ アカウントとデフォルトのユーザ プロファイルに適用します。
4. [適用] をクリックし、[OK] をクリックします。

   Windows によって [地域と言語のオプション] が適用されます。
5. マネージャ コンソールを開いてバックアップ マネージャを開きます。
6. [ソース] タブからコード ページを指定するノード、ボリューム、またはディレクトリを右クリックします。
7. [エンコード] 右クリック メニューから、必要なコード ページを選択します。

   Arcserve Backup新しいコード ページ設定がすぐに適用されます。

リストア マネージャ ウィンドウでのコード ページの指定

ソース ディレクトリツリーに表示されるすべての項目のコード ページを変更することができます。

注： Windows インストール メディアをコンピュータに挿入してこのタスクを完了するように促すメッセージが表示されます。

リストア マネージャ ウィンドウでコード ページを指定する方法

1. Arcserve Backup プライマリ、スタンドアロン、またはメンバ サーバで、Windows の [コントロール パネル] を開きます。
2. [地域と言語のオプション] を開き、[詳細] タブを選択します。

   [コード ページの変換テーブル] フィールドで、Arcserve 環境で実行中のリモート システムとエージェント システムのノード、ディレクトリ、およびボリューム名の表示に必要な言語の隣のチェック ボックスをクリックします。
3. (オプション) [適用] をクリックしてすべての設定を現在のユーザ アカウントとデフォルトのユーザ プロファイルに適用します。
4. [適用] をクリックし、[OK] をクリックします。

   Windows によって [地域と言語のオプション] が適用されます。
5. マネージャ コンソールを開いてリストア マネージャを開きます。
6. [ソース] タブからコード ページを指定するノード、ボリューム、またはディレクトリを右クリックします。

   [エンコード] 右クリック メニューから、必要なコード ページを選択します。

   Arcserve Backup新しいコード ページ設定がすぐに適用されます。

Arcserve Backup システム アカウント

Arcserve Backupシステム アカウントとは、ローカル サーバ上で各種ストレージに関する機能を実行するためにArcserve Backup によって使用されるアカウントです。ローカルのバックアップ ジョブやリストア ジョブでは、ジョブを実行するためのセキュリティとしてArcserve Backup システム アカウントが使用されます。

Arcserve Backup システム アカウントは、Arcserve Backup のインストール時に [システム アカウント] ダイアログ ボックスに入力され、オペレーティング システム レベルであらかじめ確立されている必要があります。このアカウントに特別な権限を与える必要はありません。これは Arcserve Backup によって自動的に行われます。

インストール時に [システム アカウント] ダイアログ ボックスに入力したアカウントは、Windows の管理者権限およびバックアップ オペレータ権限が自動的に追加されます。

Arcserve Backup による認証の管理方法

Arcserve Backup では、ストレージに関する各種機能を実行する場合に安全な接続を確立するために Windows およびサード パーティのセキュリティを使用します。たとえば、ジョブがリモート サーバをバックアップする場合、そのジョブに対して入力されたセキュリティは、リモート サーバにアクセスするための Windows セキュリティ基準を満たす必要があります。

ジョブを実行するセキュリティ コンテキストは、アクセスされているリソースによって異なります。ローカルのArcserve Backup サーバのバックアップ時と、ドメイン リソースのバックアップ時で、必要なセキュリティ情報が異なる場合があります。

Arcserve Backup は、Microsoft SQL、Oracle、Lotus Notes などのサード パーティのセキュリティとの情報のやり取りも行います。詳細については、Arcserve Backup インストール ディスクに含まれているさまざまなオプションおよびエージェント ガイドを参照するか、Arcserve サポート Web サイトからガイドをダウンロードできます。

ジョブ セキュリティのシステム アカウントの使用方法

通常は、Arcserve Backup のインストール時に、Arcserve Backup システム アカウントに以下の権限を与え、このアカウントをメイン バックアップ アカウントとして使用します。

- グループ権限：管理者、バックアップ オペレータ、ドメイン管理者
- 拡張権限：「オペレーティング システムの一部として機能」、「サービスとしてログオン」、および「ローカル ログオン」

ここで挙げたセキュリティ権限はあくまでも参考用です。すべてのシナリオに必ずしも適用することはできません。

重要：すべてのバックアップおよびリストア処理に対して、ジョブ セキュリティ用の Arcserve Backup システム アカウントを使用しないでください。ただし、Arcserve Backup システム アカウントにローカル管理者とバックアップ オペレータを上回る権限を付与して、この機能を有効にすることができます。

Arcserve Backup データベース保護ジョブの開始

システム上で実行されたジョブ、メディア、およびデバイスに関する情報は、Arcserve Backupデータベースにより管理されます。Arcserve Backup をインストールすると、［データベース保護ジョブ］のステータスはホールドのままになります。［データベース保護ジョブ］を使用して Arcserve Backup を保護するには、［データベース保護ジョブ］のステータスを［ホールド］から［レディ］に変更する必要があります。

Arcserve Backup データベース保護ジョブの開始方法

1. Arcserve Backup マネージャコンソールを開きます。
2. Arcserve Backup ホーム画面の［クイックスタート］メニューから［ジョブ ステータス］をクリックします。

   ［ジョブ ステータス マネージャ］ウィンドウが表示されます。
3. ［ジョブ キュー］タブを選択して、［データベース保護ジョブ］を探します。

   注： データベース保護ジョブが削除された場合、「Arcserve Backup データベース保護ジョブの再作成」の手順を使用してジョブを再作成できます。
4. ［データベース保護ジョブ］を右クリックし、ポップアップメニューから［レディ］を選択します。

   ［データベース保護ジョブ］のステータスを［ホールド］から［レディ］に変更します。データベースのフルバックアップは、指定された次の実行時間に実行されます。
5. (オプション) ［データベース保護ジョブ］を今すぐ開始するには、［データベース保護ジョブ］を右クリックしてポップアップメニューから［即実行］を選択します。

   データベース保護ジョブがすぐに開始されます。

   重要： データベース保護ジョブを開始すると、テープエンジンは検出された最初のグループの空のメディアに接続し、ASDBPROJOB という名前のメディアプールを割り当てます。テープエンジンが、5 分以内に最初のグループの空のメディアに接続できない場合、テープエンジンは、他のグループの空のメディアに接続を試みます。テープエンジンが、任意のグループの空のメディアに接続できない場合、ジョブは失敗します。

   注： デバイスの設定およびデータベース保護ジョブの変更の詳細については、「*管理者ガイド*」を参照してください。

Arcserve Backup SQL Server データベースの微調整

以下のセクションでは、SQL Server インストールを微調整してパフォーマンスを最適化する方法を説明します。

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

必要な SQL 接続の数を計算する方法

データベースの整合性チェック

リモート データベース設定での ODBC 通信の指定

必要な SQL 接続の数を計算する方法

実行するジョブごとに、2 つの SQL 接続が必要です。SQL Server に十分な接続数 (またはライセンス数) が設定されていることを確認します。デフォルトの SQL 接続を判断するには、SQL Arcserve マネージャから [サーバ]- [SQL Server] を選択します。 [環境設定] タブから参照すると、ユーザの接続を表示できます。これらの値を適切なユーザ設定に指定します。たとえば「レコードを更新できません」または「ログインできませんでした」などのエラー メッセージが表示された場合、接続数が不足している可能性があります。オープン オブジェクトを 2000 に増やす必要があります。

データベースの整合性チェック

データベースのサイズが大きく動作が遅い場合は、データベースの整合性チェックを実行することをお勧めします。この処理には時間を要しますが、SQL データベースが十分な機能を発揮しているかどうかを判定するために必要な作業です。詳細については、Microsoft SQL Serverのマニュアルを参照してください。

重要： ログサイズを定期的に確認するようにしてください。ログがいっぱいになっていると、データベースは動作しません。デフォルトで［チェックポイント時のログ切り捨て］が設定されていても、大量のレコードを保存する場合は、ログファイルのサイズをデータベースサイズの 50% に増やす必要があります。

リモート データベース設定での ODBC 通信の指定

別の Arcserve Backup サーバが Microsoft SQL をデータベースとして使用している場合は、そのリモート マシンにローカル データベースをリダイレクトできます。Arcserve Backup では、ODBC を使用して Microsoft SQL Server に接続できます。サーバに SQL がインストールされており、Arcserve Backup SQL データベースが正しくセットアップされている場合、そのサーバに ODBC データ ソースをリダイレクトできます。この場合、ローカル サーバのユーザがリモート サーバで認証を受けている必要があります。

リモート データベース設定で ODBC 通信を指定する方法

1. Windows の [コントロール パネル] を開き、[管理ツール] - [データ ソース(ODBC)] - [システム DSN] の順に選択します。
2. 以下のラベルのシステム データ ソースを追加します。

   名前: ASNT
   サーバ: MachineName\InstanceName

3. 画面の指示に従ってテストし、環境設定を完了します。

デバイス ウィザードを使用したデバイスの設定

デバイス ウィザードは [ウィザード]メニューから起動できます。デバイス ウィザードを使用すると、マシンに接続されているすべてのデバイスを確認できます。

デバイス ウィザードを使用してデバイスを設定する方法

1. ホーム画面にあるナビゲーション バーの [管理]メニューから、 [デバイス ウィザード]をクリックします。

   [デバイス ウィザードへようこそ]画面が表示されます。

2. [次へ]をクリックします。

   [ログイン]ダイアログ ボックスが表示されます。

3. デバイスが接続されているサーバ名を入力または選択し、ユーザ名とパスワードを入力して [次へ]ボタンをクリックします。
4. 使用するデバイスを選択します。 [デバイス/メディア情報]をクリックし、デバイスの詳細情報を表示します。
5. [OK]をクリックして [次へ]をクリックします。
6. デバイスの操作を選択し、 [次へ]ボタンをクリックします。

   例： フォーマットを選択します。

7. Arcserve Backupでフォーマットしようとしているメディアの新しいメディア名と有効期限を入力し、 [次へ]ボタンをクリックします。
8. スケジュール画面が表示されます。この画面で、デバイスコマンドを今すぐ実行するか、または日時を設定して後で実行するかを選択できます。ジョブを今すぐ実行する場合は [即実行]を選択し、 [次へ]ボタンをクリックします。

   ジョブをスケジュールして後で実行する場合は、 [スケジュール]オプションを選択し、ジョブを実行する日時を入力します。

9. [完了]ボタンをクリックしてジョブを実行します。
10. 操作を続行するかどうかを確認するメッセージが表示されます。 [OK]ボタンをクリックするとデバイスの操作が開始され、そのステータスが表示されます。
11. Arcserve Backupでデバイスの操作が完了すると、終了を通知するメッセージが表示されます。続けて別のデバイスを操作する場合は [次へ]ボタンをクリックし、デバイス ウィザードを閉じる場合は [終了]をクリックします。

Enterprise Module コンポーネントの設定

Enterprise Option 環境設定はウィザード形式のアプリケーションで、Arcserve Backup Enterprise Module に関連付けられたデバイスおよびアプリケーションの設定を可能にします。Enterprise Option 環境設定を使用して、Arcserve Backup Image Option を設定できます。

セットアップを実行中に [インストール サマリ] ダイアログ ボックスで [次へ] をクリックすると、[Enterprise Module 環境設定] が開きます。

セットアップが完了した後に [Enterprise Module 環境設定] を実行する、または Arcserve Backup をインストールした後に Enterprise Module コンポーネントの追加や修正を行うには、以下の手順を使用します。

Enterprise Module コンポーネントを設定する方法

1. Windows の [スタート] メニューから、[プログラム(または [すべてのプログラム])]- [Arcserve]- [Arcserve Backup]- [Enterprise Module 環境設定] の順に選択します。

   [Enterprise Module 環境設定] が開きます。

2. 設定する Enterprise Module コンポーネントをクリックします。
3. 続くダイアログ ボックスのプロンプトに従い、必要な情報をすべて提供します。

Global Dashboard の環境設定

Global Dashboard が正常に機能するには、環境設定処理をセントラルサイトおよび関連付けられている各ブランチサイトで実行して、ブランチサイトとセントラルサイト間で必要な Dashboard 関連データの通信および同期を有効にする必要があります。サーバの環境設定は、インストールの直後に実行することも、都合の良いときにサーバ環境設定ウィザードから手動で起動することもできます。

重要：環境設定の処理中、Arcserve Backup データベースエンジンは数分間シャットダウンします。Arcserve Backup ジョブがスケジュールされておらず、ほかと競合しない都合の良い時間に環境設定を計画してください。

Global Dashboard 環境設定プロセスを開始する場合、環境設定したいプライマリサーバの種類を最初に選択する必要があります。この選択を実行するときには、以下のことに注意してください。

- Arcserve Backup 環境内でセントラルプライマリサーバとして設定できるプライマリサーバは 1 台のみで、ブランチプライマリサーバは 1 台のセントラルプライマリサーバに対してのみレポートが可能です。セントラルプライマリサーバを選択する際に考慮すべき主な点は、データベースの種類とサイズです。選択したセントラルプライマリサーバが Microsoft SQL Server 2008/2008 R2/2012/2014/2016/2017 であり、登録済みのすべてのブランチプライマリサーバから受信した Dashboard データを保存できることを確認します。
- Arcserve Backup 環境内にあるプライマリサーバ(またはスタンドアロンサーバ) は、どれでもブランチプライマリサーバとして設定できます。ドメインメンバサーバはブランチプライマリサーバとして設定できません。
- 関連付けるすべてのブランチプライマリサーバをセントラルプライマリサーバに登録し、同期を有効にする必要があります。
- Global Dashboard には、セントラルプライマリサーバ、ブランチプライマリサーバ、および Global Dashboard コンソールの 3 つの役割があります。
  - Global Dashboard コンソールの役割には、環境設定が不要です。プライマリサーバのインストール中に Global Dashboard オプションを選択すると、Global Dashboard コンソールの機能が自動的に追加されます。
  - Global Dashboard コンソールの役割が設定されたプライマリサーバでも、セントラルプライマリサーバまたはブランチプライマリサーバとして設定できます。
  - プライマリサーバをセントラルプライマリサーバまたはブランチプライマリサーバとして設定した場合は、役割の変更はできません。

- 3 つの役割の関係は以下のとおりです。
  - ブランチ プライマリ サーバは、Global Dashboard コンソールの機能を有しています。
  - セントラル プライマリ サーバは、ブランチ プライマリ サーバ(ローカル ブランチあり) および Global Dashboard コンソールの両方の機能を有しています。

- Arcserve Backup のインストールの最後に、Global Dashboard 環境設定ユーティリティが起動します。このユーティリティを使用して、サーバをセントラル プライマリ サーバまたはブランチ プライマリ サーバとして設定できます。Global Dashboard コンソールの機能のみを使用する、または、後ほどセントラル プライマリ サーバまたはブランチ プライマリ サーバとして設定する場合は、 現在のプライマリ サーバ環境設定を維持する]オプションを選択します。

セントラル サイトの環境設定

セントラル サイトの環境設定中に指定したパラメータを登録済みの各ブランチ サイトにも使用して、セントラル サイトとの Dashboard 関連データの同期を有効にする必要があります。

注： セントラル プライマリ サーバのローカル Arcserve Backup データベースは、標準のブランチ サイトと同様に扱われます。ただし、このデータベースの環境設定はセントラル プライマリ サーバのセットアップ中に完了するため、手動で行う必要はありません。

セントラル サイトの環境設定を行う方法

1. [セントラル環境設定] ウィザードを起動し、[次へ] をクリックして、開始します。

   セントラル サイトのパスおよびポートの入力画面が表示されます。

2. セントラル サイトのデータベースのパスを指定します(このパスは、各ブランチ サイトからの Dashboard 関連データがアップロードされ、格納されるデータベースの場所です) 。

   注： リモート データベースをセントラル プライマリ サーバの ASDB として使用している場合、データベース パスはリモート マシンの既存のパスである必要があります。そうでない場合、環境設定は失敗する可能性があります。

3. 入力ポート番号を指定します。このポート番号は、各ブランチ プライマリ サーバがセントラル プライマリ サーバにアクセスするためのものです。デフォルトでは、ポート番号は 18001 ですが、この画面で変更できます。

4. [次へ] をクリックします。

   ユーザ認証情報の入力画面が表示されます。

5. AS_CDASH_USR ユーザ名に対するパスワードを指定し、パスワードの確認入力を行います。このアカウント名とパスワードが設定されたローカルの Windows ユーザがセントラル プライマリ サーバ上に作成されます。ブランチ サイトがセントラル サイトに接続する際、この認証情報を使用して、セントラル サイトへのアクセス許可を得ます。

   パスワードは、各ブランチ サイトをセントラル プライマリ サーバに登録する際に必要になります。必要に応じて、Windows ユーザ管理を使用してこのパスワードをリセットできます。ただし、パスワードを変更した場合は、このセントラル プライマリ サーバに登録されているすべてのブランチ サイトで、新しい情報に手動でリセットする必要があります。

   Windows ユーザ管理の [AS_CDASH_USR のパスワードの設定] ダイアログ ボックスには、セントラル プライマリ サーバの [スタート] メニューからアクセスできます([プログ

ラム]- [管理ツール]- [コンピュータの管理]- [ローカルユーザーとグループ]- [ユーザー]- [AS_CDASH_USR]- [パスワードの設定]) 。

注： あらかじめ割り当てられているユーザ「AS_CDASH_USR」は、認証のみを目的としたものです。このユーザ名には、ほかに Arcserve Backup 権限は割り当てられていません。

6. [次へ]をクリックします。

   セントラルサイトの [サマリ]画面が表示されます。

7. [サマリ]画面には、セントラル Arcserve Backup データベースおよびセントラルプライマリサーバの環境設定関連情報がすべて表示されます。表示されている情報がすべて正しいことを確認してから、続行してください。情報が正しければ、 [完了]をクリックします。

   環境設定処理中に Arcserve Backup データベースエンジンが数分間シャットダウンされることを知らせるアラートメッセージが表示されます。

8. Arcserve Backup ジョブがスケジュールされておらず、ほかと競合しない都合の良い時間であれば、 [OK]をクリックして、続行します。

   ステータスを示す [環境設定の進捗状況]画面が表示されます。

9. 環境設定処理が完了すると、確認画面が表示されます。 [OK]をクリックします。

   セントラルサイトの環境設定処理が完了します。

ブランチ サイトの環境設定

ブランチ サイトをセントラル サイトに登録して、そのセントラル サイトへの Dashboard 関連データの同期を有効にする必要があります。ブランチ サイトがレポートを送信できるのは、1 台のセントラル プライマリ サーバに対してのみです。ブランチ サイトを登録するには、まず、セントラル サイトと通信するよう環境設定する必要があります。

ブランチ サイトの環境設定を行う方法

1. [ブランチ環境設定] ウィザードを起動し、[次へ] をクリックして、開始します。

   [セントラル サイト情報の入力] 画面が表示されます。

   重要: ブランチ サイトがセントラル サイトと通信を行うには、アクセスと場所に関するパラメータを 3 つ入力する必要があります。セントラル プライマリ サーバの名前 (または IP アドレス)、セントラル プライマリ サーバにアクセスするためのポート番号、および AS_CDASH_USR ユーザの認証パスワードです。ブランチ サイトの登録を実行する前に、これらの情報を取得しておく必要があります。

2. セントラル プライマリ サーバの名前、セントラル プライマリ サーバのポート番号、および認証パスワードを入力します。

   ブランチ サイトがセントラル サイトに接続する際、これらの情報を使用して、セントラル サイトにアクセスします。

   デフォルトでは、ポート番号は 18001 ですが、セントラル サイトから変更できます。セントラル サイトからポート番号を変更する詳細については、「セントラル サイトの環境設定」を参照してください。

3. [テスト] をクリックして、セントラル サイトに正しく接続されるかどうかを確認します。

   テスト接続ステータスを示すメッセージが表示されます。

4. テスト接続ステータスが成功であれば、[OK] をクリックして、続行します。テスト接続ステータスが成功でない場合は、正しいセントラル サイト情報が入力されていることを確認してから、続行します。

   [ブランチ サイト情報の入力] 画面が表示されます。

5. ブランチ プライマリ サーバの名前、場所、およびブランチの連絡先の名前を入力する必要があります。また、ブランチ関連の追加情報を入力して、セントラル サイトの管理者がブランチ サイトを識別しやすくすることもできます。ブランチの連絡先電子メール アドレスなどの情報や、セントラル サイトの管理者に伝達したい有用なコメントを入力しておけば、Global Dashboard 環境の効率的な管理に役立ちます。

   入力されたブランチ サイト ユーザの情報は、セントラル プライマリ サーバに送信され、セントラル プライマリ サーバのデータベースに格納されます。

6. [次へ]をクリックして続行します。

   a. 同一のブランチプライマリサーバ名がすでに存在する場合は、この状況を知らせるメッセージアラートが表示され、別のブランチ名を指定するか、Arcserve Backup Global Dashboard により自動で新しい名前を割り当てる(既存のブランチ名の末尾に番号を追加する)かを求められます。

      [はい]をクリックすると、自動的に番号付きブランチ名が作成され、[いいえ]をクリックすると、[ブランチサイト情報の入力]画面に戻り、別のブランチ名を指定できます。

   b. ブランチプライマリサーバ名がまだ存在していないものであれば、ブランチ環境設定の[サマリ]画面が表示されます。

      [サマリ]画面には、セントラル Arcserve Backup データベース、ブランチサイト、およびセントラルプライマリサーバの環境設定関連情報がすべて表示されます。

7. ブランチ環境設定の[サマリ]画面には、フルデータ同期をただちに実行するオプションも用意されています。

   重要: データ同期を実行すると、このブランチサイトの Arcserve Backup データベースエンジンとデータベースは、環境設定および登録処理が完了するまで一時的に中断され、シャットダウンされます。環境設定および登録処理が完了すると、すべての Arcserve Backup データベースエンジンおよびデータベース機能は通常どおり再開されます。

   この画面の表示時にフルデータ同期を実行しない場合は、環境設定処理の完了後に実行することができます。詳細については、「手動によるデータの同期」を参照してください。

   注: 最初のデータ同期は常にフルデータ同期として実行されます。その後のデータ同期は、すべて増分データ同期となります。

8. ブランチ環境設定の[サマリ]画面で、表示されている情報がすべて正しいことを確認してから、続行します。情報が正しければ、[完了]をクリックします。

   ステータスを示す[環境設定の進捗状況]画面が表示されます。

9. 環境設定および登録処理が完了すると、確認画面が表示されます。[OK]をクリックします。

   ブランチ環境設定処理が完了し、ブランチサイトがセントラルサイトに登録されます。

ファイル システム デバイスの作成

ローカル マシンまたはネットワーク上のリモート マシンのファイルをバックアップする場合は、デバイス環境設定を使用して、大容量ディスクまたはディスク アレイをバックアップのリソースとして活用できます。

ファイル システム デバイスを作成する方法

1. マネージャ コンソールを開きます。
2. ホーム画面にあるナビゲーション バーの [管理] メニューから、[デバイス環境設定] をクリックします。

   [デバイス環境設定] が開きます。
3. [ファイル システム デバイス] オプションを選択して、[次へ] をクリックします。

   [ログオン サーバ] ダイアログ ボックスが表示されます。
4. [ユーザ名] および [パスワード] フィールドに入力し、[次へ] をクリックします。
5. 次の [ログオン サーバ] ダイアログ ボックスから、管理するサーバを選択し、[次へ] をクリックします。

   [ファイル システム デバイス環境設定] ダイアログ ボックスが開きます。
6. [追加] ボタンをクリックして新しいファイル システム デバイスを作成します。

   [ファイル システム デバイス] フィールドに、新しいデバイスが表示されます。
7. [ファイル システム デバイス名] 列で選択されているファイル システム デバイスを選択し、デバイスの名前を指定します。[説明] の列に説明を入力し、[ロケーション] の列に固有のロケーション(C:\FSD1、C:\FSD2 など) を入力します。リモート ファイル システム デバイスの場合は、[セキュリティ] をクリックして、リモート コンピュータのユーザ名、ドメイン、およびパスワードを入力します。[OK] をクリックします。
8. デバイスを設定している間、[検証とステータス] 列にはステータスとして [保留] が表示されます。ステータスの横の [検証] ボタンをクリックして、入力した情報の正確性を確認します。情報が有効である場合、Arcserve Backup は指定されたドライブの [ボリューム サイズ] を表示し、ステータスとして [適格] を表示します。

   表示されたステータスが [失敗] である場合、以下の確認を行います。

   - [場所] に指定されているパスが各デバイスに固有のパスであることを確認します。
   - セキュリティ認証情報が正確であることを確認します。
   - ボリュームが共有されていることを確認します。

注： [デバイス環境設定]では、1 つ以上のデバイスを追加できます。 [次へ]をクリックすると、Arcserve Backup は、すべてのデバイスに指定された情報の有効性を確認し、検証に失敗したデバイスがあると警告が表示されます。 [検証とステータス]列の対応する [検証]ボタンをクリックするか、または設定時に各デバイスに対してこの操作を実行し、続行する前に検証を完了します。この列に表示される可能性がある結果は、以下の 3 つです。

- [保留]-- デバイスを設定している間に表示されます。
- [適格] - 指定した情報の検証が成功すると表示されます。
- [失敗] -- 指定した情報に問題があると Arcserve Backup が判断した場合に表示されます。検証に失敗したデバイスごとに失敗の原因を確認するには、 [検証とステータス]列の [失敗]をクリックします。

9. [終了]をクリックして [デバイス環境設定]を閉じます。
10. 確認メッセージが表示されたら [はい]をクリックします。

バックアップを行うときに、バックアップ メディアとして作成したファイル システム デバイスを選択できます。Arcserve Backup では、複数のファイル システム デバイスを作成し、追加のメディア デバイスとして取り扱うことができます。

[My First Backup]というチュートリアルで、ローカル ディスクをバックアップ デバイスとして設定する手順が説明されます。 [チュートリアル]は、Arcserve Backup を初めて起動したときに表示されます。また、メニュー バーの [ヘルプ]メニューからアクセスすることもできます。

Arcserve Backup データベース エージェント用スキップ パラメータとインクルード パラメータの定義方法

Arcserve Backup には、バックアップ ジョブ中にインクルードまたはスキップ可能なデータベース関連ファイル タイプを定義するレジストリ キーが格納されています。これらのキーの使用は、実行中のデータベース エージェントのタイプに応じて判断されます。個々のレジストリ キー、対象のデータベース エージェント、および対象ファイルのタイプの定義を示する以下の一覧を参照してください。

SkipDSAFiles

注：このキーは、以前のリリースの Arcserve Backup で使用されていたものです。

ローカル サーバのバックアップでキーの格納先となるレジストリは、次のとおりです。

HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\ComputerAssociates\CA ARCserve Backup\Base\Task\Backup

エージェントのバックアップでキーの格納先となるレジストリは、次のとおりです。

HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\ComputerAssociates\CA ARCserve Backup\ClientAgent\Parameters

値の名前：SkipDSAFiles

タイプ：DWORD

値：バックアップする場合は「0」、スキップする場合は「1」

- **Agent for Oracle**

  *.dbf
  コントロール*.*
  Red*.log
  Arc*.001

- **Agent for Lotus Domino**

  *.nsf
  *.ntf
  Mail.box

BackupDBFiles

ローカル サーバのバックアップでキーの格納先となるレジストリは、次のとおりです。

HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\ComputerAssociates\CA ARCserve Backup\Base\Task\Backup

エージェントのバックアップでキーの格納先となるレジストリは、次のとおりです。

HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\ComputerAssociates\CA ARCserveBackup\ClientAgent\Parameters

値の名前： BackupDBFiles

タイプ： DWORD

値： スキップする場合は「0」、バックアップする場合は「1」(デフォルトは 0)

- **Agent for Microsoft SQL Server**

  *.ldf
  *.mdf

  distmdl.ldf および distmdl.mdf はスキップ不能のため対象から除く

- **データベース レベルのバックアップおよびドキュメント レベルのバックアップに対応した Agent for Microsoft Exchange Server**

  *.chk
  *.ログ
  Res1.log
  Res2.log
  *.edb
  *.stm

  注： 今回のリリースの Arcserve Backup は、Microsoft Exchange Server データベース上でブリック レベルのバックアップをサポートしません。以前の Arcserve Backup リリースでは SkipDSAFiles レジストリキーを使用して、ブリック レベルのバックアップ用のインクルードおよびスキップ値を定義していました。

通信を最適化するためのファイアウォールの設定

複数のArcserve Backupサーバが、ファイアウォールをはさんで配置されている場合や、Storage Area Network(SAN) ファイバループ内にファイアウォールが設定されている場合は、固定ポートとインターフェースを使用できるようにサーバを設定する必要があります。Arcserve Backup サーバの設定は、Arcserve Backup サーバが他のサーバと通信できるように、ファイアウォールの設定と一致させる必要があります。

Arcserve Backup サーバと他の Arcserve Backup サーバとの通信には、一連のリモート プロシージャコール(RPC) サービスを使用します。各サービスは、インターフェース(IP アドレス) とポートで識別できます。Arcserve Backup サーバ間でデータとテープ ライブラリを共有する場合、RPC サービスは、RPC インフラストラクチャから取得するインターフェースとポートの情報によって互いに通信します。ただし、RPC インフラストラクチャでは、特定のポート割り当ては保証されません。したがって、ファイアウォールを正しく設定するには、RPC インフラストラクチャとポート番号割り当てを知る必要があります。静的バインドを行うには、追加設定が必要です。

以下のディレクトリにあるポート環境設定ファイル(PortsConfig.cfg) を変更して、環境のポート通信設定をカスタマイズできます。

CA\SharedComponents\ARCserve Backup

注： [ファイアウォール登録]画面で [Skip the Arcserve Services/Programs registration to Windows Firewall as Exceptions (Windows ファイアウォールへの Arcserve サービス/プログラムの例外登録をスキップ)]オプションを選択して、インストール プロセス中にファイアウォールの例外の追加をスキップするオプションがあります。後でファイアウォールの例外を実行するには、以下のコマンドを入力します。

- x64 の場合 - C:\Program Files (x86)\CA\SharedComponents\ARCserve Backup\Setup\r17\SetupFW.exe /INSTALL
- x86 の場合 - C:\Program Files\CA\SharedComponents\ARCserve Backup\Setup\r17\SetupFW.exe /INSTALL

ポート環境設定ファイルに関するガイドライン

ポート環境設定ファイルを変更する場合は、以下のガイドラインに従います。

- ポート番号の変更には、Arcserve Backup ServiceName(サービス名) が必要です。

  注： サービス名の詳細については、「追加リソース - ファイアウォールポートの仕様」を参照してください。

- Transmission Control Protocol(TCP) 、User Datagram Protocol(UDP) 、および Open Network Computing Remote Procedure Call(ONCRPC) サービスには、ポートが 1 つのみ必要です。これらのサービスにポート番号を指定しない場合、デフォルトのポートが使用されます。
- MSRPC (Microsoft Remote Procedure Call) サービスには、Arcserve Backup サービス名 (ServiceName) のみが必要です。Arcserve BackupのMSRPCベースのサービスでは、システムが割り当てるポート番号が使用されます。
- すべてのリモート プロシージャコール(RPC) サービスに、キー RPCServices を使用できます。このキーにより、Arcserve Backup のすべての RPC ベースのサービスに対し、システムが割り当てるポートを Arcserve Backup で使用できます。
- 1つのArcserve Backupサーバで、MSRPCベースのサービスに対してポート設定ファイルを変更しても、Arcserve Backupでこの変更がすべてのリモートの Arcserve Backupサーバに反映される訳ではありません。すべてのリモートの Arcserve Backupサーバで、ポート設定ファイルを変更する必要があります。
- TCP 通信ベースのサービスの場合、多くの IP アドレスを持つ各ホスト名に異なるポート範囲を指定できます。
- 1 台のマシンに複数のネットワーク インターフェース カード (NIC) があり、TCP 通信に特定の NIC を使用する場合のみ IP アドレスを指定する必要があります。

注： Microsoft Windows システムの特定のポート要件の詳細については、Microsoft のサポート Web サイトを参照してください。

ポート設定ファイルの変更

ここでは、環境内での通信に Arcserve Backup が使用するプロトコルおよびポートの設定方法を説明します。

ポート設定ファイルの変更方法

1. メモ帳などのテキスト エディタを使用して、PortsConfig.cfg を開きます。ファイルには、以下のディレクトリからアクセスできます。

   64 ビット プラットフォーム

   (インストールドライブ) : \Program Files (x86)\CA\SharedComponents\ARCserve Backup

   32 ビット プラットフォーム

   (インストールドライブ) : \Program Files\CA\SharedComponents\ARCserve Backup

2. ENABLE_CONFIGURABLE_PORTS の値を 0 から 1 に置き換えます。

3. 以下のフォーマットを使用して、1 行以上のコードを追加します。

   ServiceName(%s) PortRange_1;PortRange_2;...;PortRange_n [HostName(%s)] [IPAddress(%s)]

   - 1 つのポートまたはポートの範囲を指定するには、以下のフォーマットを使用します。

     SinglePort(number)

     PortBegin(number) - PortNumberEnd(number)

   - IP アドレスを指定するには、以下のフォーマットを使用します。

     %d.%d.%d.%d

   - ServiceName はスペースなしの文字列です。

   - HostName は、有効なコンピュータ名を表す文字列です。

4. PortsConfig.cfg を閉じて、変更を保存します。

5. Portsconfig.cfg ファイルの変更後、変更の影響を受けるすべてのサービスを再起動します。すべてのArcserve Backupサービスで、サービスの停止と開始にcstopとcstartを実行できます。

   後方互換性のサポートのため、Arcserve Backupデータベース エージェントに対応するキーが、PortsConfig.cfgファイルのコメント セクションに書き込まれています。影響を受けるデータベース エージェントは、テープ エンジン(tapeengine) 、ジョブ エンジン(jobengine) 、およびデータベース エンジン(databaseengine) です。これらの Arcserve Backupデータベース エージェントは、古いポートを使用してジョブを Arcserve Backupキューに送信します。ネットワークに古いポートを使用する古いエージェントがない場合、PortsConfig.cfg ファイルからこれらの行を削除してもかま

いません。ただし、システム ポートを使用する通信を有効にするには、それぞれの Arcserve Backupデータベース エージェントのサービスを再起動する必要があります。

注： Microsoft Windows システム サービス ポートの要件については、Microsoft のサポート サイトをご覧ください。

Arcserve Backup コンポーネントで使用するポート

以下のセクションでは、主に Windows の環境設定用に、Arcserve Backup コンポーネントによって使用されるポートについて説明します。

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

通信で使用される外部ポート

Arcserve Backup ベース製品によって使用されるポート

Arcserve Backup 共通コンポーネントによって使用されるポート

Arcserve Backup エージェントおよびオプションによって使用されるポート

ファイアウォールを通してエージェントとデータベース エージェントの通信を許可する方法

Arcserve Backup Dashboard for Windows ファイアウォール通信設定

追加リソース - ファイアウォール ポートの仕様

通信で使用される外部ポート

Arcserve Backupでは、通信に以下の外部ポートが使用されます。

ポート135

このポートはMicrosoftエンドポイント マッパ(ロケータ) サービスが所有し、設定を変えることはできません。すべての Arcserve Backup MSRPC サービスは、このサービスを使用して現在のポートを登録します。

すべての Arcserve Backup クライアント(たとえば、マネージャ) はこのサービスに通信し、Arcserve Backup サービスが使用する実際のポート番号を取得してから、サービスに直接通信します。

ポート139/445

このポートは Microsoft が所有しており、設定を変えることはできません。Arcserve Backup サービスでは、名前付きパイプ転送上の MSRPC が使用されます。Microsoftは、名前付きパイプ上でMSRPCを使用するすべての通信に対して、このポートを開くように要求します。以下の点に注意してください。

- ポート 139 は、Arcserve Backup サービスが Windows NT にインストールされているときのみ使用されます。
- ポート 445 は、Arcserve Backup サービスが Windows Server 2008 にインストールされているときのみ使用されます。

ポート53

このポートは、DNS (Domain Name Server) 通信を使用して、Windows コンピュータ間でやり取りするためのものです。Arcserve Backup では、名前の解決にポート 53 を使用します。これにより、プライマリ サーバ、スタンドアロン サーバ、メンバ サーバおよびエージェント サーバが互いに通信できるようになります。

Microsoft Windows システムのポート要件は、以下の URL で参照できます。

http://support.microsoft.com/kb/832017/ja-jp

Arcserve Backup ベース製品によって使用されるポート

Arcserve Backup ベース製品に関して、以下のポートを PortsConfig.cfg ファイル内に設定できます。

Arcserve リモート プロシージャ コール サービス

これは ONCRPC ポートマッパ サービスです。caserved、cadiscovd、caathd、lqserver、camediad、idbserver といったその他の ONCRPC サービスは、このサービスを登録に使用します。その他の ONCRPC サービスを使用して通信を行うクライアントは、最初に ONCRPC ポートマッパ サービスに接続してポートを登記した後、その他のONCRPCサービスに接続して通信を行います。

- デフォルトのポート：111
- プロトコル：TCP

ドメイン サービス(Cadiscovd.exe)

このサービスは、Arcserve Backup ドメインのために、ユーザ、パスワード、同等の権限、およびホストを格納したデータベースを維持管理します。このサービスは GUI 通信に必要となります。

- デフォルトのポート：動的ポート
- プロトコル：TCP

サービス コントローラ(Caserved.exe)

このサービスを使用すると、その他のサービスをリモート管理できます。このサービスは GUI 通信に必要となります。

- デフォルトのポート：動的ポート
- プロトコル：TCP

認証サービス(Caauthd.exe)

このサービスは、caroot ユーザのログインおよび同等の権限を検証します。GUI およびバックアップ サーバ通信に必要となります。

- デフォルトのポート：動的ポート
- プロトコル：TCP

LDBServer.exe

このサービスは、データベース通信に使用されます。設定は、コマンド ラインを使用してのみ行うことができます。このサービスは、GUI およびバックアップ サーバ通信には必要ありません。

- デフォルトのポート：動的ポート
- プロトコル：TCP

LQServer.exe

このサービスは、ジョブキュー通信に使用されます。設定は、コマンドラインを使用してのみ行うことができます。このサービスは、GUI およびバックアップサーバ通信には必要ありません。

- デフォルトのポート：動的ポート
- プロトコル：TCP

Mediasvr.exe

このサービスは、テープエンジン通信に使用されます。設定は、コマンドラインを使用してのみ行うことができます。このサービスは、GUI およびバックアップサーバ通信には必要ありません。

- デフォルトのポート：動的ポート
- プロトコル：TCP

Carunjob.exe

このサービスは、エージェントへの再接続ロジック(ネットワーク通信の障害時)にポート範囲を使用します。

- デフォルトのポート：動的ポート
- プロトコル：TCP

MS エンドポイント マッパ サービス

これは設定可能なポートではありません。

- デフォルトのポート：135
- プロトコル：TCP

Arcserve Management Service (casmgmtsvc.exe)

Arcserve Management Service は、Arcserve Backup コマンドラインユーティリティ(ca_backup や ca_restore など) が以下のシナリオで通信できるようにする設定可能なサービスです。

- リモートサービス通信

  注：リモートサービスを使用して通信するには、Arcserve Management Service ではコールバックサービスが必要となります。

- Arcserve サーバとクライアントサーバの通信

  注：Arcserve サーバとクライアントサーバと通信するには、Management Service ではコールバックサービスが必要です。Arcserve

環境設定ファイルの場所

- Arcserve Management の環境設定ファイル: Management Service で使用するポートを変更するには、次のディレクトリにある mgmt.properties という名前の環境設定ファイルを変更する必要があります。Arcserve

  <$ARCserve_Home>\MgmtSvc\conf\mgmt.properties

- コールバック サービスの環境設定ファイル: Arcserve Management Service では、clntportrange という名前のコールバック サービスが必要です。clntportrange は次のディレクトリにある mgmt.properties 環境設定ファイルに一覧されている値です。

  <ドライブ文字>\Program Files\CA\Shared Components\ARCserve Backup\jcli\conf\mgmt.properties

リモート サービス通信

デフォルト値は次のとおりです。

- プロトコル: SSL
- ポート (sslport) : 7099
- usessl: True

オプションの値は次のとおりです。

- プロトコル: NON SSL
- ポート (nonsslport) : 2099

コールバック サービスの値は次のとおりです。

- デフォルトのポート範囲: [20000-20100]
- オプションのポート範囲: [10000|19999] または [20000-20100|10000|19999]

Arcserve サーバとクライアント サーバの通信

デフォルト値は次のとおりです。

- プロトコル: SSL
- ポート (sslport) : 7099
- usessl: True

オプションの値は次のとおりです。

- プロトコル: NON SSL
- ポート (nonsslport) : 2099

コールバック サービスの値は次のとおりです。

- デフォルトのポート範囲(clntportrange)：7199
- オプションのポート範囲：［20000-20100|20000|19999］

ベース製品との GUI 通信

マネージャコンソールは、ベース製品のリモート サービスとコンタクトします。その場合、Arcserve Backup マネージャのコンソール マネージャ コンポーネントがインストールされているマシンで、PortsConfig.cfg ファイルにベース製品のポート番号を設定する必要があります。さらに、これらのサービスはマネージャ コンソール コンポーネントにもインストールされます。

CA Remote Procedure Call サービス

これは ONCRPC ポートマッパ サービスです。他の ONCRPC サービスでの登録用に使用されます。これらのサービスに対するすべてのクライアントは、まずこのサービスにコンタクトしてポートを利用し、そのサービスとコンタクトします。

- デフォルトのポート：111
- プロトコル：TCP

プライマリ サーバとメンバ サーバの通信ポート

このセクションでは、Arcserve Backup ドメインのプライマリ サーバとメンバ サーバの間の通信を可能にするために使用されるポートとプロトコルについて説明します。PortsConfig.cfgファイルでは、以下のポートを設定できます。

CA Remote Procedure Call サービス

これは ONCRPC ポートマッパ サービスです。caserved、cadiscovd、caathd、lqserver、camediad、idbserver といったその他の ONCRPC サービスは、このサービスを登録に使用します。その他の ONCRPC サービスを使用して通信を行うクライアントは、最初に ONCRPC ポートマッパ サービスに接続してポートを登記した後、その他のONCRPCサービスに接続して通信を行います。

- デフォルトのポート：111
- プロトコル：TCP
- PortsConfig.cfg での表示：catirpc

ドメイン サービス(Cadiscovd.exe)

このサービスは、Arcserve Backup ドメインのために、ユーザ、パスワード、同等の権限、およびホストを格納したデータベースを維持管理します。このサービスは GUI 通信に必要となります。

- デフォルトのポート：動的ポート
- プロトコル：TCP
- PortsConfig.cfg での表示：cadiscovd

サービス コントローラ(Caservd.exe)

このサービスを使用すると、その他のサービスをリモート管理できます。このサービスは GUI 通信に必要となります。

- デフォルトのポート：動的ポート
- プロトコル：TCP
- PortsConfig.cfg での表示：caservd

認証サービス(Caauthd.exe)

このサービスは、caroot ユーザのログインおよび同等の権限を検証します。GUI およびバックアップ サーバ通信に必要となります。

- デフォルトのポート：動的ポート
- プロトコル：TCP
- PortsConfig.cfg での表示：caauthd

LDBServer.exe

このサービスは、データベース通信のプロキシに使用されます。設定は、コマンド ラインを使用してのみ行うことができます。このサービスは、GUI およびバックアップ サーバ通信には必要ありません。

- デフォルトのポート：動的ポート
- プロトコル：TCP
- PortsConfig.cfg での表示：cadbd

LQServer.exe

ジョブ キュー通信のプロキシに使用されます。設定はコマンド ラインを使用してのみ行うことができます。このサービスは、GUI およびバックアップ サーバ通信には必要ありません。

- デフォルトのポート：動的ポート
- プロトコル：TCP
- PortsConfig.cfg での表示：caqd

Mediasvr.exe

テープ エンジン通信のプロキシに使用されます。設定はコマンド ラインを使用してのみ行うことができます。このサービスは、GUI およびバックアップ サーバ通信には必要ありません。

- デフォルトのポート：動的ポート
- プロトコル：TCP
- PortsConfig.cfg での表示：

Carunjob.exe

エージェントへの再接続ロジック(ネットワーク通信の障害時) にポート範囲を使用します。

- デフォルトのポート：動的ポート
- プロトコル：TCP
- PortsConfig.cfg での表示：reconnection

Arcserve Management Service (casmgmtsvc.exe)

Arcserve Management Service は、Arcserve Backup コマンド ライン ユーティリティ(ca_backup や ca_restore など) が以下のシナリオで通信できるようにする設定可能なサービスです。

- リモート サービス通信

  注：リモート サービスを使用して通信するには、Arcserve Management Service ではコールバック サービスが必要となります。

- Arcserve サーバとクライアント サーバの通信

  注：Arcserve サーバとクライアント サーバと通信するには、Management Service ではコールバック サービスが必要です。Arcserve

環境設定ファイルの場所

- CA Management の環境設定ファイル：Arcserve Management Service で使用するポートを変更するには、以下のディレクトリにある mgmt.properties という名前の環境設定ファイルを変更する必要があります。

  <$ARCserve_Home>\MgmtSvc\conf\mgmt.properties

- コールバック サービスの環境設定ファイル：Arcserve Management Service では、clntportrange という名前のコールバック サービスが必要です。clntportrange は次のディレクトリにある mgmt.properties 環境設定ファイルに一覧されている値です。

  64 ビット プラットフォーム

  <ドライブ文字>\Program Files (x86)\CA\Shared Components\ARCserve Backup\jcli\conf\mgmt.properties

  32 ビット プラットフォーム

  <ドライブ文字>\Program Files\CA\Shared Components\ARCserve Backup\jcli\conf\mgmt.properties

リモート サービス通信

デフォルト値は次のとおりです。

- プロトコル：SSL
- ポート（sslport）：7099
- usessl：True

オプションの値は次のとおりです。

- プロトコル：NON SSL
- ポート（nonsslport）：2099

コールバック サービスの値は次のとおりです。

- デフォルトのポート範囲：［20000-20100］
- オプションのポート範囲：［10000|1999］または［20000-20100|10000|19999］

Arcserve サーバとクライアント サーバの通信

デフォルト値は次のとおりです。

- プロトコル: SSL
- ポート(sslport): 7099
- usessl: True

オプションの値は次のとおりです。

- プロトコル: NON SSL
- ポート(nonsslport): 2099

コールバック サービスの値は次のとおりです。

- デフォルトのポート範囲(clntportrange): 7199
- オプションのポート範囲: [20000-20100|20000|19999]

Universal Agent サービス(univagent.exe)

Arcserve Backup Client Agent for Windows およびその他のバックアップ エージェントのセントラル サービスを提供します。

- デフォルトのポート: 6050
- プロトコル: TCP または UDP
- PortsConfig.cfg での表示: fsbackupservice(TCP) または fsbackupserviceudp (UDP)

ジョブ エンジン(jobeng.exe)

Arcserve Backup のジョブ キューからジョブを管理および実行します。

- デフォルトのポート: 6503
- プロトコル: TCP
- PortsConfig.cfg での表示: jobengine

DB エンジン(dbeng.exe)

Arcserve Backup 製品にデータベース サービスを提供します。

- デフォルトのポート: 6504
- プロトコル: TCP
- PortsConfig.cfg での表示: databaseengine

テープ エンジン(tapeeng.exe)

Arcserve Backup 製品のバックアップ デバイスの環境設定および操作を管理します。

- デフォルトのポート：6502
- プロトコル：TCP
- PortsConfig.cfg での表示：tapeengine

ディスカバリサービス(casdscsvc.exe)

ネットワーク上で TCP/IP、メールスロット、およびブロードキャストを使用してネットワーク上で実行されている Arcserve Backup 製品を Arcserve Backup サーバが検出できるようにします。

- デフォルトのポート：41523(TCP) または 41524(UDP)
- プロトコル：TCP および UDP
- PortsConfig.cfg での表示：casdscsvctcp(TCP) または casdscsvcudp(UDP)

Global Dashboard サーバ通信

Global Dashboard 環境では、ブランチ プライマリ サーバと、指定されたセントラル プライマリ サーバとの間で、ダッシュボード関連情報が同期されます。データの送信は、常にブランチ プライマリ サーバから、関連付けられているセントラル プライマリ サーバへの一方向で行われ、セントラル プライマリ サーバでセントラル ASDB に保存されます。ブランチ プライマリ サーバが、セントラル プライマリ サーバと確実に通信できるようにするには、セントラル プライマリ サーバにアクセスするための適切なポート番号を指定する必要があります。

- セントラル プライマリ サーバのデフォルト ポート：18001
- プロトコル：TCP

Arcserve Backup エージェントおよびオプションとのベース製品通信

Arcserve Backup サーバは、エージェントのリモート サービスとコンタクトします。その場合、ベース製品がインストールされているマシンで、PortsConfig.cfg ファイルにエージェントのポート番号を設定する必要があります。

注： 詳細については、「Arcserve Backup エージェントとオプションで使用するポート」を参照してください。

Arcserve Backup 共通コンポーネントによって使用されるポート

以下のセクションでは、Arcserve Backup 共通コンポーネントで使用するポート関係の情報について説明します。

- ディスカバリサービス通信ポート
- UNIXとLinux通信ポート用の共通エージェント

ディスカバリ サービス通信ポート

ディスカバリ サービスでは、Windows プラットフォーム上にある Arcserve Backup 製品、エージェント、およびオプションが検出できます。PortsConfig.cfgファイルでは、以下のポートを設定できます。

ディスカバリ ブロードキャストと応答パケット

Arcserve Backup が、環境内で実行されている Arcserve Backup に関するデータを受信し、レスポンスを送信できるようにします。

- デフォルトのポート：41524
- プロトコル：UDP

ディスカバリ応答

Arcserve Backup が、環境内で実行されている Arcserve Backup 製品に関するデータを受信できるようにします。

- デフォルトのポート：41523
- プロトコル：TCP

ディスカバリ ブロードキャスト

Arcserve Backup が、Arcserve Backup 製品情報をネットワークにブロードキャストできるようにします。

- デフォルトのポート：動的
- プロトコル：UDP

UNIXとLinux通信ポート用の共通エージェント

この情報は、クライアント エージェント、データベース エージェント、およびアプリケーション エージェントなど、すべてのUNIXおよびLinuxベースのエージェントに提供されます。agent.cfgファイルで以下のポートを設定できます。

ディスカバリブロードキャスト パケットへの受信と応答

- デフォルトのポート：41524
- プロトコル：UDP

ブラウズ、バックアップ処理、およびリストア処理

- デフォルトのポート：6051
- プロトコル：TCP

Arcserve Backup エージェントとオプションが使用するポート

以下のセクションでは、Arcserve Backup エージェントおよびオプションで使用するポート関係の情報について説明します。

- Agent for Microsoft SharePoint Server の通信ポート
- Client Agent for Windows 通信ポート
- Agent for Microsoft Exchange Server の通信ポート
- Agent for Microsoft SQL Server の通信ポート
- Agent for Microsoft SharePoint Server データベースの通信ポート
- NDMP NAS Option 通信ポート
- Arcserve Backup データベース エージェントの通信ポート
- Arcserve Backup エージェントへの GUI 通信

Agent for Microsoft SharePoint Server の通信ポート

SharePoint Database Router AgentおよびSharePoint External Data Agentの場合、PortsConfig.cfgファイルで以下のポートを設定できます。

Universal Agent サービス

このサービスは、参照処理で使用されます。

- デフォルトのポート：6050
- プロトコル：UDP

Universal Agent サービス

このサービスは、ブラウズ/バックアップ/リストア処理で使用されます。

- デフォルトのポート：6050
- プロトコル：TCP

注： SharePoint Database Agent によって使用される通信ポートの詳細については、この章の Agent for Microsoft SQL Server および Agent for Microsoft SharePoint Server データベースの通信ポートを参照してください。

Client Agent for Windows 通信ポート

Client Agent for Windows の場合、PortsConfig.cfg ファイルで以下のポートが設定されます。

Universal Agent サービス

このサービスは、参照処理で使用されます。

- デフォルトのポート：6050
- プロトコル：UDP

Universal Agent サービス

このサービスは、参照/バックアップ/リストア処理で使用されます。

- デフォルトのポート：6050
- プロトコル：TCP

Agent for Microsoft Exchange Server の通信ポート

Agent for Microsoft Exchange Server を使用したバックアップでは、PortsConfig.cfg ファイルで以下の通信ポートを設定することができます。

Universal Agent サービス

このサービスは、参照処理で使用されます。

- デフォルトのポート：6050
- プロトコル：UDP

Universal Agent サービス

このサービスは、参照/バックアップ/リストア処理で使用されます。

- デフォルトのポート：6050
- プロトコル：TCP

Agent for Microsoft Exchange Server の旧バージョンからブリックレベルバックアップをリストアするには、以下のポートが使用されます。

Backup Agent RPC サービス

このサービスは、Arcserve Backup マネージャの参照、および、すべてのブリックレベルのバックアップおよびリストア処理に必要です。

- デフォルトのポート：6071
- プロトコル：TCP

MS エンドポイント マッパ サービス

これは設定可能なポートではありません。

- デフォルトのポート：135
- プロトコル：TCP

MSポート(Windows NTのみ)

このサービスは、名前付きパイプを使用する MSRPC 通信でのみ使用されます。このポートを設定することはできません。

- デフォルトのポート：139
- プロトコル：TCP

Agent for Microsoft SQL Server の通信ポート

Agent for Microsoft SQL Server の場合、PortsConfig.cfg ファイルで以下の通信ポートが設定されます。

Universal Agent サービス

このサービスは、参照処理で使用されます。

- デフォルトのポート：6050
- プロトコル：UDP

このサービスは、参照/バックアップ/リストア処理で使用されます。

- デフォルトのポート：6050
- プロトコル：TCP

Agent for Microsoft SharePoint Server データベースの通信ポート

Agent for Microsoft SharePoint Server の場合、PortsConfig.cfg ファイルのデータベース通信用に以下のポートが設定されます。

Backup Agent リモート サービス

このサービスは、TCP/IP バックアップ/リストアでのみ使用されます。

- デフォルトのポート：6070
- プロトコル：TCP

Backup Agent RPC Server

このサービスは、GUI 参照および名前付けパイプ バックアップとリストア処理で必要となります。

- デフォルトのポート：6071
- プロトコル：TCP

MS エンドポイント マッパ サービス

これは設定可能なポートではありません。

- デフォルトのポート：135
- プロトコル：TCP

MSポート(Windows NTのみ)

このサービスは、名前付きパイプを使用する MSRPC で使用されます。これは設定可能なポートではありません。

- デフォルトのポート：139
- プロトコル：TCP

NDMP NAS Option 通信ポート

NDMP NAS Option の場合、PortsConfig.cfg ファイルで以下の通信ポートが設定されます。

NAS ファイラ サービス

このサービスは、NAS ファイラ サービスで通信するために使用されます。GUI、バックアップ、および通信のリストアでは必要ありません。

- デフォルトのポート：10000
- プロトコル：TCP

Arcserve Backup Database Agent通信ポート

Arcserve Backup データベース エージェントでは、PortsConfig.cfg ファイルで以下のポートを指定します。

注： 以下に挙げられている設定は、Agent for Informix、Agent for SAP R/3、Agent for Oracle、Agent for Lotus Notes、および Agent for Sybase に適用されます。

Backup Agent RPC Server

このサービスは、GUI 参照とバックアップおよびリストア処理で必要となります。このポートを設定することはできません。

注： 以下の値は、Agent for Oracle には適用されません。

- デフォルトのポート：6071
- プロトコル：TCP

Backup Agent RPC Server - Agent for Oracle

このサービスは、GUI 参照、および Agent for Oracle を使用するバックアップおよびリストア処理で必要となります。このポートを設定することはできません。

- デフォルト ポート(Windows プラットフォーム上の Agent for Oracle)：6050
- デフォルト ポート(Linux および UNIX プラットフォーム上の Agent for Oracle)：6050
- プロトコル(Oracle プラットフォーム用のすべての Agent)：TCP

MS エンドポイント マッパ サービス

注： このポートを設定することはできません。

- デフォルトのポート：135
- プロトコル：TCP

MSポート(Windows NTのみ)

このサービスは、名前付きパイプを使用するMSRPCで使用されます。このポートを設定することはできません。

- デフォルトのポート：139
- プロトコル：TCP

Arcserve Backup Agent との GUI 通信

Arcserve Backup マネージャはエージェントのリモート サービスとコンタクトします。その場合、マネージャコンポーネントがインストールされているマシンで、PortsConfig.cfg ファイルにエージェントのポート番号を設定する必要があります。

注： 詳細については、「Arcserve Backup エージェントとオプションで使用するポート」を参照してください。

ファイアウォールを通してエージェントとデータベースエージェントの通信を許可する方法

以下の設定では、Arcserve Backup エージェントとデータベース エージェントがファイアウォールを通して通信する方法の例を提供します。

ベース製品を管理する GUI

ベース製品を管理する GUI

以下のシナリオでは、ファイアウォールが、GUI とベース製品が実行しているマシンを分断しています。

ベース製品が実行しているマシンでは、以下のエントリを含めるように Portsconfig.cfg ファイルを変更します。

ENABLE_CONFIGURABLE_PORTS=1
CASportmap 111
jobengine 6503
databaseengine 6504
tapeengine 6502
rtcports 6505
cadiscovd 9000
caservd 9001
caauthd 9003
caqd 9004
camediad 9005
cadbd 9006
reconnection 9010-9050
casdscsvctcp 41523
casdscsvcudp 41524

ファイアウォールでは、上のポートが開かれます。これらのポートは、ベース製品が実行されているマシンへの受信接続を許可します。

GUIマシンでは、以下のエントリを含めるようにPortsconfig.cfgファイルを変更します。

ENABLE_CONFIGURABLE_PORTS=1
CASportmap 111 BaseproductMachinename
jobengine 6503 BaseproductMachinename
databaseengine 6504 BaseproductMachinename
tapeengine 6502 BaseproductMachinename
rtcports 6505 BaseproductMachinename
cadiscovd 9000 BaseproductMachinename
caservd 9001 BaseproductMachinename
caauthd 9003 BaseproductMachinename
casdscsvctcp 41523
casdscsvcudp 41524

Arcserve Backup Dashboard for Windows ファイアウォール通信設定

インストール ウィザードでは、Arcserve Backup および Arcserve Backup Dashboard for Windows をインストールすると、Arcserve Backup サーバとクライアント システムとの間にファイアウォール通信ポートを設定します。

以下のセクションでは、環境設定ファイルのファイル名、場所、および必要な構文、ならびにクライアント システムおよび Arcserve Backup サーバ システムで使用される通信ポートについて説明します。

クライアント システム

ClientConfig.xml のラベルが付いたクライアント システム環境設定ファイルは、クライアント システムの以下のディレクトリにインストールされます。

[ARCSERVE_HOME]/ClientConfig.xml

構文

クライアント システムの環境設定ファイルには以下の構文が必要です。

```
<?xml version="1.0" encoding="utf-8" ?>
<service>
<primaryserver>LocalHost</primaryserver>
<username>caroot</username>
<port>6052</port>
</service>
```

Arcserve Backup サーバ システム

CA.ARCserve.CommunicationFoundation.WindowsService.exe.config のラベルが付いた Arcserve Backup サーバ環境設定ファイルは、以下のディレクトリにインストールされています。

C:\Program Files\CA\ARCserve Backup

構文

Arcserve Backup サーバ環境設定ファイルには以下の構文が必要です。

```
<services>
<service
name="CA.ARCserve.CommunicationFoundation.Impl.DBServicePInvokeImpl"
behaviorConfiguration="DBServiceBehavior">
<host>
<baseAddresses>
<add baseAddress="net.tcp://localhost:6052/DBService"/>
</baseAddresses>
```

```
</host>
<endpoint binding="netTcpBinding" bindingConfiguration="BindingConfiguration"
contract="CA.ARCserve.CommunicationFoundation.Contract.IDBService"
address=""></endpoint>
</service>
<service name ="CA.ARCserve.CommunicationFoundation.Impl.AuthServiceImpl"
behaviorConfiguration="AuthServiceBehavior">
<host>
<baseAddresses>
<add baseAddress="net.tcp://localhost:6052/AuthService"/>
</baseAddresses>
</host>
<endpoint address="" binding="netTcpBinding"
bindingConfiguration="BindingConfiguration"
contract="CA.ARCserve.CommunicationFoundation.Contract.IAuthService" />
</service>
</services>
```

追加リソース - ファイアウォール ポートの仕様

以下の表に、ポート設定ファイルを使用して設定できる Arcserve Backup サービスを示します。

Arcserve Backup MSRPCサービス

サービス表示名	プロセス名	キー	デフォルトのポート	サービスの種類
Agent RPC Server	dbasvr.exe	dbagentsrpcserver	システムポート	MSRPC
Tape Engine	tapeeng.exe	tapeengine	6502	MSRPC
Job Engine	jobeng.exe	jobengine	6503	MSRPC
Database Engine	dbeng.exe	databaseengine	6504	MSRPC
メッセージ エンジン	msgeng.exe	rtcports	システムポート	MSRPC

Arcserve Backup TCPサービス

サービス表示名	プロセス名	キー	デフォルトのポート	サービスの種類
Universal Agent	univagent.exe	fsbackupservice	6050	TCP
Discovery service	casdscsvc.exe	casdscsvctcp	41523	TCP
NDMP NAS Option Agent	tapeeng.exe、UnivAgent.exe	nastcpservice	10000	TCP
Reconnection	carunjob.exe	reconnection	ポートなし	TCP

Arcserve Backup ONCRPC サービス

サービス表示名	プロセス名	キー	デフォルトのポート	サービスの種類
Remote Procedure Call Server	Catirpc.exe	catirpc	111	ONCRPC
Service Controller	caserved.exe	caservd	システムポート	ONCRPC
ドメイン サーバ	cadiscovd.exe	cadiscovd	システムポート	ONCRPC
ドメイン サーバ	caauthd.exe	caauthd	システムポート	ONCRPC
caqd	lqserver.exe	caqd	システムポート	ONCRPC
cadbd	ldbserver.exe	cadbd	システムポー	ONCRPC

			ト	
camediad	mediasvr.exe	camediad	システム ポート	ONCRPC

Arcserve Backup UDPサービス

サービス表示名	プロセス名	キー	デフォルトのポート	サービスの種類
Universal Agent	univagent.exe	fsbackupservice	6050	UDP
Discovery service	casdscsvc.exe	casdscsvcudp	41524	UDP

ポート設定ファイルを変更する方法の例

ここでは、PortsConfig.cfg ファイルを変更する方法の例を示します。

- Transmission Control Protocol(TCP) 、User Datagram Protocol(UDP) 、および Open Network Computing Remote Procedure Call(ONCRPC) サービスには、ポートが 1 つのみ必要です。これらのサービスのポート番号を指定しない場合、デフォルトのハードコード化されたポートが使用されます。ポート範囲を指定する場合、範囲の最初に利用できるポートのみが使用されます。以下は、TCP サービスの変更例です。

  sqlagenttcpservice 8000 machine_name
  fsbackupservice 7000 machine_name

- マシン A と D は Arcserve Backup サーバです。マシン B と C は Client Agent マシンです。また、マシン A と B の間の通信ポートを 7000 に変更する必要があります。また、マシン A には、マシン D の Arcserve Backup サーバ用のクライアントエージェントがインストールされており、D から A への通信ポートを 8000 に変更するとします。

  マシン B(Client Agent) では、以下のエントリを含めるように PortsConfig.cfg ファイルを変更します。

  ENABLE_CONFIGURABLE_PORTS = 1
  fsbackupservice 7000 MachineB
  fsbackupserviceudp 7000 MachineB

  以下の点に注意してください。

  - この変更は、Backup Agent 管理にインストールされているネットワーク設定アプリケーションを使用して行うことができます。

    注： 詳細については、「Client Agent ユーザガイド」を参照してください。

  - Universal Agent サービスを再起動する必要があります。

  マシン A がマシン B 上のファイルをブラウズしてバックアップできるようにするには、マシン A 上の Portsconfig.cfg ファイルを変更して、以下のエントリを追加します。

  ENABLE_CONFIGURABLE_PORTS = 1
  fsbackupservice 7000 MachineB
  fsbackupserviceudp 7000 MachineB

  注： この設定を適用するには、cstop/cstart コマンドを使用してマシン A 上のサービスをすべて停止し、再起動する必要があります。

マシン A のクライアント エージェントが Arcserve Backup のマシン D と通信できるようにするには、マシン A およびマシン D 上の PortsConfig.cfg ファイルを変更して、以下のエントリを追加します。

ENABLE_CONFIGURABLE_PORTS = 1
fsbackupservice 8000 MachineA
fsbackupserviceudp 8000 MachineA

以下の点に注意してください。

- マシン A で Universal Agent を再起動する必要があります。
- cstop および cstart コマンドを使用してマシン D 上の Arcserve Backup サービスをすべて再起動する必要があります。

注： Arcserve Backup Agent for Microsoft SQL Server (sqlagenttcpservice) の TCP ベース サービス(fsbackupservice、sqlagenttcpservice) についてもこのロジックを適用できます。

- Arcserve Backup MSRPC サービスでは、以下のことが発生します。

  MSRPC は、「ncacn_ip_tcp」および「ncacn_np」プロトコルを介して受信します。「ncacn_ip_tcp」では、ハードコード化されたポートではなく、デフォルトでシステムによって割り当てられたポートを使用します。ホスト名と IP アドレスは RPC サービスには必要ありません。

  たとえば、以下は MSRPC サービスについて変更されることがあります。

  dbagentsrpcserver 9000

  この設定では、Arcserve Backup Agent RPC Server はポート 9000 を使用します。

  dbagentsrpcserver 9000;9001

  この設定では、Arcserve Backup Agent RPC Server はポート 9000 を使用して通信を試みます。それにも失敗すると、ポート 9001 の使用を試みます。それにも失敗すると、Arcserve Backup は Windows アプリケーション アクティビティ ログにメッセージを書き込みます。

  dbagentsrpcserver 9000-9500

  この設定では、Arcserve Backup Agent RPC Server はポート 9000 を使用して通信を試みます。この通信に失敗すると、Arcserve Backup はポート 9001 を使用して通信を試み、その後もポート 9500 まで使用して通信を試みます。

  範囲内のどのポートも使用できない場合、Windows アプリケーション アクティビティ ログにメッセージを書き込みます。

ポート環境設定ファイルの設定に関するガイドライン

PortsConfig.cfgファイルを変更する際は、以下の点を考慮してください。

- Arcserve Backup NDMP NAS Option のインストール後に、Arcserve Backup サーバで NAS (Network Attached Storage) ポートを変更する場合は、NAS ファイラでもポート割り当てを変更する必要があります。
- サーバのバックアップのため、NAS ファイラ用のカスタムポートまたはポートの範囲を指定する必要がある場合があります。たとえば、バックアップサーバと NAS ファイラの間にファイアウォールがあります。カスタムポートを指定するには、以下の手順に従います。

  1. バックアップサーバにログインし、以下のポート環境設定ファイルを開きます。

     Windows x64 オペレーティングシステム

     C:\Program Files (x86)\CA\SharedComponents\ARCserve Backup\PortsConfig.cfg

     から

     C:\Program Files\CA\SharedComponents\ARCserve Backup\PortsConfig.cfg

     Windows x86 オペレーティングシステム

     C:\Program Files\CA\SharedComponents\ARCserve Backup\PortsConfig.cfg

  2. ENABLE_CONFIGURABLE_PORTS=1 を設定します
  3. filertoserver 10000;10001-10005 を追加します
  4. ポート環境設定ファイルを保存して閉じます。
  5. cstop.bat および cstart.bat バッチファイルを使用して、バックアップサーバ上のすべての Arcserve Backup サービスを再起動します。
  6. すべてのプライマリサーバとメンバサーバ上で手順 1 ～ 5 を繰り返します。

- 既存のネットワークの問題を回避するため、再接続ロジックが実装されています。ネットワークの問題は、ネットワークを介してクライアントエージェントをバックアップする際に発生することがあります。バックアップ中、接続が失われたり、バックアップに失敗する可能性があります。このような問題が発生した場合、バックアップ中に使用する再接続キーとポート範囲を指定できます。この再接続キーは Arcserve Backup のサーバ側で使用します。

- リモート コンピュータを管理するには、Arcserve Backup RPC サービスは、「ncacn_ip_tcp」プロトコルと「ncacn_np」プロトコルを使用して受信待機します。「ncacn_ip_tcp」を使用する際には、TCP ポート(6502、6503、6504) 、およびシステム ポート 137～139 と 445 を開く必要があります。これらは、Windows オペレーティング システムにより、「ncacn_np」プロトコルの使用時に使われます。

  注： eTrust Firewall によって RPC 通信がブロックされた場合、Arcserve Backup の応答が遅くなったり、応答が完全に停止したりすることがあります。

- Universal Agent 用のポートを変更するには、同じマシンにインストールされ、このサービスを使用するすべてのエージェントとオプションの通信ポートを変更する必要があります(たとえば Arcserve Backup Client Agent、Arcserve Backup Agent for Microsoft Exchange Server、Arcserve Backup NDMP NAS Option など) 。

- Arcserve Backup Agent for Microsoft Exchange Server と Arcserve Backup Agent for Microsoft SQL Server 用のポートの変更は、これらのエージェントの TCP バックアップのために行います。RPC サーバでは、Arcserve Backup for Windows データベース エージェントをすべて参照することができます。

- 以前のバージョンのArcserve Backupからアップグレードしていて、現在のインストールでArcserve Backup Client Agentの設定にCAPortConfig.cfgという設定ファイルを使用している場合は、インストール プロセスでCAPortConfig.cfgの設定がPortsConfig.cfgファイルにマイグレートされます。

  以前の Arcserve Backup インストールでは、CAPortConfig.cfg ファイルの情報は以下の形式です。

  MachineName IPAddress tcpport udpport

  上記のCAPortConfig.cfg設定は、次の形式でPortsConfig.cfg にマイグレートされます。

  fsbackupservice tcpport machinename IPAddress

  fsbackupserviceudp udpport machinename IPAddress

  fsbackupserviceunix tcpport machinename IPAddress

注： Microsoft Windows システム サービス ポートの要件については、Microsoft のサポート サイトをご覧ください。

ファイアウォールを通じたテスト通信

Windows プラットフォームでは、コンピュータ間の通信をテストするための「ping.exe」と呼ばれるコマンド ライン ユーティリティを利用できます。

ファイアウォールを通じてシステムが通信できることを確認するには、ping.exe を使い、ファイアウォールを通って、コンピュータ名で両方向に通信が行えなければなりません。

ファイアウォールを通じた通信をテストする方法

1. Windows のコマンド ラインを開きます。
2. プロンプトから、以下の構文で、MACHINE を実際のマシン名に置き換えて指定します。

   ping.exe MACHINE

第9章: Arcserve Backup のアンインストール

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

Arcserve Backup のアンインストール 332

コマンド ラインを使用した Arcserve Backup コンポーネントのアンインストール 335

Agent Deployment セットアップ ファイルのアンインストール 338

Arcserve Backup のアンインストール

Windows コントロール パネルで [プログラムの追加と削除] アプリケーションを使用して、Arcserve Backup をアンインストールできます。

Arcserve Backup をシステムから完全にアンインストールするには、[プログラムの追加と削除] ダイアログ ボックスに表示されるすべての Arcserve Backup コンポーネントを削除してください。たとえば、Arcserve Backup Client Agent for Windows、Arcserve Backup Agent for Microsoft SQL Server、Arcserve Backup Diagnostic Utility などをアンインストールする必要があります。

Windows の [プログラムの追加と削除] からは、以下の Arcserve Backup コンポーネントをアンインストールできます。

- Arcserve Backup (ベース製品)
- Arcserve Backup Agent for Informix
- Arcserve Backup Agent for Lotus Domino
- Arcserve Backup Agent for Microsoft Exchange Server
- Arcserve Backup Agent for Microsoft SharePoint Server
- Arcserve Backup Agent for Microsoft SQL Server
- Arcserve Backup Agent for Open Files for Windows
- Arcserve Backup Agent for Oracle
- Arcserve Backup Agent for Sybase
- Arcserve Backup Agent for Virtual Machines
- Arcserve Backup Client Agent for Windows
- Arcserve Backup 診断ユーティリティ
- Arcserve Backup Disaster Recovery Option
- Arcserve Backup Enterprise Module
- Arcserve Backup Enterprise Option for SAP R/3 for Oracle
- Arcserve Backup Global Dashboard
- Arcserve Backup Image Option
- Arcserve Backup NDMP NAS Option

以下の Arcserve Backup コンポーネントをアンインストールするには、サーバ管理マネージャを使用します。

- Arcserve Backup Central Management Option
- Arcserve Backup Tape Library Option
- Arcserve Backup Storage Area Network (SAN) Option

アンインストール操作を行うと、以下のディレクトリとディレクトリ内のファイルを除く、すべての Arcserve Backup コンポーネント、ディレクトリ、ファイルなどがシステムから削除されます。

- CA ライセンス:
  - (x86 システム) C:\Program Files\Arcserve\SharedComponents\CA_LIC
  - (x64 システム) C:\Program Files(X86)\Arcserve\SharedComponents\CA_LIC

  注: これらのファイルを使用するアプリケーションが使用中のコンピュータ上にない場合は、これらを安全に削除できます。

- C:\Program Files\CA\SharedComponents\Jre\JRE-1.8.0

  以前の Arcserve Backup リリースからアップグレードし、そのリリースが JRE (Java Runtime Environment) の以前のバージョンを使用していた場合、アンインストールを実行しても、JRE 1.8.0 やそれ以前のバージョンに関連するディレクトリやファイルはシステムから削除されません。

  注: これらのファイルを使用するアプリケーションが使用中のコンピュータ上にない場合は、これらを安全に削除できます。

- C:\Program Files\CA\ARCserve Backup

  アンインストール操作では、クラスタのインストールの結果として修正または作成されたディレクトリのファイルは削除されません。

  注: 最後のクラスタノードから Arcserve Backup がインストールされた後で、このディレクトリを安全に削除できます。

- C:\Program Files\CA\ARCserve Backup\ASDBBackups.txt

  アンインストール操作では、クラスタのインストールで作成された Arcserve データベースログファイルは削除されません。Arcserve データベースログファイルには、ASDBBackups.txt と ASDBBackups.X.txt という名前が付けられます。

  注: Arcserve Backup をクラスタに再インストールしない場合は、最後のクラスタノードから Arcserve Backup をアンインストールした後で、このディレクトリを安全に削除できます。

Arcserve Backup をアンインストールする方法

1. [Arcserve Backup マネージャコンソール]を閉じます。
2. Windows の [コントロールパネル]を開きます。

3. [プログラムの追加と削除] をダブルクリックします。

   [プログラムの追加と削除] ダイアログ ボックスが開きます。

4. Arcserve Backup を参照して選択します。

5. [削除] ボタンをクリックします。

   [コンポーネント] ダイアログ ボックスが表示されます。

6. アンインストールする Arcserve Backup コンポーネントを選択し、 [削除] をクリックします。

   指定された Arcserve Backup コンポーネントがコンピュータからアンインストールされます。

   重要: アンインストール プログラムでは、コンピュータから Arcserve Backup データベース インスタンスがアンインストールされません。Arcserve Backup を再インストールする場合は、インストール ウィザードによって、使用中のシステムで Microsoft SQL Server または Microsoft SQL Server 2014 Express Edition のデータベース インスタンスがあることが検出されます。その結果、インストール ウィザードは、 [製品の選択] ダイアログ ボックスで自動的に Arcserve Backup Agent for Microsoft SQL Server コンポーネントを選択します。

コマンド ラインを使用した Arcserve Backup コンポーネントのアンインストール

Windows Server 2008 サーバコアは Windows Server 2008 を実行するサーバの最小限のインストールオプションです。Windows Server Core には、最小限のユーザインターフェース機能のみが含まれます。サーバコアと対話する主な方法は、コマンド ラインを使用することです。

ユーザ インターフェースの不足から、Windows コマンド ラインを使用して Arcserve Backup コンポーネント、エージェント、およびオプションをアンインストールしなければならない状況もあり得ます。たとえば、サーバコアを実行している Windows Server 2008 システムから Arcserve Backup Disaster Recovery Option をアンインストールする場合などです。

このリリースでは、サーバコアを実行している Windows Server 2008 システムに以下のコンポーネントをインストールできます。

- Arcserve Backup メンバサーバおよびサポートされるオプション
- Arcserve Backup Agent for Open Files
- Arcserve Backup Agent for Virtual Machines
- Arcserve Backup Client Agent for Windows
- Arcserve Backup for Windows Disaster Recovery Option

重要：以下の手順では、コマンド ラインを使用して、すべての Windows オペレーティング システムからすべての Arcserve Backup コンポーネントをアンインストールする手順を説明します。

コマンド ラインを使用して Arcserve Backup コンポーネントをアンインストールする方法

1. Arcserve Backup コンポーネントをアンインストールするコンピュータにログインします。

   注：コンピュータには、管理アカウントを使用してログインする必要があります。

2. Windows のコマンド ラインを開きます。

   コンピュータのオペレーティング システムのアーキテクチャに対応した構文を以下のとおり実行します。

   - x86 オペレーティング システム

     %ProgramFiles%\CA\SharedComponents\ARCserve Backup\Setup\r16\uninstall.exe /p <_ProductCode>

   - **x64 オペレーティング システム**

%ProgramFiles%(x86)\CA\SharedComponents\ARCserve Backup\Setup\r16\uninstall.exe /p <_ProductCode>

<ProductCode>

以下の表は、アンインストールする Arcserve Backup コンポーネントに対して指定する必要がある製品コードを示しています。

例:

コマンド ラインを使用して Windows x86 オペレーティング システムから Arcserve Backup ベース製品をアンインストールするには、以下の構文を使用します。

%ProgramFiles%\CA\SharedComponents\ARCserve Backup\Setup\r17\uninstall.exe /p {CAABDF1F-E6BC-483F-B7E5-CEEF32EBE841}

コンポーネント	Platform	<Product Code>
BrightStorSAK	x86	{CAABD359-0497-414E-9423-711FDC90B38B}
Arcserve Backup (ベース製品)	x86	{CAABD1E0-CC76-4057-BEC0-F55D76BB8D05}
Arcserve Backup Agent Deployment パッケージ	x86	{CAABD1C4-50E7-402E-80CB-AB0AAF8B6066}
Arcserve Backup Agent for Informix	x86	{CAABD568-F3FC-468E-92A4-2EDA409231D8}
Arcserve Backup Agent for Lotus Domino	x86	{CAABD126-715C-4484-B973-FFC0023F5F49}
Arcserve Backup Agent for Microsoft Exchange	x86	{CAABD938-ACC3-4F97-9E89-BC0DA98B02DB}
Arcserve Backup Agent for Microsoft Exchange 12	x64	{CAABD353-614B-4E13-B27A-CA538040E874}
Arcserve Backup Agent for Microsoft SharePoint 2007	x86	{CAABD3E6-9580-4D44-8C90-007963464B66}
Arcserve Backup Agent for Microsoft SharePoint 2007	x64	{CAABD7A3-77C0-4488-A852-7B40C197D3E6}
Arcserve Backup Agent for Microsoft SQL Server	x86	{CAABDC9E-4DDE-4036-A8EF-AFC00091DE45}
Arcserve Backup Agent for Microsoft SQL Server	x64	{CAABD7A7-60FC-48D7-9B12-36E332EF6477}
Arcserve Backup Agent for Open Files for Windows	x86	{CAABD8CF-8E01-49DE-BAB7-DCB33DDF676A}
Arcserve Backup Agent for Open Files for Windows	x64	{CAABDD41-1935-4C04-AE4B-803EF455E1A3}
Arcserve Backup Agent for Oracle	x86	{CAABD914-ED4B-44E9-BBCE-3312A25583F6}
Arcserve Backup Agent for Oracle	x64	{CAABD2F1-63E6-416F-A361-

		343CAF549883}
Arcserve Backup Agent for Sybase	x86	{CAABDDB2-A533-4C4E-AE7A-6F1300B085BB}
Arcserve Backup Agent for Virtual Machines	x86	{CAABD4D7-AF38-4BCE-89FA-1A8E76CCAEF9}
Arcserve Backup Agent for Virtual Machines	x64	{CAABD63D-2328-4353-B271-F08B4E21E0F5}
Arcserve Backup Client Agent for Windows	x86	{CAABD7A8-3190-4D8A-B0AC-4F43421F4A1D}
Arcserve Backup Client Agent for Windows	x64	{CAABD00D-1FA6-48CD-AD28-75BABE0522AE}
Arcserve Backup 診断ユーティリティ	x86	{CAABD34D-F821-41CE-B4D2-5E06B86878F7}
Arcserve Backup Disaster Recovery Option	x86	{CAABD400-8ABB-40E9-A3B0-C72069ED796C}
Arcserve Backup Enterprise Module	x86	{CAABDA6A-9EED-4C96-9AB2-BCA270A9C22F}
Arcserve Backup Enterprise Option for SAP R3 for Oracle	x86	{CAABDAEE-B05D-4E60-8858-BFD874D833D5}
Arcserve Backup Enterprise Option for SAP R3 for Oracle	x64	{CAABD200-0E1D-4640-9483-376C21B3975A}
Arcserve Backup Image Option	x86	{CAABDAA9-1DFA-4811-BE57-1B22D9823E82}
Arcserve Backup Microsoft Windows EBS Option	x86	{CAABDC3B-9375-4AF8-AB1B-8555A6281E6A}
Arcserve Backup NDMP NAS Option	x86	{CAABD971-BF83-4817-965E-DACA6732E854}
Arcserve Backup Serverless Backup Option	x86	{CAABDCC6-9EB1-45BD-9113-E5087032A7DB}
Arcserve Backup セットアップ サポート ファイル	x86	{CAABD0BC-0C3F-4E38-AF09-2300389691FF}
CA Arcserve Discovery Service	x86	{CAABDC77-9350-47CF-ADC1-682C60F70E2E}
CA Arcserve Universal Agent for Windows	X86	{CAABDEFE-0449-4AA1-8A7C-085EA5A52ECB}
CA Arcserve Universal Agent for Windows	X64	{CAABD4AD-A551-4AA4-82ED-87247EB7DD72}
Central Dashboard	x86	{CAABD3A2-C0CD-4F3C-A8B2-D55353C1225E}

コマンドの実行後に、該当するコンポーネントがアンインストールされます。

Agent Deployment セットアップ ファイルのアンインストール

Arcserve Backup には Agent Deployment セットアップ ファイルをアンインストールするためのルーチンが含まれていません。Arcserve Backup サーバ上のディスク領域を解放する必要が生じた場合、Arcserve Backup のインストールに悪影響を与えることなく、Arcserve Backup サーバから Agent Deployment セットアップ ファイルをアンインストールすることができます。

プライマリ サーバ、メンバ サーバ、またはスタンドアロン サーバからエージェント セットアップ ファイルをアンインストールする最適な方法は、このセクションに説明されている手順を使用することです。

Agent Deployment セットアップ ファイルをアンインストールする方法

1. Arcserve Backup サーバにログインします。

   注： Arcserve Backup マネージャ コンソールは開くことはできますが、Agent Deployment は閉じておく必要があります。

2. コマンド ライン ウィンドウを開いて、以下のコマンドを実行します。

   - **x86 プラットフォーム**

     C:¥Program Files¥CA¥SharedComponents¥ARCserve Backup¥Setup¥r17¥Uninstall.exe" /q /p {CAABD375-B0AA-4511-A384-439D5CBC6D94}

   - **x64 プラットフォーム**

     C:¥Program Files (x86)¥CA¥SharedComponents¥ARCserve Backup¥Setup¥r17¥Uninstall.exe" /q /p {CAABD375-B0AA-4511-A384-439D5CBC6D94}

     Arcserve Backup サーバから Agent Deployment セットアップ ファイルが削除されます。

注： Arcserve Backup サーバからセットアップ ファイルを削除した後で Agent Deployment を実行するには、以下のいずれかの操作を行います。

- Arcserve Backup インストール メディアを使用して Agent Deployment セットアップ ファイルを再インストールします。
- Agent Deployment を実行し、プロンプトが表示されたら Arcserve Backup インストール メディアを挿入します。

第10章: Arcserve Backup インストールのトラブルシューティング

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

セットアップがリモート Microsoft SQL Server データベースと通信できない 340
このリリースのインストール後に Arcserve Backup にログインできない 342
Arcserve Backup サービスの初期化に失敗する 344
メンバサーバのアップグレードで、テープエンジンが起動しない 345
このリリースへのアップグレード後に Arcserve Backup にログインできない 346
Arcserve Backup でどのデバイスがサポートされているかを判断できない 347
クラスタ HA リソースが作成されない 348

セットアップがリモート Microsoft SQL Server データベースと通信できない

Windows プラットフォームで有効

現象

セットアップが、リモート コンピュータにインストールされた Microsoft SQL Server データベース インスタンスと通信できません。その結果、バックアップ処理は失敗します。

解決策

ODBC は UDP ポート 1434 を使用して SQL Server ブラウザ サービスと通信し、SQL Server の通信用 TCP ポートを検出します。その後、ODBC は検出されたポートを使用して SQL Server と通信します。UDP ポート 1434 がブロックされていた場合、セットアップはリモート Microsoft SQL Server インスタンスと通信できず、インストール処理が失敗します。

セットアップがリモート Microsoft SQL Server データベースと通信できるように、UDP ポート 1434 がブロックされていないかどうか確認してください。その後、以下のいずれかを実行します。

- **UDP ポート 1434 がブロックされている** -- UDP ポート 1434 がブロックされている場合は、システム DSN の TCP/IP ポート番号として 1433 を指定するように ODBC データ ソースを設定します。ポート番号を設定するには、以下の手順に従います。

  1. 以下のディレクトリの Odbcad32.exe を開きます。

     - **x86 システム:**

       %systemdrive%\Windows\system32

     - **x64 システム:**

       %systemdrive%\Windows\SysWoW64

       [ODBCデータソーステスト管理者]ダイアログ ボックスが開きます。

  2. [システムDSN]タブをクリックし、次に [追加]をクリックします。

     [データ ソースの新規作成]ダイアログ ボックスが開きます。

  3. データ ソースとして SQL Server を指定し、 [完了]をクリックして続行します。

  4. [SQL Server に接続するための新規データ ソースを作成する]ダイアログ ボックスの以下のフィールドに入力します。

- **名前** -- データソースの名前。例：testmachine1
- **サーバー** -- SQL Server システム名前。例：testmachine1\mysqlserver

5. [次へ]をクリックします。
6. 次のダイアログボックスで [クライアントの設定]をクリックします。

   [ネットワークライブラリ設定の追加]ダイアログボックスが表示されます。
7. [ネットワークライブラリ設定の追加]ダイアログボックスの [ポートを動的に決定する]のチェックマークを外します。
8. [ポート番号]フィールドで「1433」を指定します。
9. [完了]ボタンをクリックします。

   UDP ポート 1433 が適用されます。

- **UDP Port 1434 がブロックされていない** -- UDP ポート 1434 がブロックされていない場合は、SQL Server ブラウザサービスが有効になっていることを確認します。

  注： Microsoft SQL Server のインストール時には、SQL Server ブラウザサービスは無効になっています。

このリリースのインストール後に Arcserve Backup にログインできない

Windows プラットフォームで有効

現象

Arcserve Backup の新規インストールを実行した後に、Arcserve Backup にログインできません。

解決策

ユーザを認証するサービスが実行されていない可能性があります。コントロール パネルからサービス パネルを開き、以下のサービス実行されていることを確認します。

- Arcserve Backup ドメイン サーバ
- Arcserve Backup Service Controller
- Arcserve Remote Procedure Call Server

または、タスク マネージャを起動し、［プロセス］タブに「caauthd.exe」というアプリケーションが表示されているかどうかを確認します。このアプリケーションがタスク マネージャに表示されていない場合は、［サービス］ダイアログ ボックスを開いて、「Arcserve Backup Domain Server」サービスをいったん停止してから開始し、再度 Arcserve Backup マネージャ コンソールにログインしてみてください。それでもログインできない場合は、コマンド プロンプトを開いてディレクトリを Arcserve Backup ホーム ディレクトリに変更し、以下のコマンドを実行します。

ca_auth 勃ser getall

画面に以下のような出力が表示されます。
ユーザ名：
caroot

ユーザcarootが表示されないか、またはコマンド実行中に他のエラーが発生した場合は、調査用のログをArcserve Backup テクニカル サポートに送信するために、以下のデバッグ認証コマンドを実行します。

- マシン名でpingコマンドを実行します。例：

  ping.exe BAB_MACHINE

  この例では、BAB_MACHINE が自分のマシンです。上記のコマンドがうまく行かない場合は、etc/hosts ファイルまたは DNS を変更して、IP アドレスによる名前解決を有効にします。

  以下のコマンドを実行します。

  ipconfig /all > ipconfig.log

- 以下のコマンドを実行し、マシン上で Portmapper が実行中であるかどうかを、弊社テクニカルサポートにお知らせください。

  netstat -na >netstat.log

- 以下のコマンドを実行し、クライアントマシン上で実行している rpc サーバで、どの Arcserve Backup サービスが登録されているかを、弊社テクニカルサポートにお知らせください。

  rpcinfo.exe -p BAB_MACHINE >rpcinfo.log

  この例では、BAB_MACHINE が自分のマシンです。

- 以下のコマンドを入力します。

  rpcinfo.exe -t BAB_MACHINE 395648 1 > caauthd.txt

  この例では、BAB_MACHINE が自分のマシンです。

  注：「>」を使用すると、出力結果を画面に表示する代わりに、ファイルに出力します。

- 以下のレジストリキーを作成します。

  HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\ComputerAssociates\CA ARCserve Backup\Base\LogBrightStor\[DWORD]DebugLogs ==1

  Arcserve Backup のホームディレクトリ内の logs ディレクトリ内に、ファイル「rpc.log」が作成されます。

Arcserve Backup サービスの初期化に失敗する

Windows プラットフォームで有効

症状:

Arcserve Backupサービスの初期化に失敗するのはなぜですか。

解決策:

Arcserve Backupがポート111の競合を検出し、CA RPCサーバサービスに使用しているポート番号が以前インストールされたポートマッパと同じポート番号であった場合、Arcserve Backup は自動的に別のポート番号に切り替えます。

別のコンピュータをお使いのコンピュータと通信できるようにしたい場合は、専用のポートを指定することをお勧めします。専用のポートを指定するには、以下のディレクトリにある portsconfig.cfg と名前のファイルを使用します。

C:\Program Files\CA\SharedComponents\ARCserve Backup

Arcserve Backup は、外部のポートマッパ(Microsoft Services for UNIX (SFU) 、Noblenet Portmapper、StorageTek LibAttach など) と連携します。ただし、マシンの起動シーケンス中、外部ポートマッパが完全に初期化される前に、Arcserve Backup サービスの初期化が試行される場合があります。このような場合、Arcserve Backup サービスは初期化に失敗します。この問題を防ぐには、以下の手順に従います。

1. 以下のレジストリキーを作成します。

   HKEY_LOCAL_MACHINE\Software\ComputerAssociates\CA ARCserve Backup\Base\Portmap

2. このキーの下に、DWORD 値 DelayedRegistration を作成します。
3. このキーに、Arcserve Backup サービスがポートマッパ登録を初期化する前に待機する時間を分単位(10進数値) で割り当てます。たとえば、DelayedRegistration=1 と指定すると、どの Arcserve Backup サービスも、起動後 1 分間はポートマッパに登録されません。

メンバ サーバのアップグレードで、テープ エンジンが起動しない

Windows プラットフォームで有効

症状：

スタンドアロン サーバまたはプライマリ サーバを前のリリースからメンバ サーバにアップグレードした後に、メンバ サーバのテープ エンジンが起動しません。

解決策：

プライマリ サーバまたはスタンドアロン サーバをメンバ サーバにアップグレードする手順が完了すると、通常は、メンバ サーバのテープ エンジンが自動的に起動します。メンバ サーバのテープ エンジンが自動的に起動しない場合は、プライマリ サーバのテープ エンジンのステータスをチェックしてください。プライマリ サーバのテープ エンジンは、メンバ サーバのアップグレード手順が完了した時点で実行されていなかった可能性が高いと考えられます。

この問題を解決するには、プライマリ サーバ上でテープ エンジンが稼働していることを確認してください。必要に応じて、サーバ管理マネージャを使用して、プライマリ サーバのテープ エンジンを起動します。その後、プライマリ サーバでテープ エンジンが実行されていることを確認したら、メンバ サーバでテープ エンジンを起動します。

注： Arcserve Backup エンジンの開始と停止の詳細については、「管理者ガイド」を参照してください。

このリリースへのアップグレード後に Arcserve Backup にログインできない

Windows プラットフォームで有効

現象

Arcserve Backup のこのリリースにアップグレードしても、ユーザ プロファイルはマイグレートされません。その結果、ユーザは Arcserve Backup マネージャおよびドメインにログインできなくなります。

解決策

この問題は、Arcserve Backup r16 など、Arcserve Backup の以前のリリースからアップグレードする場合にのみ発生します。問題が発生するのは、以下のいずれか、あるいは両方の条件がそろった場合です。

- アップグレード処理の開始前にバックアップ サーバの IP アドレスが変更された。
- アップグレードの完了後にバックアップ サーバが再起動され、その後 IP アドレスが変更された。

このような条件の下では、以前のリリースで追加されたユーザ アカウントは、このリリースの Arcserve Backup へのアップグレード時にマイグレートされないことになります。この問題を解決するには、ca_auth コマンド (新しい IP アドレスに基づく) を使用してバックアップ サーバ上の同等の権限を再作成し、それからユーザ アカウントを更新する必要があります。

この手順を完了するには、以下を実行します。

1. Arcserve Backup サーバからコマンド ライン ウィンドウを開きます。
2. 以下の構文を使用して ca_auth を実行します。

   ca_auth -equiv add <domainnameA\NT user(administrator)> <hostnameA> caroot caroot <passwordofcaroot>

   同等の権限が作成されます。
3. 各ユーザ アカウントに対して以下のコマンドを実行します。

   caauthd.exe -setupuser
   cadiscovd.exe -m

   ユーザ アカウント情報が更新されます。

   注： コマンドライン ユーティリティは Arcserve Backup インストール ディレクトリのルートに保存されています。例：

   C:\Program Files\CA\ARCserve Backup\caauthd.exe

Arcserve Backup でどのデバイスがサポートされているかを判断できない

Windows プラットフォームで有効

症状:

どのデバイスが Arcserve Backup でサポートされているかわかりません。

解決策:

サポートされているデバイスのファームウェアとモデルを確認するには、Arcserve Web サイトで公開されている認定デバイスリストを参照してください。この情報にアクセスするには、以下のように Arcserve Backup ホーム画面を開いて、[テクニカル サポート] の [テクニカル サポートへのアクセス] リンクをクリックします。

クラスタ HA リソースが作成されない

Microsoft Cluster Server (MSCS) を実行する Windows プラットフォームで有効

現象

Arcserve Backup がクラスタ HA リソースを作成できません。

解決策

この問題は、Arcserve Backup をインストールした後、babha -postsetup コマンドを使用してクラスタ HA リソースを作成しようとすると発生します。このコマンドを実行すると、メッセージ ボックスが表示され、クラスタ リソースが作成されなかったことが示されます。さらに、以下のようなメッセージが Cluster.log ファイルに表示されます。

ファイル共有のオープンまたは作成で、エラーが返りました: [87]

この問題を解決するには、以下の手順に従います。

1. Arcserve Backup クラスタ グループの下で、「Arcserve Share」という名前のオブジェクトを作成し、リソース タイプをファイル共有にします。
2. 共有されるディスクおよび Arcserve Backup 仮想名でリソースの依存関係を追加します。
3. 以下を指定します。
   - **共有名**: ARCSERVE$
   - **パス**: Arcserve Backup ホーム ディレクトリ。
   3. babha -postsetup コマンドを実行します。

第11章: 推奨事項を使用した Arcserve Backup のインストールおよびアップグレード

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

Arcserve Backup のインストールに関する推奨事項 350

以前のリリースからの Arcserve Backup のアップグレードに関する推奨事項 395

一般的な推奨事項 462

Arcserve Backup のインストールに関する推奨事項

Arcserve Backup をインストールするには、以下の推奨事項を考慮してください。

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

Arcserve Backup のインストールの前提条件タスクの完了方法

単一サーバ環境への Arcserve Backup のインストール

プライマリサーバとメンバサーバのインストール

メンバサーバおよびデバイスとのプライマリサーバのインストール

SAN におけるメンバサーバおよび共有デバイスとのプライマリサーバのインストール

SAN への複数のプライマリサーバとメンバサーバのインストール

クラスタ対応環境への Arcserve Backup のインストール

Arcserve Backup のインストールの前提条件タスクの完了方法

Arcserve Backup をインストールする前に、以下の前提条件タスクを完了する必要があります。

ライセンス登録

Arcserve Backup のインストールに必要なライセンスがあることを確認します。

システム要件

Arcserve Backup をインストールするコンピュータのシステム要件については、「リリースノート」を参照してください。

Arcserve Backup データベース

Arcserve Backup データベースに使用するアプリケーションを判別します。以下のアーキテクチャ上の条件を考慮します。

- 推奨するデータベースアプリケーションは、Microsoft SQL Server 2014 Express Edition です。
- Microsoft SQL Server 2014 Express Edition は、リモート通信をサポートしていません。現在のトポロジがリモート データベース設定で構成されている場合、または異なるシステム(リモート システム) にインストールされているデータベースアプリケーションにアクセスする場合は、Microsoft SQL Server を Arcserve Backup データベースとして指定する必要があります。

  注： 詳細については、「データベースの要件」を参照してください。

Arcserve Backup サーバタイプ

必要な Arcserve Backup サーバのタイプを判別します。インストール ウィザードによって、現在の構成が検出および分析されます。その後、インストール ウィザードにより、インストールが必要な Arcserve Backup サーバのタイプ、およびインストールが必要なエージェントとオプションが判別されます。トポロジが単一の Arcserve サーバで構成される場合は、スタンドアロン サーバをインストールする必要があります。

将来、Arcserve Backup サーバを使用環境に追加する計画がある場合は、以下の Arcserve サーバ インストールのいずれかを指定できます。

- **スタンドアロン サーバ:** スタンドアロン サーバ インストールでは、将来、独立したスタンドアロン サーバを展開する必要があります。
- **プライマリ サーバ** -- プライマリ サーバをインストールすると、複数の Arcserve Backup サーバを一元管理できます。

一元管理機能を有効にするには、Arcserve プライマリサーバオプションを指定し、Central Management Option をインストールする必要があります。

注：さまざまなタイプの Arcserve サーバインストールの詳細については、「Arcserve Backup サーバインストールのタイプ」を参照してください。

接続デバイス

インストールプロセスを開始する前に、ライブラリなどのすべてのデバイスが Arcserve サーバに接続されていることを確認します。インストールの完了後に初めてテープエンジンを起動すると、接続されているデバイスが Arcserve Backup によって自動的に検出および設定されるため、手動による設定は必要ありません。

単一サーバ環境への Arcserve Backup のインストール

以下のセクションでは、単一サーバ環境に Arcserve Backup をインストールする際の推奨事項について説明します。

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

推奨構成：スタンドアロン サーバ

インストールが必要なコンポーネント

スタンドアロン サーバまたはプライマリ サーバをインストールする方法

スタンドアロン サーバ インストールを確認する方法

推奨構成：スタンドアロン サーバ

現在の環境を保護するために単一のバックアップ サーバが必要な場合、スタンドアロン サーバ インストールを使用して Arcserve Backup をインストールすることをお勧めします。

スタンドアロン サーバ インストールでは、バックアップ サーバに対してローカルで動作するジョブを実行、管理、およびモニタできます。

ある時点で、環境を保護するためにバックアップ サーバを追加する必要があると判断した場合、プライマリ サーバ オプションをインストールしてから、Arcserve Backup ドメインにメンバ サーバを追加できます。プライマリ サーバをインストールする場合は、Central Management Option をインストールする必要があります。

Arcserve Backup スタンドアロン サーバまたは Arcserve Backup プライマリ サーバのアーキテクチャを以下の図に示します。

インストールが必要なコンポーネント

ご使用の環境にこの設定を展開するには、以下の Arcserve Backup コンポーネントをインストールする必要があります。

Arcserve Backup スタンドアロン サーバ

スタンドアロン バックアップ サーバ上に Arcserve Backup をインストールできるようにします。

Arcserve Backup Agent for Microsoft SQL Server

Arcserve Backup データベースを保護できるようにします。

注： Arcserve プライマリ サーバおよび スタンドアロン サーバのインストールでは、Agent for Database という修正バージョンのエージェントがインストールされます。ArcserveArcserve

重要： アンインストール プログラムでは、コンピュータから Arcserve Backup データベース インスタンスがアンインストールされません。Arcserve Backup を再インストールする場合は、インストール ウィザードによって、使用中のシステムで Microsoft SQL Server または Microsoft SQL Server 2014 Express Edition のデータベース インスタンスがあることが検出されます。その結果、インストール ウィザードは、 製品の選択]ダイアログ ボックスで自動的に Arcserve Backup Agent for Microsoft SQL Server コンポーネントを選択します。

Arcserve Backup Client Agent for Windows

Arcserve Backup サーバにローカルでデータをバックアップできるようにします。

スタンドアロン サーバまたはプライマリ サーバをインストールする方法

単一サーバ環境に Arcserve Backup をインストールするには、以下のタスクを完了します。

1. ターゲット システムに Arcserve Backup スタンドアロン サーバ インストール オプションをインストールします。
2. インストールを確認します。

スタンドアロン サーバ インストールを確認する方法

Arcserve Backup インストールが正常に機能することを確認するには、以下のタスクを完了します。

1. Arcserve Backup マネージャ コンソールを開きます。
2. データベース マネージャとジョブ ステータス マネージャを開きます。

   データベース情報およびアクティビティ ログのデータが表示できることを確認します。
3. デバイス マネージャを表示します。

   デバイス マネージャで、サーバに接続されているすべてのデバイスが検出されることを確認します。

   以下の画面は、ライブラリが接続されたスタンドアロン サーバが表示されたデバイス マネージャを示しています。ライブラリは共有されません。

   デバイス マネージャによってすべてのデバイスが検出されない場合、以下のタスクを完了します。

   - デバイスが、サーバに正しく接続されていることを確認します。
   - 適切なデバイスドライバがインストールされていることを確認します。
   - デバイス環境設定を使用したデバイスの設定

   これらのタスクを完了した後、Arcserve Backup でデバイスを検出できない場合は、テクニカル サポートまでお問い合わせください。

   注： デバイスの設定の詳細については、「管理者ガイド」を参照してください。
4. (オプション) [デバイス環境設定]を使用して、必要な設定を実行します。たとえば、ファイル システム デバイスを設定します。
5. 単純バックアップ ジョブをサブミットします。

   バックアップ ジョブが正常に完了することを確認します。

   ジョブが失敗した場合は、以下のトラブルシューティング タスクを実行します。

   - ジョブ ステータス マネージャから、ジョブのアクティビティ ログの詳細を確認します。
   - ジョブに警告メッセージ、エラー メッセージ、あるいはその両方が含まれていた場合、メッセージをダブルクリックして、問題の説明およびそれを修正するための手順を参照します。
   - 問題を修正したら、ジョブを再度サブミットします。
6. 単純リストア ジョブをサブミットします。

リストア ジョブが正常に完了することを確認します。

ジョブが失敗した場合は、以下のトラブルシューティング タスクを実行します。

- ジョブ ステータス マネージャから、ジョブのアクティビティ ログの詳細を確認します。
- ジョブに警告メッセージ、エラー メッセージ、あるいはその両方が含まれていた場合、メッセージをダブルクリックして、問題の説明およびそれを修正するための手順を参照します。

問題を修正したら、ジョブを再度サブミットします。

7. ジョブ ステータス マネージャを表示します。

   [ジョブ キュー]タブおよび [アクティビティ ログ]に、ジョブに関する情報が表示されていることを確認します。

プライマリ サーバとメンバ サーバのインストール

以下のセクションでは、プライマリ サーバおよび 1 つまたは複数のメンバ サーバと共に Arcserve Backup をインストールする際の推奨事項について説明します。

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

推奨構成

インストールが必要なコンポーネント

プライマリ サーバとメンバ サーバをインストールする方法

プライマリ サーバとメンバ サーバのインストールを確認する方法

推奨構成

現在の環境を保護するために、同じドメイン内に存在する複数のバックアップサーバが必要な場合は、プライマリサーバおよびメンバサーバのインストールオプションを使用して Arcserve Backup をインストールすることをお勧めします。この構成を使用すると、一元管理環境を構築できます。

プライマリサーバは、それ自身および 1 つまたは複数のメンバサーバを制御します。プライマリサーバから、プライマリサーバとメンバサーバ上で実行されるのバックアップやリストアなどのジョブを管理および監視することができるようになります。プライマリサーバおよびメンバサーバを使用すると、環境内の複数の Arcserve Backup サーバを一元管理できるようになります。この環境では、マネージャコンソールを使用してプライマリサーバを管理できます。

注： Microsoft SQL Server 2014 SP2 Express Edition は、リモート通信をサポートしていません。Microsoft SQL Server 2014 SP2 Express Edition を使用して Arcserve Backup をインストールする場合は、インストールウィザードによって、プライマリサーバ上にデータベースアプリケーションおよび Arcserve データベースインスタンスがインストールされます。リモートシステム上で Arcserve データベースインスタンスをホストするには、Microsoft SQL Server を使用する必要があります。

一元管理環境のトポロジを以下の図に示します。この環境は、1 つのプライマリサーバおよび 1 つまたは複数のメンバサーバで構成されます。Arcserve Backup データベースは Microsoft SQL Server 2008 Express Edition によってホストされ、データベースインスタンスはプライマリサーバ上に存在しています。

インストールが必要なコンポーネント

ご使用の環境にこの設定を展開するには、以下の Arcserve Backup コンポーネントをインストールする必要があります。

Arcserve Backup プライマリサーバ

メンバサーバおよびプライマリサーバ上で実行されるバックアップおよびリストアジョブを一元的にサブミット、管理、およびモニタする Arcserve Backup をサーバ上にインストールできます。

Arcserve Backup Central Management Option

Arcserve Backup ドメイン内のプライマリサーバとすべてのメンバサーバを中央のコンピュータから管理できるようになります。

注： Arcserve Backup プライマリサーバは前提条件のコンポーネントです。

Arcserve Backup Agent for Microsoft SQL Server

Arcserve Backup データベースを保護できるようにします。

注： Arcserve プライマリサーバおよびスタンドアロンサーバのインストールでは、Agent for Database という修正バージョンのエージェントがインストールされます。ArcserveArcserve

重要： アンインストールプログラムでは、コンピュータから Arcserve Backup データベースインスタンスがアンインストールされません。Arcserve Backup を再インストールする場合は、インストールウィザードによって、使用中のシステムで Microsoft SQL Server または Microsoft SQL Server 2014 Express Edition のデータベースインスタンスがあることが検出されます。その結果、インストールウィザードは、 製品の選択]ダイアログボックスで自動的に Arcserve Backup Agent for Microsoft SQL Server コンポーネントを選択します。

Arcserve Backup Client Agent for Windows

Arcserve Backup サーバにローカルでデータをバックアップできるようにします。

Arcserve Backup メンバサーバ

Arcserve Backup ドメイン内のサーバが、プライマリサーバからジョブやデバイスに関する命令を受け取れるようにします。

プライマリ サーバとメンバ サーバをインストールする方法

プライマリ サーバとメンバ サーバをインストールするには、以下のタスクを完了します。

1. プライマリ サーバとして機能するシステム上に Arcserve Backup プライマリ サーバをインストールします。

   注： Arcserve Backup プライマリ サーバをインストールすると、セットアップによって Central Management Option がインストールされます。

   Microsoft SQL Server 2014 Express または Microsoft SQL Server を Arcserve Backup データベースに指定できます。

2. 新しい Arcserve Backup ドメインのメンバとして機能するすべてのサーバ上に Arcserve Backup メンバ サーバをインストールします。
3. インストールを確認します。

プライマリ サーバとメンバ サーバのインストールを確認する方法

Arcserve Backup インストールが正常に機能することを確認するには、以下のタスクを完了します。

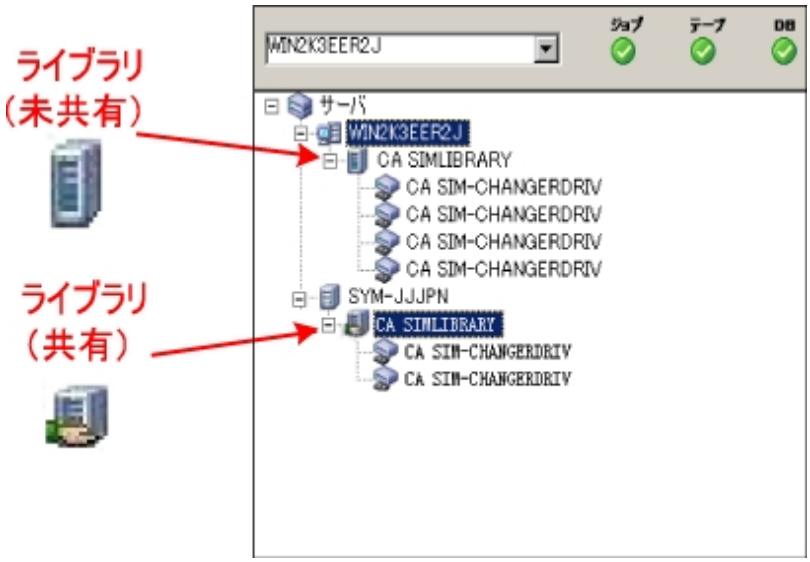
1. プライマリ サーバで Arcserve Backup マネージャ コンソールを開きます。
2. サーバ管理を開きます。

   ドメイン ディレクトリ ツリーに Arcserve ドメインのプライマリ サーバとすべてのメンバ サーバの名前が表示されていることを確認します。
3. データベース マネージャとジョブ ステータス マネージャを開きます。

   データベース情報およびアクティビティ ログのデータが表示できることを確認します。
4. デバイス マネージャを表示します。

   デバイス マネージャが、プライマリ サーバとすべてのメンバ サーバに接続されているすべてのデバイスを検出することを確認します。

   以下は、プライマリ サーバと接続されたデバイス、およびメンバ サーバと接続されたデバイスが含まれるデバイス マネージャ ウィンドウを示しています。プライマリ サーバは、共有されていないライブラリに接続されており、メンバ サーバは共有されているライブラリに接続されています。



   デバイス マネージャによってすべてのデバイスが検出されない場合、以下のタスクを完了します。

- デバイスが、サーバに正しく接続されていることを確認します。
- 適切なデバイスドライバがインストールされていることを確認します。
- デバイス環境設定を使用したデバイスの設定

これらのタスクを完了した後、Arcserve Backup でデバイスを検出できない場合は、テクニカルサポートまでお問い合わせください。

注： デバイスの設定の詳細については、「管理者ガイド」を参照してください。

5. (オプション) デバイスマネージャを開き、ファイルシステムデバイスを設定します。
6. 簡単なバックアップジョブをプライマリサーバ上でサブミットします。

   ジョブが正常に完了することを確認します。

   ジョブが失敗した場合は、以下のトラブルシューティングタスクを実行します。

   - ジョブステータスマネージャから、ジョブのアクティビティログの詳細を確認します。
   - ジョブに警告メッセージ、エラーメッセージ、あるいはその両方が含まれている場合、メッセージをダブルクリックして、問題の説明およびそれを修正するための手順を参照します。
   - 問題を修正したら、ジョブを再度サブミットします。
7. 単純バックアップジョブをメンバサーバ上でサブミットします。

   バックアップジョブが正常に完了することを確認します。

   ジョブが失敗した場合は、以下のトラブルシューティングタスクを実行します。

   - ジョブステータスマネージャから、ジョブのアクティビティログの詳細を確認します。
   - ジョブに警告メッセージ、エラーメッセージ、あるいはその両方が含まれている場合、メッセージをダブルクリックして、問題の説明およびそれを修正するための手順を参照します。
   - 問題を修正したら、ジョブを再度サブミットします。
8. 単純リストアジョブをプライマリサーバ上でサブミットします。

   リストアジョブが正常に完了することを確認します。

   ジョブが失敗した場合は、以下のトラブルシューティングタスクを実行します。

- ジョブ ステータス マネージャから、ジョブのアクティビティ ログの詳細を確認します。
- ジョブに警告メッセージ、エラー メッセージ、あるいはその両方が含まれている場合、メッセージをダブルクリックして、問題の説明およびそれを修正するための手順を参照します。
- 問題を修正したら、ジョブを再度サブミットします。

9. 単純リストア ジョブをメンバ サーバ上でサブミットします。

   リストア ジョブが正常に完了することを確認します。

   ジョブが失敗した場合は、以下のトラブルシューティング タスクを実行します。

   - ジョブ ステータス マネージャから、ジョブのアクティビティ ログの詳細を確認します。
   - ジョブに警告メッセージ、エラー メッセージ、あるいはその両方が含まれている場合、メッセージをダブルクリックして、問題の説明およびそれを修正するための手順を参照します。
   - 問題を修正したら、ジョブを再度サブミットします。

メンバ サーバおよびデバイスとのプライマリ サーバのインストール

以下のセクションでは、1 つのプライマリ サーバ、1 つまたは複数のメンバ サーバ、およびプライマリ サーバまたはメンバ サーバ(あるいはその両方) に接続されたデバイスと共に Arcserve Backup をインストールする際の推奨事項について説明します。

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

推奨構成

インストールが必要なコンポーネント

プライマリ サーバとメンバ サーバとデバイスをインストールする方法

プライマリ サーバとメンバ サーバとデバイスのインストールを確認する方法

推奨構成

現在の環境を保護するために、同じドメイン内に存在する複数のバックアップサーバおよびデバイス(ライブラリなど) が必要な場合、プライマリサーバおよびメンバサーバのインストールオプションを使用して Arcserve Backup をインストールすることをお勧めします。この構成を使用すると、一元管理環境を構築できます。

プライマリサーバは、それ自身および 1 つまたは複数のメンバサーバを制御します。プライマリサーバから、プライマリサーバとメンバサーバ上で実行されるのバックアップやリストアなどのジョブを管理および監視することができるようになります。プライマリサーバおよびメンバサーバを使用すると、ドメイン内の複数の Arcserve Backup サーバを一元管理できるようになります。この環境では、マネージャコンソールを使用してプライマリサーバを管理できます。

注： Microsoft SQL Server 2014 SP2 Express Edition は、リモート通信をサポートしていません。Microsoft SQL Server 2014 SP2 Express Edition を使用して Arcserve Backup をインストールする場合は、インストールウィザードによって、プライマリサーバ上にデータベースアプリケーションおよび Arcserve データベースインスタンスがインストールされます。リモートシステム上で Arcserve データベースインスタンスをホストするには、Microsoft SQL Server を使用する必要があります。

接続デバイスを持つ一元管理環境とのアーキテクチャを以下の図に示します。この環境は、1 つのプライマリサーバおよび 1 つまたは複数のメンバサーバで構成されます。Arcserve Backup データベースは Microsoft SQL Server 2008 Express Edition によってホストされ、データベースインスタンスはプライマリサーバ上に存在しています。

インストールが必要なコンポーネント

ご使用の環境にこの設定を展開するには、以下の Arcserve Backup コンポーネントをインストールする必要があります。

Arcserve Backup プライマリサーバ

メンバサーバおよびプライマリサーバ上で実行されるバックアップおよびリストアジョブを一元的にサブミット、管理、およびモニタする Arcserve Backup をサーバ上にインストールできます。

Arcserve Backup Central Management Option

Arcserve Backup ドメイン内のプライマリサーバとすべてのメンバサーバを中央のコンピュータから管理できるようになります。

注： Arcserve Backup プライマリサーバは前提条件のコンポーネントです。

Arcserve Backup Agent for Microsoft SQL Server

Arcserve Backup データベースを保護できるようにします。

注： Arcserve プライマリサーバおよびスタンドアロンサーバのインストールでは、Agent for Database という修正バージョンのエージェントがインストールされます。ArcserveArcserve

重要： アンインストールプログラムでは、コンピュータから Arcserve Backup データベースインスタンスがアンインストールされません。Arcserve Backup を再インストールする場合は、インストールウィザードによって、使用中のシステムで Microsoft SQL Server または Microsoft SQL Server 2014 Express Edition のデータベースインスタンスがあることが検出されます。その結果、インストールウィザードは、［製品の選択］ダイアログボックスで自動的に Arcserve Backup Agent for Microsoft SQL Server コンポーネントを選択します。

Arcserve Backup Client Agent for Windows

Arcserve Backup サーバにローカルでデータをバックアップできるようにします。

Arcserve Backup Tape Library Option

複数ライブラリおよびテープ RAID ライブラリを使用して、バックアップ、リストア、およびメディア管理のタスクを実行できるようになります。

Arcserve Backup メンバサーバ

Arcserve Backup ドメイン内のサーバが、プライマリサーバからジョブやデバイスに関する命令を受け取れるようにします。

プライマリ サーバとメンバ サーバとデバイスをインストールする方法

プライマリ サーバとメンバ サーバとデバイスをインストールするには、以下のタスクを完了します。

1. プライマリ サーバとして機能するシステム上に Arcserve Backup プライマリ サーバをインストールします。

   注： Arcserve Backup プライマリ サーバをインストールすると、セットアップによって Central Management Option がインストールされます。

   Microsoft SQL Server 2008 Express または Microsoft SQL Server を Arcserve Backup データベースに指定できます。

2. プライマリ サーバに接続されたデバイスをサポートするのに必要なオプションをインストールします。たとえば、Tape Library Option または NDMP NAS Option などです。
3. 新しい Arcserve Backup ドメインのメンバとして機能するすべてのサーバ上に Arcserve Backup メンバ サーバをインストールします。
4. メンバ サーバに接続されたデバイスをサポートするのに必要なオプションをインストールします。たとえば、Tape Library Option または NDMP NAS Option などです。
5. インストールを確認します。

プライマリ サーバとメンバ サーバとデバイスのインストールを確認する方法

Arcserve Backup インストールが正常に機能することを確認するには、以下のタスクを完了します。

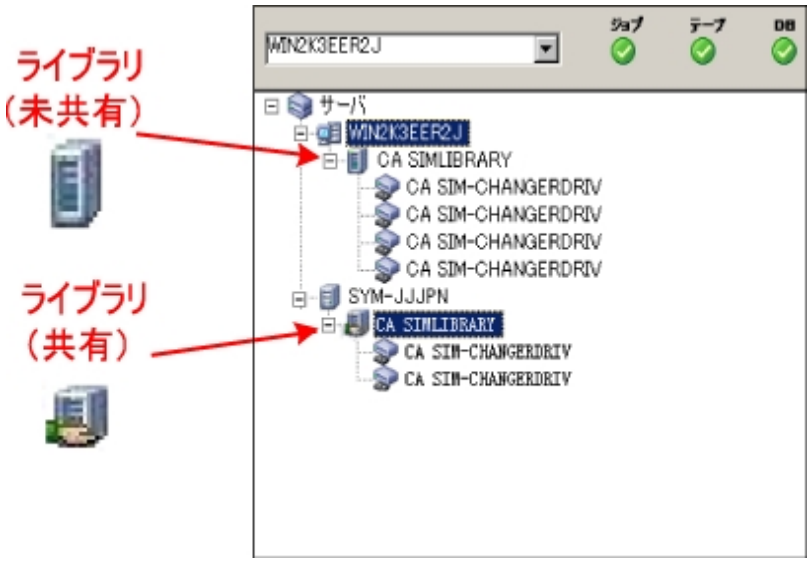
1. プライマリ サーバで Arcserve Backup マネージャ コンソールを開きます。
2. サーバ管理を開きます。

   ドメイン ディレクトリ ツリーに Arcserve ドメインのプライマリ サーバとすべてのメンバ サーバの名前が表示されていることを確認します。
3. データベース マネージャとジョブ ステータス マネージャを開きます。

   データベース情報およびアクティビティ ログのデータが表示できることを確認します。
4. デバイス マネージャを表示します。

   デバイス マネージャが、プライマリ サーバとすべてのメンバ サーバに接続されているすべてのデバイスを検出することを確認します。

   以下は、プライマリ サーバと接続されたデバイス、およびメンバ サーバと接続されたデバイスが含まれるデバイス マネージャ ウィンドウを示しています。プライマリ サーバは、共有されていないライブラリに接続されており、メンバ サーバは共有されているライブラリに接続されています。



   デバイス マネージャによってすべてのデバイスが検出されない場合、以下のタスクを完了します。

- デバイスが、サーバに正しく接続されていることを確認します。
- 適切なデバイスドライバがインストールされていることを確認します。
- デバイス環境設定を使用したデバイスの設定

これらのタスクを完了した後、Arcserve Backup でデバイスを検出できない場合は、テクニカルサポートまでお問い合わせください。

注： デバイスの設定の詳細については、「管理者ガイド」を参照してください。

5. 簡単なバックアップジョブをプライマリサーバ上でサブミットします。

   ジョブが正常に完了することを確認します。

   ジョブが失敗した場合は、以下のトラブルシューティングタスクを実行します。

   - ジョブステータスマネージャから、ジョブのアクティビティログの詳細を確認します。
   - ジョブに警告メッセージ、エラーメッセージ、あるいはその両方が含まれている場合、メッセージをダブルクリックして、問題の説明およびそれを修正するための手順を参照します。
   - 問題を修正したら、ジョブを再度サブミットします。

6. 単純バックアップジョブをメンバサーバ上でサブミットします。

   バックアップジョブが正常に完了することを確認します。

   ジョブが失敗した場合は、以下のトラブルシューティングタスクを実行します。

   - ジョブステータスマネージャから、ジョブのアクティビティログの詳細を確認します。
   - ジョブに警告メッセージ、エラーメッセージ、あるいはその両方が含まれている場合、メッセージをダブルクリックして、問題の説明およびそれを修正するための手順を参照します。
   - 問題を修正したら、ジョブを再度サブミットします。

7. 単純リストアジョブをプライマリサーバ上でサブミットします。

   リストアジョブが正常に完了することを確認します。

   ジョブが失敗した場合は、以下のトラブルシューティングタスクを実行します。

   - ジョブステータスマネージャから、ジョブのアクティビティログの詳細を確認します。

- ジョブに警告メッセージ、エラーメッセージ、あるいはその両方が含まれている場合、メッセージをダブルクリックして、問題の説明およびそれを修正するための手順を参照します。
- 問題を修正したら、ジョブを再度サブミットします。

8. 単純リストアジョブをメンバサーバ上でサブミットします。

   リストアジョブが正常に完了することを確認します。

   ジョブが失敗した場合は、以下のトラブルシューティングタスクを実行します。

   - ジョブステータスマネージャから、ジョブのアクティビティログの詳細を確認します。
   - ジョブに警告メッセージ、エラーメッセージ、あるいはその両方が含まれている場合、メッセージをダブルクリックして、問題の説明およびそれを修正するための手順を参照します。
   - 問題を修正したら、ジョブを再度サブミットします。

SAN におけるメンバサーバおよび共有デバイスとのプライマリサーバのインストール

以下のセクションでは、プライマリサーバ、1 つまたは複数のメンバサーバ、および Storage Area Network (SAN) 環境で共有されているデバイスと共に Arcserve Backup をインストールする際の推奨事項について説明します。

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

推奨構成

インストールが必要なコンポーネント

プライマリサーバとメンバサーバと SAN の共有デバイスをインストールする方法

プライマリサーバとメンバサーバーと SAN の共有デバイスのインストールを確認する方法

推奨構成

現在の環境を保護するために、同じドメイン内に存在する複数のバックアップサーバおよび SAN で共有されているデバイス(ライブラリなど) が必要な場合、プライマリサーバおよびメンバサーバのインストールオプションを使用して Arcserve Backup をインストールすることをお勧めします。この構成を使用すると、一元管理環境を構築できます。

プライマリサーバは、それ自身および 1 つまたは複数のメンバサーバを制御します。プライマリサーバから、プライマリサーバとメンバサーバ上で実行されるのバックアップやリストアなどのジョブを管理および監視することができるようになります。プライマリサーバおよびメンバサーバを使用すると、ドメイン内の複数の Arcserve Backup サーバを一元管理できるようになります。この環境では、マネージャコンソールを使用してプライマリサーバを管理できます。

注： Microsoft SQL Server 2008 Express Edition は、リモート通信をサポートしていません。Microsoft SQL Server 2008 Express Edition を使用して Arcserve Backup をインストールする場合は、インストールウィザードによって、プライマリサーバ上にデータベースアプリケーションおよび Arcserve データベースインスタンスがインストールされます。リモートシステム上で Arcserve データベースインスタンスをホストするには、Microsoft SQL Server を使用する必要があります。

共有デバイスを持つ Storage Area Network 内の一元管理環境のアーキテクチャを以下の図に示します。この環境は、1 つのプライマリサーバおよび 1 つまたは複数のメンバサーバで構成されます。Arcserve Backup データベースは Microsoft SQL Server 2008 Express Edition によってホストされ、データベースインスタンスはプライマリサーバ上に存在しています。

インストールが必要なコンポーネント

ご使用の環境にこの設定を展開するには、以下の Arcserve Backup コンポーネントをインストールする必要があります。

Arcserve Backup プライマリサーバ

メンバサーバおよびプライマリサーバ上で実行されるバックアップおよびリストアジョブを一元的にサブミット、管理、およびモニタする Arcserve Backup をサーバ上にインストールできます。

Arcserve Backup Central Management Option

Arcserve Backup ドメイン内のプライマリサーバとすべてのメンバサーバを中央のコンピュータから管理できるようになります。

注： Arcserve Backup プライマリサーバは前提条件のコンポーネントです。

Arcserve Backup Agent for Microsoft SQL Server

Arcserve Backup データベースを保護できるようにします。

注： Arcserve プライマリサーバおよびスタンドアロンサーバのインストールでは、Agent for Database という修正バージョンのエージェントがインストールされます。ArcserveArcserve

重要： アンインストールプログラムでは、コンピュータから Arcserve Backup データベースインスタンスがアンインストールされません。Arcserve Backup を再インストールする場合は、インストールウィザードによって、使用中のシステムで Microsoft SQL Server または Microsoft SQL Server 2014 Express Edition のデータベースインスタンスがあることが検出されます。その結果、インストールウィザードは、 製品の選択]ダイアログボックスで自動的に Arcserve Backup Agent for Microsoft SQL Server コンポーネントを選択します。

Arcserve Backup Client Agent for Windows

Arcserve Backup サーバにローカルでデータをバックアップできるようにします。

Arcserve Backup Tape Library Option

複数ライブラリおよびテープ RAID ライブラリを使用して、バックアップ、リストア、およびメディア管理のタスクを実行できるようになります。

Arcserve Backup Storage Area Network (SAN) Option

1 つまたは複数の Arcserve サーバが接続された高速ストレージネットワーク上で、1 つまたは複数のメディアライブラリを共有できるようになります。

以下の点に注意してください。

- Tape Library Option は SAN (Storage Area Network) オプションの前提条件のコンポーネントです。
- Storage Area Network (SAN) Option をインストールするには、Arcserve Backup プライマリサーバインストールオプションを指定する必要があります。

Arcserve Backup メンバサーバ

Arcserve Backup ドメイン内のサーバが、プライマリサーバからジョブやデバイスに関する命令を受け取れるようにします。

注： この構成を展開するには、SAN において、サーバごとに Storage Area Network (SAN) Option および Tape Library Option のライセンスを確実に発行する必要があります。

プライマリ サーバとメンバ サーバと SAN の共有デバイスをインストールする方法

SAN においてメンバ サーバおよび共有デバイスと共にプライマリ サーバをインストールするには、以下のタスクを完了します。

1. プライマリ サーバとして機能するシステム上に Arcserve Backup プライマリ サーバをインストールします。

   注： Arcserve Backup プライマリ サーバをインストールすると、セットアップによって Central Management Option がインストールされます。

   Microsoft SQL Server 2014 Express または Microsoft SQL Server を Arcserve Backup データベースに指定できます。

2. プライマリ オプションに、Tape Library Option と SAN (Storage Area Network) オプションをインストールします。

   注： この構成を展開するには、SAN において、サーバごとに Storage Area Network (SAN) Option および Tape Library Option のライセンスを確実に発行する必要があります。

3. プライマリ サーバに接続されたデバイスをサポートするのに必要なオプションをインストールします。たとえば、NDMP NAS Option などです。
4. 新しい Arcserve Backup ドメインのメンバとして機能するすべてのサーバ上に Arcserve Backup メンバ サーバをインストールします。
5. メンバ サーバに接続されたデバイスをサポートするのに必要なオプションをインストールします。たとえば、NDMP NAS Option などです。
6. インストールを確認します。

プライマリ サーバとメンバ サーバーと SAN の共有デバイスのインストールを確認する方法

Arcserve Backup インストールが正常に機能することを確認するには、以下のタスクを完了します。

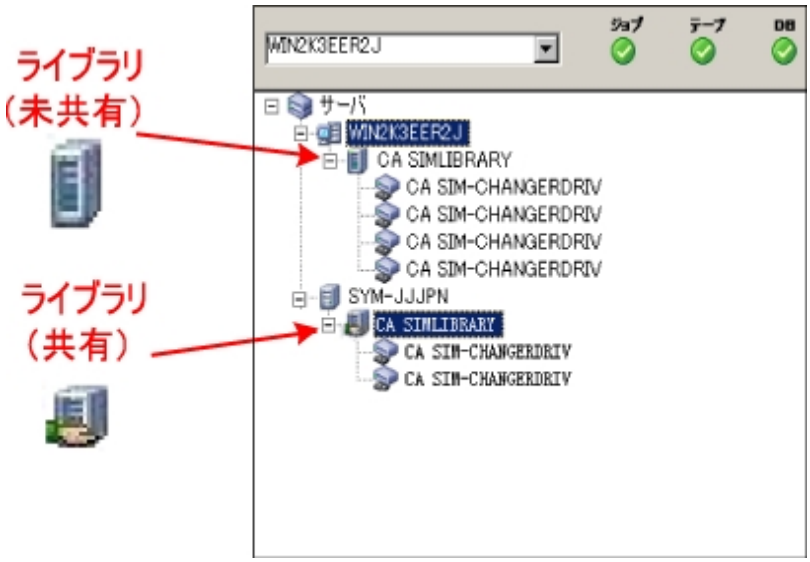
1. プライマリ サーバで Arcserve Backup マネージャ コンソールを開きます。
2. サーバ管理を開きます。

   ドメイン ディレクトリ ツリーに Arcserve ドメインのプライマリ サーバとすべてのメンバ サーバの名前が表示されていることを確認します。
3. データベース マネージャとジョブ ステータス マネージャを開きます。

   データベース情報およびアクティビティ ログのデータが表示できることを確認します。
4. デバイス マネージャを表示します。

   デバイス マネージャが、プライマリ サーバとすべてのメンバ サーバに接続されているすべてのデバイスを検出することを確認します。

   以下は、プライマリ サーバと接続されたデバイス、およびメンバ サーバと接続されたデバイスが含まれるデバイス マネージャ ウィンドウを示しています。プライマリ サーバは、共有されていないライブラリに接続されており、メンバ サーバは共有されているライブラリに接続されています。



   デバイス マネージャによってすべてのデバイスが検出されない場合、以下のタスクを完了します。

- デバイスが、サーバに正しく接続されていることを確認します。
- 適切なデバイスドライバがインストールされていることを確認します。
- デバイス環境設定を使用したデバイスの設定

これらのタスクを完了した後、Arcserve Backup でデバイスを検出できない場合は、テクニカルサポートまでお問い合わせください。

注： デバイスの設定の詳細については、「管理者ガイド」を参照してください。

5. 簡単なバックアップジョブをプライマリサーバ上でサブミットします。

   ジョブが正常に完了することを確認します。

   ジョブが失敗した場合は、以下のトラブルシューティングタスクを実行します。

   - ジョブステータスマネージャから、ジョブのアクティビティログの詳細を確認します。
   - ジョブに警告メッセージ、エラーメッセージ、あるいはその両方が含まれている場合、メッセージをダブルクリックして、問題の説明およびそれを修正するための手順を参照します。
   - 問題を修正したら、ジョブを再度サブミットします。

6. 単純バックアップジョブをメンバサーバ上でサブミットします。

   バックアップジョブが正常に完了することを確認します。

   ジョブが失敗した場合は、以下のトラブルシューティングタスクを実行します。

   - ジョブステータスマネージャから、ジョブのアクティビティログの詳細を確認します。
   - ジョブに警告メッセージ、エラーメッセージ、あるいはその両方が含まれている場合、メッセージをダブルクリックして、問題の説明およびそれを修正するための手順を参照します。
   - 問題を修正したら、ジョブを再度サブミットします。

7. 単純リストアジョブをプライマリサーバ上でサブミットします。

   リストアジョブが正常に完了することを確認します。

   ジョブが失敗した場合は、以下のトラブルシューティングタスクを実行します。

   - ジョブステータスマネージャから、ジョブのアクティビティログの詳細を確認します。

- ジョブに警告メッセージ、エラーメッセージ、あるいはその両方が含まれている場合、メッセージをダブルクリックして、問題の説明およびそれを修正するための手順を参照します。
- 問題を修正したら、ジョブを再度サブミットします。

8. 単純リストアジョブをメンバサーバ上でサブミットします。

   リストアジョブが正常に完了することを確認します。

   ジョブが失敗した場合は、以下のトラブルシューティングタスクを実行します。

   - ジョブステータスマネージャから、ジョブのアクティビティログの詳細を確認します。
   - ジョブに警告メッセージ、エラーメッセージ、あるいはその両方が含まれている場合、メッセージをダブルクリックして、問題の説明およびそれを修正するための手順を参照します。
   - 問題を修正したら、ジョブを再度サブミットします。

SAN への複数のプライマリ サーバとメンバ サーバのインストール

以下のセクションでは、複数のプライマリ サーバがそれぞれ 1 つまたは複数のメンバ サーバを管理し、Storage Area Network (SAN) で共有されているデバイスが存在する場合に Arcserve Backup をインストールする際の推奨事項について説明します。

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

推奨構成

インストールが必要なコンポーネント

SAN において複数のプライマリ サーバとメンバ サーバをインストールする方法

SAN における複数のプライマリ サーバとメンバ サーバのインストールを確認する方法

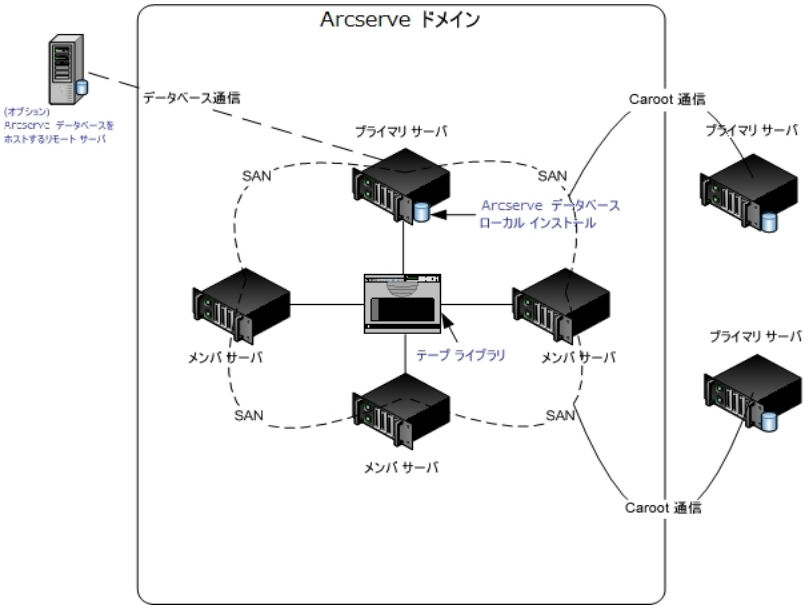
推奨構成

現在の環境を保護するために、同じドメイン内に存在する複数のバックアップサーバおよび SAN で共有されているデバイス(ライブラリなど) が必要な場合、プライマリサーバおよびメンバサーバのインストールオプションを使用して Arcserve Backup をインストールすることをお勧めします。この構成を使用すると、一元管理環境を構築できます。

プライマリサーバは、それ自身および 1 つまたは複数のメンバサーバを制御します。プライマリサーバから、プライマリサーバとメンバサーバ上で実行されるのバックアップやリストアなどのジョブを管理および監視することができるようになります。プライマリサーバおよびメンバサーバを使用すると、Arcserve Backup ドメイン内の複数のサーバを一元管理できるようになります。この環境では、マネージャコンソールを使用してプライマリサーバを管理できます。

注： Microsoft SQL Server 2014 SP2 Express Edition は、リモート通信をサポートしていません。Microsoft SQL Server 2014 SP2 Express Edition を使用して Arcserve Backup をインストールする場合は、インストールウィザードによって、プライマリサーバ上にデータベースアプリケーションおよび Arcserve データベースインスタンスがインストールされます。リモートシステム上で Arcserve データベースインスタンスをホストするには、Microsoft SQL Server を使用する必要があります。

共有デバイスを持つ Storage Area Network 内の一元管理環境のアーキテクチャを以下の図に示します。この環境は、1 つのプライマリサーバおよび 1 つまたは複数のメンバサーバで構成されます。Arcserve Backup データベースは Microsoft SQL Server 2008 Express Edition によってホストされ、データベースインスタンスはプライマリサーバ上に存在しています。



インストールが必要なコンポーネント

ご使用の環境にこの設定を展開するには、以下の Arcserve Backup コンポーネントをインストールする必要があります。

Arcserve Backup プライマリサーバ

メンバサーバおよびプライマリサーバ上で実行されるバックアップおよびリストアジョブを一元的にサブミット、管理、およびモニタする Arcserve Backup をサーバ上にインストールできます。

Arcserve Backup Central Management Option

Arcserve Backup ドメイン内のプライマリサーバとすべてのメンバサーバを中央のコンピュータから管理できるようになります。

注： Arcserve Backup プライマリサーバは前提条件のコンポーネントです。

Arcserve Backup Agent for Microsoft SQL Server

Arcserve Backup データベースを保護できるようにします。

注： Arcserve プライマリサーバおよびスタンドアロンサーバのインストールでは、Agent for Database という修正バージョンのエージェントがインストールされます。ArcserveArcserve

重要： アンインストールプログラムでは、コンピュータから Arcserve Backup データベースインスタンスがアンインストールされません。Arcserve Backup を再インストールする場合は、インストールウィザードによって、使用中のシステムで Microsoft SQL Server または Microsoft SQL Server 2014 Express Edition のデータベースインスタンスがあることが検出されます。その結果、インストールウィザードは、［製品の選択］ダイアログボックスで自動的に Arcserve Backup Agent for Microsoft SQL Server コンポーネントを選択します。

Arcserve Backup Client Agent for Windows

Arcserve Backup サーバにローカルでデータをバックアップできるようにします。

Arcserve Backup Tape Library Option

複数ライブラリおよびテープ RAID ライブラリを使用して、バックアップ、リストア、およびメディア管理のタスクを実行できるようになります。

Arcserve Backup Storage Area Network (SAN) Option

1 つまたは複数の Arcserve サーバが接続された高速ストレージネットワーク上で、1 つまたは複数のメディアライブラリを共有できるようになります。

以下の点に注意してください。

- Tape Library Option は SAN (Storage Area Network) オプションの前提条件のコンポーネントです。
- Storage Area Network (SAN) Option をインストールするには、Arcserve Backup プライマリサーバインストールオプションを指定する必要があります。

Arcserve Backup メンバサーバ

Arcserve Backup ドメイン内のサーバが、プライマリサーバからジョブやデバイスに関する命令を受け取れるようにします。

注： この構成を展開するには、SAN において、サーバごとに Storage Area Network (SAN) Option および Tape Library Option のライセンスを確実に発行する必要があります。

SAN において複数のプライマリ サーバとメンバ サーバをインストールする方法

複数のプライマリ サーバをメンバ サーバと共に SAN にインストールするには、以下のタスクを完了します。

1. プライマリ サーバとして機能するシステム上に Arcserve Backup プライマリ サーバをインストールします。

   注： Arcserve Backup プライマリ サーバをインストールすると、セットアップによって Central Management Option がインストールされます。

   Microsoft SQL Server 2008 Express または Microsoft SQL Server を Arcserve Backup データベースに指定できます。

2. プライマリ オプションに、Tape Library Option と SAN (Storage Area Network) オプションをインストールします。

   注： この構成を展開するには、SAN において、サーバごとに Storage Area Network (SAN) Option および Tape Library Option のライセンスを確実に発行する必要があります。

3. プライマリ サーバに接続されたデバイスをサポートするのに必要なオプションをインストールします。たとえば、Tape Library Option または NDMP NAS Option などです。

4. 新しい Arcserve ドメインのメンバとして機能するすべてのサーバ上に Arcserve Backup メンバ サーバをインストールします。

5. SAN の外部に配置する Arcserve Backup プライマリ サーバをインストールします。

   注： SAN の外部に配置する <caab> プライマリ サーバには、SAN の内部に配置するプライマリ サーバに割り当てるドメイン名とは異なるドメイン名を割り当てる必要があります。

6. メンバ サーバに接続されたデバイスをサポートするのに必要なオプションをインストールします。たとえば、NDMP NAS Option などです。

7. インストールを確認します。

SAN における複数のプライマリ サーバとメンバ サーバのインストールを確認する方法

Arcserve Backup インストールが正常に機能することを確認するには、以下のタスクを完了します。

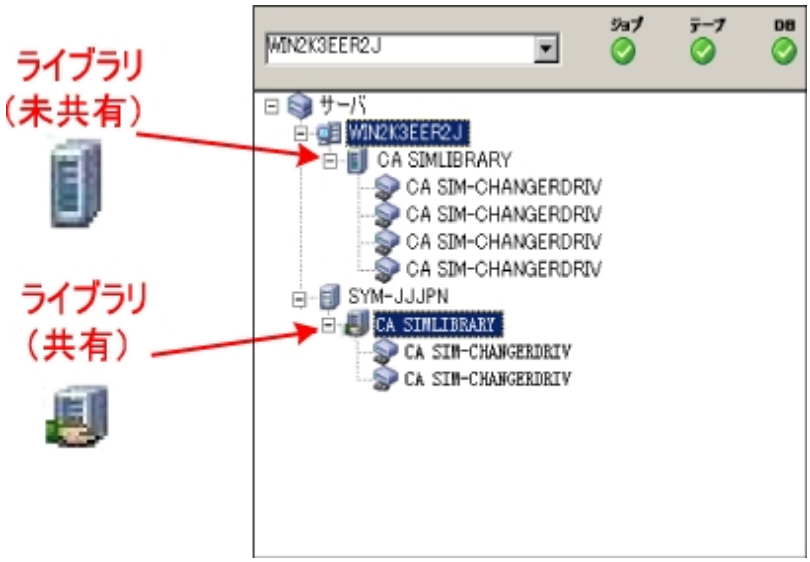
1. プライマリ サーバで Arcserve Backup マネージャ コンソールを開きます。
2. サーバ管理を開きます。

   ドメイン ディレクトリ ツリーに Arcserve ドメインのプライマリ サーバとすべてのメンバ サーバの名前が表示されていることを確認します。
3. データベース マネージャとジョブ ステータス マネージャを開きます。

   データベース情報およびアクティビティ ログのデータが表示できることを確認します。
4. デバイス マネージャを表示します。

   デバイス マネージャが、プライマリ サーバとすべてのメンバ サーバに接続されているすべてのデバイスを検出することを確認します。

   以下は、プライマリ サーバと接続されたデバイス、およびメンバ サーバと接続されたデバイスが含まれるデバイス マネージャ ウィンドウを示しています。プライマリ サーバは、共有されていないライブラリに接続されており、メンバ サーバは共有されているライブラリに接続されています。



   デバイス マネージャによってすべてのデバイスが検出されない場合、以下のタスクを完了します。

- デバイスが、サーバに正しく接続されていることを確認します。
- 適切なデバイスドライバがインストールされていることを確認します。
- デバイス環境設定を使用したデバイスの設定

これらのタスクを完了した後、Arcserve Backup でデバイスを検出できない場合は、テクニカルサポートまでお問い合わせください。

注： デバイスの設定の詳細については、「管理者ガイド」を参照してください。

5. 簡単なバックアップジョブをプライマリサーバ上でサブミットします。

   ジョブが正常に完了することを確認します。

   ジョブが失敗した場合は、以下のトラブルシューティングタスクを実行します。

   - ジョブステータスマネージャから、ジョブのアクティビティログの詳細を確認します。
   - ジョブに警告メッセージ、エラーメッセージ、あるいはその両方が含まれている場合、メッセージをダブルクリックして、問題の説明およびそれを修正するための手順を参照します。
   - 問題を修正したら、ジョブを再度サブミットします。

6. 単純バックアップジョブをメンバサーバ上でサブミットします。

   バックアップジョブが正常に完了することを確認します。

   ジョブが失敗した場合は、以下のトラブルシューティングタスクを実行します。

   - ジョブステータスマネージャから、ジョブのアクティビティログの詳細を確認します。
   - ジョブに警告メッセージ、エラーメッセージ、あるいはその両方が含まれている場合、メッセージをダブルクリックして、問題の説明およびそれを修正するための手順を参照します。
   - 問題を修正したら、ジョブを再度サブミットします。

7. 単純リストアジョブをプライマリサーバ上でサブミットします。

   リストアジョブが正常に完了することを確認します。

   ジョブが失敗した場合は、以下のトラブルシューティングタスクを実行します。

   - ジョブステータスマネージャから、ジョブのアクティビティログの詳細を確認します。

- ジョブに警告メッセージ、エラーメッセージ、あるいはその両方が含まれている場合、メッセージをダブルクリックして、問題の説明およびそれを修正するための手順を参照します。
- 問題を修正したら、ジョブを再度サブミットします。

8. 単純リストアジョブをメンバサーバ上でサブミットします。

   リストアジョブが正常に完了することを確認します。

   ジョブが失敗した場合は、以下のトラブルシューティングタスクを実行します。

   - ジョブステータスマネージャから、ジョブのアクティビティログの詳細を確認します。
   - ジョブに警告メッセージ、エラーメッセージ、あるいはその両方が含まれている場合、メッセージをダブルクリックして、問題の説明およびそれを修正するための手順を参照します。
   - 問題を修正したら、ジョブを再度サブミットします。

クラスタ対応環境への Arcserve Backup のインストール

以下のセクションでは、クラスタ対応環境に Arcserve Backup をインストールする際の推奨事項について説明します。

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

- 推奨構成
- インストールが必要なコンポーネント
- クラスタ対応環境へ Arcserve Backup をインストールする方法
- クラスタ対応インストールを確認する方法

推奨構成

現在の環境を保護するために、同じドメイン内に存在する複数のバックアップサーバとクラスタ対応環境の高可用性が必要な場合、プライマリサーバおよびメンバサーバのインストールオプションを使用して Arcserve Backup をクラスタ対応環境にインストールすることをお勧めします。このアーキテクチャによって、Arcserve Backup 環境を一元管理し、クラスタ対応環境の高可用性機能を維持できます。

プライマリサーバは、それ自身および 1 つまたは複数のメンバサーバを制御します。プライマリサーバから、プライマリサーバとメンバサーバ上で実行されるのバックアップやリストアなどのジョブを管理および監視することができるようになります。プライマリサーバおよびメンバサーバを使用すると、Arcserve Backup ドメイン内の複数のサーバを一元管理できるようになります。この環境では、マネージャコンソールを使用してプライマリサーバを管理できます。

注： Microsoft SQL Server 2014 SP2 Express Edition は、リモート通信をサポートしていません。Microsoft SQL Server 2014 SP2 Express Edition を使用して Arcserve Backup をインストールする場合は、インストールウィザードによって、プライマリサーバ上にデータベースアプリケーションおよび Arcserve データベースインスタンスがインストールされます。リモートシステム上で Arcserve データベースインスタンスをホストするには、Microsoft SQL Server を使用する必要があります。

一元管理されたクラスタ対応環境のアーキテクチャを以下の図に示します。この環境は、1 つのプライマリサーバおよび 1 つまたは複数のメンバサーバで構成されます。Arcserve データベースは Microsoft SQL Server 2008 Express Edition によってホストされ、データベースインスタンスはプライマリサーバ上に存在しています。

インストールが必要なコンポーネント

ご使用の環境にこの設定を展開するには、以下の Arcserve Backup コンポーネントをインストールする必要があります。

Arcserve Backup プライマリサーバ

メンバサーバおよびプライマリサーバ上で実行されるバックアップおよびリストアジョブを一元的にサブミット、管理、およびモニタする Arcserve Backup をサーバ上にインストールできます。

Arcserve Backup Central Management Option

Arcserve Backup ドメイン内のプライマリサーバとすべてのメンバサーバを中央のコンピュータから管理できるようになります。

注： Arcserve Backup プライマリサーバは前提条件のコンポーネントです。

Arcserve Backup Agent for Microsoft SQL Server

Arcserve Backup データベースを保護できるようにします。

注： Arcserve プライマリサーバおよびスタンドアロンサーバのインストールでは、Agent for Database という修正バージョンのエージェントがインストールされます。ArcserveArcserve

重要： アンインストールプログラムでは、コンピュータから Arcserve Backup データベースインスタンスがアンインストールされません。Arcserve Backup を再インストールする場合は、インストールウィザードによって、使用中のシステムで Microsoft SQL Server または Microsoft SQL Server 2014 SP2 Express Edition のデータベースインスタンスがあることが検出されます。その結果、インストールウィザードは、 製品の選択]ダイアログボックスで自動的に Arcserve Backup Agent for Microsoft SQL Server コンポーネントを選択します。

Arcserve Backup Client Agent for Windows

Arcserve Backup サーバにローカルでデータをバックアップできるようにします。

Arcserve Backup メンバサーバ

Arcserve Backup ドメイン内のサーバが、プライマリサーバからジョブやデバイスに関する命令を受け取れるようにします。

クラスタ対応環境へ Arcserve Backup をインストールする方法

以下のクラスタプラットフォームでは、ジョブフェールオーバ機能を持つクラスタ環境に Arcserve Backup をインストールできます。

- x86/AMD64 Windows Server の Microsoft Cluster Server (MSCS)
- NEC CLUSTERPRO/ExpressCluster

クラスタ対応環境への Arcserve Backup のインストール方法

1. クラスタ対応環境へ Arcserve Backup をインストールする方法については、以下のセクションのいずれかを参照します。
   - MSCS の場合は、「MSCS での Arcserve Backup サーバの展開」を参照してください。
   - NEC CLUSTERPRO の場合は、「NEC クラスタでの Arcserve Backup サーバの展開」を参照してください。
2. インストールを確認します。

クラスタ対応インストールを確認する方法

Arcserve Backup インストールが正常に機能することを確認するには、以下のタスクを完了します。

1. プライマリサーバで Arcserve Backup マネージャコンソールを開きます。

   ジョブステータスマネージャ内にデータベース情報およびアクティビティログデータが表示できることを確認します。

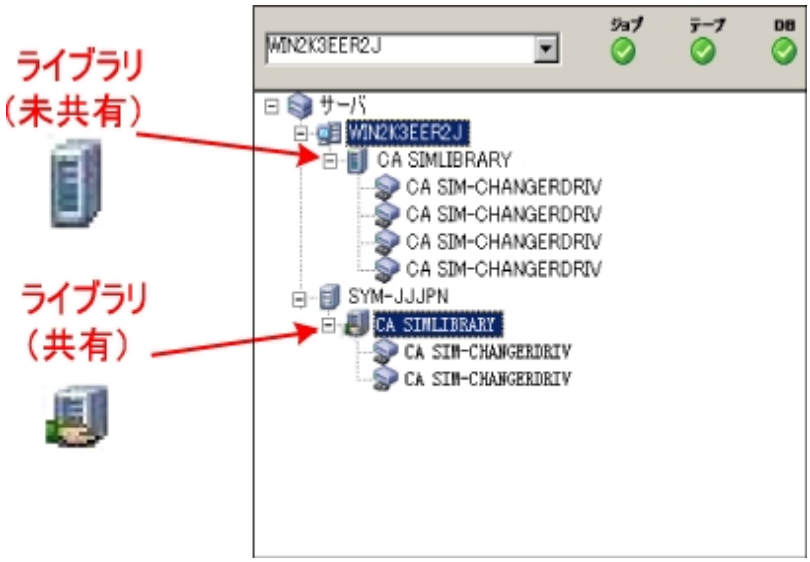
2. データベースマネージャとジョブステータスマネージャを開きます。

   データベース情報およびアクティビティログのデータが表示できることを確認します。

3. デバイスマネージャを表示します。

   デバイスマネージャが、プライマリサーバとすべてのメンバサーバに接続されているすべてのデバイスを検出することを確認します。

   以下は、プライマリサーバと接続されたデバイス、およびメンバサーバと接続されたデバイスが含まれるデバイスマネージャウィンドウを示しています。プライマリサーバは、共有されていないライブラリに接続されており、メンバサーバは共有されているライブラリに接続されています。



   デバイスマネージャによってすべてのデバイスが検出されない場合、以下のタスクを完了します。

   - デバイスが、サーバに正しく接続されていることを確認します。
   - 適切なデバイスドライバがインストールされていることを確認します。
   - デバイス環境設定を使用したデバイスの設定

これらのタスクを完了した後、Arcserve Backup でデバイスを検出できない場合は、テクニカル サポートまでお問い合わせください。

注： デバイスの設定の詳細については、「管理者ガイド」を参照してください。

4. Arcserve クラスタ グループを異なるノードに移動します。

   すべての Arcserve サービスが正常に開始されたことを確認します。

   注： クラスタ グループを他のノードに移動する間、マネージャ コンソールの応答が断続的に停止することがあります。

5. (オプション) 必要な設定を実行します。たとえば、ファイル システム デバイスを設定します。

6. 単純バックアップ ジョブをサブミットします。

   バックアップ ジョブが正常に完了することを確認します。

7. 単純リストア ジョブをサブミットします。

   リストア ジョブが正常に完了することを確認します。

8. ジョブ ステータス マネージャを表示します。

   ジョブに関する情報が [ジョブ キュー] タブおよびアクティビティ ログに表示されることを確認します。

以前のリリースからの Arcserve Backup のアップグレードに関する推奨事項

以前のリリースから Arcserve Backup をアップグレードする際には、以下の推奨事項を考慮してください。

Arcserve Backup のアップグレードの前提条件タスクの完了方法

スタンドアロン サーバまたはプライマリ サーバのアップグレード

ドメイン内の複数のスタンドアロン サーバのアップグレード

リモート データベースを共有する複数のスタンドアロン サーバのアップグレード

ローカルまたはリモートのデータベースを使用する SAN 内のサーバのアップグレード

SAN および非 SAN の環境における複数のサーバの本リリースへのアップグレード

セントラル データベースを使用する複数のサーバのアップグレード

クラスタ対応環境における複数サーバのアップグレード

Arcserve Backup のアップグレードの前提条件タスクの完了方法

Arcserve Backup をアップグレードする前に、以下の前提条件タスクを完了します。

ライセンス登録

Arcserve Backup のアップグレードに必要なライセンスがあることを確認します。

システム要件

Arcserve Backup をインストールするコンピュータのシステム要件については、「リリースノート」を参照してください。

アップグレードの要件

現在のインストールを本リリースにアップグレードできるかどうかを判断します。現在のインストールがアップグレードをサポートしていない場合、Arcserve をアンインストールしたうえで本リリースをインストールする必要があります。詳細については、「サポート対象のアップグレード」を参照してください。

Arcserve Backup データベース

Arcserve Backup データベースをホストするアプリケーションを判別します。以下のアーキテクチャ上の条件を考慮します。

- 現在、Microsoft SQL Server を使用して Arcserve データベースをホストしている場合、Microsoft SQL Server を引き続き使用する必要があります。

  Arcserve Backup は、Microsoft SQL Server データベースから Microsoft SQL Server 2014 SP1 Express データベースへデータをマイグレートできません。そのため、現在 Arcserve データベースとして Microsoft SQL Server を実行している場合は、Arcserve Backup データベースとして Microsoft SQL Server を指定する必要があります。

- Microsoft SQL Server 2014 SP1 Express Edition は、リモート通信をサポートしていません。現在の環境がリモート データベース設定で構成されている場合、またはリモート システムにインストールされているデータベース アプリケーションにアクセスする場合は、Microsoft SQL Server を使用して Arcserve データベースをホストする必要があります。

  注：Arcserve データベースの要件に関する詳細は、「データベースの要件」を参照してください。

Arcserve Backup サーバタイプ

必要な Arcserve Backup サーバのタイプを判別します。インストール ウィザードによって、現在の構成が検出および分析されます。次に、現在のインストー

ルに基づき、ウィザードはアップグレード対象の Arcserve Backup サーバのタイプとインストールする必要があるエージェントとオプションを判別します。

将来、現在の環境に Arcserve Backup サーバを追加する場合、以下のサーバインストールのタイプを考察してください。

- **スタンドアロン サーバ:** スタンドアロン サーバインストールでは、将来、独立したスタンドアロン サーバをインストールする必要があります。
- **プライマリ サーバ** -- プライマリ サーバをインストールすると、複数の Arcserve Backup サーバを一元管理できます。

  一元管理機能を有効にするには、Arcserve Backup および Central Management Option をインストールしてライセンスを登録する必要があります。

  注: さまざまなタイプの Arcserve サーバインストールの詳細については、「Arcserve Backup サーバインストールのタイプ」を参照してください。

接続デバイス

アップグレード プロセスを開始する前に、ライブラリなどのすべてのデバイスが Arcserve Backup サーバに接続されていることを確認します。アップグレードの完了後に初めてテープ エンジンを起動すると、接続されたデバイスが Arcserve Backup によって自動的に検出および設定されるので、手動による設定は必要ありません。

進行中のジョブ

アップグレード プロセスを開始する前に、すべてのジョブが停止していることを確認します。Arcserve Backup は、[レディ]状態のすべてのジョブを検出して、[ホールド]状態にします。実行中のプロセスがある場合、Arcserve Backup はメッセージを表示し、実行中のすべてのジョブが完了するまでアップグレード プロセスは一時停止します。

スタンドアロン サーバまたはプライマリ サーバのアップグレード

以下のセクションでは、Arcserve スタンドアロン サーバを本リリースにアップグレードする際の推奨事項について説明します。

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

現在の構成：Arcserve スタンドアロン サーバ

推奨構成：Arcserve Backup スタンドアロン サーバまたはプライマリ サーバ

インストールが必要な新しいコンポーネント

アップグレードが必要な新しいコンポーネント

Arcserve スタンドアロン サーバへアップグレードする方法

スタンドアロン サーバまたはプライマリ サーバのアップグレードを確認する方法

現在の構成：Arcserve スタンドアロン サーバ

以前のリリースの Arcserve Backup スタンドアロン サーバ構成のアーキテクチャを以下の図に示します。

推奨構成：Arcserve Backup スタンドアロン サーバまたはプライマリ サーバ

現在の Arcserve インストールが、単一のスタンドアロン サーバで構成されている場合、Arcserve Backup スタンドアロン サーバまたは Arcserve Backup プライマリ サーバにアップグレードすることをお勧めします。

Arcserve Backup プライマリ サーバまたは Arcserve Backup スタンドアロン サーバのアーキテクチャを以下の図に示します。

インストールが必要な新しいコンポーネント

ご使用の環境にこの設定を展開するには、以下の Arcserve Backup コンポーネントをインストールする必要があります。

Arcserve Backup スタンドアロン サーバ

スタンドアロン バックアップ サーバ上に Arcserve Backup をインストールできるようにします。

(オプション) Arcserve Backup プライマリ サーバメンバ サーバおよびプライマリ サーバ上で実行されるバックアップおよびリストア ジョブを一元的にサブミット、管理、およびモニタする Arcserve Backup をサーバ上にインストールできます。

Arcserve Backup Agent for Microsoft SQL Server

Arcserve Backup データベースを保護できるようにします。

注： Arcserve プライマリ サーバおよび スタンドアロン サーバのインストールでは、Agent for Database という修正バージョンのエージェントがインストールされます。ArcserveArcserve

重要： アンインストール プログラムでは、コンピュータから Arcserve Backup データベース インスタンスがアンインストールされません。Arcserve Backup を再インストールする場合は、インストール ウィザードによって、使用中のシステムで Microsoft SQL Server または Microsoft SQL Server 2014 Express Edition のデータベース インスタンスがあることが検出されます。その結果、インストール ウィザードは、 製品の選択]ダイアログ ボックスで自動的に Arcserve Backup Agent for Microsoft SQL Server コンポーネントを選択します。

Arcserve Backup Client Agent for Windows

Arcserve Backup サーバにローカルでデータをバックアップできるようにします。

アップグレードが必要な新しいコンポーネント

使用環境にこの設定を展開するには、以下の Arcserve Backup コンポーネントをアップグレードする必要があります。

- 現在の Arcserve 環境にインストールされているすべてのコンポーネント

Arcserve スタンドアロン サーバへアップグレードする方法

Arcserve スタンドアロン サーバ環境を Arcserve Backup スタンドアロン サーバまたはプライマリ サーバ環境にアップグレードするには、以下のタスクを完了します。

1. ターゲット システムに Arcserve Backup プライマリ サーバまたは Arcserve Backup スタンドアロン サーバをインストールします。
2. プロンプトが表示されたら、以前のリリースから新しいデータベースへデータをマイグレートします。

   Arcserve Backup をアップグレードすると、セットアップによってマイグレーション ウィザードが起動されます。このウィザードを使用して、以前のインストールから新しい Arcserve Backup サーバへデータをマイグレートできます。ジョブ、ログ、およびユーザセキュリティに関連するデータをマイグレートできます。

   データをマイグレートするには、続いて表示されるダイアログ ボックスのプロンプトに従い、必要な情報をすべて入力します。
3. インストールを確認します。
4. (オプション) Arcserve Backup データベースのバックアップを最後に実行したのがこのリリースへのアップグレード前である場合、Arcserve Backup は Arcserve Backup データベースの復旧をサポートしません。アップグレードの完了後に、できるだけ早く Arcserve Backup データベースをバックアップすることをお勧めします。Arcserve Backup データベースのバックアップの詳細については、「管理者ガイド」を参照してください。

   詳細情報:

   アップグレードに関する考慮事項

スタンドアロン サーバまたはプライマリ サーバのアップグレードを確認する方法

Arcserve Backup インストールが正常に機能することを確認するには、以下のタスクを完了します。

1. Arcserve Backup マネージャコンソールを開きます。
2. データベース マネージャとジョブ ステータス マネージャを開きます。

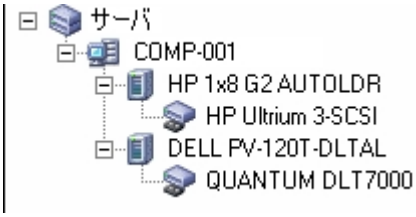
   データベース情報およびアクティビティ ログのデータが表示できることを確認します。

   以前のバックアップ データがすべて正常にマイグレートされたことを確認します。

   注： Arcserve Backup はジョブに関する情報、ログおよびユーザ情報を古いサーバから新しいインストールへマイグレートします。
3. デバイス マネージャを表示します。

   デバイス マネージャで、サーバに接続されているすべてのデバイスが検出されることを確認します。

   以下の画面は、ライブラリが接続されたスタンドアロン サーバが表示されたデバイス マネージャを示しています。ライブラリは共有されません。

   デバイス マネージャによってすべてのデバイスが検出されない場合、以下のタスクを完了します。

   - デバイスが、サーバに正しく接続されていることを確認します。
   - 適切なデバイスドライバがインストールされていることを確認します。
   - デバイス環境設定を使用したデバイスの設定

   これらのタスクを完了した後、Arcserve Backup でデバイスを検出できない場合は、テクニカル サポート(www.arcserve.com) までお問い合わせください。

   注： デバイスの設定の詳細については、「管理者ガイド」を参照してください。

4. (オプション) [デバイス環境設定]を使用して、必要な設定を実行します。たとえば、ファイルシステムデバイスを設定します。
5. 単純バックアップジョブをサブミットします。

   バックアップジョブが正常に完了することを確認します。

   ジョブが失敗した場合は、以下のトラブルシューティングタスクを実行します。

   - ジョブステータスマネージャから、ジョブのアクティビティログの詳細を確認します。
   - ジョブに警告メッセージ、エラーメッセージ、あるいはその両方が含まれていた場合、メッセージをダブルクリックして、問題の説明およびそれを修正するための手順を参照します。
   - 問題を修正したら、ジョブを再度サブミットします。
6. 単純リストアジョブをサブミットします。

   リストアジョブが正常に完了することを確認します。

   ジョブが失敗した場合は、以下のトラブルシューティングタスクを実行します。

   - ジョブステータスマネージャから、ジョブのアクティビティログの詳細を確認します。
   - ジョブに警告メッセージ、エラーメッセージ、あるいはその両方が含まれていた場合、メッセージをダブルクリックして、問題の説明およびそれを修正するための手順を参照します。

   問題を修正したら、ジョブを再度サブミットします。
7. ジョブステータスマネージャを表示します。

   [ジョブキュー]タブおよび[アクティビティログ]に、ジョブに関する情報が表示されていることを確認します。

ドメイン内の複数のスタンドアロン サーバのアップグレード

以下のセクションでは、ドメイン内でデータベースを共有しない複数の Arcserve サーバを、プライマリサーバと複数のメンバサーバで構成される Arcserve Backup ドメインにアップグレードする際の推奨事項について説明します。

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

現在の構成：ドメイン内の複数の Arcserve サーバ

推奨構成：プライマリサーバおよびメンバサーバで構成される Arcserve Backup ドメイン

インストールが必要な新しいコンポーネント

アップグレードが必要な新しいコンポーネント

一元管理環境へ複数の Arcserve サーバをアップグレードする方法

プライマリサーバおよびメンバサーバで構成されるドメインのアップグレードを確認する方法

現在の構成：ドメイン内の複数の Arcserve サーバ

以前のリリースにおいて、ドメイン内に複数の Arcserve Backup サーバが存在するアーキテクチャを以下の図に示します。

推奨構成：プライマリサーバおよびメンバサーバで構成される Arcserve Backup ドメイン

現在の構成が、ドメイン内に複数の Arcserve Backup サーバを含む場合、1 つのプライマリサーバと 1 つ以上のメンバサーバで構成される一元管理環境にアップグレードすることをお勧めします。

一元管理環境にアップグレードするには、既存の Arcserve Backup サーバの 1 つを Arcserve Backup プライマリサーバにアップグレードした上で、ドメイン内のほかのすべてのサーバを Arcserve Backup メンバサーバにアップグレードする必要があります。

注： 以前のインストールにおけるドメインのプライマリサーバが Arcserve Backup プライマリサーバの役割を引き継ぐ必要があります。

メンバサーバをインストールするには、インストールウィザードがネットワーク内の Arcserve Backup ドメイン名とプライマリサーバ名を検出できる必要があります。そのため、Arcserve Backup を少なくとも 1 つのプライマリサーバにインストールした後でメンバサーバをインストールする必要があります。

注： Microsoft SQL Server 2008 Express Edition は、リモート通信をサポートしていません。Microsoft SQL Server 2008 Express Edition を使用して Arcserve Backup をインストールする場合は、インストールウィザードによって、プライマリサーバ上にデータベースアプリケーションおよび Arcserve データベースインスタンスがインストールされます。リモートシステム上で Arcserve データベースインスタンスをホストするには、Microsoft SQL Server を使用する必要があります。

一元管理環境のアーキテクチャを以下の図に示します。

注： Arcserve Backup がリモートデータベースと通信できるようにするには、Microsoft SQL Server を使用して Arcserve データベースをホストする必要があります。

インストールが必要な新しいコンポーネント

ご使用の環境にこの設定を展開するには、以下の Arcserve Backup コンポーネントをインストールする必要があります。

Arcserve Backup プライマリサーバ

メンバサーバおよびプライマリサーバ上で実行されるバックアップおよびリストアジョブを一元的にサブミット、管理、およびモニタする Arcserve Backup をサーバ上にインストールできます。

Arcserve Backup Central Management Option

Arcserve Backup ドメイン内のプライマリサーバとすべてのメンバサーバを中央のコンピュータから管理できるようになります。

注： Arcserve Backup プライマリサーバは前提条件のコンポーネントです。

Arcserve Backup Agent for Microsoft SQL Server

Arcserve Backup データベースを保護できるようにします。

注： Arcserve プライマリサーバおよびスタンドアロンサーバのインストールでは、Agent for Database という修正バージョンのエージェントがインストールされます。ArcserveArcserve

重要： アンインストールプログラムでは、コンピュータから Arcserve Backup データベースインスタンスがアンインストールされません。Arcserve Backup を再インストールする場合は、インストールウィザードによって、使用中のシステムで Microsoft SQL Server または Microsoft SQL Server 2014 Express Edition のデータベースインスタンスがあることが検出されます。その結果、インストールウィザードは、［製品の選択］ダイアログボックスで自動的に Arcserve Backup Agent for Microsoft SQL Server コンポーネントを選択します。

Arcserve Backup Client Agent for Windows

Arcserve Backup サーバにローカルでデータをバックアップできるようにします。

Arcserve Backup メンバサーバ

Arcserve ドメイン内のサーバが、プライマリサーバからジョブやデバイスに関する命令を受け取れるようにします。

アップグレードが必要な新しいコンポーネント

使用環境にこの設定を展開するには、以下の Arcserve Backup コンポーネントをアップグレードする必要があります。

- 現在の Arcserve 環境にインストールされているすべてのコンポーネント

一元管理環境へ複数の Arcserve サーバをアップグレードする方法

複数の Arcserve サーバを、Arcserve Backup プライマリサーバおよび 1 つまたは複数の Arcserve Backup メンバサーバで構成される一元管理環境にアップグレードするには、以下のタスクを完了します。

1. プライマリサーバとして機能するシステム上に Arcserve Backup プライマリサーバをインストールします。

   注： Arcserve Backup プライマリサーバをインストールすると、セットアップによって Central Management Option がインストールされます。

   Microsoft SQL Server 2008 Express または Microsoft SQL Server を Arcserve Backup データベースに指定できます。

   プロンプトが表示されたら、以前のリリースから新しいデータベースへデータをマイグレートします。

2. 新しい Arcserve ドメインのメンバとして機能するすべてのサーバ上に Arcserve Backup メンバサーバをインストールします。

   プロンプトが表示されたら、以前のリリースから新しいデータベースへデータをマイグレートします。

3. インストールを確認します。

4. (オプション) Arcserve Backup データベースのバックアップを最後に実行したのがこのリリースへのアップグレード前である場合、Arcserve Backup は Arcserve Backup データベースの復旧をサポートしません。アップグレードの完了後に、できるだけ早く Arcserve Backup データベースをバックアップすることをお勧めします。Arcserve Backup データベースのバックアップの詳細については、「管理者ガイド」を参照してください。

   詳細情報：

   アップグレードに関する考慮事項

プライマリ サーバおよびメンバ サーバで構成されるドメインのアップグレードを確認する方法

Arcserve Backup インストールが正常に機能することを確認するには、以下のタスクを完了します。

1. プライマリ サーバで Arcserve Backup マネージャ コンソールを開きます。
2. サーバ管理を開きます。

   ドメイン ディレクトリ ツリーに Arcserve ドメインのプライマリ サーバとすべてのメンバ サーバの名前が表示されていることを確認します。
3. データベース マネージャとジョブ ステータス マネージャを開きます。

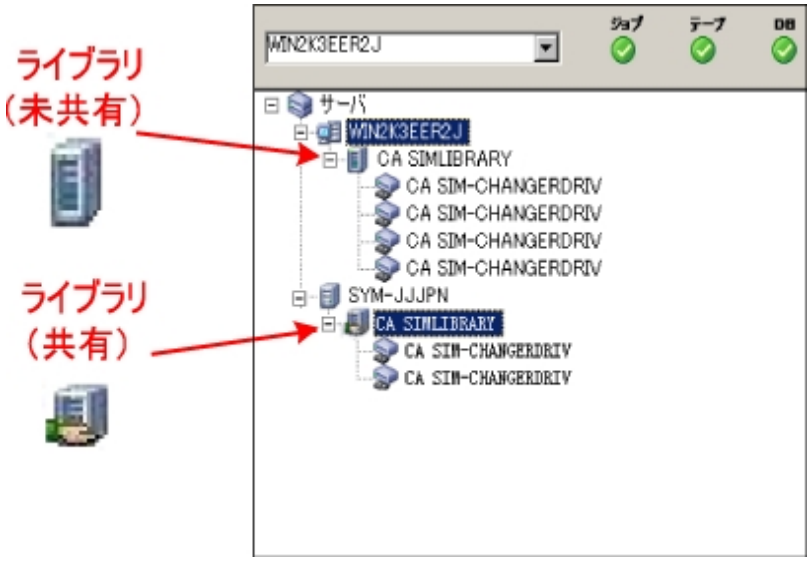
   データベース情報およびアクティビティ ログのデータが表示できることを確認します。

   以前のバックアップ データがすべて正常にマイグレートされたことを確認します。

   注： Arcserve Backup はジョブに関する情報、ログおよびユーザ情報を古いサーバから新しいプライマリ サーバへマイグレートします。
4. デバイス マネージャを表示します。

   デバイス マネージャが、プライマリ サーバとすべてのメンバ サーバに接続されているすべてのデバイスを検出することを確認します。

   以下は、プライマリ サーバと接続されたデバイス、およびメンバ サーバと接続されたデバイスが含まれるデバイス マネージャ ウィンドウを示しています。プライマリ サーバは、共有されていないライブラリに接続されており、メンバ サーバは共有されているライブラリに接続されています。



デバイス マネージャによってすべてのデバイスが検出されない場合、以下のタスクを完了します。

- デバイスが、サーバに正しく接続されていることを確認します。
- 適切なデバイスドライバがインストールされていることを確認します。
- デバイス環境設定を使用したデバイスの設定

これらのタスクを完了した後、Arcserve Backup でデバイスを検出できない場合は、テクニカル サポートまでお問い合わせください。

注： デバイスの設定の詳細については、「管理者ガイド」を参照してください。

5. 簡単なバックアップ ジョブをプライマリ サーバ上でサブミットします。

   ジョブが正常に完了することを確認します。

   ジョブが失敗した場合は、以下のトラブルシューティング タスクを実行します。

   - ジョブ ステータス マネージャから、ジョブのアクティビティ ログの詳細を確認します。
   - ジョブに警告メッセージ、エラー メッセージ、あるいはその両方が含まれている場合、メッセージをダブルクリックして、問題の説明およびそれを修正するための手順を参照します。
   - 問題を修正したら、ジョブを再度サブミットします。

6. 単純バックアップ ジョブをメンバ サーバ上でサブミットします。

   バックアップ ジョブが正常に完了することを確認します。

ジョブが失敗した場合は、以下のトラブルシューティングタスクを実行します。

- ジョブステータスマネージャから、ジョブのアクティビティログの詳細を確認します。
- ジョブに警告メッセージ、エラーメッセージ、あるいはその両方が含まれている場合、メッセージをダブルクリックして、問題の説明およびそれを修正するための手順を参照します。
- 問題を修正したら、ジョブを再度サブミットします。

7. 単純リストアジョブをプライマリサーバ上でサブミットします。

   リストアジョブが正常に完了することを確認します。

   ジョブが失敗した場合は、以下のトラブルシューティングタスクを実行します。

   - ジョブステータスマネージャから、ジョブのアクティビティログの詳細を確認します。
   - ジョブに警告メッセージ、エラーメッセージ、あるいはその両方が含まれている場合、メッセージをダブルクリックして、問題の説明およびそれを修正するための手順を参照します。
   - 問題を修正したら、ジョブを再度サブミットします。

8. 単純リストアジョブをメンバサーバ上でサブミットします。

   リストアジョブが正常に完了することを確認します。

   ジョブが失敗した場合は、以下のトラブルシューティングタスクを実行します。

   - ジョブステータスマネージャから、ジョブのアクティビティログの詳細を確認します。
   - ジョブに警告メッセージ、エラーメッセージ、あるいはその両方が含まれている場合、メッセージをダブルクリックして、問題の説明およびそれを修正するための手順を参照します。
   - 問題を修正したら、ジョブを再度サブミットします。

リモート データベースを共有する複数のスタンドアロン サーバのアップグレード

以下のセクションでは、リモート Arcserve データベースを共有する複数の Arcserve スタンドアロン サーバを、Arcserve Backup プライマリ サーバと複数の Arcserve Backup メンバ サーバにアップグレードする際の推奨事項について説明します。

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

現在の構成：リモート データベースを共有する複数の Arcserve サーバ

推奨構成：プライマリ サーバおよびメンバ サーバで構成される Arcserve Backup ドメイン

インストールが必要な新しいコンポーネント

アップグレードが必要な新しいコンポーネント

データベースを共有する複数の Arcserve サーバを一元管理環境へアップグレードする方法

一元管理環境のアップグレードを確認する方法

現在の構成：リモート データベースを共有する複数の Arcserve サーバ

以前のリリースにおける、ドメイン内でリモート データベースを共有する複数の Arcserve Backup スタンドアロン サーバのアーキテクチャを以下の図に示します。

推奨構成：プライマリサーバおよびメンバサーバで構成される Arcserve Backup ドメイン

現在の構成が、ドメイン内に複数の Arcserve Backup サーバを含む場合、1 つのプライマリサーバと 1 つ以上のメンバサーバで構成される一元管理環境にアップグレードすることをお勧めします。一元管理環境では、Arcserve Backup ドメインにおいてローカルまたはリモートのデータベースを共有できます。

一元管理環境にアップグレードするには、既存の Arcserve サーバの 1 つを Arcserve Backup プライマリサーバにアップグレードした上で、ドメイン内のほかのすべてのサーバを Arcserve Backup メンバサーバにアップグレードする必要があります。

注： 以前のインストールで Arcserve データベースをホストしているシステムが Arcserve Backup プライマリサーバの役割を引き継ぐ必要があります。

注： Microsoft SQL Server 2008 Express Edition は、リモート通信をサポートしていません。Microsoft SQL Server 2008 Express Edition を使用して Arcserve Backup をインストールする場合は、インストールウィザードによって、プライマリサーバ上にデータベースアプリケーションおよび Arcserve データベースインスタンスがインストールされます。リモートシステム上で Arcserve データベースインスタンスをホストするには、Microsoft SQL Server を使用する必要があります。

一元管理環境のアーキテクチャを以下の図に示します。

注： Arcserve Backup がリモートデータベースと通信できるようにするには、Microsoft SQL Server を使用して Arcserve Backup データベースインスタンスをホストする必要があります。

インストールが必要な新しいコンポーネント

ご使用の環境にこの設定を展開するには、以下の Arcserve Backup コンポーネントをインストールする必要があります。

Arcserve Backup プライマリサーバ

メンバサーバおよびプライマリサーバ上で実行されるバックアップおよびリストアジョブを一元的にサブミット、管理、およびモニタする Arcserve Backup をサーバ上にインストールできます。

Arcserve Backup Central Management Option

Arcserve Backup ドメイン内のプライマリサーバとすべてのメンバサーバを中央のコンピュータから管理できるようになります。

注： Arcserve Backup プライマリサーバは前提条件のコンポーネントです。

Arcserve Backup Agent for Microsoft SQL Server

Arcserve Backup データベースを保護できるようにします。

注： Arcserve プライマリサーバおよびスタンドアロンサーバのインストールでは、Agent for Database という修正バージョンのエージェントがインストールされます。ArcserveArcserve

重要： アンインストールプログラムでは、コンピュータから Arcserve Backup データベースインスタンスがアンインストールされません。Arcserve Backup を再インストールする場合は、インストールウィザードによって、使用中のシステムで Microsoft SQL Server または Microsoft SQL Server 2014 Express Edition のデータベースインスタンスがあることが検出されます。その結果、インストールウィザードは、［製品の選択］ダイアログボックスで自動的に Arcserve Backup Agent for Microsoft SQL Server コンポーネントを選択します。

Arcserve Backup Client Agent for Windows

Arcserve Backup サーバにローカルでデータをバックアップできるようにします。

Arcserve Backup メンバサーバ

Arcserve ドメイン内のサーバが、プライマリサーバからジョブやデバイスに関する命令を受け取れるようにします。

アップグレードが必要な新しいコンポーネント

使用環境にこの設定を展開するには、以下の Arcserve Backup コンポーネントをアップグレードする必要があります。

- 現在の Arcserve 環境にインストールされているすべてのコンポーネント

データベースを共有する複数の Arcserve サーバを一元管理環境へアップグレードする方法

データベースを共有する複数の Arcserve サーバを一元管理された Arcserve ドメインにアップグレードするには、以下のタスクを完了します。

1. プライマリサーバとして機能するシステム上に Arcserve Backup プライマリサーバをインストールします。

   注： Arcserve Backup プライマリサーバをインストールすると、セットアップによって Central Management Option がインストールされます。

   Microsoft SQL Server 2008 Express または Microsoft SQL Server を Arcserve Backup データベースに指定できます。

   プロンプトが表示されたら、以前のリリースから新しいデータベースへデータをマイグレートします。

2. 新しい Arcserve ドメインのメンバとして機能するすべてのサーバ上に Arcserve Backup メンバサーバをインストールします。

   プロンプトが表示されたら、以前のリリースから新しいデータベースへデータをマイグレートします。

3. インストールを確認します。

4. (オプション) Arcserve Backup データベースのバックアップを最後に実行したのがこのリリースへのアップグレード前である場合、Arcserve Backup は Arcserve Backup データベースの復旧をサポートしません。アップグレードの完了後に、できるだけ早く Arcserve Backup データベースをバックアップすることをお勧めします。Arcserve Backup データベースのバックアップの詳細については、「管理者ガイド」を参照してください。

   詳細情報：

   アップグレードに関する考慮事項

一元管理環境のアップグレードを確認する方法

Arcserve Backup インストールが正常に機能することを確認するには、以下のタスクを完了します。

1. プライマリサーバで Arcserve Backup マネージャコンソールを開きます。
2. サーバ管理を開きます。

   ドメインディレクトリツリーに Arcserve ドメインのプライマリサーバとすべてのメンバサーバの名前が表示されていることを確認します。
3. データベースマネージャとジョブステータスマネージャを開きます。

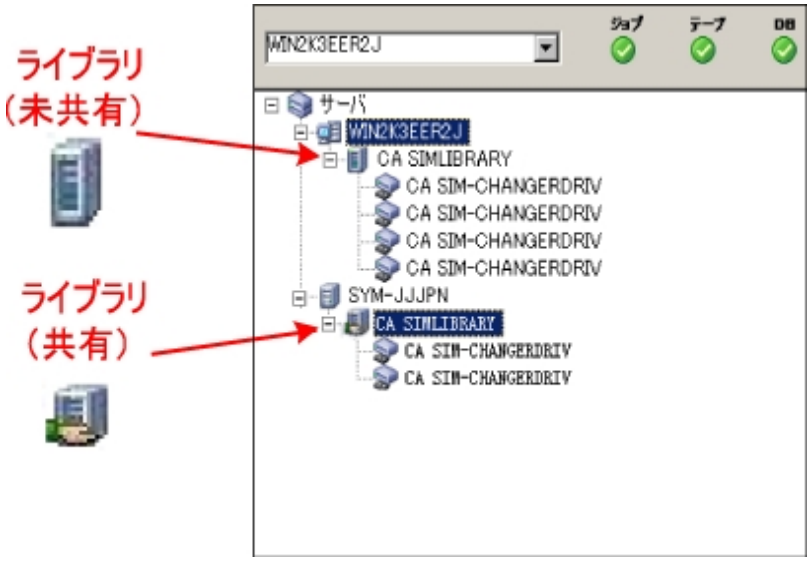
   データベース情報およびアクティビティログのデータが表示できることを確認します。

   以前のバックアップデータがすべて正常にマイグレートされたことを確認します。

   注： Arcserve Backup はジョブに関する情報、ログおよびユーザ情報を古いサーバから新しいプライマリサーバへマイグレートします。
4. デバイスマネージャを表示します。

   デバイスマネージャが、プライマリサーバとすべてのメンバサーバに接続されているすべてのデバイスを検出することを確認します。

   以下は、プライマリサーバと接続されたデバイス、およびメンバサーバと接続されたデバイスが含まれるデバイスマネージャウィンドウを示しています。プライマリサーバは、共有されていないライブラリに接続されており、メンバサーバは共有されているライブラリに接続されています。



デバイス マネージャによってすべてのデバイスが検出されない場合、以下のタスクを完了します。

- デバイスが、サーバに正しく接続されていることを確認します。
- 適切なデバイスドライバがインストールされていることを確認します。
- デバイス環境設定を使用したデバイスの設定

これらのタスクを完了した後、Arcserve Backup でデバイスを検出できない場合は、テクニカル サポートまでお問い合わせください。

注： デバイスの設定の詳細については、「管理者ガイド」を参照してください。

5. 簡単なバックアップ ジョブをプライマリ サーバ上でサブミットします。

   ジョブが正常に完了することを確認します。

   ジョブが失敗した場合は、以下のトラブルシューティング タスクを実行します。

   - ジョブ ステータス マネージャから、ジョブのアクティビティ ログの詳細を確認します。
   - ジョブに警告メッセージ、エラー メッセージ、あるいはその両方が含まれている場合、メッセージをダブルクリックして、問題の説明およびそれを修正するための手順を参照します。
   - 問題を修正したら、ジョブを再度サブミットします。

6. 単純バックアップ ジョブをメンバ サーバ上でサブミットします。

   バックアップ ジョブが正常に完了することを確認します。

   ジョブが失敗した場合は、以下のトラブルシューティング タスクを実行します。

   - ジョブ ステータス マネージャから、ジョブのアクティビティ ログの詳細を確認します。
   - ジョブに警告メッセージ、エラー メッセージ、あるいはその両方が含まれている場合、メッセージをダブルクリックして、問題の説明およびそれを修正するための手順を参照します。
   - 問題を修正したら、ジョブを再度サブミットします。

7. 単純リストア ジョブをプライマリ サーバ上でサブミットします。

   リストア ジョブが正常に完了することを確認します。

   ジョブが失敗した場合は、以下のトラブルシューティング タスクを実行します。

- ジョブ ステータス マネージャから、ジョブのアクティビティ ログの詳細を確認します。
- ジョブに警告メッセージ、エラー メッセージ、あるいはその両方が含まれている場合、メッセージをダブルクリックして、問題の説明およびそれを修正するための手順を参照します。
- 問題を修正したら、ジョブを再度サブミットします。

8. 単純リストア ジョブをメンバ サーバ上でサブミットします。

   リストア ジョブが正常に完了することを確認します。

   ジョブが失敗した場合は、以下のトラブルシューティング タスクを実行します。

   - ジョブ ステータス マネージャから、ジョブのアクティビティ ログの詳細を確認します。
   - ジョブに警告メッセージ、エラー メッセージ、あるいはその両方が含まれている場合、メッセージをダブルクリックして、問題の説明およびそれを修正するための手順を参照します。
   - 問題を修正したら、ジョブを再度サブミットします。

ローカルまたはリモートのデータベースを使用する SAN 内のサーバのアップグレード

以下のセクションでは、SAN 上に存在し、ローカルまたはリモートの Arcserve データベースを共有する複数の Arcserve サーバをアップグレードする際の推奨事項について説明します。

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

現在の構成：ローカルまたはリモートのデータベースを使用する SAN 内の複数の Arcserve サーバ

推奨構成：SAN プライマリサーバおよび SAN メンバサーバで構成される Arcserve Backup ドメイン

インストールが必要な新しいコンポーネント

アップグレードが必要な新しいコンポーネント

SAN 内の複数の Arcserve サーバを本リリースへアップグレードする方法

一元管理環境のアップグレードを確認する方法

現在の構成：ローカルまたはリモートのデータベースを使用する SAN 内の複数の Arcserve サーバ

以前のリリースにおいて、SAN 環境内でローカルまたはリモートのデータベースを使用する複数の Arcserve Backup サーバのアーキテクチャを以下の図に示します。

推奨構成：SAN プライマリ サーバおよび SAN メンバ サーバで構成される Arcserve Backup ドメイン

現在の構成が、ローカルまたはリモートの Arcserve Backup データベースを共有する SAN 上の複数の Arcserve Backup サーバを含む場合、一元管理環境にアップグレードすることをお勧めします。一元管理環境を使用すると、ライブラリおよびローカルまたはリモートのデータベースを共有できます。

現在の SAN 環境を一元管理環境にアップグレードするには、現在の SAN プライマリ サーバを Arcserve Backup プライマリ サーバにアップグレードして、SAN メンバ サーバをその特定のプライマリ サーバの Arcserve Backup メンバ サーバにアップグレードする必要があります。

メンバ サーバをインストールするには、インストール ウィザードが環境内の Arcserve Backup ドメイン名とプライマリ サーバ名を検出できる必要があります。そのため、Arcserve Backup を少なくとも 1 つのプライマリ サーバにインストールした後でメンバ サーバをインストールする必要があります。

注： Microsoft SQL Server 2008 Express Edition は、リモート通信をサポートしていません。Microsoft SQL Server 2008 Express Edition を使用して Arcserve Backup をインストールする場合は、インストール ウィザードによって、プライマリ サーバ上にデータベース アプリケーションおよび Arcserve データベース インスタンスがインストールされます。リモート システム上で Arcserve データベース インスタンスをホストするには、Microsoft SQL Server を使用する必要があります。

SAN およびローカルまたはリモートの Arcserve データベースと統合した一元管理環境のアーキテクチャを以下の図に示します。

インストールが必要な新しいコンポーネント

ご使用の環境にこの設定を展開するには、以下の Arcserve Backup コンポーネントをインストールする必要があります。

Arcserve Backup プライマリサーバ

メンバサーバおよびプライマリサーバ上で実行されるバックアップおよびリストアジョブを一元的にサブミット、管理、およびモニタする Arcserve Backup をサーバ上にインストールできます。

Arcserve Backup Central Management Option

Arcserve Backup ドメイン内のプライマリサーバとすべてのメンバサーバを中央のコンピュータから管理できるようになります。

注： Arcserve Backup プライマリサーバは前提条件のコンポーネントです。

Arcserve Backup Agent for Microsoft SQL Server

Arcserve Backup データベースを保護できるようにします。

注： Arcserve プライマリサーバおよびスタンドアロンサーバのインストールでは、Agent for Database という修正バージョンのエージェントがインストールされます。ArcserveArcserve

重要： アンインストールプログラムでは、コンピュータから Arcserve Backup データベースインスタンスがアンインストールされません。Arcserve Backup を再インストールする場合は、インストールウィザードによって、使用中のシステムで Microsoft SQL Server または Microsoft SQL Server 2014 Express Edition のデータベースインスタンスがあることが検出されます。その結果、インストールウィザードは、［製品の選択］ダイアログボックスで自動的に Arcserve Backup Agent for Microsoft SQL Server コンポーネントを選択します。

Arcserve Backup Client Agent for Windows

Arcserve Backup サーバにローカルでデータをバックアップできるようにします。

Arcserve Backup Tape Library Option

複数ライブラリおよびテープ RAID ライブラリを使用して、バックアップ、リストア、およびメディア管理のタスクを実行できるようになります。

Arcserve Backup Storage Area Network (SAN) Option

1 つまたは複数の Arcserve サーバが接続された高速ストレージネットワーク上で、1 つまたは複数のメディアライブラリを共有できるようになります。

以下の点に注意してください。

- Tape Library Option は SAN (Storage Area Network) オプションの前提条件のコンポーネントです。
- Storage Area Network (SAN) Option をインストールするには、Arcserve Backup プライマリサーバインストールオプションを指定する必要があります。

Arcserve Backup メンバサーバ

Arcserve ドメイン内のサーバが、プライマリサーバからジョブやデバイスに関する命令を受け取れるようにします。

注：この構成を展開するには、SAN において、サーバごとに Storage Area Network (SAN) Option および Tape Library Option のライセンスを確実に発行する必要があります。

アップグレードが必要な新しいコンポーネント

使用環境にこの設定を展開するには、以下の Arcserve Backup コンポーネントをアップグレードする必要があります。

- 現在の Arcserve 環境にインストールされているすべてのコンポーネント

SAN 内の複数の Arcserve サーバを本リリースへアップグレードする方法

SAN 環境を本リリースの SAN 環境にアップグレードするには、以下のタスクを完了します。

1. Arcserve Backup プライマリサーバを現在の SAN プライマリシステムにインストールします。このシステムは、新しい Arcserve ドメインでプライマリサーバとして機能します。

   注： Arcserve Backup プライマリサーバをインストールすると、セットアップによって Central Management Option がインストールされます。

   現在の SAN プライマリシステムに Storage Area Network (SAN) Option をインストールします。

   Microsoft SQL Server 2014 SP1 Express または Microsoft SQL Server を Arcserve Backup データベースに指定できます。

   プロンプトが表示されたら、以前のリリースから新しいデータベースへデータをマイグレートします。

2. Arcserve Backup メンバサーバを現在の SAN メンバサーバのすべてにインストールします。これらのシステムは、新しい Arcserve ドメインでメンバサーバとして機能します。

   プロンプトが表示されたら、以前のリリースから新しいデータベースへデータをマイグレートします。

3. インストールを確認します。

4. (オプション) Arcserve Backup データベースのバックアップを最後に実行したのがこのリリースへのアップグレード前である場合、Arcserve Backup は Arcserve Backup データベースの復旧をサポートしません。アップグレードの完了後に、できるだけ早く Arcserve Backup データベースをバックアップすることをお勧めします。Arcserve Backup データベースのバックアップの詳細については、「管理者ガイド」を参照してください。

   詳細情報：

   アップグレードに関する考慮事項

一元管理環境のアップグレードを確認する方法

Arcserve Backup インストールが正常に機能することを確認するには、以下のタスクを完了します。

1. プライマリサーバで Arcserve Backup マネージャコンソールを開きます。
2. サーバ管理を開きます。

   ドメインディレクトリツリーに Arcserve ドメインのプライマリサーバとすべてのメンバサーバの名前が表示されていることを確認します。
3. データベースマネージャとジョブステータスマネージャを開きます。

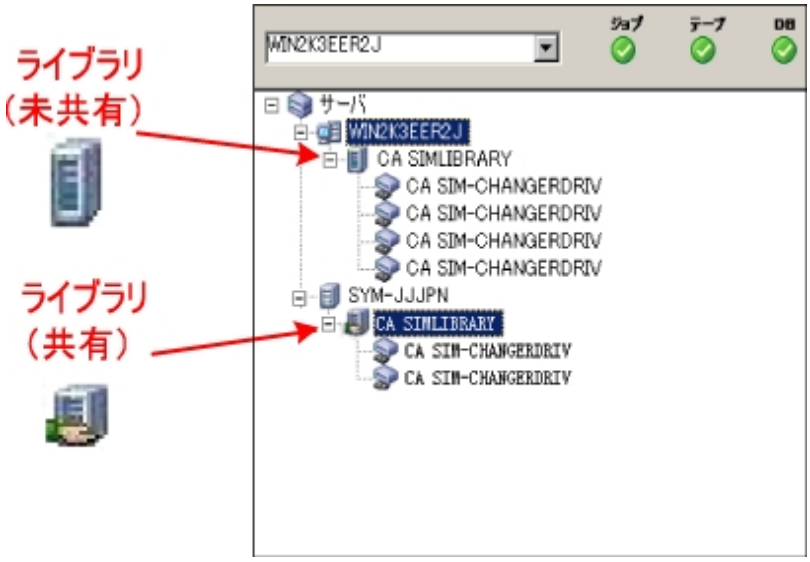
   データベース情報およびアクティビティログのデータが表示できることを確認します。

   以前のバックアップデータがすべて正常にマイグレートされたことを確認します。

   注： Arcserve Backup はジョブに関する情報、ログおよびユーザ情報を古いサーバから新しいプライマリサーバへマイグレートします。
4. デバイスマネージャを表示します。

   デバイスマネージャが、プライマリサーバとすべてのメンバサーバに接続されているすべてのデバイスを検出することを確認します。

   以下は、プライマリサーバと接続されたデバイス、およびメンバサーバと接続されたデバイスが含まれるデバイスマネージャウィンドウを示しています。プライマリサーバは、共有されていないライブラリに接続されており、メンバサーバは共有されているライブラリに接続されています。



デバイス マネージャによってすべてのデバイスが検出されない場合、以下のタスクを完了します。

- デバイスが、サーバに正しく接続されていることを確認します。
- 適切なデバイスドライバがインストールされていることを確認します。
- デバイス環境設定を使用したデバイスの設定

これらのタスクを完了した後、Arcserve Backup でデバイスを検出できない場合は、テクニカル サポートまでお問い合わせください。

注： デバイスの設定の詳細については、「管理者ガイド」を参照してください。

5. 簡単なバックアップ ジョブをプライマリ サーバ上でサブミットします。

   ジョブが正常に完了することを確認します。

   ジョブが失敗した場合は、以下のトラブルシューティング タスクを実行します。

   - ジョブ ステータス マネージャから、ジョブのアクティビティ ログの詳細を確認します。
   - ジョブに警告メッセージ、エラー メッセージ、あるいはその両方が含まれている場合、メッセージをダブルクリックして、問題の説明およびそれを修正するための手順を参照します。
   - 問題を修正したら、ジョブを再度サブミットします。

6. 単純バックアップ ジョブをメンバ サーバ上でサブミットします。

   バックアップ ジョブが正常に完了することを確認します。

   ジョブが失敗した場合は、以下のトラブルシューティング タスクを実行します。

   - ジョブ ステータス マネージャから、ジョブのアクティビティ ログの詳細を確認します。
   - ジョブに警告メッセージ、エラー メッセージ、あるいはその両方が含まれている場合、メッセージをダブルクリックして、問題の説明およびそれを修正するための手順を参照します。
   - 問題を修正したら、ジョブを再度サブミットします。

7. 単純リストア ジョブをプライマリ サーバ上でサブミットします。

   リストア ジョブが正常に完了することを確認します。

   ジョブが失敗した場合は、以下のトラブルシューティング タスクを実行します。

- ジョブ ステータス マネージャから、ジョブのアクティビティ ログの詳細を確認します。
- ジョブに警告メッセージ、エラー メッセージ、あるいはその両方が含まれている場合、メッセージをダブルクリックして、問題の説明およびそれを修正するための手順を参照します。
- 問題を修正したら、ジョブを再度サブミットします。

8. 単純リストア ジョブをメンバ サーバ上でサブミットします。

   リストア ジョブが正常に完了することを確認します。

   ジョブが失敗した場合は、以下のトラブルシューティング タスクを実行します。

   - ジョブ ステータス マネージャから、ジョブのアクティビティ ログの詳細を確認します。
   - ジョブに警告メッセージ、エラー メッセージ、あるいはその両方が含まれている場合、メッセージをダブルクリックして、問題の説明およびそれを修正するための手順を参照します。
   - 問題を修正したら、ジョブを再度サブミットします。

SAN および非 SAN の環境における複数のサーバの本リリースへのアップグレード

以下のセクションでは、SAN および非 SAN 環境の複数の Arcserve サーバを本リリースへアップグレードする際の推奨事項について説明します。

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

現在の構成：セントラルデータベースを使用する複数の Arcserve サーバ

推奨構成：プライマリサーバおよびメンバサーバで構成される Arcserve Backup ドメイン

インストールが必要な新しいコンポーネント

アップグレードが必要な新しいコンポーネント

SAN および非 SAN の環境における複数の Arcserve サーバを本リリースへアップグレードする方法

一元管理されたアップグレードを検証する方法

現在の構成：セントラル データベースを使用する複数の Arcserve サーバ

以前のリリースにおいて、セントラル データベースを使用する複数の Arcserve Backup サーバのアーキテクチャを以下の図に示します。

以下の図では、複数の Arcserve Backup サーバが一元化されたデータベースを共有しています。データベースを共有するサーバには、Arcserve Backup データベースのコピーが保持されていません。

以下の図では、複数の Arcserve Backup サーバが一元化されたデータベースを共有しています。データベースを共有するサーバの 1 つには、Arcserve Backup データベースのコピーが保持されています。

推奨構成：プライマリサーバおよびメンバサーバで構成される Arcserve Backup ドメイン

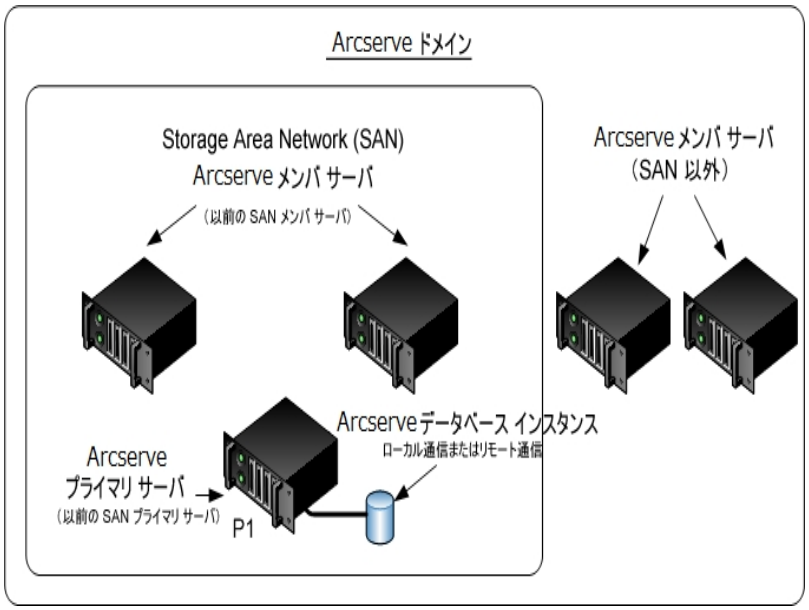
現在の構成が、SAN 上にある Arcserve Backup サーバと SAN 上にない Arcserve Backup サーバが混在する SAN 環境を含む場合、一元管理環境に Arcserve Backup をインストールすることをお勧めします。

現在の SAN 環境を一元管理環境にアップグレードするには、現在の SAN プライマリサーバを Arcserve Backup プライマリサーバにアップグレードしたうえで、SAN メンバサーバを Arcserve Backup メンバサーバにアップグレードする必要があります。

メンバサーバをインストールするには、インストールウィザードが環境内の Arcserve Backup ドメイン名とプライマリサーバ名を検出できる必要があります。そのため、Arcserve Backup を少なくとも 1 つのプライマリサーバにインストールした後でメンバサーバをインストールする必要があります。

注： Microsoft SQL Server 2014 SP2 Express Edition は、リモート通信をサポートしていません。Microsoft SQL Server 2014 SP2 Express Edition を使用して Arcserve Backup をインストールする場合は、インストールウィザードによって、プライマリサーバ上にデータベースアプリケーションおよび Arcserve データベースインスタンスがインストールされます。リモートシステム上で Arcserve データベースインスタンスをホストするには、Microsoft SQL Server を使用する必要があります。

SAN 上にあるプライマリサーバとメンバサーバ、および SAN 上にないメンバサーバで構成される一元管理環境のアーキテクチャを以下の図に示します。



インストールが必要な新しいコンポーネント

ご使用の環境にこの設定を展開するには、以下の Arcserve Backup コンポーネントをインストールする必要があります。

Arcserve Backup プライマリサーバ

メンバサーバおよびプライマリサーバ上で実行されるバックアップおよびリストアジョブを一元的にサブミット、管理、およびモニタする Arcserve Backup をサーバ上にインストールできます。

Arcserve Backup Central Management Option

Arcserve Backup ドメイン内のプライマリサーバとすべてのメンバサーバを中央のコンピュータから管理できるようになります。

注： Arcserve Backup プライマリサーバは前提条件のコンポーネントです。

Arcserve Backup Agent for Microsoft SQL Server

Arcserve Backup データベースを保護できるようにします。

注： Arcserve プライマリサーバおよびスタンドアロンサーバのインストールでは、Agent for Database という修正バージョンのエージェントがインストールされます。ArcserveArcserve

重要： アンインストールプログラムでは、コンピュータから Arcserve Backup データベースインスタンスがアンインストールされません。Arcserve Backup を再インストールする場合は、インストールウィザードによって、使用中のシステムで Microsoft SQL Server または Microsoft SQL Server 2014 Express Edition のデータベースインスタンスがあることが検出されます。その結果、インストールウィザードは、［製品の選択］ダイアログボックスで自動的に Arcserve Backup Agent for Microsoft SQL Server コンポーネントを選択します。

Arcserve Backup Client Agent for Windows

Arcserve Backup サーバにローカルでデータをバックアップできるようにします。

Arcserve Backup Tape Library Option

複数ライブラリおよびテープ RAID ライブラリを使用して、バックアップ、リストア、およびメディア管理のタスクを実行できるようになります。

Arcserve Backup Storage Area Network (SAN) Option

1 つまたは複数の Arcserve サーバが接続された高速ストレージネットワーク上で、1 つまたは複数のメディアライブラリを共有できるようになります。

以下の点に注意してください。

- Tape Library Option は SAN (Storage Area Network) オプションの前提条件のコンポーネントです。
- Storage Area Network (SAN) Option をインストールするには、Arcserve Backup プライマリサーバインストールオプションを指定する必要があります。

Arcserve Backup メンバサーバ

Arcserve ドメイン内のサーバが、プライマリサーバからジョブやデバイスに関する命令を受け取れるようにします。

注：この構成を展開するには、SAN において、サーバごとに Storage Area Network (SAN) Option および Tape Library Option のライセンスを確実に発行する必要があります。

アップグレードが必要な新しいコンポーネント

使用環境にこの設定を展開するには、以下の Arcserve Backup コンポーネントをアップグレードする必要があります。

- 現在の Arcserve 環境にインストールされているすべてのコンポーネント

SAN および非 SAN の環境における複数の Arcserve サーバを本リリースへアップグレードする方法

SAN および非 SAN の環境で複数の Arcserve サーバを本リリースへアップグレードするには、以下のタスクを完了します。

1. Arcserve Backup プライマリサーバを現在の SAN プライマリシステムにインストールします。このシステムは、新しい Arcserve ドメインでプライマリサーバとして機能します。

   注： Arcserve Backup プライマリサーバをインストールすると、セットアップによって Central Management Option がインストールされます。

   現在の SAN プライマリシステムに Storage Area Network (SAN) Option をインストールします。

   Microsoft SQL Server 2008 Express または Microsoft SQL Server を Arcserve Backup データベースに指定できます。

   プロンプトが表示されたら、以前のリリースから新しいデータベースへデータをマイグレートします。

2. Arcserve Backup メンバサーバをすべての現在の SAN 分散サーバおよび非 SAN サーバにインストールします。これらのシステムは、新しい Arcserve ドメインでメンバサーバとして機能します。

   プロンプトが表示されたら、以前のリリースから新しいデータベースへデータをマイグレートします。

3. インストールを確認します。

4. (オプション) Arcserve Backup データベースのバックアップを最後に実行したのがこのリリースへのアップグレード前である場合、Arcserve Backup は Arcserve Backup データベースの復旧をサポートしません。アップグレードの完了後に、できるだけ早く Arcserve Backup データベースをバックアップすることをお勧めします。Arcserve Backup データベースのバックアップの詳細については、「管理者ガイド」を参照してください。

   詳細情報：

   アップグレードに関する考慮事項

一元管理されたアップグレードを検証する方法

Arcserve Backup インストールが正常に機能することを確認するには、以下のタスクを完了します。

- 1. プライマリサーバで Arcserve Backup マネージャコンソールを開きます。
  2. サーバ管理を開きます。

     ドメインディレクトリツリーに Arcserve ドメインのプライマリサーバとすべてのメンバサーバの名前が表示されていることを確認します。
  3. データベースマネージャとジョブステータスマネージャを開きます。

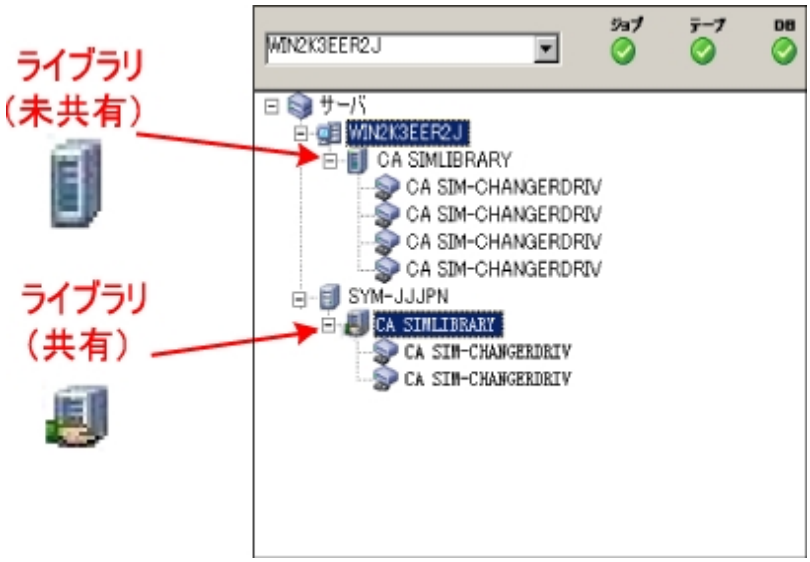
     データベース情報およびアクティビティログのデータが表示できることを確認します。

     以前のバックアップデータがすべて正常にマイグレートされたことを確認します。

     注： Arcserve Backup はジョブに関する情報、ログおよびユーザ情報を古いサーバから新しいプライマリサーバへマイグレートします。
  4. デバイスマネージャを表示します。

     デバイスマネージャが、プライマリサーバとすべてのメンバサーバに接続されているすべてのデバイスを検出することを確認します。

     以下は、プライマリサーバと接続されたデバイス、およびメンバサーバと接続されたデバイスが含まれるデバイスマネージャウィンドウを示しています。プライマリサーバは、共有されていないライブラリに接続されており、メンバサーバは共有されているライブラリに接続されています。



デバイス マネージャによってすべてのデバイスが検出されない場合、以下のタスクを完了します。

- デバイスが、サーバに正しく接続されていることを確認します。
- 適切なデバイスドライバがインストールされていることを確認します。
- デバイス環境設定を使用したデバイスの設定

これらのタスクを完了した後、Arcserve Backup でデバイスを検出できない場合は、テクニカル サポートまでお問い合わせください。

注： デバイスの設定の詳細については、「管理者ガイド」を参照してください。

5. 簡単なバックアップ ジョブをプライマリ サーバ上でサブミットします。

   ジョブが正常に完了することを確認します。

   ジョブが失敗した場合は、以下のトラブルシューティング タスクを実行します。

   - ジョブ ステータス マネージャから、ジョブのアクティビティ ログの詳細を確認します。
   - ジョブに警告メッセージ、エラー メッセージ、あるいはその両方が含まれている場合、メッセージをダブルクリックして、問題の説明およびそれを修正するための手順を参照します。
   - 問題を修正したら、ジョブを再度サブミットします。

6. 単純バックアップ ジョブをメンバ サーバ上でサブミットします。

   バックアップ ジョブが正常に完了することを確認します。

   ジョブが失敗した場合は、以下のトラブルシューティング タスクを実行します。

   - ジョブ ステータス マネージャから、ジョブのアクティビティ ログの詳細を確認します。
   - ジョブに警告メッセージ、エラー メッセージ、あるいはその両方が含まれている場合、メッセージをダブルクリックして、問題の説明およびそれを修正するための手順を参照します。
   - 問題を修正したら、ジョブを再度サブミットします。

7. 単純リストア ジョブをプライマリ サーバ上でサブミットします。

   リストア ジョブが正常に完了することを確認します。

   ジョブが失敗した場合は、以下のトラブルシューティング タスクを実行します。

- ジョブ ステータス マネージャから、ジョブのアクティビティ ログの詳細を確認します。
- ジョブに警告メッセージ、エラー メッセージ、あるいはその両方が含まれている場合、メッセージをダブルクリックして、問題の説明およびそれを修正するための手順を参照します。
- 問題を修正したら、ジョブを再度サブミットします。

8. 単純リストア ジョブをメンバ サーバ上でサブミットします。

   リストア ジョブが正常に完了することを確認します。

   ジョブが失敗した場合は、以下のトラブルシューティング タスクを実行します。

   - ジョブ ステータス マネージャから、ジョブのアクティビティ ログの詳細を確認します。
   - ジョブに警告メッセージ、エラー メッセージ、あるいはその両方が含まれている場合、メッセージをダブルクリックして、問題の説明およびそれを修正するための手順を参照します。
   - 問題を修正したら、ジョブを再度サブミットします。

セントラル データベースを使用する複数のサーバのアップグレード

以下のセクションでは、一元化されたデータベースを共有する複数の Arcserve サーバを本リリースにアップグレードする際の推奨事項について説明します。

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

現在の構成：セントラル データベースを使用する複数の Arcserve サーバ

推奨構成：プライマリ サーバおよびメンバ サーバで構成される Arcserve Backup ドメイン

インストールが必要な新しいコンポーネント

アップグレードが必要な新しいコンポーネント

リモート データベースを使用する複数の Arcserve サーバの一元管理環境へアップグレードする方法

一元管理されたアップグレードを検証する方法

現在の構成：セントラル データベースを使用する複数の Arcserve サーバ

以前のリリースにおいて、セントラル データベースを使用する複数の Arcserve Backup サーバのアーキテクチャを以下の図に示します。

以下の図では、複数の Arcserve Backup サーバが一元化されたデータベースを共有しています。データベースを共有するサーバには、Arcserve Backup データベースのコピーが保持されていません。

以下の図では、複数の Arcserve Backup サーバが一元化されたデータベースを共有しています。データベースを共有するサーバの 1 つには、Arcserve Backup データベースのコピーが保持されています。

推奨構成：プライマリサーバおよびメンバサーバで構成される Arcserve Backup ドメイン

現在の構成が、一元化されたデータベースを共有する複数の Arcserve Backup サーバを含む場合、プライマリサーバと 1 つ以上のメンバサーバで構成される一元管理環境にアップグレードすることをお勧めします。一元管理環境により、Arcserve Backup データベースをプライマリサーバ上またはリモートシステム上にホストできるようになります。Arcserve Backup データベースインスタンスをホストするシステム上に Arcserve Backup をインストールする必要はありません。

注： Microsoft SQL Server 2008 Express Edition は、リモート通信をサポートしていません。Microsoft SQL Server 2008 Express Edition を使用して Arcserve Backup をインストールする場合は、インストールウィザードによって、プライマリサーバ上にデータベースアプリケーションおよび Arcserve データベースインスタンスがインストールされます。リモートシステム上で Arcserve データベースインスタンスをホストするには、Microsoft SQL Server を使用する必要があります。

一元管理環境にアップグレードするには、現在のシステムの 1 つを Arcserve Backup プライマリサーバにアップグレードしたうえで、他のすべてのシステムを Arcserve Backup メンバサーバにアップグレードする必要があります。

Arcserve Backup データベースをホストするリモートシステムが含まれる一元管理環境のアーキテクチャを以下の図に示します。

インストールが必要な新しいコンポーネント

ご使用の環境にこの設定を展開するには、以下の Arcserve Backup コンポーネントをインストールする必要があります。

Arcserve Backup プライマリサーバ

メンバサーバおよびプライマリサーバ上で実行されるバックアップおよびリストアジョブを一元的にサブミット、管理、およびモニタする Arcserve Backup をサーバ上にインストールできます。

Arcserve Backup Central Management Option

Arcserve Backup ドメイン内のプライマリサーバとすべてのメンバサーバを中央のコンピュータから管理できるようになります。

注： Arcserve Backup プライマリサーバは前提条件のコンポーネントです。

Arcserve Backup Agent for Microsoft SQL Server

Arcserve Backup データベースを保護できるようにします。

注： Arcserve プライマリサーバおよびスタンドアロンサーバのインストールでは、Agent for Database という修正バージョンのエージェントがインストールされます。ArcserveArcserve

重要： アンインストールプログラムでは、コンピュータから Arcserve Backup データベースインスタンスがアンインストールされません。Arcserve Backup を再インストールする場合は、インストールウィザードによって、使用中のシステムで Microsoft SQL Server または Microsoft SQL Server 2014 SP2 Express Edition のデータベースインスタンスがあることが検出されます。その結果、インストールウィザードは、 製品の選択]ダイアログボックスで自動的に Arcserve Backup Agent for Microsoft SQL Server コンポーネントを選択します。

Arcserve Backup Client Agent for Windows

Arcserve Backup サーバにローカルでデータをバックアップできるようにします。

Arcserve Backup プライマリサーバ

メンバサーバおよびプライマリサーバ上で実行されるバックアップおよびリストアジョブを一元的にサブミット、管理、およびモニタする Arcserve Backup をサーバ上にインストールできます。

アップグレードが必要な新しいコンポーネント

使用環境にこの設定を展開するには、以下の Arcserve Backup コンポーネントをアップグレードする必要があります。

- 現在の Arcserve 環境にインストールされているすべてのコンポーネント

リモート データベースを使用する複数の Arcserve サーバの一元管理環境へアップグレードする方法

一元化されたデータベースを使用する複数の Arcserve サーバを本リリースにアップグレードするには、以下のタスクを完了します。

1. プライマリサーバとして機能するシステム上に Arcserve Backup プライマリサーバをインストールします。

   注： Arcserve Backup プライマリサーバをインストールすると、セットアップによって Central Management Option がインストールされます。

   Microsoft SQL Server 2008 Express または Microsoft SQL Server を Arcserve Backup データベースに指定できます。

   プロンプトが表示されたら、以前のリリースから新しいデータベースへデータをマイグレートします。

2. 新しい Arcserve ドメインのメンバとして機能するすべてのサーバ上に Arcserve Backup メンバサーバをインストールします。

   プロンプトが表示されたら、以前のリリースから新しいデータベースへデータをマイグレートします。

3. インストールを確認します。

4. (オプション) Arcserve Backup データベースのバックアップを最後に実行したのがこのリリースへのアップグレード前である場合、Arcserve Backup は Arcserve Backup データベースの復旧をサポートしません。アップグレードの完了後に、できるだけ早く Arcserve Backup データベースをバックアップすることをお勧めします。Arcserve Backup データベースのバックアップの詳細については、「管理者ガイド」を参照してください。

   詳細情報：

   アップグレードに関する考慮事項

一元管理されたアップグレードを検証する方法

- Arcserve Backup インストールが正常に機能することを確認するには、以下のタスクを完了します。
  1. プライマリサーバで Arcserve Backup マネージャコンソールを開きます。
  2. サーバ管理を開きます。

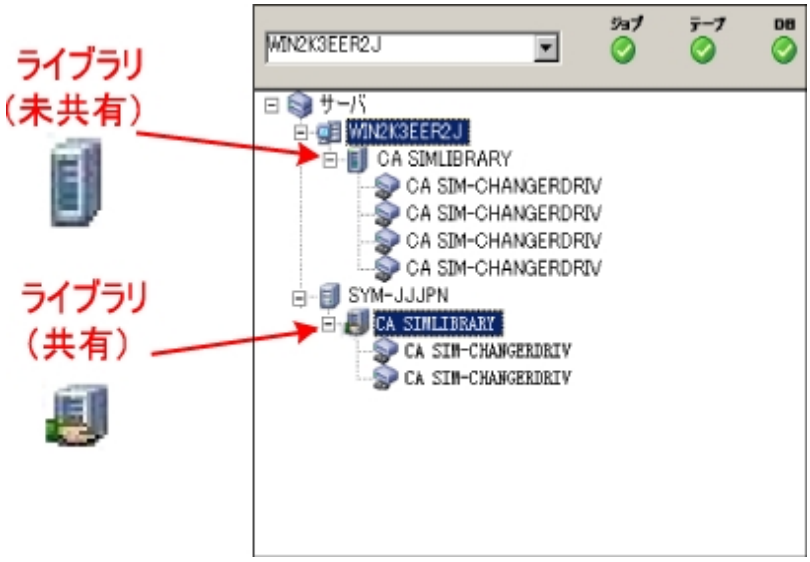
     ドメインディレクトリツリーに Arcserve ドメインのプライマリサーバとすべてのメンバサーバの名前が表示されていることを確認します。
  3. データベースマネージャとジョブステータスマネージャを開きます。

     データベース情報およびアクティビティログのデータが表示できることを確認します。

     Arcserve Backup はジョブに関する情報、ログおよびユーザ情報を古いサーバから新しいプライマリサーバへマイグレートします。
  4. デバイスマネージャを表示します。

     デバイスマネージャが、プライマリサーバとすべてのメンバサーバに接続されているすべてのデバイスを検出することを確認します。

     以下は、プライマリサーバと接続されたデバイス、およびメンバサーバと接続されたデバイスが含まれるデバイスマネージャウィンドウを示しています。プライマリサーバは、共有されていないライブラリに接続されており、メンバサーバは共有されているライブラリに接続されています。



     デバイスマネージャによってすべてのデバイスが検出されない場合、以下のタスクを完了します。

- デバイスが、サーバに正しく接続されていることを確認します。
- 適切なデバイスドライバがインストールされていることを確認します。
- デバイス環境設定を使用したデバイスの設定

これらのタスクを完了した後、Arcserve Backup でデバイスを検出できない場合は、テクニカルサポートまでお問い合わせください。

注： デバイスの設定の詳細については、「管理者ガイド」を参照してください。

5. 簡単なバックアップジョブをプライマリサーバ上でサブミットします。

   ジョブが正常に完了することを確認します。

   ジョブが失敗した場合は、以下のトラブルシューティングタスクを実行します。

   - ジョブステータスマネージャから、ジョブのアクティビティログの詳細を確認します。
   - ジョブに警告メッセージ、エラーメッセージ、あるいはその両方が含まれている場合、メッセージをダブルクリックして、問題の説明およびそれを修正するための手順を参照します。
   - 問題を修正したら、ジョブを再度サブミットします。

6. 単純バックアップジョブをメンバサーバ上でサブミットします。

   バックアップジョブが正常に完了することを確認します。

   ジョブが失敗した場合は、以下のトラブルシューティングタスクを実行します。

   - ジョブステータスマネージャから、ジョブのアクティビティログの詳細を確認します。
   - ジョブに警告メッセージ、エラーメッセージ、あるいはその両方が含まれている場合、メッセージをダブルクリックして、問題の説明およびそれを修正するための手順を参照します。
   - 問題を修正したら、ジョブを再度サブミットします。

7. 単純リストアジョブをプライマリサーバ上でサブミットします。

   リストアジョブが正常に完了することを確認します。

   ジョブが失敗した場合は、以下のトラブルシューティングタスクを実行します。

   - ジョブステータスマネージャから、ジョブのアクティビティログの詳細を確認します。

- ジョブに警告メッセージ、エラーメッセージ、あるいはその両方が含まれている場合、メッセージをダブルクリックして、問題の説明およびそれを修正するための手順を参照します。
- 問題を修正したら、ジョブを再度サブミットします。

8. 単純リストアジョブをメンバサーバ上でサブミットします。

   リストアジョブが正常に完了することを確認します。

   ジョブが失敗した場合は、以下のトラブルシューティングタスクを実行します。

   - ジョブステータスマネージャから、ジョブのアクティビティログの詳細を確認します。
   - ジョブに警告メッセージ、エラーメッセージ、あるいはその両方が含まれている場合、メッセージをダブルクリックして、問題の説明およびそれを修正するための手順を参照します。
   - 問題を修正したら、ジョブを再度サブミットします。

クラスタ対応環境における複数サーバのアップグレード

以下のセクションでは、Microsoft Cluster Server (MSCS) というクラスタ対応環境内に存在する複数の Arcserve サーバを本リリースへアップグレードする際の推奨事項について説明します。

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

現在の構成：クラスタ内の複数の Arcserve サーバ

推奨構成 - クラスタ対応環境にインストールされた Arcserve プライマリサーバおよびメンバサーバ

インストールが必要な新しいコンポーネント

アップグレードが必要な新しいコンポーネント

Arcserve クラスタ対応環境を本リリースへアップグレードする方法

クラスタ対応アップグレードを確認する方法

現在の構成：クラスタ内の複数の Arcserve サーバ

以前のリリースにおいて、クラスタ対応環境内の複数の Arcserve Backup サーバのアーキテクチャを以下の図に示します。Arcserve Backup データベースは RAIMA データベースによってホストされ、Arcserve Backup データベース インスタンスは Arcserve Backup サーバ上に存在しています。

以前のリリースにおいて、クラスタ対応環境内の複数の Arcserve Backup サーバのアーキテクチャを以下の図に示します。Arcserve Backup データベースは、Microsoft SQL Server によってホストされ、Arcserve Backup データベース インスタンスはリモートシステム上に存在しています。

推奨構成 - クラスタ対応環境にインストールされた Arcserve プライマリサーバおよびメンバサーバ

現在の構成が、クラスタ対応環境内の複数の Arcserve Backup サーバを含む場合、複数の Arcserve Backup プライマリサーバまたは複数の Arcserve Backup スタンドアロンサーバにアップグレードすることをお勧めします。

このアーキテクチャによって、Arcserve Backup 環境を一元管理し、クラスタ対応環境の高可用性機能を維持できます。

ご使用の環境にこの構成を展開するには、Microsoft SQL Server 2008 Express Edition または Microsoft SQL Server を使用して Arcserve Backup データベースをホストします。

注： Microsoft SQL Server 2008 Express Edition は、リモート通信をサポートしていません。Microsoft SQL Server 2008 Express Edition を使用して Arcserve Backup をインストールする場合は、インストールウィザードによって、プライマリサーバ上にデータベースアプリケーションおよび Arcserve データベースインスタンスがインストールされます。リモートシステム上で Arcserve データベースインスタンスをホストするには、Microsoft SQL Server を使用する必要があります。

本リリースにおけるクラスタ対応環境内に複数の Arcserve Backup サーバが存在するアーキテクチャを以下の図に示します。Arcserve Backup データベースは Microsoft SQL Server 2008 Express Edition によってホストされ、Arcserve Backup データベースインスタンスは Arcserve Backup サーバ上に存在しています。

本リリースにおけるクラスタ対応環境内に複数の Arcserve サーバが存在するアーキテクチャを以下の図に示します。Arcserve データベースは、Microsoft SQL Server によってホストされ、Arcserve データベースインスタンスはリモートシステム上に存在しています。

インストールが必要な新しいコンポーネント

ご使用の環境にこの設定を展開するには、以下の Arcserve Backup コンポーネントをインストールする必要があります。

Arcserve Backup プライマリサーバ

メンバサーバおよびプライマリサーバ上で実行されるバックアップおよびリストアジョブを一元的にサブミット、管理、およびモニタする Arcserve Backup をサーバ上にインストールできます。

Arcserve Backup Central Management Option

Arcserve Backup ドメイン内のプライマリサーバとすべてのメンバサーバを中央のコンピュータから管理できるようになります。

注： Arcserve Backup プライマリサーバは前提条件のコンポーネントです。

Arcserve Backup Agent for Microsoft SQL Server

Arcserve Backup データベースを保護できるようにします。

注： Arcserve プライマリサーバおよびスタンドアロンサーバのインストールでは、Agent for Database という修正バージョンのエージェントがインストールされます。ArcserveArcserve

重要： アンインストールプログラムでは、コンピュータから Arcserve Backup データベースインスタンスがアンインストールされません。Arcserve Backup を再インストールする場合は、インストールウィザードによって、使用中のシステムで Microsoft SQL Server または Microsoft SQL Server 2014 Express Edition のデータベースインスタンスがあることが検出されます。その結果、インストールウィザードは、［製品の選択］ダイアログボックスで自動的に Arcserve Backup Agent for Microsoft SQL Server コンポーネントを選択します。

Arcserve Backup Client Agent for Windows

Arcserve Backup サーバにローカルでデータをバックアップできるようにします。

Arcserve Backup メンバサーバ

Arcserve ドメイン内のサーバが、プライマリサーバからジョブやデバイスに関する命令を受け取れるようにします。

アップグレードが必要な新しいコンポーネント

使用環境にこの設定を展開するには、以下の Arcserve Backup コンポーネントをアップグレードする必要があります。

- 現在の Arcserve 環境にインストールされているすべてのコンポーネント

Arcserve クラスタ対応環境を本リリースへアップグレードする方法

以下のクラスタプラットフォームでは、ジョブフェールオーバ機能を使用したクラスタ環境に Arcserve Backup をアップグレードできます。

- x86/AMD64 Windows Server の Microsoft Cluster Server (MSCS)
- NEC CLUSTERPRO/ExpressCluster

Arcserve クラスタ対応環境を本リリースへアップグレードする方法

1. 以下の手順のいずれかを使用して、Arcserve Backup をアップグレードします。
   - MSCS クラスタ環境での Arcserve Backup 16.5、r17、r17.5 から r18.0 へのアップグレード
   - NEC CLUSTERPRO 環境での Arcserve Backup 16.5、r17、r17.5 から r18.0 へのアップグレード
2. アップグレードを確認します。
3. (オプション) Arcserve Backup データベースのバックアップを最後に実行したのがこのリリースへのアップグレード前である場合、Arcserve Backup は Arcserve Backup データベースの復旧をサポートしません。アップグレードの完了後に、できるだけ早く Arcserve Backup データベースをバックアップすることをお勧めします。Arcserve Backup データベースのバックアップの詳細については、「管理者ガイド」を参照してください。

クラスタ対応アップグレードを確認する方法

Arcserve Backup インストールが正常に機能することを確認するには、以下のタスクを完了します。

1. スタンドアロンサーバ上で Arcserve Backup マネージャコンソールを開きます。
2. 仮想名を使用して、アップグレードした Arcserve サーバに接続します。
3. アップグレードしたサーバに正常に接続できる場合、Arcserve クラスタグループを別のノードに移動します。

   すべての Arcserve サービスが正常に開始されたことを確認します。

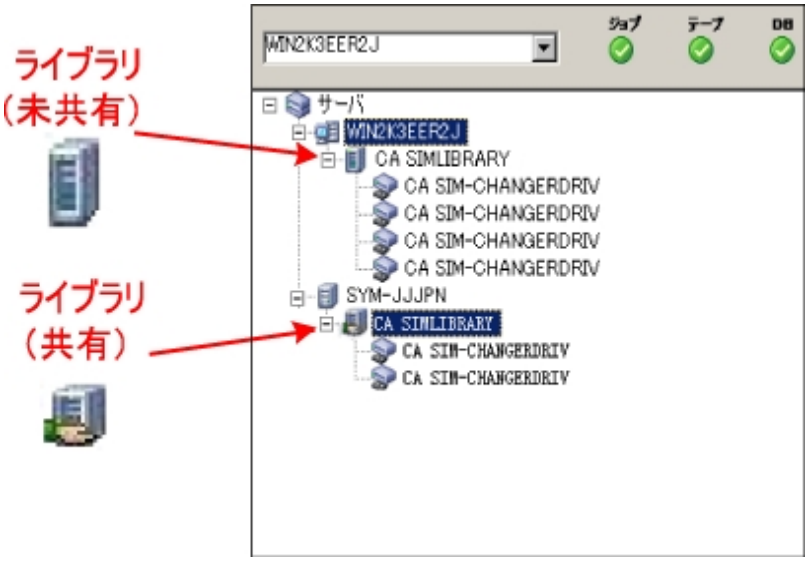
   注： クラスタグループを他のノードに移動する間、マネージャコンソールの応答が断続的に停止することがあります。
4. サーバ管理を開きます。

   ドメインディレクトリツリーに Arcserve ドメインのプライマリサーバとすべてのメンバサーバの名前が表示されていることを確認します。
5. データベースマネージャとジョブステータスマネージャを開きます。

   データベース情報およびアクティビティログのデータが表示できることを確認します。
6. デバイスマネージャを表示します。

   デバイスマネージャが、プライマリサーバとすべてのメンバサーバに接続されているすべてのデバイスを検出することを確認します。

   以下は、プライマリサーバと接続されたデバイス、およびメンバサーバと接続されたデバイスが含まれるデバイスマネージャウィンドウを示しています。プライマリサーバは、共有されていないライブラリに接続されており、メンバサーバは共有されているライブラリに接続されています。



デバイス マネージャによってすべてのデバイスが検出されない場合、以下のタスクを完了します。

- デバイスが、サーバに正しく接続されていることを確認します。
- 適切なデバイスドライバがインストールされていることを確認します。
- デバイス環境設定を使用したデバイスの設定

これらのタスクを完了した後、Arcserve Backup でデバイスを検出できない場合は、テクニカル サポートまでお問い合わせください。

注： デバイスの設定の詳細については、「管理者ガイド」を参照してください。

7. 簡単なバックアップ ジョブをプライマリ サーバ上でサブミットします。

   ジョブが正常に完了することを確認します。

   ジョブが失敗した場合は、以下のトラブルシューティング タスクを実行します。

   - ジョブ ステータス マネージャから、ジョブのアクティビティ ログの詳細を確認します。
   - ジョブに警告メッセージ、エラー メッセージ、あるいはその両方が含まれている場合、メッセージをダブルクリックして、問題の説明およびそれを修正するための手順を参照します。
   - 問題を修正したら、ジョブを再度サブミットします。

8. 単純バックアップ ジョブをメンバ サーバ上でサブミットします。

   バックアップ ジョブが正常に完了することを確認します。

ジョブが失敗した場合は、以下のトラブルシューティングタスクを実行します。

- ジョブステータスマネージャから、ジョブのアクティビティログの詳細を確認します。
- ジョブに警告メッセージ、エラーメッセージ、あるいはその両方が含まれている場合、メッセージをダブルクリックして、問題の説明およびそれを修正するための手順を参照します。
- 問題を修正したら、ジョブを再度サブミットします。

9. 単純リストアジョブをプライマリサーバ上でサブミットします。

   リストアジョブが正常に完了することを確認します。

   ジョブが失敗した場合は、以下のトラブルシューティングタスクを実行します。

   - ジョブステータスマネージャから、ジョブのアクティビティログの詳細を確認します。
   - ジョブに警告メッセージ、エラーメッセージ、あるいはその両方が含まれている場合、メッセージをダブルクリックして、問題の説明およびそれを修正するための手順を参照します。
   - 問題を修正したら、ジョブを再度サブミットします。

10. 単純リストアジョブをメンバサーバ上でサブミットします。

    リストアジョブが正常に完了することを確認します。

    ジョブが失敗した場合は、以下のトラブルシューティングタスクを実行します。

    - ジョブステータスマネージャから、ジョブのアクティビティログの詳細を確認します。
    - ジョブに警告メッセージ、エラーメッセージ、あるいはその両方が含まれている場合、メッセージをダブルクリックして、問題の説明およびそれを修正するための手順を参照します。
    - 問題を修正したら、ジョブを再度サブミットします。

一般的な推奨事項

以下のセクションでは、Arcserve Backup のインストールおよび使用に役立つ一般的な推奨事項について説明します。

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

マネージャコンソールをインストールする場所

ライセンスのインストールと管理の方法

Arcserve Backup サーバベースオプションのインストール方法

マネージャコンソールをインストールする場所

Arcserve Backup マネージャコンソールは、リモート システムから Arcserve プライマリ サーバおよびスタンドアロン サーバにログインするためのグラフィカル ユーザ インターフェース(GUI) です。マネージャコンソールを使用すると、任意の Arcserve サーバから実行されるバックアップやリストアなどのジョブを管理およびモニタできます。たとえば、スタンドアロン サーバや、プライマリ サーバとそのメンバ サーバなどです。

マネージャコンソール インストール オプションを使用することで、バックアップ操作の管理に必要なコンポーネントをインストールできます。バックアップ データ、ログ、レポートなどにストレージ領域を割り当てる必要はありません。このタイプの情報は、プライマリ サーバおよびスタンドアロン サーバに保存されます。

マネージャコンソールは、Arcserve Backup がサポートするオペレーティング システムが搭載されたすべてのコンピュータにインストールできます。

マネージャコンソールをインストールするのに最も適したロケーションを決定するには、以下の一般的なガイドラインを考慮してください。

- ターゲット システムがポータブル コンピュータである。たとえば、ノート パソコンなどです。バックアップ操作の管理にポータブル コンピュータを使用しても、バックアップ データをポータブル コンピュータに保存するわけではありません。
- ターゲット システムがバックアップ環境から離れたロケーションに存在する。使用環境のネットワーク帯域幅に制限があることが判明した場合、リモート システム上でデータを管理し、そこにデータをバックアップするのは現実的ではないことがあります。
- ターゲット システムが、Arcserve Backup サーバ コンポーネントをインストールするための最低限のシステム要件を満たしていない。Arcserve Backup サーバおよびマネージャのコンポーネントをインストールするのに必要な最低限のシステム要件に関する説明については、「リリース ノート」を参照してください。
- ターゲット システムが定期的に停止する。バックアップ サーバは、最高レベルのデータ保護を実現するために、常時稼働している必要があります。

ライセンスのインストールと管理の方法

以下のセクションでは、Arcserve Backup ライセンスのインストールと管理の方法について説明します。

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

Arcserve Backup コンポーネント ライセンスの管理

サーバからのライセンスの解放

Arcserve Backup コンポーネント ライセンスの管理

Arcserve Backup サーバ管理を使用すると、以下のライセンス管理タスクを実行できます。

- Arcserve Backup ドメイン内のプライマリサーバ、スタンドアロンサーバ、メンバサーバ、およびエージェントサーバにインストールされている Arcserve Backup 製品を表示する。
- Arcserve Backup ドメイン内の各コンポーネントに適用されているライセンスの総数、およびアクティブなライセンス数を特定する。
- Arcserve Backup ドメイン内のコンポーネントライセンスを使用しているサーバの名前を表示する。
- サーバからライセンスを解放して、ドメイン内のほかのサーバがライセンスを利用できるようにする。

注： サーバからのライセンスの解放については、「サーバからのライセンスの解放」を参照してください。

Arcserve Backup コンポーネント ライセンスを管理する方法

1. Arcserve Backup マネージャコンソールで、［クイックスタート］メニューから［サーバ管理］をクリックして開きます。

   ［サーバ管理］が開きます。

   Arcserve Backup プライマリサーバおよびそのメンバサーバは、以下のようにディレクトリツリー構造で表示されます。

2. プライマリサーバおよびメンバサーバにインストールされている Arcserve Backup 製品を表示するには、ディレクトリツリーでサーバを選択します。

選択したサーバのコンポーネントおよびライセンスが、以下のようにプロパティビューで表示されます。

3. Arcserve Backup ドメインのコンポーネントおよびライセンス関係を表示するには、プライマリサーバを右クリックして、ポップアップメニューから [ライセンスの管理] を選択します。

   [ライセンス管理] ダイアログボックスが表示されます。

   [ライセンス管理] ダイアログボックスには、以下の情報が表示されます。

   - **バージョン** -- 選択したコンポーネントのライセンスのリリース番号を指定します。
   - **アクティブなライセンス数** -- 選択したコンポーネント用に現在アクティブな数ライセンスを指定します。合計には購入済みライセンスと試用ライセンスが含まれます。
   - **利用可能なライセンス数** -- 選択したコンポーネントを使用するために利用可能なライセンスの数を指定します。合計には購入済みライセンスのみが含まれます。
   - **ライセンス総数** -- 選択したコンポーネント用に購入されたライセンスの総数を指定します。
   - **必要なライセンス数** -- 選択したコンポーネントを使用するために必要とする追加のライセンスの数を指定します。

     例:

     - あるコンポーネントの購入済みライセンスと試用ライセンスを 1 件ずつ使用しているとします。この場合、Arcserve Backup は、選択したコン

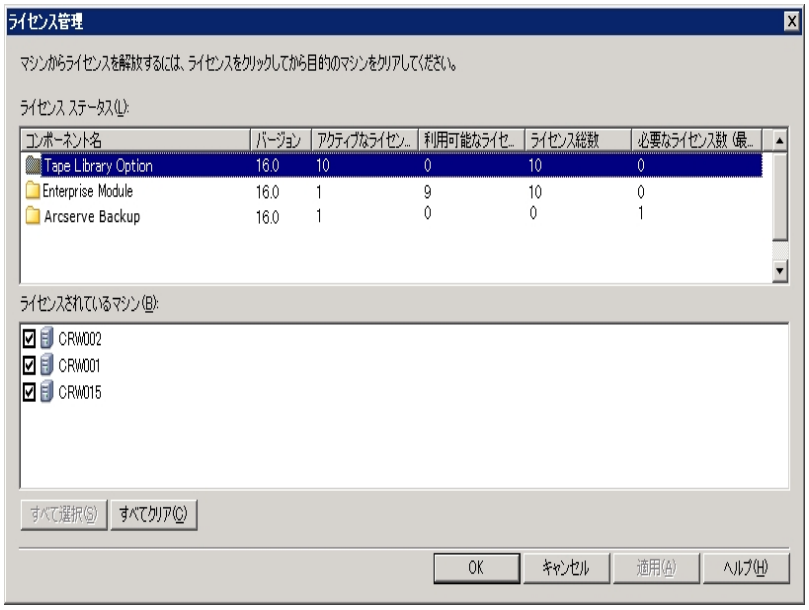
ポーネントの使用が中断されないようにするため、試用ライセンスを購入済みライセンスで置き換えることを推奨します。

– Client Agent for Windows を使用して、6 つの Windows コンピュータを保護しています。Client Agent for Windows のライセンスは 4 件購入済みです。これまでに、ライセンスの数が不足しているためにバックアップが完全に実行されなかった可能性があります。Arcserve Backup は Client Agent for Windows の使用が中断されないようにするため、2 件のライセンスの追加購入を推奨します。

- **ライセンスされているマシン** -- 選択したコンポーネントのアクティブなライセンスを使用しているコンピュータの名前を指定します。

例:

– 以下のダイアログボックスには、Tape Library Option のアクティブなライセンスが 10 件あり、使用可能なライセンスは 0 件であることが示されています。 [ライセンスされているマシン]フィールドには、Tape Library Option ライセンスを使用しているコンピュータのホスト名が表示されています。



サーバからのライセンスの解放

Arcserve Backup のライセンスはカウントベース方式で機能します。カウントベースのライセンス管理では、1 つの包括的なライセンスが付与され、ライセンスプール内でアクティブなライセンス権限の数が事前に定義されます。ライセンスを使用するサーバは、使用可能なライセンス数の上限に達するまで、先着順にプールからアクティブライセンスが供与されます。すべてのアクティブライセンスが適用された後で、ライセンスを別のメンバサーバに追加する必要がある場合は、いずれかのメンバサーバからライセンス権限を削除してカウントを減らし、別のメンバサーバがそのライセンスを使用できるようにする必要があります。

サーバからライセンスを解放する方法

1. Arcserve Backup マネージャコンソールで、［クイックスタート］メニューから［サーバ管理］をクリックして開きます。

   ［サーバ管理］が開きます。

2. サーバディレクトリツリーから、プライマリサーバを右クリックして、コンテキストメニューから［ライセンスの管理］を選択します。

   ［ライセンス管理］ダイアログボックスが表示されます。

3. ［ライセンスステータス］セクションから、解放するライセンスを含むコンポーネントを選択します。

   ライセンスを使用するマシンが［ライセンスされているマシン］フィールドに表示されます。

4. 解放するライセンスを持つマシンの名前の隣にあるチェックボックスをオフにし、［適用］をクリックします。

   選択したサーバからアクティブライセンスが解放されます。これで、ご使用の Arcserve ドメイン内で Arcserve Backup 製品を実行している他のサーバがライセンスを利用できるようになります。

   注：［適用］ボタンをクリックすると、選択したマシンは［ライセンスされているマシン］フィールドに表示されなくなります。

Arcserve Backup サーバ ベース オプションのインストール方法

プライマリ サーバまたはスタンド アロン サーバには、以下のオプションがインストールされます。

- Central Management Option

  注： このオプションをインストールするには、Arcserve Backup プライマリ サーバをインストールする必要があります。

- Tape Library Option
- Storage Area Network (SAN) Option

Arcserve Backup サーバ ベース オプションをインストールには、以下の 2 つの方法を使用できます。

- Arcserve Backup をインストールする際にこれらのオプションをインストールする。
- サーバ管理を使用してこれらのオプションをインストールする。

サーバ ベース オプションは、サーバ管理からインストールおよびアンインストールできます。

注： サーバ管理を使用したサーバ ベース オプションのインストールおよびアンインストールの詳細については、「*管理者ガイド*」を参照してください。

第12章: 用語集

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

Arcserve Backup Agent Deployment 472
caroot アカウント 472
Data Mover サーバ 472
ファイル システム エージェント 472
メンバ サーバ 472
プライマリ サーバ 472
レスポンス ファイル 473
仮想マシン 473

Arcserve Backup Agent Deployment

Arcserve Backup Agent Deployment は、複数のリモート コンピュータに Arcserve Backup エージェントの集合を同時にインストールおよびアップグレードするためのウィザード形式のアプリケーションです。

caroot アカウント

caroot アカウントは、Arcserve Backup が管理用の認証メカニズムとして使用するデフォルト アカウントです。caroot アカウントのパスワードは、任意の英数字と特殊文字を組み合わせて指定できますが、15 バイトを超えないようにしてください。

注： 合計 15 バイトのパスワードは、およそ 7 ～ 15 文字に相当します。

Data Mover サーバ

Arcserve Backup Data Mover サーバは、ローカル ストレージ デバイスへのデータの転送を容易にします。ストレージ デバイスには、共有ライブラリとファイル システム デバイスがあります。Data Mover サーバは、UNIX または Linux オペレーティング システムでサポートされています。Arcserve Backup では、プライマリ サーバから複数の Data Mover サーバを一元管理します。Arcserve Backup Data Mover サーバの動作はメンバ サーバと似ています。

ファイル システム エージェント

ファイル システム エージェントは、さまざまなオペレーティング システムを実行するコンピュータにインストールされ、各コンピュータ上に存在するファイルを保護できる Arcserve Backup アプリケーションです。

メンバ サーバ

メンバ サーバは、プライマリ サーバの実行サーバとして機能します。メンバ サーバはプライマリ サーバによって割り当てられたジョブを処理します。プライマリ サーバおよびメンバ サーバを使用すると、環境内の複数の Arcserve Backup サーバを一元管理できるようになります。プライマリ サーバ上のマネージャ コンソールを使用して、そのメンバ サーバを管理できます。

プライマリ サーバ

プライマリ サーバはマスタ サーバとして機能し、自分自身および 1 つ以上のメンバ サーバおよび Data Mover サーバを制御します。プライマリ サーバを使用すると、プライマリ サーバ、メンバ サーバ、および Data Mover サーバ上で実行されるバック

アップ、リストア、およびその他のジョブを管理およびモニタできます。プライマリサーバ、メンバサーバ、および Data Mover サーバを使用することで、環境内にある複数の Arcserve Backup サーバを一元管理できます。この環境では、マネージャコンソールを使用してプライマリサーバを管理できます。

レスポンス ファイル

レスポンス ファイルは、Arcserve Backup の製品およびコンポーネントのセットアップと構成の設定が格納され、サイレント インストールで使用されるテキストベースのファイルです。

仮想マシン

仮想マシンは、1 つのパーティションが物理コンピュータと同じように動作できるようにするソフトウェアベースの環境です。Arcserve Backup は、VMware および Microsoft Hyper-V ベースの仮想マシン上に存在するデータのバックアップ、リストア、回復をサポートします。